

岳山

第十二年
第一號

秩父號

秩父號

第二

山岳

第二十年第一號　大正十五年七月發行

目次

多摩秩父行　田島勝太郎　一頁
川乘山と其附近　神谷恭　四九
仙元峠附近　武田久吉　六一
多摩郡の山川（郡村誌抄錄）　七五

圖版

○甲武信嶽より八ヶ岳及小川山を望む○甲武信嶽より見たる三寶山　對頁　八
○三寶山の森林○甲武信嶽の森林　一六
○金峯山より見たるミヅカキ山　二四
○千丈頭より金峯山及朝日嶽を望む　三二
○千丈頭より見たる甲武信嶽及三寶山　四〇

○飛龍山より白岩山及雲取山を望む……四八
○タラヒゴヤ附近より川乗山及舟井戸山を望む○タラヒゴヤより舟井戸、大田和、高指山及御前山を望む……五六
○スダレ東北面の樹林○天目峯より望める酉谷山とスダレ……六四
○仙元峠より三ッドッケと天祖山(白石山)及び雲取山の遠望○仙元峠頂上と蕎麥粒山の西南面……七二
○蕎麥粒山絶頂より仙元峠頂上、三ッドッケ、瀧谷山、スダレ及大平山を望む○日向澤頭より望める蕎麥粒山、三ッドッケと横篶尾根、瀧谷山、白岩山、芋ノ木ドッケ及天祖山の一部……七六
○冠岩附近より三ッドッケ、スダレ、大平山の北面を望む○冠岩附近より廣河原谷を距てゝ蕎麥粒山と仙元峠の北面を望む……八四
○蕎麥粒山絶巓○日向澤頭より長尾ノ丸、槇ノ尾山、棒ノ折レ山、黒山、常盤ノ前山、高水山及び石茸石山を望む……九二
○惣岳山北背の木立○横篶尾根北端より仙元峠頂上と蕎麥粒山を望む……一〇〇
○日向澤峯より南に川苔山を望む○横篶尾根北端より鳥屋戸山の脈を距てゝ川苔山を望む……一〇八
○足毛谷の岩峯○桂谷の落ち口……一一六
○廣河原谷の平○棚澤附近より仰げる筑摩山、高指山及び燒多亡山……一二四
○棒ノ折レ○澤井惣岳山頂より石茸石山、馬佛山、黒山及び棒ノ折レ山を望む……一二八
○吊シ橋より下流を見る○大丹波川吊シ橋の淵……一三六
○側面より見たる獅子口巖○獅子口巖の正面……一四四
○笠山の肩より見たる白石峠、川木澤ノ頭及び丸山○劔ノ峯より川木澤ノ頭、大野峠及丸山を望む……一五二

○劍ノ峯より堂平山及笠山を望む○大野峠ノ頭より高篠峠、川木澤ノ頭及堂平山を望む……一六〇
○シラビソ○オホシラビソ……一六八
○シラビソの枝○オホシラビソの枝……一七二
○オホシラビソの毬果○オホシラビソの獨立樹……一七六
○西御荷鉾山頂の不動尊石像○道祖神峠より西に東西御荷鉾山を望む……一八四
○南より見たる乾德山○裏より見たる乾德山……一九二
○淺間峠(仙元峠)頂上○乾德山頂上……二〇〇
○天狗山より望める小倉山○木賊峠より瑞牆山を望む……二〇八

雜錄

○多摩川水源の山脈に就きて(田島勝太郎)○小倉山(大島亮吉)○秩父笠山より丸山へ(松本善二)○高山植物雜記(武田久吉)……自一五九頁至二一〇頁
○琴川を溯りて奥千丈岳へ(吉澤一郎)○兩神、父不見、西御荷鉾(戸澤英一)○乾德山から黑金山へ(冠松次郎)○瑞牆山(大島亮吉)○川上の天狗山(武田)

雜報

○マウナ・ロアの大噴火○大菩薩連山の伐木……自二一一頁至二一四頁

○會員通信

會報

○第三十一回小集會記事○本會大會の期日變更に就て○有志晩餐會○會務報告○會員の訃報○退會者○交換及寄贈圖書目……自二一五頁至二二一頁
○本會規則抜萃○投稿規定

附錄

多摩郡の山川項目索隱

多摩秩父行

田島勝太郎

嵯峨鹽——大菩薩——落合——將監峠——唐松尾——雁峠——雁坂——甲武信——三寶——梓山——金峰——國師——三寶——栃本——三峰——酉谷山——氷川——小河内——雲取——飛龍——將監——落合——丹波山——猿橋

記事中圖又は地圖とあるは何れも陸地測量部五萬分ノ一地圖のことである。

東京市役所に勤めてゐた時分、私は水道の方の事務も見てゐたので、職務上からしても多摩川溪谷の研究といふことは相當必要なものであつた。そこで在職中にも、小丹波から大ダワ峠を越へ、川乘谷を經て日原を訪れたり、又秩川の溪谷を究めて御嶽山に登攀したことはあつたが、何分忙しいために、心行くまでの山行を味ふ餘裕を有たなかつた。それが十三年の九月にフトしたことから東京市を辭めることゝなつたので、宿望一時に擡頭して、上高地や尾瀧の秩色、さては八ヶ岳もまだ遲くはあるまいなどと憧憬は更に憧憬を生んで遊心頻りに動いたが、結局、從來の職務の關係もあり、先づ多摩の水源を訪ふて都合よくば金峰まで縱走し梓山や栃本の秩を探りたいといふことになつた。

同行は東京市に勤むる兒玉林學士、中川金治君外數名、何れも多摩上流の普通の道路や造林地は知り拔いてゐるのであるが、奥深い關係地方をも此際遺憾なく視察して置きたいといふ人々である。就中中川君は明治三十五年以來多摩水源地に在勤し、縣郡界の測量、御料局との境界査定などもやり、水源地の主ともいはれる東京市水道の恩人で、多摩の水落ちの方は何人よりも詳しい人であるが、その

中川君すら日原の奥から三峰にかけて一回も往つたことがなく、又雁峠以西は一行悉く全くの無經驗者である。そこで、私は首唱者の一人として『山岳』其他手に入る限りの凡ゆる記錄に就いて研究し、一面木暮、辻本兩氏に色々と御相談をして、先づ大體の計劃を樹てたのであるが、その日程がまた頗る盛り澤山なもので、即ち嵯峨鹽鑛泉から小金澤、大菩薩、落合を經由して將監峠、唐松尾、雁峠、雁坂、甲武信、三宝を踏破し、國師、金峰に縱走、梓山に至り、それから栃本、三峰、酉谷山、一杯水、日原、氷川を過ぎり、更に登つて雲取から飛龍に向ひ、次で將監峠から落合に歸り、丹波山を經て猿橋又は上野原に出やうといふ慾張り方だ。秩父關係の峠だけでも仙元、將監、雁峠、雁坂、十文字の五つを越える譯で、これを一氣呵成にやらうといふのだから『大分御勉强ですな』と木暮君から笑はれたほどであるが、然し、初めて浪人になつて自由に飛び歩ける以上、暇無し人には無駄と見られても、これ位の旅行はやらなければ行樂慾が滿たせない、遂々秩父だけを十八日行程といふ鷄棒に御念の入つた九十九折の旅程を捏ねあげた手際を寧ろ褒めて貰ひたい位だ。だが差當り困つたのは案内者である。今回の旅行が多摩水源地を中心とする以上、何としても第一に此處から始めたい、のみならず順路からしても大菩薩連嶺から雁峠に出で、甲武信、國師と行くべきであるが、肝心の多摩上流の落合には適當の案内者がゐない。落合、高橋の者は唐松尾や牛王院は知つてゐても雁坂以西を知らない、又梓山や栃本の人を選んでも多摩水源地の方は不慣だ。色々考へてみたが、別段大した心配もあるまいと、人夫は全部高橋、一ノ瀬の者を傭ふことにし、かく申す拙者自らが机上の研究によつて案内者の代理を勤めることにした。さて然し劍呑な話ではある。

◇——嵯峨鹽——小金澤連嶺——泉水谷小屋——大菩薩往復——落合——◇

十月十四日。午前六時四十六分飯田町發、八時五分立川で兒玉、川鍋兩君青梅より來り合し、折か

らの快晴に幸先を祝ひながら十一時二十分初鹿野着、落合から先着の中川君に迎へられ驛前の茶屋に少憩、途中に不用の品を分け鹽山經由落合に直送することにして晝食を攝る。この茶屋には曾て笹子驛から笹子峠を越えて來た當時休息したことがあるが、相變らず塵と埃で不潔極まる家である。

正午過十七分、心地よい秋陽を浴びて發足、日川の谷を上ること四十分の後日川を渡つて小坂にかゝり午後一時十分景德院に着く、荒廢しきつた小庵で、纔かに當年の俤を樓門に留めてゐる、天目山で自刃したと傳へらるゝ武田勝賴は實は此處で天正十年三月十一日に自刃し僧の拈橋といふが屍を收めて寺後に葬つたもので、寺邊に建てた『誰ゆきて問はぬみ墓の秋風にうらみや深き田野の葛原』と理慶尼の歌もあはれに讀める、田野の葛原といへば風流にも聞へるが名詮自稱蔓葛の離々たる所である。刈入れた蕎麥に狼藉たる寺庭を拔けて背後の小山に入り『曲り澤山道』の示標を右に見ながら進むこと十町餘にして田野鑛泉の前に出る、甲州によくある沸し湯である。緩やかな小坂を登ると道の曲り角には『土屋惣藏片手斫の場所』と書いた建札が見える、天目山戰闘の名殘の一幕が演ぜられた場所だが、一帶の風物極めて平凡、感興を惹く何ものもない。更に登つて燒山澤を渡る、石英閃綠岩の岩盤の中を過ぎる小流である。山腹を橫に數町進めば日川の本谷が現はれ木賊村が見え初めた。二時三十五分天目山栖雲寺に着く、軒は傾き屋根は落ちて水滸傳にでもありさうな無住の寺であるが、樓門の跡からする富士の眺望に亦棄て難い趣もある。その茅屋の一隅に小區劃をなして三十脚ばかりの小机が並べてある、木賊村の小學校分教場なのだ。一年から六年までの單級編成でタッタ一人の先生は代用教員兼寺番といふ格である。先生は番茶に菓子を添へて薦めながら寺の話などして呉れた。寺背の大石磴砌たる所に幸の池、梵音洞、靈石泉、金剛窟等があるが名は立派だが何れも荒廢し切つて由緒も何も判らない、只靈石泉のみは一碧の清水の滾々として晝夜を舍かぬのを見るのみである。少し登つて開基業海和尙の墓がある、五百年後の今日かくも荒廢しやうとは蓋し和尙も思ひ及ばなかつ

たことだらう。應永二十四年此處で自刃させられた武田信勝の墓も亦附近にある。

三時十七分發、木賊部落の山畠の間を爪先上りに行く、間もなく右から出て來た尾根筋を急に曲ると俄に兩方に壓迫されたやうな日川の溪谷に入つたのである、斷岸を過ぎる棧道の邊りは紅葉はまだ早いが水が如何にも清冽で峽谷の情景眞に嵐氣の膚に迫る趣がある。更に十數町進み、川を渡り右岸を上ること數町、四時三十五分嵯峨鹽鑛泉に着く。宿は日川より二十間も高い傾斜地に建てられ、可なり大きな建物である。曾ては川端にあつたさうだが洪水のために斯く上に移轉したものなので、浴槽だけは今に長い階段を下つて川端にある、室は總て東面し、小金澤三角點から西南に燒山澤と日川谷との間を下る尾根の可なりの急斜面に對してゐる。仰げばその山稜に巨きな孤木の屹立してゐるのがある。一行は望遠鏡まで持出してこれが樹名鑑定に努めたが、林木通の中川君すら『水楢だらう』位の所で、全く決定がつき兼ねた。主人に尋ねると楠（ブナ）の大木で『大楔（ブナ）』といへば近郷に知らぬものはないといふことであつた。成るほど大菩薩からでも明瞭に認められる位顯著なものである。紅葉はまだ五六分の所、薄色の紅や黃で相當には眺められる。天長節頃の見頃も想ひやられるが、それにつけても今一時雨でも來たら、甲武信や金峰山の紅葉は我より先に過ぎて了ふではないかなど取越苦勞を始める。此の鑛泉は約六十年前澤胡桃の樹を下駄に製造する職人が風呂を設けて入浴したのに始まり、一時中絶したが明治二十六年十月獵師某誤つて此の奥で負傷しその療養に再興、二十七年相當設備を加へて一般に開放し、漸次浴客を增したが四十年の洪水にて全部流失し、大正五六年の頃現在の所に移轉復活した。現今近郷の農民間によくその效能を認められ、春秋の候には滿員の盛況を呈するさうだが此の日は秋季のために浴客もさまで多からず幸に靜かであつた。鑛泉名嵯峨鹽の起源に就ては主人も何等知る所がない、信玄が搜したので搜し湯といつたのが轉訛したのだといふ說もあるが果してどうか。

十五日。秋空一碧拭つたやうな快晴だ。五時半起きては見たが、沸し湯の悲しさ、まだ入浴が出來ない、のみならず人夫も姿を見せないので待つこと二時間、漸く七時半に朝食して八時五分に出發した。鑛泉の附近は以前に伐採されたものと見へ樹木も割合に小さくて山の氣分が味はへない。二十五分位で一小坂を登る。富士點南に御坂山系と笹子峠の連嶺とを距てゝ指呼の間に見える。九時になつて下日川峠への道と別れる、溪畔の小平地に縣の造林小屋と炭燒小屋とがある。此處で落合から出迎へた一少年に逢ひ、更に荷物の一部をこれに託して今夜の宿泊豫定地泉水谷の小屋に送らせる。九時十五分發、日川を東に渡り尾根に沿うて相當に踏めた道を登ると約二十分にして岐路に出た。右すれば澤に入るので即ち左を取つて尙尾根傳ひに登る、十時半水楢の美林にかゝる、最大徑三尺位、その並び立つた樣は如何にも見事だ。林の終より右に澤に出る、境澤の源頭だといふ。登れば間もなく原野となり針葉樹の林が原野の北端に廣がつてゐる、野と林の隙を尙續けて登れば小金澤の溪谷と日川の谷との分水嶺の大タルミに達した、時に十一時四十五分。伴つた人夫の說明によりこれが雁ヶ腹摺だと知る。あまり時間が經つたので小憩もしないで直に南方の尾根に取付き、小金澤三角點に志した。雁ヶ腹摺の頭からは針葉樹の密林となつてゐて、切開け樣のものゝ殆んどなく、倒木脛を拂つて相當の難路だが登りは緩傾斜なので一行は只管に先を急いだ。地圖にある崩壞地は可なりのものである。

このガレの頭に立つて小金澤山（黑岳山）と雁ヶ腹摺山（小金澤三角點より東方に突出する山で、前に登り着いた鞍部の雁ヶ腹摺とは全く別物であることはいふまでもない）とを並べた景觀は實に筆舌に絕するものがある。紫紺色を帶びた見事な針葉樹の密林を點綴して楢、樹、ナゝカマドなどの紅葉が、紅黃とり〳〵に、これを彩つてゐる、殊に小金澤三角點から深く切込んだ鏡タルといふ鞍部から紫紺色を湛へた青空を望めば恰も鏡にふさわしい氣持でこれが更に圓形の眞黑な雁ヶ腹摺山を起し、この兩山の傾斜が一瞥遽ぎるものもなく深く小金澤の谷に陷入した所など、壯嚴といはうか雄大とい

はうか此方の身體も吸込まれんばかりである。折からヒヨ、ヒヨ、ヒヨウと銀鈴を振るやうな音が澤の底から起つて一行の耳朶に響く、これが妻戀ふ鹿の啼く聲だ、『聲聞く時ぞ秋は悲しき』どころか如何にも快心の聲で、人ですらも自ら引きつけられるやうな氣がするものを、牝鹿が遠い山の峽から引きつけられるのは無理のないことである。針葉樹と闊葉樹との綾錦を織りなした深溪から浮んで來たやうな神韻縹緲たるこの美音、一行は全く恍惚たらざるを得なかつた。

零時四十分小金澤三角點に達す、頂上には三角木組の觀測臺が出來て出張中の陸地觀測部員が大地震後の變化を觀測中だとのことである。思ひ設けぬお茶の馳走になつて晝食を喫り緩々と休息する。天氣は晴で甲斐駒から白峰、赤石、聖、上河内までの連山が歷然と見へ、笊ヶ岳の山系も明かに指摘することが出來るが、然しモヤで秋の空の清澄さはない。測量部員は毎日毛無三角點（富士の西方天子山塊の最高點）を觀測してゐるが、天氣が惡いのでモウ三十日も西南の方ばかり見てゐると零してゐた。山頂は針葉樹の森で鬱蒼としてゐるが南の方だけは切開けから茅野になつて、富士も遺憾なく眺められる。測量部員の物資を燒山澤の方面から運んでゐたので、道がよく踏めて玆暫らくはその方面からは容易にこの山頂に登られる筈である。

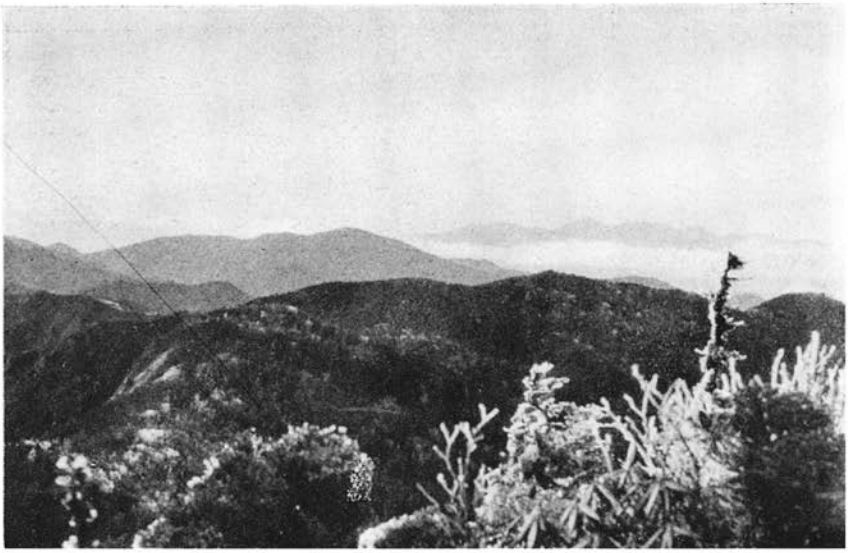
一時間餘憩つて二時に出發、往路を引返へし崩壞地の上で寫眞を二三枚撮り、三時雁ヶ腹摺の鞍部に歸着、小憩の上、乳の高さもある萱や熊笹を押し分けながら、鞍部の北方の頭に登りつくのに四十分も費した。これからは矢張り大體は針葉樹の林の中を潛つて行くのである。御料局時代の郡界測量の切開けがあるにはあるが、既に年次を經たことで通行の不自由は固よりである。殆んど同じ高さの小突起を四ツ以上も上下する、熊笹の繁茂は進路を塞いで一行を惱ますこと一方でない。四時二十分二〇一四米の三角點に到達した。面白い岩のある小突起で、小金澤の溪谷を瞰下した景色は却々に見事であるが、行く手を急ぐ一行は觀賞を擅にする暇もなく更に又密林中を潛つて下り、數個の小突起

を越えると西方の傾斜地一帶が原野地である所に出た。これは石丸峠(宛字)の南方にある突起で、東多摩川側は眞黒な森林である、尙峠を目標に原野の山腹を一直線に進む。五時十五分、峠の最高點に着くと直にこの峠と北方大菩薩峠との間にある地圖の一九八〇米の山にかゝり、十五分間にして頂上に達した。この山は大體針葉樹の森で、只南方石丸峠に面せる方が萱野混りの疎林となつてゐるのみである。頂上で川鍋君から携行の握飯を勸められたが、今の登り坂を急いだせいか渴は訴へるが食慾はないのでこれを兒玉君に讓ると、晝飯抜きを常習とする同君が何としたことか今日は晝飯も認めながら餘り辭退もせずに又もや剩さず平げて了つた。これが抑も私が後刻大菩薩嶺の下でへたばつた所以をなすのだから大に同君を怨まざるを得ない譯だ。さうかうする內暮色漸く蒼然、泉水谷から大菩薩まで人夫が出迎へてゐる筈で一行は提灯も蠟燭も持合せないから大急ぎに頂上から降る。所が例の密林で惱まされ暗さは暗し登りと同じく十五分を費した、大菩薩峠に着いた時は『大層遲うございましたな』と迎の人夫は大欠伸である。此處で嵯峨鹽から來た人夫を歸すことにする。生憎提灯の餘裕がないので三本の裸蠟燭を分けて二人の人夫は大急ぎに日川の方へ降つた。一行は六時に出發して東方に降ると十七分にして林道への分岐點に達した。この林道は東京市の水源林事務所で開鑿した造林步道で、年々若干宛延長すると同時に多少の手入草刈を行つてゐるのだから、その實際を知つて置くのは水源地の旅行に極めて有益なことゝ信じ、即ち別稿にこれを紹介する積りである。

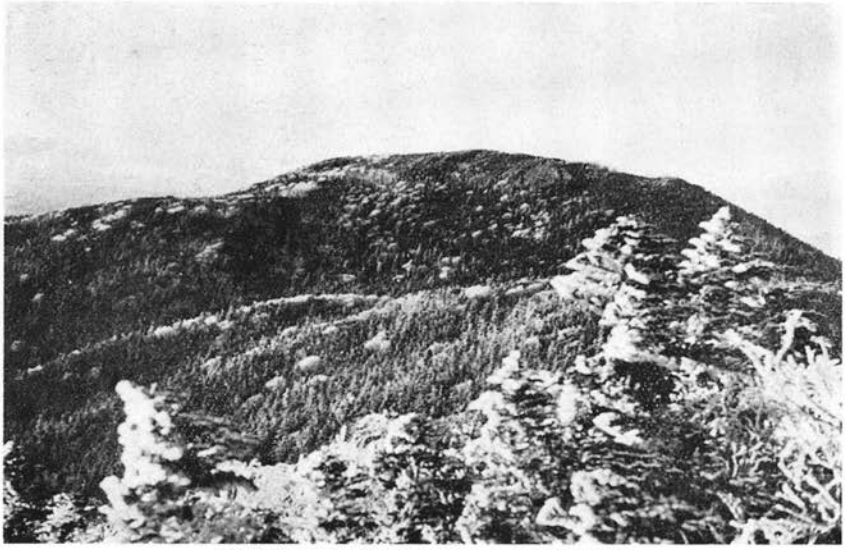
此處から左に林道を取つて進む。三十分も步いた頃私は次第に空腹を覺えて來て遂には一步も步けなくなつた。同行の諸君は大騷ぎで色々と心配して呉れたが、何しろ今日はさほど遲着しない積りで肝心の荷物を宿營地に先送してゐるので、食物とては手許に何もない。玆に於てか、先程の握飯でも殘つてゐたらと兒玉君を怨んで見たが今更後の祭で致し方がない。左思右考する內に、フト氣づいたのは、萬一のために新宿驛で買入れたチヨコレートが荷物に入れる事を忘れてポケットに藏ひ込んであ

ることだ。早速取出し手早くこれを平げて水をしたゝかに飲んだら幸に相當元氣を回復した。そこで更に歩行を續けて密林中を進むこと殆んど二時間、八時二十分丸川の峠に着く。此處は柳澤峠登口の雲峰寺附近から泉水谷に越える道が大菩薩の山脈を横斷する地點に當る（地圖にあり）泉水谷は眼下にある筈だが四邊闇に包まれ固よりこれを望見する由もない、只鹽山の方に當つて秋季に打揚ぐる煙花が數千尺の下方の暗に開くのが眼に映るのみである。纔て泉水谷の方から點々火を發して人の近づいて來るのが見える『迎らしい』と中川君がいふ、これから急な下りで、間もなく人夫が大急ぎに上り來るのに會ふ、握飯を拵へて來たのだが、小屋も近いので其儘に、九時五分泉水の小屋に辿り着いた。此處は東京市水道の多摩水源地（以下單に水源地又は水源林と記す）の泉水谷造林の中心點で、事務所の外に人夫小屋が二棟ばかり、不充分ながら風呂もあつて登山者からいへば大ホテルである、尤も今では泉水谷は殆んど造林を終つて、間伐手入の時機に逢してゐるから、毎年入山する人夫はさまで多くはなく、從つて夏の間も或は空家の場合がある。

今日の旅行は少しく强行軍に過ぎた。普通ならば大菩薩峠の直下十數町のフルコンバの小屋（東京市の造林小屋で年々數なからず登山者に利用される）に泊るべきであつたが、この地方の主人公たる兒玉、中川兩君が同行してゐるし、目を瞑つてゐても行けるといふので、此處までやつつけたのであるが大分に疲勞を感じた。一風呂浴びて爐邊の焚火に手を翳すと、酒を絶つて以來百日ばかりになる腹の蟲がグウ〳〵と不平を鳴らす。强くはないが酒の好きな中川君が、竹筒に收めて屋後の土中に埋藏した昨年の酒、美味いこと受合といふのでツイ引入れられて一二杯やる。效能覿面陶然とする。マヽヨ疲勞休めの藥だと更に續けて盃を傾ける、疲勞休めの度合は夙に過ぎて了つて、考は段々高くなる、氣焰は上る。可惜百日苦心の戒律を破つて十一時まで大飲みに飲んで寢に就いた。華胥の夢は飛んで甲武信岳邊に彷徨したのである。



甲武信岳より八ヶ岳及小川山を望む



甲武信岳頂上より見たる三宝山（白きは樹氷）

神谷恭氏撮影

十六日。五時に起きて見ると曇天で今にも降り出しさう。少し肌寒さへ感じた。今日は鷄冠山からオイラン澗を見て落合までの豫定だが、昨夕闇の中に通過した大菩薩峠やその頂上なども極めて置きたいので、七時十三分小屋を出で昨夜の道を登り始める。一路黄みかゝつた落葉松の造林地が涯しもなく續く、葉先に結ばれる一滴の水も粗かにしないで東京市民に屆けようとの水源林從業者諸君の丹誠である。一時間で丸川峠に着く、此處は柳澤峠から大菩薩に續く山脈が深溝のやうに窪んだ所を通過する峠で、丁度甲州から水源地への通風路に當る。流石の落葉松も此處では枯れ落ちたり地に這つたりして殆んど滿足に成育してゐるのはない。丸川の直上の突起はクニウチ御殿といひ、附近で土器などが掘出されることもある。御殿とは後人の命名らしく、勝頼敗軍後此處に來たとの口碑は殘つてゐるが、さほどの場所でもなさそうである。この突起から大菩薩主として大黒茂谷の展望は大菩薩としては類のないもので、大菩薩の遠望は何所からしても極めて丸っこい柔和な感じの貌であるが此處から眺めると堂々實に四邊を壓するの慨がある。間には七カマドなどの紅葉がかつたのがないでもないが如何にも大黒茂谷の名に相應しく、眞黒々と霧の中に浮び出てゐる。さうして頂上から小室川、泉水谷の合流點へ出した尾根が、頂上の少し下方で一のタルを作り、次に二のタル、三のタルを作つて長く尾を引いた傾斜線は相當に美くしい線である。

丸川からの道は柳澤峠から分水界近くを繞る林道に合する、中川君の測量で出來た道である。緩やかな上りが梅の老木や若木の間を縫ふて進む。九時三十分一のタルに着く。海拔六千四百尺の標示札がある。林道は尚山腹を搦むのであるが頂上へはこれから尾根傳ひに切開けを登る。一のタルから十分で頂上に達した。梅、白檜の密林で東京市有林と山梨恩賜縣有林との境界である。これから西北方柳澤峠方面への尾根の切開けも相當に明いてゐる。曾て一のタルを林道が通過しなかつた時分には、頂上よりの尾根が一のタルの方へ立派に通つてゐるので、柳澤への尾根と誤り大黒茂や小室川に紛れ

込んで困つた人も隨分あつた。

頂上からダラ〳〵の下りを東南方に四五町行くと日川谷の方に向つた傾斜の野山に出る。日川側は全部原野で多摩川側は森林である。この堺の尾根傳ひに行けば岩角の露出した小突起に出る。妙見岩が即ちこれで鹽山方面では雷岩と稱してゐる。折から霧が非常な速力で襲來し咫尺を辨へぬ有樣となつた。風も强く寒さも甚い、止むなく引返して樹林の中に焚火をして暖をとる、雨もボツリ〳〵落ちたが大したことはなかつた、四五十分雨の止むを俟ち、更に再び妙見岩に行つてみた、矢よりも早く捲いて來る霧の隙間から、脚下に、日川の餘り急でない丸味のある傾斜を有つた溪谷が雲の中の陷穽のやうに隱見し、まだ時雨に飽足らないでホンノリ薄化粧をした趣の闊葉樹林や、その向ふの「大栃」の下に白いペンキ屋根の嵯峨鹽鑛泉などこの穴の奥深い所に隱見する、かうした霧の慌だしい去來を眺めてゐると身も心も自ら融けて何だか深い海の中でも覗いてゐるやうな氣持になる。然し、鑛泉までの日川の谷以外は全く視線を掩ふて、昨夜煙花に歡樂の巷であつたらう所の鹽山など霧の海の底に沈んで影も見せない。それも晴れそうな見込がないので十一時を過ぎたので思ひ切つて下山の途に就く、一時間で丸川、更に三十分即ち午後一時前二十分といふに泉水の小屋に歸着した。

小屋には諸戸林學博士が來てゐられる、震災後の崩壞地に對する砂防工事檢分のためだといふ、晝食を共にして閑談、博士は更に崩壞地を視て落合に歸るとのことに今宵の再會を約して私は尙小屋の爐邊に寐轉んだ。風は却々强く尾根筋の樹々が凄い呻りをたてゝ無茶苦茶に搖ぐ、紅や黃の落葉は舞ひ上り舞ひ下り蝶の飛ぶやうに又花の舞ふやうである。今にも雨が來さうなので少時は雜談に時を過したが、遂に意を決し三時四十分に小屋を發足する。鷄冠山より黑川金山跡へ下るのは止め直接落合に出ることにして、その途中造林地を視察しながら行く。其の中に三十五年頃、東京府時代に本多博士が造林した折のもので寒害に會はないのは目通り廻り三尺にもなつてゐるのがある。谷を下り牛首

谷が泉水の本谷に合する所位まで行つて更にハンノ木峠（圖面一七一〇米三角點の西方點線の道が落合の方へ分水界を越える所）に着いたのが五時二十分だ。途中で路傍に生えた栗茸といふ深黄色の茸を採つて今夜の好下物だと喜ぶ。暮色は次第に濃くなつた。今日こそ早く宿に着かうものと提灯を携帯しなかつたので坂を下るのに隨分難儀した。川鍋君は眼が悪いので前の人の首にかけた白手拭だけを見て下つたなどの滑稽もある。六時半落合の東京市造林事務所に着いた。諸戸君は既に歸着してゐる。共に同君の所謂溫泉に浸る。これは人夫などの多い時に沸す東京市の風呂で、宿泊所から三町も離れてゐるが、浴槽は二坪位もあり、使ひ水は瀧をなして筧から一方に落ちてゐて、宛然、田舍の溫泉に於ける入湯氣分になれるからだ。

◇——將監峠——庚松尾——雁峠——笠取小屋——◇

十七日。五時半起床、今日は暫らくの野營旅行の準備のため却々出立が出來ない。少くとも甲武信の下のミヅシと、國師と金峰の間の何處かには野營しなくてならず、又雁峠の下の造林小屋も狹いから人夫だけは野營の必要がある。人夫が不慣のため準備が手間取るので葉書など認めてゐる間約二時間、八時漸く出發の準備が整つた。

昨夜泊つた事務所は八疊と六疊二室位の家で、一方に留守居格の事務員夫婦の住居が付いて、別に板張りの事務室がある。水源地の檢分に來る市吏員や市會議員諸氏は皆此處に厄介になるのである。普通宿屋は事務所より今少し坂上にあるが大分蚤の多さうな家である。落合は明治八年から十二年に柳澤峠の開通後初めて出來た新らしい部落で、三十戸足らずの人家が急勾配の坂道を挾んで相對してゐる。東京市の造林事業が始まつてから初めてこれだけの集團をなしたもので、さもなくては殆んど宿場の價値もなさそうだ。只丹波山は氷川方面から馬車が通じないので、馬背によるとなると此處ま

で運んでこゝから鹽山驛に出ることも便利であるから旁々駄馬の宿場になつてゐるのだが、丹波山の荷物が青梅の方へ馬車で出るやうになるのも遠いことではなからうし、さうなれば大打撃に相違ない。南には横手山が鷄冠山に續き、東には藤尾山がある。北高橋との間には小さな尾根があつて高橋の村は見えない。その尾根の上に大鳥居が建つてゐる。水神社奥宮の遙拜所だ。水神社は北多摩の下流羽村の水道引入口に鎭座まします東京市水道の守護神であるが、更に東京市民の感謝の念を献ぐるために、笠取の東『ミヅヒ』(水干と宛字を書いたものもあるが水源に水干は緣起でもないと思ふ。稱呼は地名だから致方もないが宛字が必要なら他の字を考へたい)が多摩川の本源だといふので、其處の點滴の落ちる崖頭に水神社の奥宮を奉祀し、大正七年五月二十二日田尻子爵の市長時代に子爵自ら老軀を提げてその地に臨み鎭座式を擧げた、然し鎭座の場所が餘りに奥深いといふので此處に遙拜所を建てたのである。例年五月二十一日は水神社の奥宮の祭禮だが、土地の氏神たる鷄冠神社の祭禮よりも一層の賑はひでこの地方に書入れ日である。

八時十分、晝食所要品だけを殘して他は今夜の宿泊豫定地笠取山下の造林小屋に直送することにして出發、本日から水源林の春木、神森兩君も同行し、途中將監峠あたりまで同行するといふ落合駐在の巡査君や國有林の擔當區員君も加はつて却々賑やかだ。高橋の部落外れには鷄冠神社がある。昔は鷄冠山にあつたもので、武田信玄が黒川金山採掘の當時奉祀したものだが、金山衰へ武田氏衰へ黒川の部落も保てなくなつて、僅に居殘つた人達が糊口の道を日當りの可い平地に求めた、これが高橋、一ノ瀨等の部落である。神社もその際の移轉に係り、社名だけは以前のまゝを踏襲して來たのだといふ。社前に徑三尺近くの亭々たる老檜があつて樹齡凡そ四百年を越ゆと思はれ、年代も略々合致することになる。二十分ばかり小坂を登つて九時十分犬切峠に着く。一ノ瀨の部落を瞰下し、唐松尾から將監、飛龍に至る山容が眼前に展開する。犬切峠の名は一寸興味を唆るものがあつて誰かの記述にも色々面

白さうな傳說を載せてあつたと思ふが、高橋、一ノ瀨の人々に就いて調べても、椿說弓張月の須藤重季が忠犬の首を切つたなどといふやうな面白い傳說は一つもない、只『犬切といふ名なんです』と怪訝な顏をするのみである。

一ノ瀨から小山の裾を一寸廻れば二ノ瀨で三ノ瀨とは橋一つ、云はゞ一續きの部落である。山の峽の間に大分平地があつて耕地も相當にある、從つて民有地も多い。二ノ瀨の最下部に寺がある。これが小學校分敎場で七十才以上になる寺の老住持が先生である。天目山の分敎場と同じく一年より六年までの單級編成で、設備の不完全なことは勿論唱歌や體操などはテンデ分らない。それでも君ケ代は歌へねばならないので、坊さんの娘さんで鹽山の高等小學を卒へたのが手傳つて敎へてゐるさうな。これでも大正の小學敎育だ。山梨縣には山間の交通不便の爲め義務敎育免除の部落すらある位だからこれなどは先づ結構な部類だと聞いては日本もまだ威張れないと思つた。

三ノ瀨部落の背後から道は急に細くなりボッ〳〵と將監への上りになる。一ノ瀨から一時間で道は二つに分れ、右は新らしく出來た緩傾斜の林道で迂路にはなるが龍バミ谷源頭の所から將監峠に出で、左は急傾斜で萩原山七ッ石（雲取の七ッ石と區別するために萩原山を冠して置くこの地方では單に七ッ石といふ）を經て將監峠に通ずる（地圖にある直線の道）。一行はこの左をとつて、昔野火の入つたと思はれる萱交りの水楢の林を上る。日が照りつけるので汗が滲んで暑いといふ感じを抱ぎながら分岐點から五十分で七ッ石に着いた。木立のない萱地の中に大石の群が壘々と轉んでゐる、中で最も大きなのは恰も巨牛の蹲踞する形のもので脊の上に飛び上るには多少骨な位だ。この上から南方を展望すると甲斐駒から白峰、赤石、聖と一眸の裡に收まつて、近くは飛龍（私は大洞山といふよりは飛龍の名が相應はしいと思ふ）が一ノ肩を聳やかし丹波山の方へ長い尾を引いて威武堂々たる姿を現はし、その前の龍バミ谷には白樺の林が庭木のやうに美しく入り亂れて將に純黃色に染め出さんばかりであ

る。この絶景を前にして小春日のやうな暖かさに、一行は少時足を伸べながら白峰、赤石のスケッチに餘念がなかつた。

休息三十分の後又少し上つて牛王院平に出る。七ッ石から約二十分だ。圖の將監峠は平なタルでこの地方では牛王院平といふ、此處は平の入口である。小屋もあるが少し谷間に下りなければならぬので小屋の上の叢に休む。折よく小屋に來てゐた造林地掛の人夫にお茶を賴んで焚火を始める。七ッ石ではポカ〳〵と暖かつたのが此處では雲が湧いて風も冷たいのだ。晝食後尙焚火に暖をとつて一時二十分に漸く出發、道のない叢の間を分けて牛王院平の頭に出た。地圖の將監峠は原野で近く少し下つた所に見える。この平の一帶には落葉松の老木が點在してゐるが、風のせいもあり老木のせいもあり樹姿却々に面白く恰もコローの畫にでもありさうな圖だ。この間から地圖の牛王院山や二〇一一米の野山（所謂龍バミ山）を望んだ景色を二三枚カメラに收め、十分ばかりにして將監峠へ下り着く、この地點より稍秩父の方に寄つた所で雁峠の方へ行く林道が分岐する。例の井戸澤源頭の野營地には行つて見なかつたが、この分岐點から林道を二三町西に傳はつて二股の奥に出ても、水は潤澤、薪もあり露營には事を缺がぬ。

林道を傳ふと直に密林に入り約二十五分にして、道上の樹林極めて疎に萱を交へた丸い尾根に出會ふ、唐松尾に登る尾根である。道下は『トガノタワ』といふ、栂の密生した緩傾斜地である。これから尾根を登ること約三十分、樹は益々疎となり遂に殆んど原野となる所、此處を『ナツヤケ』と稱する。『ナツヤケ』から頂上は程近い、林道から五十分にして頂上に達した、時に三時二十分。頂上は南北に細長く、岩石崔嵬として歩き難いが、その北端からの眺望は洵に雄大なもので、雁坂の北側の水晶谷から古禮澤、瀧澤（木暮君のブドウ澤で、私は瀧澤と聞いた瀧川の本流の意だらうと思ふ）を初め最も近い所で枝澤、此の四本の喰込が深い眞黒い針葉樹の森の中に歷然と見下され、その深い谷底か

ら山の魔神にフラ〳〵と吸ひ込まれでもしさうに見える。荒川の奥は實に途徹もなく深い谷だ。これで三寶から眞ノ澤を見下したらば又一層の凄味を感ずるだらうと思つた。遠望は槍から大天井にかけて夕日に白く浮出してゐる。北の方淺間から棒名、妙義、赤城、特に妙義の諸山は岩の一つ〳〵さへ數ふることが出來る位だ、その奥の奥上州の山々、さては東の方日光山系の諸山、何れも亦一眸の中である。

時間の都合上長く展望を擅にすることも許されぬので、惜しくも四時に此處を辭し、南の頂上に戻つて西の尾根續きを一氣に下る、樹下の熊笹に惱まされながら幾突起を上下し、ミヅヒの澤に近い頭より急轉直下して五時半にミヅヒ着、水神社奥宮に參拜して直に出發する。これからは林道で、奥宮の參道になつてゐるから誠によく踏めてゐる。行くこと少時にして笠取の裾の野山となる。晝寐でもして見たいやうな立派な野原だ。道下の原の中に築山然とした小さな丘阜がある、この邊に採金の盛んな頃信玄が巡視して來て相撲をとらせて見物した山だといふ、嘘らしいが可愛い山である。ミヅヒから四十分位野道を氣持よく歩いて、六時十五分笠取の造林小屋に着いた。小屋は林道より一寸谷間に下りた所にある。雁峠からは見えぬが道に沿うて一ノ瀬の方に下れば十五分位で到達する位の距離である。地圖では雁峠の南一八〇二米の三角點の東の谷頭にあつて、丁度東山梨の『東』の字の所にあるのである。雁峠に野營するまでもなく此處は誰にも利用出來るし水も相當に潤澤だ。落合から荷物を送つて先着してゐる人夫はモウでかい火を起して一行を待つてゐた。

◇——雁坂——甲武信——三寶——梓山——◇

十八日。今日は是非ともミヅシまで行かねばならぬ、雁坂からミヅシまでの一日行程はこれまで再々記錄があるが、雁峠からミヅシまで突破した話は寡聞にしてまだ聞かぬ。尤も木暮君によれば雁峠、

雁坂間二時間としてあるから大丈夫決行出來ると思つてこの日程を擡へあげたもの丶、雁峠の方から來て雁坂で野營するのと、甲武信附近の密林中をミヅシに出るのと、着く時刻の關係では大分差を生ずる。正確に先例を踏襲するのでないから心配になる。私は不注意不用意に基く冒險はやりたくないばかりでなく、精力の浪費も出來得る限り避けたいから大事に大事をとる譯で、時間の計算では立派に符合しても、計算だけでは自信が生れない。況んや子酉川が危險だとか、鷄冠山が下れぬとか脅かされてゐては尚更である。

今日は殊に川鍋君に早起して貰つて、人夫を督勵しつゝ五時三十分に發足した。一體に曇つてはゐるが、甲武信方面の展望はきく。山の頂が白く見へる、雪には可笑しいと双眼鏡を藉ると確かに樹氷に相違ない。寒い筈だ、何かの變化なかれと祈りながら進む。この邊の野の工合は、落葉松の點々する度合こそ少けれ如何にも牛王院平に酷似してゐる。のみならず燕尾根の取つ付も笠取山も共に野山で、彼の龍バミ山と同巧の姿である。雁峠のタルは將監のやうにやはり沮洳の地である。宿舍の小屋を出て十五分、雁峠に辿りついて直に燕尾根に取付く、この取付の上に燕の形に似た燕石があるのでこのタルも燕(ツバクロ)のタルの名があり、尚秩父側に下つてから岩燕の群集する岩もあるさうで或はそれが名の起りかも知れぬ。又高橋の住民は古禮山などいふものはなく、雁峠から雁坂までの間を燕尾根といつてゐる。古禮山とか袴ゴシとかやかましい議論のある所だから、私は寧ろこの尾根を燕尾根と稱したいと思ふ。

最初は草ばかりの急傾斜の尾根を登つて頂上に達した。これより漸次針葉樹が多くなり終には非常な密林となる。第二の突起は尾根を行かずに東側を搦む道がある。第三の突起（圖の古禮山）も同樣だ。第四の突起（水晶澤と古禮澤との間の頂上）は頂上の切開けを通る。明瞭で別に迷ふやうな處はない。然し、下りには尾根が丸くなつて百米も下ると却々判り惡くなるが、右に沿ふ心算で行けば誤



三寶山の森林（五月下旬）　山本正造氏撮影



甲武信岳の森林　濱田和雄氏撮影

りなく雁坂の鞍部に出ることが出來る（圖上雁坂峠の南方の鞍部）林道（巡視の林道）はこの鞍部を通過してゐる。所謂雁坂峠はこれから三四十米上つた所に在る。これまでは密林であるがこのタルで雁坂嶺より急傾斜面をなしてゐる原野に出る。そこには老いたる落葉松が、秋風に鬚を振ふ老馬のやうに突つ立つてゐる。秩父側は凡て密林、霧は忙しく廣瀬の方から秩父の方に越える。展望も何もない。此處で焚火して休息する。雁峠より餘程急いだ積りだが二時間半を要した。

序に卑見を述べて見たい。袴腰の名は一ノ瀬、高橋では、ミヅヒより西、笠取の裾より雁峠まで位の原野を稱し、上狹まり下廣くして、その形狀が袴の腰板又は袴をつけた腰に似てゐるので名付くるといふのである。實際遠見からは地圖の笠取山は袴の腰板に類似してまぎれがない、甲斐國志の『山形の似たるを以て名とす』といふはこれに當るのではあるまいか。木暮君は地圖の古禮山を袴腰山とされたが山形は少しも袴の何處へも似通つてゐないやうに思ふ。又袴越で腰ではないといふ説もある、さうすると雁峠の越のことになるが、甲斐國志では山の名であるから腰を越とするは場所も略々當つてはゐるが首肯し難い。古禮山が秩父方面の稱呼であるのは古禮澤——元來は宛て字に相違ない——があるので明瞭である。コレイは方言『コレ』でコレッパ又は山ガンピョウともいひ、生にて汁の實となし、干して干瓢の代とするものでサワギバウシだといふ。袴腰といふから禮に因む。古禮可然などいつて古禮山と名けたといふ説も何かに見たやうだが駄洒落に過ぎない。餘りクドク論ずる要もないが考へたことを一寸序に書き添へて置く。

霧は益々捲いて來る、寒くはあり展望はなし、可い加減に切りあげて八時四十五分出發、直に雁坂嶺に登りかゝる。僅に二百米ばかりの上りであるが中々の急傾斜だ、それにコビソ（白檜の子）が簇生し間に倒木が足を絡むので僻易する。四十五分で頂上に達した。頂上から霧の間に槍や常念の山影を認むることが出來たが、栃本の方は全く見れなかつた。それより切開けに伴いて下り二三の小突起

を越え、十時四十分破風の下鞍部に着し小憩する。空漸く霽れて日光を見る。三人連の學生に出會ふ、二股を上り昨夜は木賊下の小屋に一泊したと聞いて、初めて小屋の出來たことを知つた。此處から二十分を費して東破風の頂上に登り着く。東破風と西破風との間は圭角のある岩石が列を亂して轉がつてゐる中に石楠やコビソが八方に蔓り這ふてゐる。去つて西破風に行くに餘程急いだが三十分を要した。これからタルに下り着くまでは二百米の峻崖だ。俯瞰すれば秩父の方も甲州側も屏風のやうな懸崖をなしてゐる、內百米ばかりは岩石のみの傾斜で、米栂やコビソなどが毛氈を布いたのにも似て生ひ茂り、その間に曾て木暮君や田部君を驚喜せしめた偃松が繁つてゐる。この高山性の斜面を見下した氣分は假令兩君ならずとも驚喜するに足るの情感である。後に眞ノ澤を下つた時に、木賊澤の合流點から破風を仰ぐと、直ぐ眼前にこの毛氈帶を見られ、一ノ股の上流から常念を仰いだよりも遙かに高山らしい氣分が私の印象に殘つてゐる。

これから鞍部まで下るのに霧でも捲いた時は困難だと木暮君の記述にあるが、それは大正初めの昔のことで、現在では登山者の頻繁なために足跡の垢が岩上に印せられて、何んな日でも路を失ふやうな憂はない。下の方の森林になれば切開けも立派にあることである。破風を地圖に破不と書いたのは誰しも誤りであると思ふが、私の山中卯吉から聞いた所によると破風に『破る』と『破らず』とあるといつてゐる。深く質す暇もなく今日に至つたが、破らずの方の積りで破不と書いたのかも知れぬ。信州の方では木賊（これは秩父の稱呼で甲州では戸渡尾根の頂上である）を破風といひ、地圖の破風は前破風といつてゐる。成る程國師あたりから見ると戸渡も破風の形をしてゐる。これが破ると破らずとの二つある所以ではあるまいか。陸地測量部の三角點名稱は破風は破不山となり木賊は單に破風となつてゐる。何れにしても尙精査して見たら隱れた事實が現はれるかも知れない。

十一時四十五分西破風頂上發、前記傾斜を下り零時二十分小屋に着いた。小屋は二間半に三間の丸太組、十四年十月十二日の落成とあつて、まだ間もないことである。然しモウ幾組かの宿泊があつたものゝ樣に見える、粗末な板に『飲料水は北方約四町の下にあり、東、破不山に一時間、西、甲武信に一時四十分にして至る。使用後火氣の始末及び雨戸を締めること』の掲示がある。東京出發前この小屋の存在を知つたらば多少の準備も違つたものをと殘念に思つた。小屋は當時の山梨縣知事梅谷君（今の長野縣知事）が縣の各所に建設した梅谷小屋の一である。梅谷君は偉大なる體軀に似合はず登山が好きで、不思議にも山の多い縣にのみ在任する。長野の高山も何れ同君の恩惠に浴して、登山者のため新施設を見るであらう。これまで來るとモウ心配はないので悠々と晝食して一時四十五分に出發する。近時甲斐山岳會の手入れと小屋の建設等のため切開けは立派で歩き易い。一時間にして戸渡尾根の分派點に達した。更に殆んど平道を五分間行くと二四六八米の三角點に到着した。地圖と磁石があれば迷ふ譯もないが、左に這入り込んだ切開けもあつたやうに思ふから注意を要する。木賊山と甲武信との切れ込は相當に深い。甲武信は此處から見ると小さな圓錐形の山で、西南方の大きな崩壞地を除き、他は眞黑い針葉樹の密林だ。三十分餘で甲武信の頂上に達する。將に四時に垂んとしてゐる頃である。

甲武信の頂は極めて狹い。然し平にされた地面に三國々境を劃する石積はある。空は晴れて夕日が隈なく三寶山を照らす柔和な姿の眞正面に巍々として突立つ三寶岩は確かに偉觀である。三角點の木組も見える、此頃人が來たのかとも思つたが双眼鏡を取り出す暇もなかつた。三寶と甲武信との間は緩やかなタルで、針葉樹の非常な密林である。清澄な秋の空氣を縫ふて夕日さへ照らしてゐるので尙更近く思はれる。木暮君が『距離も近く登り降りも少ないので容易に達せられさうに思へるが、さて木立の中に這入ると、白檜や唐檜の若木が透間もなく生へてゐるので通過に困難だ、四十分はかゝる

と見なければならない』といつてゐるのを想起し、田部君の記事の何處かにも『三十分で行ける』とあつたのを記憶してゐたが、如何にも近く見へ、木立の幹さへ見え透く鮮明な空氣に欺かれて、何に譯なく行けると一圖に私は信じた。のみならず此處まで來て三寶の山容を見ては、甲武信の上で眺望を恣にする暇もなく萬障繰合せて三寶へと向ふのは誰しも經驗する所だらうと思ふ位強い誘惑にかゝつたのである。

時計を見れば四時五分、そこで一行を二分し、春木、神森兩君は人夫を引率してこの下で分れてミヅシの小屋に向ひ、私は兒玉、中川兩君に川鍋君を加へ、そこから三寶を極めて後からミヅシで合することに約束し、よく〳〵不都合のことではあつたが、先も近いし後刻間もなく追ひつくからといふので川鍋君以外は各自の背負嚢を人夫に渡して空身で行くことにした。これが抑々運の盡きで、ために一夜の間互に苦心苦勞をしなければならなくなつたのである。

木幕君は『甲武信頂上から北に下れば切開けの失せた邊りから左斜に窪を下ると十五六町で側師の小屋に達する』といつてゐるので、これを賴りに北へ下ると切開けらしいのは直ぐになくなり、小ビソの下生が十重二十重で全く泳ぐやうだ。無理もない、木幕君の時から十五年近くも經つてゐるのだからその切開けを當にするのは當にする方が不都合だと考へて、一寸小さなタルに下り着いたと思ふ所から左斜に準備隊を分遣することにした。此處は小ビソの稍〻少ない所である。春木君等は一々適當の距離を置いて立木に鉈をかけてその經過路を示すこと、又小屋といふも小屋跡で今は小屋がないに極つてゐるからその積りで宿營の準備をすること、小屋があると思つて何處までも下らぬこと等を約して此處で分れ、私等は尙小ビソを押し分けながら三寶へと泳いだ。岩を目標にして兎も角も岩に近い所まで漕ぎつけたと思ふ頃、私等は次第に抵抗力の少い方向を選んで岩の右の方に當つて進んでゐた。もう頂上には程近いのであるが何しろ小ビソに石楠が交つて來た堅固な防禦壁をなしてゐるの

だから頂上が見えてゐながら近寄れない。その中前面を仰いでゐた一同がフト三角觀測臺上にカンバスのかけてあるのを發見し、異口同音に『人がゐるぞ』と聲をあげた。懸命に呼ぶと應へる聲がして、右に廻れば頂上に行けると敎へられたが却々右に廻れない。千辛萬苦の末漸くにして頂上から東方へ行く測量員便所への切開けに出た。時に早くも五時を過ぐること五分である。甲武信頂上から一時間を費したのだ。今までは非常な努力をして此處まで來たのであるから相當疲れてはゐるし、これから同一の時間で先發隊と袖を分つた場所まで歸れるかは疑はしい、のみならず三寶と甲武信の間のタルは極めて緩やかな殆んど平地みたいなタルで目印といふものが全くない、僅かの距離ではあるが日沒後になつたら徹宵でも間誤つくに充分な難所だ。

測量部員は人夫共凡そ十人近くゐる、主任者は若林測量師で、大震災後の東京灣沿岸の上下を知るためにこの三角點で觀測中で、目下富士の西の毛無三角點を觀測してゐるのだが、入山後彼是一ヶ月ばかりまだ意の加く測定が出來ないのでゐるさうな。若林氏の話によると、先日陸地測量部の三角課長が巡視に來られ、序を以て前の山（陸軍では三寶の三角點の名稱を甲武信三角點と稱してゐる、從つて我々のいふ甲武信岳はこの諸君には名無しの山である）に人夫一人を連れて出掛けたが、下の澤の所まで行くのに一時間半も費し、トウ〳〵屁古垂れて歸つて來た。私等が一時間で此處まで辿り着いたのは寧ろ驚異とすべきで、日が暮れると到底その調子でゆかぬから、これから下の水汲場から澤を下つてその方から行かれた方が可からうといふ。私等もこれに和して僅々十分にして此處を辭去し、眞南に立派な切開けを下つた。行程二十分の所に測量部員の水汲場がある、更に谷を沿うて下る。暮色に包まれ道も見えなくなつて來た。このまゝで下るのは不可能と思はれる。焚火でもして靜に待つてゐれば捜査隊にブツかること明瞭であるが、何しろ双物は總て別隊が有つてゐるし川鍋君所持の僅少なマツチでは一寸焚火も困難視せられる。蠟燭、マツチ何れも各自相當の分量を背負嚢に用意して

ゐるのだが此處にはない。食糧も川鍋君が多少のものを背負袋に收めてゐるだけだ。下れる見込がないから觀測臺へ引返さうかと相談すると、兒玉君が自分が一つ大聲で呼んで見やうとミヅシの方向に大分這入つて行つて呼んで見る。大きな尾根が途中に蹲まつてゐるのでこの放送固より先方に達しさうもない。お蔭で兒玉君はゲートルの一方を落して歸つて來た。一應引返すと決定しても、折角川鍋君の携行した提灯が底の一方が破れてゐて用をなさない、重ね〳〵當惑の所を、中川君が裸蠟燭を紙で包んで『燃える方を濕して行けば大抵保てる』といふ、實行して見ると風が大分出たが幸に消えない。針葉樹林の暗夜は文字通り咫尺を辨ぜぬが幸に火は消えずに五十分を費して六時半三角點に歸着した。日沒頃からの風は益々強く烈風となつて南より吹き上げ吹りをたてゝテントの裾を吹き捲つてゐる。谷の彼方から『オーイ〳〵』の叫び聲が風に送られて來る。此方でも一齊に大聲をあげて應へて見るが風に逆つて通じないらしい。若林氏とも色々相談の末、人夫の一人を借りて甲武信からの流に三寶澤が合する所にあるといふ測量師の小屋まで足勞を煩はしその邊で相當に呼んで貰ふことにした。刻々に時は過ぎるが谷間からは依然として呼ぶ聲が聞え聞いてゐる方でも堪らなく焦燥を感ずる。せめて先刻甲武信の頂上から双眼鏡で觀測臺を見て置いたら此處に人のゐることが先發隊にも判つてゐてお互に安心が出來たらうものをなど今さら愚痴な考が浮んで來る。若林測量師は『ブマになると總てがブマに行くものです、命がなくなる譯でなし、明日は譯なく會へますからマア今夜は此處でお泊りなさい』と慰めて呉れる。一時間ばかりの後に先に出した人夫が歸つて來て合流點まで行つたが何者とも會はず又呼ばはる聲も聞かなかつたと報告する。そこで一同はこれから提灯を借りて更に捜して見やうかと相談して見たが、果して都合よく邂逅へる見込もなし、若林氏の好意に甘へて一夜の褥を此處に借りることに決し狹いテントの中に割込んだ。若林氏はよくテント内を整理して我々に場所を與へ九時過には一同寢に就いたが、更くるに從つて益々颶々と吠へ狂ふ風にテントは物凄く

猛り騒ぎ、その間から遥かに人を呼ぶ聲が斷續して聞える。神經は彌が上にも尖つて却々に眠れなかつたが、轉て呼び聲も聞えなくなつて、濟まぬと思ひながらウト〳〵と淺い眠に入る。夢の内にも風の音は強い。

十九日。五時三十分起きてみると、濛々一面の濃霧だ、今にも降りさうで到底縱走の出來る日でない。朝食を濟まして將に出立といふ所へ、下の方から『オーイ』と呼ぶ聲がする。來たなと思つて應へると上つて來たのが人夫の政次郎だ。見るなり飛びあがつて『こうして居られて可かつた』と死んだ者が蘇生したやうに大喜びだ。若林氏にも厚く謝して八時五分政次郎を東道に發足した。二十分で水汲場、それから左に林の中を搦んで下ること三十五分、漸くミヅシの小屋跡に着いた。一同萬歲を唱へて再會を喜び携行の酒全部を傾けて祝杯を擧げた。小屋は全く廢址で骨組も殘つてゐない、只一方に側の削り屑が堆積されて小屋跡たることを示してゐるのみである、白檜の良材を惜氣なく伐倒し側にもとらず腐朽するに任せたのもあり、伐跡には身丈ばかりの鬼苺が時を得顏に生い茂つて餘り感じの可い野營地ではない。

雨は次第に降り出し雨足は早い。低氣壓は急に通過して了へさうもないので、鳩首凝議の末意を決して梓山下りと定める。十時三十分發、鬼苺の多い谷間を下ると二十分足らずで三寶澤の流に出會つた。これからは道はよく踏めてゐる。澤の合する所は極めて急傾斜であるが、その右側に昨年まで位は使つたらしい立派な側師の小屋が三戸並んで建つてゐる、屋根も壁もまだ四五年は確に保てると見られた。縱走する人は矢張り私等の先發隊が下りたやうに下つて此處まで來るか、又は三寶に登つてそれから水汲場を經て三寶澤を下れば容易に此處に來られる、三寶頂上から四十分もあれば充分である。此處に宿營して翌日はミヅシの頭を省略し甲武信からの本谷の左岸を斜に登れば譯なくミヅシの西南方の尾根筋に達することが出來る。この道は小ビソの繁茂がさほど劇しくないから樂に行ける、

甲武信の頂上から三寶をまはつて總計二時間位で充分だ。

本谷を下るに伴れ道と紅葉とは段々と立派になる。一時頃所謂八町ヶ原に入込んだ、今、牧場に使つてゐる、仕事に來てゐる百姓に八町ヶ原は此處かと問へば知らないといふ。間もなく牧場の限界の垣根がある。野は益々緩やかに、落葉松の群や白樺の若木が、犬牙錯綜して、黄や、萠黄や、美事な錦を展べてゐる。さうして野が延びて筑摩の本流に沿うてゐる邊り、誠に柔かな傾斜線を作つてゐる。戰場ヶ原の紅葉は遲れやせむと心配したのは無用であつた。これでは昔の落葉松の林が伐られて却つて戰場ヶ原の光彩を增したのではないかなどと讃嘆の辭を捧げながら一時五十分といふに白木屋に着いた。ミヅシの小屋跡から二時間二十分を要した譯である。雨は小降ではあるが尙歇まない。

◇——梓山滯在——三國山往復——朝日下ナギの小屋

——金峯——國師——黄蓮小屋——◇

梓山は千三百餘米の高さに位置し、多摩上流の落合邊りよりも、二百米餘も高いに拘はらず、割合に平地多く、川も中流の狀を呈し、一帶に純粹な奥山氣分に乏しい。村は大體に於て北面し何となく陰鬱である。然し、一燈數百圓も投じて電燈を點火してゐる有福な村で、落合や栃本の今尙ランプを點火してゐるのに比べて一層山村氣分を殺ぐものがある。總じて信州のこの山奥は何れの部落も有福で、一戸平均何萬圓の價値ある共有林を有つてゐるので、何百圓の電燈の如きは何でもない。金の多い共産主義は當節の流行に合はないか知らぬが、共産主義に隨喜するなら、一つ恁麼制度をロシア邊りに出品して威張つて見ては、など餘計なこともいひたくなる。流石に長野縣の村だけに、學校は隣の秋山にあるが餘程進んでゐるものらしく『草苗』とかいふ寫字雜誌を子供が發行してゐる揭示など見える。とても山梨の山村と比較にならない。白木屋は黒木屋で古色蒼然とした山臭い宿ではあるが、主人が親切、妻女や子供はよく働いて誠に感じの可い家である。



金峯山より見たるミヅカキ山　　中川金治氏撮影

二十日。 昨日と同じく霧深く小雨そぼ降る。到底出發は出來ぬが三國山が霧の中から姿を現はしてゐるので、散歩がてらに歩いて見る。村の少し上から本流に別れ、左の方三國から來る支流に沿うて上る。里近い森は今が紅葉の眞つ盛り、雨に濡れた風情は得もいはれない。道は次第に上る。落葉松の造林地もあれば燒畑らしい所もある。切り荒した所が多く、鬼苺が繁茂した所などあつて深山氣分は味へない。ボツリ〳〵と登つて二時間で三國峠の頂上に着いた。三國峠といふが三國山よりも少し西方にある通路で、路は直に上州神流川の方に下り、萬場に向つて通ずるのである。一方中津川の方への通路は、この峠から水平に東の方に絡んで進み、五六町も行つた所で下りになる。武州、上州、信州の三國の境なる三國山は峠とこの下り始まる地點との間にある小突起で、名は大きいが極めて平凡な山だ。それに村有林の悲しさ、樹はなく殆んど丸裸になつてゐる。戰場ヶ原邊りで神襟方が戰ひ、この三國山で戰は最も激しく、血は信州に流れてチクマ川となり、刀は武州に流れて荒川となり、御神體は上州に流れて神流川となつた、とは里人の傳說で、傳說は大したものだが戰場ヶ原などと異つて何の取り柄もない景色だ。中津川の方へ少し下つて見たが、雨は降るし展望はきかないので正午引返し午後一時半に宿に歸り着いた。

宿の主人に少しばかり山の話を聞く。大正五年七月、帝大生等四人の諸君が、甲州廣瀨奧にて遭難した時、當地にも大學から捜索方の依賴があつた。秋山邊りでは村中總出で捜し廻つたが、この村では自分が先に立つて、大學の人に、遭難は決して信州側ではない、分水界から此方、何れへ出ても下れぬ所はないし、少し下れば鷄犬の聲の聞えるやうな場所に、捜索するのは愚の骨頂だ。甲州分をお捜しなさいといつて應じなかつたが、果せるかなその通りであつた。信州側に事故の起らないことは私が保證するといふ。眞にその通りである。次には地名の話で、山登りの人々は何故か色々ありもせぬ名を付けて人を困らせる。度々書生さんにこの奧の八町ヶ原といふ場所を聞かれるがそんな場所は

ない。何でも戰場ヶ原の奥で秋山の人が牧場をやつてゐる所に當るが、これはモウキバといふ字の所で八町といふのは十文字へ登る八町坂の外にはない、多分それを轉用したものであらうといつた。記して江湖の參考に供する。

廿一日。豪雨で屋前の梓川も非常な增水だ。評議の末、さう長くは降るまいから晴れるを俟つて是非金峰には登りたいといふに一致し、梓山名物の馬鈴薯を蒸して、それを下物に低酌する。泉水谷で中川君に一寸引込まれた、薄志弱行の小生、トウ〳〵元の左黨に逆戻り、今日となつては中川君も僻易する位に復舊し、喧濶しに飮中の酒仙を學ぶ。所が宿の主人がまた我々以上の酒豪で何をやるにも一寸一杯、酒なくては働かぬ。妻君も心得てゐて買置をしない、入用の度毎に二三合宛買つてゐる、これも節酒の手段だ。使に行くのは何時も尋常六年位の惣領の女の子、此方も飮んではゐるが、こうなつては可愛想が先に立つ。宿を立つ時に少しばかりの心付を『殊勝な君の惣領娘に』と主人に渡して置いたが、さて子供の手に入つたかどうか。大分アルコール臭い氣もする。

廿二日。曇天だが雲次第に薄く低氣壓も愈々過ぎ去つたらしい。豫て案內を賴んであつた鷹野戶一郎がやつて來て正午から發たうといふ。十一時五十分宿を出で、村端れから直に上り、木材運搬の軌道に沿うて三四町、更に左に入つてダラ〳〵上りとなる。秋山部落脚下に見え、川端下川一帶の溪谷が眼下に展開する、この溪の原も亦見事な原野である。昨日の時雨に山も谷も映ゆるが如き一面の錦で、落葉松はまだ薄黃であるがコナラ、クヌギは全く黃葉し、山櫨の類や楓は眞紅に燃えて、秋や今は闌である。今回のやうな長途の、しかも高度の日々異なる旅行では、紅葉の程度も時々刻々に變るのは止むを得ないが、今日の紅葉ほど美くしいのは未だ曾て私の見ないものであつた。

新田に至つて川端下の谷に下り、川端下の部落の上を通つた道を次第に山つきの方に進んで落葉松林の中を行く。唐松シメヂといふ茸が所々に出揃つてゐる。落合の栗茸以來の好下物、出來るだけ採

り込んで行く。右方より流下する屏風澤を渡り午後一時二十五分大日堂と呼ぶ小堂に少憩する。堂は奇岩の下にあつて紅葉がこれを取り巻いてゐる。更に進めば小牧場あり、一時五十分川上林業會社事務所の掛札ある家の家の前を通過した。これから少し上ると、右の方から來る金峰山からの川と左から來る國師、朝日からの川との合流點である。金峯山よりの谷を上れば近いのであるが、途中野營の要があるので、小屋のある左の流をとつて進む。道は材木運搬の木馬道となり、間もなく木馬道は二つに岐れる。右は立派だが左をとる。二時五十分頃國師よりの流の左より來り會する所に出で、右をとつて、合流點より凡そ四五丁も上つたと思はるゝ頃小屋に達す。梓山から約三時三十分間を要した。

小屋は朝日岳よりの大崩壞地（地圖にもある）の尻にあつて、ナギ尻の小屋といふ。官林拂下の伐採小屋である。建物は小さいが同勢の泊るのには充分であり寢心地もよささうだ。人夫は別にシートを張ることに手配した。この邊りに至つて初めて落葉松の黃葉が最ッ盛りだ、赤味を帶びた黃色で、闊葉樹の黃色とは全く異り、何所にあつても截然として明らかな色合が誠に面白い。小屋の高度バロメーターで六三〇〇尺。

廿三日。今日は金峯に登り引返して國師を越え、戸一郎が多分國師の下にあるといふ泊るべき小屋の場所をも多少搜索せねばならぬから、三時半に起床して準備に着手した。それでも小屋出發は六時になる。曇天ではあるが降らぬのが何より、殊に寒氣が强いので、多分晴天になるだらうと見込んで出で發つ。戸一郎が昨夕、尾根までの所要時間は二時間乃至三時間といつてゐたが、峻坂ながら道はよく踏めてゐるし、傾斜も破風の登りなどよりは樂で一時間で尾根に到達した。この道は所謂甲州街道で、奥千丈の西側を經て黑平、西分に下つてゐる（バロメーター高度七六七〇尺、溫度は氷點）甚しく寒いので焚火して暖をとり、四十分餘り休息の後朝日岳に向ふ、立派な切開けがあつて三十五分

で頂上に達した。頂上には東方に少しく花崗岩の露出があり、西端には更に累々として多數の岩が露出してゐる、多少の偃松を除いては白檜の領域である。此處から道は大した上下なく密林の中を行くのだが、切開けは鐵山を通らずに稍北方を直線に金峰に向つてゐる、鐵山の山影はピラミッド型に樹林の中から窺はれるが頂上は非常な白檜の密林である。偃松中の小坂を登つて金峰の頂上に着く、朝日より一時間弱である。

金峰頂上は、東西に長く然し餘り急峻でない岩塊露出の地で、頂上一帶を除き、北側廻りは偃松が毛氈のやうに擴がりその間や岩石の間には寒臘梅が紅い實を結んでゐる、戸一面に勸められて食つてみると多少の酸味があつて頗る美味い。皆貪り食つて道が捗取らない位だ。中川君も兒玉君も山男の癖に偃松が莫迦に嬉しくて、此處は破風のやうに危險でないから、松の中に浸つて喚いて見たり、折つて見たり、結局松の中で寫眞を撮られる騷ぎ、全く罪がない。有名な五丈石は思つたほどに大きくはないが、八ヶ岳邊りからも確かに指摘せられる位だから相當なものだ、此處で偶然、昨朝梓山から發つた早大の會田君等の一隊に出會ふ。川上林業事務所から西方の澤を上り昨夜はその澤の源頭に露營したとのことであつた。

去來する霧の間に南方甲斐駒から白峰赤石聖に至る山々が隱現する。八ヶ岳の赤岳も突兀として霧の中に怪物のやうに顏を出すが横岳や夏澤峠は遂に姿を見せぬ。それでも早大の會田君は、これまで數回登つたが何時も天氣に惠まれず、今日位平和な天氣に歷然と白峰、赤石を見たことはないといふ。脚下の黒平の溪谷や增富のラヂユウム鑛泉なども俯瞰される筈だが、これは霧に遮られて見れなかつた。只早大の諸君が勇ましく下つて行つた增富への尾根が、現滅して偃松の脊を見せたばかり。瑞牆の岩山が海中の暗礁のやうにポツ〳〵と頭を出すのが眼に映る。

頂上に遊ぶこと一時間半にして十時四十分出發往路を引返す、一時間二十分で焚火をしたタルに歸

着、晝食、休息一時間の後又國師の方へ登りかゝる。密林中の切開けを辿り、約百米近くの高距を上下して、三十分にして、『川端下の東のタル』に着いた。地圖にて略々東山梨、中巨摩の郡界と縣界の行合つた所に當る。南に緩く傾斜した平坦な場所で、白檜や白樺の混淆せる林の中を滾々と湧く泉が緩やかに南に流れる。甲州荒川の源頭なのである。林下は下生へもなく鮮苔蒸すばかりで、草は一面に天鵞絨を展べたやう、そのまゝに茵とするに充分である。

縱走を計劃した當初、甲武信と金峰の中間に、餘り谷に下らないで適當の野營地が欲しいと色々記錄を搜しても見當らぬ。木暮君に相談すると『何うも谷に下るより外はあるまい』といふ。梓山滯在中、早大の會田君も『屢々やつて來るが尾根筋には適當な所がない』といつた。然るに戸一郎が遊びに來た時聞いてみると言下に『それは譯はない、國師の下に丁度恰好な所がある。尾根を行けば嚴でも通らなければならぬ所だから敎へるまでもなく直ぐ判る』と答へたが、成程行つてみると誠に天與の野營地で、薪は豐富、敷草は要らず、清泉近くに湧き出で、氣候は暖かいといふ凡ての條件を具備してゐる。近頃村の靑年等が大分通過すると見え、拙い樂書で『この先に可い泊り所がある』など木を削つて書いたのが近所に屢々見受けられる。最近登山の諸君には既に知られてゐることかも知れぬが、私はこの結構な場所を一人でも多くに紹介したいと思つて此處に記す次第である。名稱も川端下の東のタルといふのは長いから、國師野營地と稱したい。此處から國師の頂上は上り一時間弱、下り三十分位の所である。又此處から川端下の方に谷を沿つて下れる。但し途中にナギがあるので左に避けなければならぬと戸一郎はいつた。

國師の前岳（地圖の國師三角點の西方圓圈の所）まで依然たる密林を上る。此處で專門家には可笑なことだらうが、我々には大問題が起つた。私はさる針葉樹の葉を調べてゐたが、白檜に似而非なるものを發見した。中川君に尋ねても判らぬ。兒玉林學士は岩石の名はチョイ〳〵地質學者らしく敎へ

て呉れるが、一たび樹の名となると風馬牛相關せずといふ有様だ。そこに戸一郎が口を出して『そりヤブサだ』といふ『ブサたア何だい』『白檜たア違ふよ』さてこうなると各自に說を持出して埒が明かぬ。結局『武田博士にでも聞いて貰ふかな、それとも兒玉君、大學ででも調べて呉れるか』位で結論になつたが、それが後日山林會の『森林家必携』を偶然に見てゐる中、青森トド松の異名と判つて、道は近きにありとはこのことだと大笑ひ。

時々霧が捲くが、天氣は大體よくなり眺望もきく。此處から金峰朝日を望むと崢嶸といふ形容はこんな心持かと思ふ位の雄大サである。金峰は八幡山を經、木賊峠の方に長い〳〵尾を延ばして、峠は遙かに小さな凹形をこの線の上に示してゐる。それを右端とし、左端には奥千丈から劍ヶ峰の方へ下つた尾根があつて、此兩尾根の中央の凹みを荒川の水が深く刻み込んで流れる。恰かも大自然が兩巨掌を廣げて青空を掬ひ上げてゐる容で、その緩やかに傾斜した谷一杯が、折々霧の通過するに伴れて走馬燈のやうに動く。飛行機で滑走でもやつて見たい心持がする。紅葉はこの大溪谷を色とり〳〵に染揚げ、特に落葉松の褐黄色の彩が、元崩壞地に飛込んで繁茂したことを物語るが如くに隨所に帶のやうに長く各種の曲線を畫いた樣は得もいへぬ配合である。霧は刻々大きな刷毛を以て刷くやうにこの巨掌を撫でる、その度毎に滿溪の紅葉がサッと動く、實に名狀し難い一幅の活動寫眞である。一度この澤を秋の眞中に黑平へぬけて木賊峠へ越えてみたいと思つた。

前岳には偃松が少しある。此處から木賊、甲武信、三寶を並べて見る。東股頭までの尾根が國師からグッと肱を張つたやうに北に突込んでゐる。三寶が綺麗に夕陽を受けて、先頃狼狽した我々を嘲笑つてゐるやうに見える。國師前岳から奥千丈までは平坦な道で、上りといふ程のことはないが、偃松が殆んど金峰に次ぐ位に蔓延してゐる。所謂奥千丈の頂上は、小岩塊の累々としてゐる中に苔桃などが繁茂してゐて、「大嶽山奥の院」の碑も見へる。黑金山までの尾根は歷然としてゐるが甲州平原は全

く霧の海だ、奥千丈のことに就ては木暮君の研究極めて詳細なるものがあつて、未熟の私が敢て異論を立てる譯ではないが、只實地に臨んでは、國師と奥千丈とを別物扱にすることは、聊か不自然の感あるを免れない。これは恐らく極めて漠然たる地理上の知識に基いて命名されたものを、正確な地理上の測定に當て嵌めるのによつて生ずる避け得ない矛盾であると思ふ。然し別に異論を提唱する根據もないから只私の感想だけを申述べるに止まる。

國師の頂上は奥千丈から一寸低い。多少の岩塊はあるが極めて平凡な所だ。三時二十五分辭して下る。切開けは餘り明瞭でない。密林の中で下生へも少ないから何處でも行けるが、少しく甲州側に入つて覗くと深溪窅然といふ落だ、二十分で甲州側西澤の頭、更に十五分で石塔尾根の本尾根と分れる所に至る。戸一郎によれば成るべく甲州側に外れぬやうに尾根を下らぬと危險ださうだ。下ること四十五分、殆んどタルに下りつかんとする際に左に信州側に外れグッと下ること十分、四時五十五分に今夜厄介になるべき小屋に着いた。小屋は黄蓮小屋と稱する。附近に黄蓮の多いより起つたものだらう。最々に造つた三棟の粗末な小屋である。昨夜泊つたナギ尻の小屋はまだ五六年は大丈夫だらうが、この小屋は大雪でも降つたら何うかと危ぶまれる程の側師の小屋で今盛んに國有林の拂下材で曲物側の製造中である。密林中にあつて北向の寒い所なので、本月一杯で仕事を休んで引揚げるといふ。幸に最上段の小屋が空いてゐるのでそれを貸して呉れたが、眞に雨露を凌げるといふ程度のもので、碌に壁もない。今夜は寒さうである。萬一の用意にと携へたウイスキーなど取出して寐に就く。谷頭で水には七八十間も下らなければならぬが尾根は非常に近い。野營の登山者は心掛けて利用せられたら可からうと思ふ。

◇——東股頭——三寶——眞ノ澤——栃本——◇

廿四日。晴。野營に毛の生へた位のこの宿營の夜は隨分寒かつた。二時半には既に目が覺める。二時四十五分起床、人夫を督勵して準備を急ぐ。朝寒に慄へるばかりだ。六時出發斜に左に上り六七分で尾根に取つく。此處は信州澤の源頭のタルである。更に行くこと四十分にして東股頭に着く。これから見ると流石に國師奥千丈が高く見へる、その頂上から二ツ目のタルに岩塊の突立つた所が大嶽山奥の院の所在だ。石塔尾根の凄い姿もよく見える。これから信州側の入り込んだ窪を唐松窪といふ。崩壞地であつた所に生へた唐松が多いので命じたのであらうがその黄葉も觀賞するに足りる。梓川の東股の發源地である。此處からズッと北の方に入り込んで二十米以内の小突起を上下し更に右折して東股ノ頭より一時間十五分を經て龍門ノ頭（宛て字）即ち釜澤の澤頭に着く。奇岩が釜澤の深谷に峭立して、上から見下すと膚に粟を生ずる程物凄い。鷄冠山も眼下に見へる（龍門ノ頭とは戸一郎が教へて呉れた名で、一寸名があつても可い所だと思ふので記錄した。富士見に分れる二三七九測點の直前にある小圈がそれである。岩は圖に記載がない）。

八時二十分發、同じく密林中を上下し、三十五分にして二三七九米の地點に着いた。國師の方から來れば木暮君の注意にもある如く、餘程氣をつけなければ二二四九米の三角點の方へ迷ひ込むやうになる、國境の尾根は急に右折しグッと下り坂になつて恰かも甲州の方へ下るかの心地がするから間違へるのである、のみならず切開けが不明であるが、富士見の方へは坦々と且つ踏めた道が通じてゐる。先頭の春木、神森兩君は果して富士見の方へ行つて了つて、大聲で呼んでも答がない、致し方なく休息して人夫をやつて呼び返さしたやうな始末である。急傾斜を下ると間もなく小ピソの密林が現はれた、切開けの際と側製造のためか大木は倒されて、遙かにミヅシの頭を望見することが出來るが、この密林を泳ぎ渡るのが却々の骨折だ、切開けは全くない、否その後に出來た下生えが成長して切開けを塞いでゐるのである、倒れ木の上を渡るやら、小ピソの中に陷沒するやら難澁を極めて、ミヅシ



千丈頭より金峯山及朝日岳を望む　　中川金治氏撮影

の上りに取つくまで四十分近くを要した。

少し上つて國境を離れ、左に澤へ斜に下る。實は先日三寶の若林氏に救つて貰つたが、それ以來天氣工合が悪くて到底毛無の觀測の出來た筈もないから、今日は是非甲武信を通る代りに三寶を通つて、若林氏にお禮も申し併せてその折出來なかつた展望の埋合せをしやうと三寶澤の出合を目當に下るのである。人夫等は甲武信經由を希望するので、今日は前の覆轍を踏むこともあるまいと、望に任せ甲武信から眞ノ澤へ林道を下りかゝりの所で待合せるやうに命じ、私等は戸一郎だけを伴れて分れた。谷に下りつくまでは心配した程の小ビソもなく、僅に十分で三寶澤の合流點に達する。直に急傾斜を上りお馴染の水汲場に出て、兒玉君の落失した卷脚絆を弔ひつゝ登つた。一寸斷つて置くが兒玉君は物を拾ふに妙を得てゐるとみへ、先日一方の分を落してから、その後梓山に下る途中、丁度誰かの落した卷脚絆を拾つて借用してゐる、梓山でも賣品がなかつたので今も使つてゐるが、大して色も違はず、間に合つてゐるから面白い。さて三寶三角點のテントに着いたのが十一時十分、國師の下の黄蓮小屋から休憩時間を加へて五時間十分である。この三寶への近道は戸一郎も初めての模樣で、面白い道が見つかつたと喜んでゐた。

若林氏には待設けぬ再會とて大に喜んで貰つた。積る話をして晝食、序でに三角觀測機を見せて貰つて甲斐駒を覗いてみた。少し靄があるので瞭然とはゆかぬが、摩利支天の地獄谷の所などは手に取るやうだ。觀測臺からの展望は誠に雄大で、遠方は靄に隱れてゐるが、來し方の金峰國師から富士見にかけての蜒々たる尾根、それを昨日から踏破し盡したかと思へば人間の足も莫迦にならぬ、紅葉は三寶澤から……それが實に甲武信との間の殆ど平坦な澤……本流への澤にかけて、上方手近な所は殆んど散り果てゝゐるが中央は淡く下るに伴れ次第に濃く一面に紅葉してゐる。栃本の方、眞ノ澤は三角點が少し西に寄つてゐるのと東の方の樹に遮られてよく見えない。序に記して置くが、戸一郎は三

寶と十文字峠との間に林道はないといつてゐるが、早大の會田君が白木屋での話には立派にあるといふし、木暮、田部兩君も共に亦林道があると記してゐたのを記憶してゐる。そこでこれを若林君に質すと『此處に着いた直後に、梓山との連絡の關係上、萬一の用心に十文字峠との連絡をとる必要があるので、先づ此方から試みたが、到底行かれぬとて空しく引返した、そこで更に十文字から這入らしてみたが、これも同じく道を見出だせず、苦心の後漸く此處に到達した、道は全くないのが事實だ』との話であつた。秩父の記錄は最初の本誌の記錄からすれば既に時日を經ること十五年に垂んとする今日、多少の訂正も必要であらうが、兎に角十文字、三寶間には現在林道らしい通路みたいなものはなく、切開けも不充分だといふから四時間位で通過は困難と思ふ。

零時四十分發、若林君は『トド松の杖でも切りませう』と一緒に送つて來られる（同君は北海道に三角測量に行つてトド松を知つてゐるが此處のはそれとソックリだからトド松と呼んでゐるとのことであつた。或は此處の白檜らしいのは例のブサかも知れぬ）先づ三寶岩に上る。それは水汲場への道を下ること一二町で、左の一寸小ビソの薄い所から更に左折すると直に岩に出る、岩は丸い凹凸のある頗る大きなものだ。五丈石のやうには角がないが大きさは彼にも優る位である。岩上に若林君と並んで撮影した後、尚岩に沿うて東に向ふ。岩を東に廻り盡した位の所に小ビソが薄くなつてゐて、其處から林中に入つて下生へのない所を沿うて右へ左へと下ると何等の抵抗なしに林道へ出た。甲武信の方から林道を下るならば、三寶と甲武信間のタルよりも尚右へ構はず下つて行くと、右に彎曲して今にも眞ノ澤へ下りにならうと思はれるばかりの所の少し手前、左に小ビソの少い所を左に這入り込んで、澤みたいな所を上り、成るべく左上へと進んで抵抗の少い所を三寶岩の方向に志して上るのである。この入込の所を誤りさへせねば苦もなく達せられる。入込の所に樹でも倒つて置いたらばと、何時まで認めることが出來るかは判らぬが一行は大分削り込を拵へて來た、今も尚識別が出來るだら

うと思ふ。甲武信から三寶に行くのは小ビソの困難もあるだらうが又億劫も感ぜられるのか、若林君が三寶に來て今日まで彼是五十日近くまだ一人もやつて來ないとのことであつた。若林君とは午後一時二十分に林道の所で別れた、撮影や何かの時間を加へて四十分であるから、直行したらモ少し短縮が出來やう。後、昨年春同君は態々拙宅に來訪され、三寶頂上の小ビソで拵へたステッキを贈られた。私はこれを『三寶杖』と命名して秘藏してゐる、今もこのステッキを手にすると三寶頂上の颯々たる風の音を想起せずにはゐられない。

人夫は眞ノ澤を少し下りかけた所に焚火して一行を待つてゐた、時に一時三十五分。直に下り始むる、相變らず密林で、唐檜と思はるゝ單純林もある。二十五分足らずで眞ノ澤の水が流れ初むる所に出た、荒川の眞個の源は此處である。林道は急傾斜ながらも却々立派に出來てゐる、然し、開鑿後修繕の金がないとみえ、橋には橋柱が朽ちたり橋桁が折れたりしてゐるのもある、渡橋が危險だから態々谷に下りて向岸に渡つたこともある、尤も橋が愈々通れなくなつても、少し奮發さへすれば別に迂る方法もあるから將來通行には差支なからう。只恐ろしいのはナギである、私の通つた際は別段の崩壞も見當らず、密林だから將來も容易にありさうにも思はれないが、油斷はならぬから、警戒して豫め調べてかゝる必要があらう。道は段々下り椹（サワラ）の自然生が見え、栂も見え初めた、紅葉は段々と可くなる。二時四十五分に木賊の小屋場の上（小屋跡は道の下方谷際にあり）を通過す、トクサが樹下一面に簇生してゐる。木賊の澤は向側から落ちて來る、破風は直ぐ眼の上に聳立する。更に下ること十五分、所謂「大瀧」の上に至る、橋が落ちてゐて、双方は斷崖、水は深いし、一寸通れぬのであるが、幸に、切倒された巨木が丸木橋となつてゐて通行に事を缺がない。これも數年は朽ることはない、向ふに渡つて川の右岸から瀧を覗く、高さ三十丈もあらう、半以下は樹に縋つて俯瞰しても見られない、水聲轟々、可なりの壯觀だ、これが大瀧村の名稱の起る大瀧だと戸一郎は說明した。ヒタ下りに下ること

五十分餘、三時五十五分に柳小屋跡に着く。最初黄蓮小屋を立つ時は、此處を今宵の宿營地と豫定して置いたが、さて此處まで來てみると、山柳の一本薄條たる下に如何にも濕潤らしい到底一夜の茵にも閉口するやうな場所である。私は主として長驅栃本行を主張した『まだ四時だ、三時間もしたら栃本に着けやう』戸一郎は當惑顔『行けといやア行くだ、仕方がねエが、大分かゝるよ』といふ、一行中にも贊成しない顔もあるやうだし人夫は殊に不平顔だが、太陽はまだ西の空に高い、行きたい身になればまだ暮れるまでには大分時間がある氣がする、實際川も餘程大きくなり道も平垣になつたので三時間位で栃本に着ける積りであつた。そこで兎も角も行程を續けることになり歩調を早めて一路栃本に向つた。間もなく左岸に渡る、これから大學演習林となりとり付に澤胡桃が植ゑてある小平地がある。多少の上り下りがあつて一時間半ばかりの後十文字峠から來る赤澤谷を渡る、大きな楢や桂のある深い谷で、水の深い所は大木の丸木橋を渡るのであるがよく見えないので眼の惡い川鍋君のために心配した位だ。此處から栃本はモウ二里位と思はれるので、急げ〳〵とヒタ押しに進むと、暫くして右手の薄明りに白石山の尾根らしい長い廣い尾根が木の間から見える、次で杉の造林が出て來る、炭燒の小屋が道の下にある、モウ一里位だらうと急ぐ、本隊は遙か後ろに遲れたため先頭の私等には蠟燭がない、この先まだ栃本まで何の位の路程があるか、戸一郎は默して語らず、此方も敢て問はぬ、モウ着くか〳〵と思ふが却々栃本らしいのが見えぬ、何所までもクル〳〵と左方から出て來た尾根を幾つも廻るだけで二里も來たと思つたが依然として島らしいのさへ現はれない、闇は益々濃くなるし行程は却々捗らない、我慢して又一里近く歩くと漸く栃本の部落に出た。投げ入れらるゝやうに大村の宅に飛込んだのが八時三十分、柳小屋から三時間位で着けるといふ私の心算は見事裏切られて殆んど五時間近くかゝつた、後續部隊が着いたのは正しく五時間の九時だつた『これはえらい奮發だつた』と私がいへば戸一郎が『東京さアけえつて御自慢が出るめエ』と皮肉な笑を浮べた、彼も案外

隅に置けぬ男である。

諸戸博士から秩父町の大學演習林に知らせてあつたとかで、先日主任の人が來て二三日待つたさうだが餘り到着が遲いので歸り、代つて端といふ助手の人が來て待つてゐるとの宿屋の話に早速端君と會見して明日の打合せをする。今まで色々聞合せても正確なことの判らなかつた大日向から日原間の行程が氣にかゝるので端君に質すと、大日向に演習林の定夫がゐるからその邊で何とかなるだらうとのことに、先づ安心して寢に就く。

◇——三峰——大日向——酉谷山——日原——小河內鑛泉——◇

廿五日。晴。昨日の疲勞と今日の日程の見當が少しもついてゐないので朝七時起床、門前に立つて展望する。栃本は一體富有な村らしく、白妙岩の方から來た南向の傾斜に建並んだ部落で、前には大瀧川が彼是二百米近くも深く喰込んで、その上に白石山が突立つてゐる。西方には三寶と甲武信と相並び、雁坂嶺は眼の上に如何にもそゝり立つたやうに聳えてゐる。昨日下つた三寶からの眞ノ澤も極く手近にあつて相當に急いで下りに八時間近くを要したとは見えない。

九時出發、十時廠生を經て大洞合流點だ、今日の夜に入つた時の用心に小店で蠟燭を買入れ、これから三峰の裏參道を上り初める、輕蔑してかゝつたせいか相當にえらい、十一時四十分三峰山着、總門で許定の結果、大日向邊りで酉谷山越のことを充分に調べて置かねば不測の失策をするかも知れぬし、又氷川着は遲いに定つてゐるから途中まで迎を出して貰ひたいと川鍋君に先發してこの任に當つて貰ふことゝし、一名の人夫に必要な荷物を脊負はして直に發足して貰つた。他の人夫はこれから先は不必要だから雲取越で落合に歸すことにして、一行は兒玉、中川、春木、神森の四君と私及び大學の端君の六人となつた、禮拜その他を濟まし充分に晝食の饗應を受けて午後零時四十分發、一時三十

分奥の院妙法嶽の入口に達す、參拜は後日に讓つて、莫迦に長く山腹を搦んだ後、急坂を下り二時五十三分太陽寺を通過、總門から町目標のある道を下つて三時十五分大學演習林出張所に着いた。生憎定夫は家族と共に山に行つて不在川鍋君は何の申殘しもなく事情全く不明である。同行の端君が心配して、事務所前の民家に事情に通じた人がゐるとて案内して呉れたが、遂つてみると先方の若い口髯の人は先づ私の頭から足の先まで檢査する樣な眼つきで見上げ見下しながら『天目山（酉谷山）の峠上まで私が先日一時間半かゝつた、貴下方は見受ける所、尠くも二時間はおかゝりでせう、マア日一杯ですな、それから日原までが大變ですぜ、日原へは谷通りは路が荒れて駄目ださうですから尾根通りをおいでなさい』といふ。兎に角川鍋君も既に行つて了つて、騎虎の勢泊る氣にもなれず、三時五十分出發した。この事務所は大血川の西谷（往年木暮君あたりが道に迷つて炭燒小屋に泊つた谷、今は大學の演習林でボツ〳〵と造林中）と酉谷山から來る東谷とが合流せる點にある。

一行は一應東谷を渡つてその右岸に沿うて上つた、二十分も行くと端君が道上から呼ぶ、定夫君が家族と仕事に來てゐるのである『今から日原に行くのだが君も行つて貰ひたい、君は日原に行つたことがあるのか』一回行きました、谷通りで大分えらうござんすぜ』定夫君は早速道具を妻君に抛つてその儘同行する。道は又左岸に移る、初めから二十四五町も上つた所で岐路があり、右の谷を沿うたものが廣くて立派だが左の方を取つて上る。二三町で又岐路に出で此處は右の方を取つて上る。これから峠まで岐路なく間もなく殆んど谷の磧を上るやうな所が續いてゐる。以前炭燒小屋であつた一棟のある邊りから端君が次第に遲れ出した。定夫と春木君が先頭で三十度位の傾斜を殆んどその儘に登るのだから動もすれば辷り落ちる。仰げば峠と思はれる所が木立の中に薄く凹んで見えるが、道は急峻なり休む時間はなし苦しさを堪へて登る。四十位の男の下つて來るのに會ひ、川鍋君のことを尋ねると峠の向ふで逢つたとのことで尚『日原行は谷は駄目だよ、わしも尾根通りして來たんだ、若エ人

も尾根を行くといつてゐた』とつけ加へた。お蔭で川鍋君の消息も判つた、我々も尾根を行くことに決心した。六時に峠に着く（圖の天目山の「目」の字の上のタル、北方の小圈はタルから二十米以上の高さのやうであつた）正味二時間で約九百米餘を上つた譯である。これから山の北東側を絡んで水平に進み尾根を廻はると東京府内に入る。二三十間下れば筧の音がして小さな小屋を發見した、峠から十五分、日は峠からは全く暮れ果てた。中川君は例の通り殿りとなつて最後に上つて來て『端君が急に工合が惡くて下の小屋の近所に寢てゐる、あの樣子では上の小屋に泊るより外はあるまい、兎に角定夫君は早く行つて呉れ』といふ、先着の定夫は驚いて端君の許へ急いだ、何しろこの定夫は一行中大日向、日原の經驗を有つた唯一人者であつて、例へそれが澤通りであつてもこの男がゐれば何かにつけて心強いのに、端君の急病でこれも行かれなくなるとはよく〳〵のことだと勘からず閉口した。

發見した小屋には七十位の老爺と、蓬のやうな亂れ髮の五十位の女とがゐる。武者修行にでもありさうな幕で、三坪足らずの家に床も完全になく立てば頭をうちさうな屋根である、入つて爐邊に近寄ると中川君は驚いた樣な聲で『お爺さん！此處にゐたね』と、老爺はキョト〳〵と中川君を視詰めて『あなた！お珍らしい』この老爺は落合に人夫をしてゐて四五年前に中川君の配下にゐたことがあつたのだ。女の方は數も碌々辨へない頭の持主で、年も二十も違ふのを夫婦らしくしてこの千七百米の山頂に竹の柱に茅の屋根といふ住居、職業はこの頂上の野に無限にある萱を原料とする炭俵の製作で、高度に於ても生活に於ても全く浮世を超越してゐるのである。お茶を貰つて夕食、道を問ふと『尾根通り』といふし、幾時間かゝるかと問へば『大分かゝるよ』で要領を得ないこと夥だしい。女の話の中に時々『隣り』『隣り』の言葉が漏れる、何れ餘程離れた隣りであらうが、其處でゞも尋ねやうと七時に出立する。只川鍋君が一時間ばかり前に此家で憩つて尾根通を行つたことだけは明かになつたの

で大に安心した。

この家を出て萱野の中を切開いた道を上る、霧は非常に強く寸前も見えぬ、南の方から異常の速さで吹き上げてブッつかる外套も直に滴るようだ。尾根道といふのだから少しでも下りになつて谷間にでも外れやうとすると心配して考へる。老婆の所謂お隣りは隨分遠い、三十分にして漸くタルの小平地らしい所に出ると果して其處に二軒の小屋があつた。火のある方に向つて呼んでみると女の聲で應へる、戸口と思ふ所から無理に突入すると、これはしたり子供の寢てる直ぐ際に轉がり込んだ、お婆さん驚いて『そちらは入口ぢやあねえよ』裏口の防禦の薄い所から潜り込んだのだつた。聞いてみると先刻若い人が一人、人足を伴れて道を問ふたので主人が教へに出て行つたといふ『あんた方行かっしやったら屹度會ふべエ』と嫁も一緒に口を添へる、側ではまだ寢付かない男の子が呆れ顔で私等を覗いてゐる、この家も炭俵製造業だ、これなども先頃の國勢調査に洩れてゐるのではないだらうか、原籍を質すと『浦山の方だ』の一點張である、子供もあるによくまあ呑氣に居られたことだ、などと餘計なおせつかいを考へながら辭去すると間もなく道が二つに分れたやうな所に出る、左の方に萱が折られて新しい紙が結びつけてある、一同期せずして同音に『川鍋君の氣轉だ左に違ひない』と進んで行く、ものゝ三十分も經つ頃下の方から火繩銃を擔いだ四十男が上つて來た『あんた方が後の組か、今若エ人を送つて來た、判らぬ所には若エ人が一々しるしをつけてあるで』と告げ更に語を繼いで、途中左に浦山に入る道があるが下りだから迷はない、又石橋尾根といふ岩ばかりの難所があつて其處を過ぐると道が秩父側木山の中を行く所があるが又直ぐ野の尾根に出る、といふことなど懇切に教へて呉れた。晝ならば無論のこと、夜でも月明に多少の展望でもきけば、中川君初め多摩溪谷を知り拔いてゐる諸君がゐるし別に心配は要らぬのだが、何しろ月はなし霧は深く吹雨みたいにブッつける。これで晝だつたらナアンだと鼻であしらうやうな所で難儀してゐるに相違ないと一同大に憤慨するが何とも致し方も



千丈頭より見たる三寶山　甲武信岳　木賊山　　中川金治氏撮影

ない。

八時四十五分、岩石の峭立した絶壁らしい所に來た、石橋尾根である。岩と岩との間を渡るのが誠に危險で、岩の高さや谷の工合は判らぬが只絶壁たることは間違はない、霧は益々深く旦急速にブッつかって動もすると提灯は消えさうである。前後相呼應して警戒しながら漸く通過した、その後は道を誤つて引返し大騒ぎで調べたことがあつた位で、川鍋君の紙の道しるべや、折かけの樹の枝などを頼りにして十時十分一抔水の本道に出た。道の中央に紙を挿んだ木の枝が建てゝある、見ると川鍋君が一時間前に通過したことを認めてゐる、同君の無事が判つて一同安堵したが、一體今夜は氷川までの豫定なので、川鍋君は三峰で別れる時倉澤通りが有利だと主張した關係もあり萬一倉澤通りをとつてゐればイヤでも氷川まで行かねばならぬ譯だ、日原通りなら氷川泊りを止めて日原の宿屋『山上』に泊れるのだが、と取越苦勞をする、二十分經つて倉澤の分岐點の標示のある所に出ると又例の紙があつて『日原へ——川鍋』とある、これで愈〻安心、もう下りさへすれば可いと一同聲をあげて喜んだが、さてさうなると足が少々重くなつた。下りは急になり小石は多くなる。愚痴りながら十一時五十分漸く日原の宿屋に着いた。家の上の道から同家の人聲を聞いて先着の川鍋君が話込んでゐるものだと思つて庭に入ると大勢の人が木戸でガヤ〳〵と話してゐる、開けば郡長の巡視があつたので村の有志がその宿に來てまだ散ぜぬ所へ、川鍋君が着いて一行が途中で難澁してゐると報じたので、昨年來た時に舊知の人々ばかりだから青年會でも驅り出して救助?に行かうかと相談最中の所だつたのだとの事で、早速祝宴となつて飲むことの好きな村の人々、何時までも許して呉れず、奥に泊つてゐる郡長に氣の毒とは思ひながらツイ午前三時まで皆と盃盤の間に歡談した。

廿六日。晴。最後の豫定では氷川から七ツ石、雲取と登ることになつてゐたが、雲取の下の宿營所に持上げる毛布や炊事具の都合上小河内から登ることに變更し、兒玉君が小河内附近に所用もあり、

私も亦春來痛んでゐた右の肩が大分凝つたやうだから小河内鑛泉に休養したら可からうと定め、朝緩つくり發つて氷川に出で、三河屋の鯉料理に久し振りに脊せ腹を肥やし、午後更に小河内に至り、勝利館に落ちついて、さまで奇麗でない沸し湯に浸つてその夜と二十七日は休養した。小河内の鑛泉は打身などによく効能があるといふこの地方人の湯治場だ、街道の兩側の狹い所に軒を並べた馬糞臭い汚い田舍の宿場で、今までの身に浸みた嵐氣も忽ちに消え失せるやうな場所である。

◇——親川谷——雲取——飛龍——將監——落合——◇

廿八日。昨日まで快晴であつた天氣は今日は生憎曇で今にも降りさうである。然し、今日は雲取の下の造林小屋で泊るのだからどんな大雨でも構はぬと八時四十分出發本道を上る。小河内の川上二町ばかりに辨天淵がある、多摩川沿ひの勝地の一つで不完全ながら宿屋もある。一時間も過ぎた頃トウ〳〵雨になつた。十時十五分鴨澤着少憩、此處は武藏と甲斐の境界で、左岸に落込む名も優しい小袖川を挾んで相對してゐる、道の上には田舍に珍らしい白壁の大きな家も見える。色々の準備に三十分を費して十時四十五分發、十一時二十分愈々親川谷に入り込んだ、川の名は後山川で、親川は谷の入口の地名である。鴨澤から七ッ石への道を辿らなかつたのはこの谷筋にある東京市有林の成績を一覽せんがためであつた。地圖の後山の右方に後山川に合する無名の澤は片倉谷と稱する、この澤に沿うて上る。正午頃から豪雨となつたが幸に持參の傘があるので左程には濡れない、造林を視ながら上つて二時に圖の標高一四一三米の東方の澤（政右衞門窪といふ）の造林小屋で晝食する、雨は車軸を流すやうでうすら寒い。三時小屋を發足、十數分で鴨澤七ッ石間の本道に出た。親川入りのこの道は相當な造林道だから場合によつては利用するのもよろしい。

篠つく雨を衝いて四時七ッ石神社に着く、この宮は荒神（あらがみ）樣で地方の崇敬が厚い、殊に七ッ石と稱す

る野中に露出せる十數の石の一つを少しでも動かしたり汚したりすれば、その者の村全體に祟るといはれてゐる。四時五十分小雲取の下の甚助小屋に着く、萱葺壁の造林小屋で相當堅固だから野營代りに利用するによろしく、小雲取の下木立の中にあるので小雲取からは見えぬが、七ツ石の方向へ本道を下つて二十分位の所にある大椚の木から右方に水平に山を搦んだ道を入り込めば十分位で達する、小雲取の頭から下り三十分とみたら充分であらう、水は小屋下一町位の距離に澤の源頭があつて七ツ石まで下る必要は勿論ない。雨は六時頃から小降りになつた。丹波山附近は蔓蒻玉の産地で、それを材料とした手製の蔓蒻と栗茸が今夜の馳走だ、小河内の宿屋の料理よりも山男のこの料理が我々の食慾を挑發する。『今夜が山泊りの最終だと何かに理屈をつけて大に盃を重ねる、愈々酒飲みが本物になつて師匠の中川君タヂ〳〵とある。

廿九日。風は強いが快晴である。五時に起床、五時四十分朝食。富士は昨日の雪で六合目位まで純白の化粧を施してゐる、小屋の窓から居ながらにして芙蓉峰を眺むるのも一快心事である、六時三十分發、往路を椚の木まで返り小雲取に上り初める、坂の途中日原の方に降る道がある。右下の澤は地圖の唐松谷で、鴨澤から來た定夫の話では、この澤には日原の人が山葵田を作つてゐて日原への交通は左程難事ではないとのことだ。小屋から一時間で小雲取の頂上に立つた。

今日縱走する三ツ山、飛龍の連山は眼前に一揖し、青岩谷の紅葉は昨日の雨に身を清めて目覺むるばかりの鮮かさを我々の眼前に展開してゐる。この澤は別に雄大といふほどではなく、直前に飛龍から後山川口の後山、高畑部落の方面まで緩やかに延びた天平の尾根を堺にする小ジンマリとした澤で、飛龍の八合位から下は多くは白樺や椚、水楢を主とする闊葉樹林をなし紅葉としては殊に見事である。大溪谷の紅葉を一眸の中に收めるのも恐らく此處が最終だらうと語り合ひながら雲取に上りかゝる、道は殆んど立木のない枯野原である。風は強い。中川君は襞に酉谷山で帽子を落し鴨澤で代りを仕入

れたが、それを又此處で吹き飛ばされアッといふ間に日原谷深く擾はれて了つた、一同、中川君の疎になつた枯野原の頭に同情を表したが施しやうがない、中川君も諦めて、手拭の頬冠りで間に合せることにした、蓋し好箇の田舍爺さんだ、但し鼻歌は唄はない。七時五十分雲取頂上に達す、秩父側は滿目の木立、多摩側は一面の枯野、展望は誠に充分である。

東の方を一瞥して一同は思はず拍手した。芝浦沖に碇泊せる七、八隻の汽船が朝日に輝やく漣の上に煙を吐いてゐるではないか、深川越中島先の直線をなした埋立地や、ズット左には淺草觀音堂の甍の特立したのが見えるではないか『惜しいかな十二階は!!』など大震災の繰言も聞える、その他の市内の町には一面の靄で視界を隔つてゐる。雲取頂上から東京が見えるのは、東京から雲取が見える事程左樣に當然のことであるが、かくまでもよく見えた日は未曾有であらうなど一同が喜んだ、お蔭で春木君がこの頃建つたばかりで近日陸地測量部から觀測に來やうといふ新らしい三角臺に私の洋傘を置き忘れて了ひ、後刻飛龍の上でそれを思ひ出して『長傘飛龍に及ばず』なんてとんだ洒落になつた。

風が強くて長くはゐられないので惜しい展望を打切つて八時十五分出發縱走にとりかゝり、同じく枯野の中を尾根傳ひに下る。圖の荒澤谷（秩父側）の詰りの小突起邊りから尾根筋は木立となり熊笹が間に密生して相當に困難だ、中川君は二十餘年前この國境の測量に從事した人で、尾根筋は何れも掌を指すが如くに熟知してゐる所である。雲取から一時間二十分で三ッ山着、三ッ山とは丹波山邊りの稱呼で一九四九米三角點附近をいふのであるが、同三角點から西方に小突起が三個ばかり續いてゐるから起つた名で、木暮君のいふ栂澤山である。頂上は針葉樹の森で山腹は枯野である。九時四十五分發、熊笹の漸增する中を辿る。地圖の三ッ岩附近は成るほど岩山が三つばかり峭立してゐる、栂が亂雜に枝を出して困難な上下だが木に摑まつて事なく飛龍の前のタルに出で、針葉樹や白樺の點出せる尾根を上り十一時四十五分飛龍三角點に達した。三角點の所在は少し低く東方に偏し、西方の幾分

か高い眞の絶頂と思はるゝのは白檜の密林である。脚下の澤は飛龍權現安置場所の肩下邊りから發するので權現谷と稱せられてゐる、黃葉は野の中の白樺の稚樹から老木の林に移り次に栂、水楢と下るに從つて漸次に淡きより濃きに變り、白檜や栂その間に點在し唐松は濃黃色の穗を振はせる、濃淡紅黃眼も眩むばかり滿溪燦々として紅葉は正に絶頂である。三角點附近の野で白檜、唐檜の稚樹を背景に晝食し寫眞など撮る。

午後一時出發、西方の所謂飛龍の大タルに向つて下る、主として栂の密林で展望は全くない、傾斜は急だが尾根は丸味を帶び切開けも既に判然せず、正當の尾根筋を搜すのに、肝心の中川君すら骨が折れる、萬一霧でも捲いたら不案內の人は到底眞個の大タルに下り着けなからうと思はれる、然し今日では、多摩側はこのズット下方に將監から丹波山への東京市の林道が出來てゐるから、もし迷つたらそれにブッつかれば苦もなく將監又は丹波山に出られる。又西の大常木（二〇一一米三角點の名稱は大常木三角點である）の方から飛龍に上るに、上りは平尾根でも兎に角頂上には達せられさうに思へるが矢張り上り難いと見へ大洞林道の方に迷ひ込んで遂に飛龍の頂上に達しなかつた人もある。注意すべき場所だが、幸に左右何れに迷ひ入つても生命に別狀のないことだけは確かである。

大タルから大常木へかゝる、熊笹が脊丈までも延びてゐて、盛夏の候なら餘程難澁することゝ思ふ。小突起を幾つも上下して三時大常木三角點に着く、飛龍頂上から正に二時間である、此處から牛王院平（今の將監峠）まで下りに三十五分を費した、急いで下つてこれだから上りには一時間はかゝるだらう。雲取から將監まで休息時間を加へて六時間四十五分を要した譯である。將監は去る十七日に來た時とは又格別の眺めで、龍バミ谷の小櫟大櫟は友禪の模樣さながらに入れ交り、一風吹かば散りなん風情、今が黃葉の全盛期だ、落葉松の葉の散り失せ骨立つて來た峠筋の光景と對照して一層の妙味がある。此處を辭して一ノ瀨、高橋を過ぎ落合に急いだが今日も暮れた、六時三十七分落合の事務所

に着く。

◇——鷄冠山——横手山——おいらん淵

——丹波山——奈良倉山——猿橋——◇

三十日。風もない小春日和の上天氣である。兒玉君は所用のため早朝鹽山を經て東京に向つた。春木君や神森君は此處の仕事が待つてゐる、川鍋君も合宿に行つて顔を出さない、誠に淋しい朝だ。午前中に中川君の東道で鷄冠山（トサカ山とは云はない）に遊んだ。ハンノ木峠の頂上の少し下から東に分岐した水平に近い道を行けば間もなく達する、落合から一時間半で緩くりである。

山は木賊山の下の鷄冠山と同じく、トサカなりに凸凹の甚だしい岩山である、岩窪の所々に樅の自然生があるが木振りの惡いためか盜伐を免れてゐる、高橋の鷄冠神社内の奥の院で且古への鎭座の跡であるが、この地方の住民は氏神樣の物は自分の物とでも心得てゐると見え、昔は檜の見事なものばかりで實に神々しいものであつたさうだが、スッカリ盜伐されて、今では檜は殆んど見當らない位だ。然し、勞銀騰貴の餘慶とでもいふか、岩茸採りが此處迄遠く孤立した岩塊までは荒さぬらしく、岩角には無數の岩茸が生へてゐるので、中川君を煩はし熟練な人夫を賴んで密柑箱一杯これを頂戴して持歸つた。岩茸の風味は數年前朝鮮の金剛山で覺えたのであるが、此處のは金剛山の程に香が高くないとはいへ當節では珍物の中に數へることが出來る。

此處から右に山の鼻を繞ぐると直ぐ一七一〇米三角點の下に出る、これが橫手山である。山上から展望すると聖、赤石から甲斐駒までの連山、續いては國師から戸渡、破風、雁坂、唐松尾、將監に至るまで手にとるやうに見える、中川君と間もない縱走の追憶談に耽つて眺め飽く時を知らなかつた。これからハンの木峠までは殆んど平道で何の苦もなく一時間で落合の事務所に下つた。

晝食後充分休息して二時半出發丹波山へ向ふ。響岩に至る、これは地圖の一ノ瀨川と柳澤川との合流

點の少し上で、一〇一八米標高の少し手前である、轟岩の所だけ僅に三四十間の間臼でも掘くやうな音が聞へる、二百米近い下を流れる本流の澤の音が反響するのである。少し下つて一〇一八米標高の角から直下に百五十米ばかり、三十度以上の急勾配を木に縋り岩角を傳ふて谷に下りきると、其處に銚子瀧(宛字)といふのがある、高さは七八丈位、岩の間を繰り抜いて紺碧の色を湛へた狹い淵がその下にある、所謂オイラン淵がこれである、黒川金山がまだ盛んで黒川千軒といつた頃、鑛山に付き物の多くの女郎——花魁——も全盛を極めたのであるが、山が衰へて愈々引揚げる時、邪魔ッケだと花魁どもをこの淵に投げ込んで行つたといふ傳説から起つた名で、傳説の眞僞は知らぬが兎に角凄い淵だ。この邊りから山と山と相迫り、巖と巖と相接して、盜伐以外千古斧鉞の入らない大森林が溪谷の左右を鎖してゐる。檜は概ね失敬されてゐるが他の針葉樹は闊葉樹に交つて時しも紅葉の長溪を作つてゐる。巨木と長幹と天を摩して、紅や黄の葉の間から遙かに高く澄んだ碧空を望むのは、自身が井底の蛙となつて宇宙を仰いでゐるやうな感じがあつて、到底名狀し難い景色である。落合から丹波山までは三時間强で行ける、餘慶橋で右岸から左岸に渡ると急に里近い雰圍氣となり、聽て畑が現はれ、天平の美しい傾斜の下に丹波山の寒村が靜かに展開する、多摩の流は上流でありながら此處で一寸下流の趣を呈し南方に大きな曲線を畫いて丹波山村に貴重な平地を提供してゐる。寒い夕風にランプの燈の慄へてゐる頃野村屋に着いた。

田部君が大黒茂で遭難しこの宿で休養されたことは昔讀んだ記事だが、この宿の若主人も亦最近大菩薩で數人の同伴者と共に遭難して大騒ぎをしたさうだ。その話を聞きながら大菩薩峠で獲れた鹿の肉だといふ鹿鍋を夕食に圍む、彼の小金澤で美妙な聲で啼いてゐた鹿ではないかと思ふとあまり心地がよくない。

卅一日。今日は又よく晴れてゐる。愈々旅行の最後日で萬感が胸に湧く。八時出發、大田和峠を過

ぎて小永田に至る。今日の天長節を祝ふ兒女の禮裝を見て成るほどと思ふ位暦日に無頓着になつてゐた。これから本道を離れて右に入り、市有林を視るために上り始める。零時二十五分奈良倉山に着く、武田博士等のいふオボウ山であるが、小菅村でも亦地主たる東京市でも共に奈良倉山と稱してゐる、オボウ山とは葛野谷の稱呼であらう。東は鶴峠から三頭山、大嶽山にかけ御嶽山脈がよく見え、西は大菩薩、小金澤の連嶺の一つの澤、一つの突起も明かに指點することが出來る、小金澤溪谷の紅葉はモウ盛りを過ぎて落寞の有樣であつた。

晝食して中川君と分袖の話に思はず時間を費し、二時出發、殆んど水平な尾根上の道を歩いて三時に葛野川の谷を覗く突端に出る、これが地圖の佐野峠である、成るほど葛野方面からは急な上りだが小菅方面からは峠でなくて下りである。此處で中川君と別を惜む、十八日の間寢食を共にしたので何となく見返り〳〵下らざるを得なかつた。四時急坂を下り着いて葛野川を渡り、これから一瀉千里の勢で下り道を急ぐ、四邊を罩めた凄々たる暮色の中に機織の音を五月蠅く聞きながら六時二十分猿橋を渡り、更に二十分にして驛前桂川館着休憩する、川鍋、神森兩君は終列車では立川で連絡がつかぬので一泊、私と春木君とは八時三分發の汽車に乘り代々木で春木君と別れ飯田町から宅に着いたのは夜半近い頃であつた。

附記。十數年前の多摩、秩父の奥と今日のそれと登山上大差別あるは論を俟たぬ。先輩諸氏の努力で逐年煩累を減じて登山し得ることは同慶の至りである。私の經驗では雲取から金峰までの縱走に五日あれば充分だと思ふ、即ち第一日雲取より將監、第二日雁峠又は雁坂、第三日ミゾシ又は三寶經由三寶澤合流點(天候の如何によりては破風の小屋)、第四日國師の野營地、第五日金峰頂上から梓山又は增富、黑平といふ順路である、これは左程骨の折れぬ日程である、のみならず國師の野營地以外は野營の必要がない、國師の野營もテントその他の携行が面倒ならナギ尻の小屋に下ればそれも



飛龍より白岩山及雲取山を望む　中川金治氏撮影

不要である、要するに今日の多摩、秩父の奥は、木暮氏や田部氏等の苦心せられた時代とは異り極めて平易な山行と稱してもよろしい。國師の野營地も成るべく山梨縣廳あたりに賴んで簡單な小屋を設くるやうに骨を折りたいと思ふ、縱走の上からいへば破風の小屋よりも國師の方が早く出來べき必要があつたのである、多分破風の小屋を思ひ立たれた頃はまだ國師の水のあることが明かでなかつたためかとも思ふ。（完）

川乘山と其附近

神谷恭

一、はしがき

日原から仙元峠を秩父へ越ゆる時、倉澤の谷を距てて、東南に聳ゆる川乘山の秀拔な姿を眺めた人々は、あの飽きる程長い峠路を喘ぎ〳〵登つて來た勞苦も忘れて、思はず歡聲を擧げることであらう、そうして何ものか酬いられた樣な悅びに、山に旅する身の幸多きをつく〳〵感謝せずには居られないであらう。標高は僅に一三六四米突で、近くの仙元峠や蕎麥粒山にも劣つてゐるのであるが、實際此方面から眺めた川乘山は、地圖の上だけでは一寸想像も及ばない程立派な山容を成し、雲取以東漸く低下して來た此山脈掉尾の勇を振つて、南に多摩の淸流を挾み、大岳や御前山に對抗して居るのである。夫れにも拘らず今日まで山に登る人々から、餘り顧みられなかつたと云ふことは、何う云ふ譯であつたらうか。勿論標高の取るに足らないといふ理由もあるだらうが、何故か自分は此不遇な山

に對し、それでは誠に氣の毒で堪らない様な感を懷いて居つたのであつた。

最初自分は會員の岩井君が仙元峠附近で撮られた此山の寫眞を見て、其秀麗な山容にすつかり魅せられ、其山頂を訪づるゝ日の近からんことを絶えず心に冀つて居た、それが漸く叶つて昨春三、四回其附近を歩いたので當時の記憶を辿りつゝ書いて見ることにした、勿論貧弱な觀察で貴重な本誌を汚すことは誠に恐縮する次第であるが、幾分なりとも後遊の士の御參考になれば本懷の至りである。

此山に就ては十六年三號の通信欄に、大正十一年一月木暮、武田兩氏が仙元峠から尾根傳ひに登らうとされたが、折惡しく烈しい雪に遇はれたゝめ、日向澤山から有馬谷を名栗村へ降つて仕舞はれたと云ふ記事が載つて居る。併し其後木暮さんから承つた處に依ると、近く第二秩父號が出版され、其際此附近に就て詳記せられた多摩郡村誌の一部を載せるそうであるから、夫を參照せられたならば、粗漏な私の記錄も補充さるゝことゝ思ふ。

二、川乘谷

初め自分は地圖上の判斷から巨巖重疊して居る川乘谷に興味を有つて居たので、先づ此方面から探つて見たいと思ひ、三月二十二日（大正十四年）朝七時友人D君と共に氷川の三河屋方を出發した。

前夜宿の主人が世話して呉れた仙さんと云ふ、四十五六の男を案內に連れて行くことにした。空は飽く迄晴れ亘り、一片の雲さへ飛んで居ない。今日はお彼岸の中日であるから自然東京の街の賑ひが頭の中に浮んで來る、だが此狹い溪沿ひの村々は、未だ冬の眠りから覺めないと見えて、路傍に作られた山葵畠には厚い氷が張り詰めてゐる。阿寺澤の落口を對岸に見て、寺地の部落を過ぎると行手に高く小菅の人家が仰がれる、自分達は小菅の村は通らずに、直ぐその下から細徑傳ひに河原に降つて左岸に移り、日原川の碧潭を脚下に見て、山の鼻を一つ廻ると徑は自然に川乘谷へ吸ひ込まれる様に

這入つて行く。獨木橋で右岸に渡ると徑は愈々狹く、崖際に危なく架けられた棧道の幾つかと、ゴロ〳〵石の多い溪沿ひの徑は、靴穿の自分を惱ますこと一通りでなく、三十分も來ないうちもう一息入れる樣な始末で、漸く一つの炭燒小屋を左手に仰ぐ頃、幾らか徑も良くなつて、杉と檜の植林してある中を潜り拔けると程なく、逆川（サカサ）（川乘山三角點の南側舟井戸附近に源を發す）と本谷との合流點へ出た、時に午前九時、氷川から丁度二時間を費して仕舞つた。

此處から自分の計畫では本谷を遡ぼる積りだつたのであるが、此附近の地理に明るいといふ仙さんの言葉に、三角點の在る方へ行くには逆川を遡ぼつた方が遙かに近く、若し本谷の方へ行くのならば、先刻見た炭燒小屋の上に立派な路があるから、其處迄戻つた方が良い、と言はれて見ると今更戻るのは馬鹿らしい樣な氣もしたし、地圖を披いて見ても、仙さんの言ふ如く逆川を遡る方が早さうなので、遂に其言葉に從つて仕舞つた、是が此行失敗の最大原因となつたのである。

此出合から河原へ降つて、岩の上を飛び〳〵に逆川の右岸に渡つた、すると丁度自分達の降りて來た頭の上に、高サ參丈許りの巨巖が半ば雜木に覆はれてすつくと聳立つてゐるのが實に立派に仰がれたので、何か名のありさうなものと仙さんに聞いて見ると、之が大根岩と云つて有名ださうだ。併し大根にしては馬鹿に大き過ぎる、何か他に適當な名が有さうなものと思つた。

此附近には地圖にも明示されてある如く、處々立派な岩壁を露出して、其形も可なり面白いものがあつた。徑は逆川の右岸、山葵など作られてある中を歩くのだつたが、二三丁も來ない中にかすれて仕舞ひ、何う行つて良いか解らない、殊に自分の一番嫌な野薔薇が縱橫に這ひ廻つてゐるので實に歩き惡い。やがて壞れた炭燒小屋のある處まで來ると最早全く踏んだ跡を失つて仕舞つたので、詮方なく殘雪膝を沒する藪の中や、氷つてツル〳〵滑る澤の中を約一時間餘り苦闘した揚句、漸く地圖に示されてある小徑に出る事が出來た。此徑は川乘山から南に舟井戸を經て高指山（一二二四米突）へ續

く九九〇米突の獨立標高點を有する附近で大多和と呼んでゐる鞍部を踰えて、棚澤方面へ降つて行くのであるが、之を反對にとれば本谷と横ヶ谷（川乘山三角點の北側に源を發する小澤）の出合附近に祠られてある山ノ神へ通ずるものゝ由。其處には鞍懸岩と稱する奇巖ありて、昔秩父の莊司畠山重忠が腰掛たるものなりとか。岩は全く自然の儘なるに、其形恰も鞍を置きたると些も違はざるは誠に不思議なりと仙さんの感服振りより推して、まんざら嘘でもなささうに思はれた。

此徑に上つて後ろを振返へると、遙か日原川溪谷の奥に高く雲取山が其東面に針葉樹林を黑々と粧ひ、頂上には尙ほ多量の殘雪を載せて悠然と構へてゐるのを眺め、我知らず歡聲を擧げる。茲から目的の三角點へ登るには、前記の大多和へ出て尾根を傳ふた方が良かつたが、其時は只一途に遡川を行ける處まで遡つてから直接に三角點の尾根へ登るつもりであつた。しかし攀るに從つて傾斜は急に、靴は無暗に滑るので、又思ひ切つて藪の中へ潛入した。所が意外に多量で而かも軟かい殘雪が待ち構へて居て、歩行困難を極め、僅かの登りに非常に多くの時間を費し、藪嫌ひのD君は下の方で悲鳴を揚げてゐるといふ騒ぎ。時計は既に十一時半を過きてゐる。初の豫定ではその頃は頂上に着いてゐる筈であるのに、前途は未だ遠く、これから頂上を極めて棚澤へ降り、二俣尾發午後七時何分かの終列車に乘ることは絶對に不可能となつて來たので、遂に遺憾ながら引返すことにしたのであるが、こゝで又第二の失敗を演じたのである。仙さんは數年前本谷を降つた事があつて、その時惡くはあつたが兎に角徑らしい徑があつたから、現在でも解るだらうと云ふので、同じ苦しむのなら本谷を降つた方が良からうと、殘雪の多い西北の尾根を滑り〳〵本谷を目がけて降つた、降りついた地點は地圖に川乘谷を示された「乘」の字附近と記憶する。

扨て本谷に來て見ると仙さんの言ふ樣な徑らしいものはなく、只幽かに昔は徑でゝも有つたかと想像さるゝ程度な切開けが主として左岸に發見されたが、其途中幾つか危ないガレに出遭ひ、全く踏み

跡の絶えた藪の中を潜り、或は凍つた瀧の間を通り抜け、其美觀さへ味ふ餘裕もなく、思ひがけざる勞力と時間とを費して、午後五時漸く大根岩の下に辿り着いたのであつた。斯くして氷川へ六時、棚澤へ着いた頃は最早眞暗になつて居た。そこで駄菓子屋に腰掛けて夕食を濟ませ、終列車に間に合はねまゝ悠々と落着き、闇夜にもぼつと白く浮かむ廣い街道を小丹波まで來ると、後から近づいて來た提灯三ツ、互ひに挨拶を交すとそれが會員の高畑棟材氏及友人の方々で、大岳、御前からの歸り路自分達と同樣終列車に乘り遲れられた譯で、意外の處で同志に逢つた嬉しさに、疲れた脚も割合輕く、二俣尾まで話しながら來て仕舞つた。その時は既に十時半、流石に疲れた一同は路端に脚を投げ出して再び動こうともしない。併し此處には泊るべき宿もないので、最終の元氣を振ひ起し、漸く日向和田まで辿りつき、驛前の萬年屋といふ宿屋を叩いて、疲れ切つた脚を投げ出したのは彼是十二時頃だつたらう。

翌朝同驛發一番列車で歸京、即刻出勤と云ふ慘めさ。併し夫だけまた懷かしさもまさるのであつた。

三、峯より川乘山を瞰えて影森まで

川乘谷の失敗以來、此山のことが氣懸りで堪らなくなつて居た折柄、自分と同じく川乘山に對し深い憧憬を有つて居られた會員の岩井君が來訪されて、早速同行する事になり、四月四日午後二時十八分の新宿發列車で出發した。當日曉方から降り出した雨は容易に歇みさうにもないが、翌日の日曜は良い花見日和になると云ふ天氣豫報に充分の望みをかけ、ドシャ降りの中をかまはず出かけた。二俣尾からの道は幾度となく通り慣れてゐるので、常ならば隨分飽き〳〵する所だが、今日は岩井君が一緒だし、それに雨に煙むる澤井、川井附近の多摩川の景色も何處となく潤ひに富み、平常に比して一段

とすぐれて居り、御岳邊りが墨繪の樣に雨ににじむ。

小丹波では未だ明るく、夕闇迫る頃漸く棚澤へ着いた。この前に世話になつた駄菓子屋に憩ひ、今夜泊る筈の峯の福島方へ行く路を敎つて、此家を立つたのは七時頃だつたと思ふ。雨は未だ盛んに降つてゐる。橋を渡つて直ぐ火ノ見の下を右に這入つて、急な坂路を喘ぐ內雨合羽に包まれた躰は忽ち汗になる、岩井君も堪らなくなつたと見えてレーンコートを脫ぎ出した。やがて眞つ暗な杉林の下を過ぎた頃、雨は遂々雪に變つて、山ノ神まで來るともう眞白に積つて居た。玆で路は左右に岐れ、左を登れば川乘の尾根へ出る、自分達は分岐點にある數百年も經つたらうと思はれる樅の老木（目通り四間といふ）を右に乘越し、暫くして三叉路の中間の徑を少し進むと、太い犬の啼聲が邊りの靜寂を破つて恐ろしく響いて來る。これが先刻下の駄菓子で聞いた福島方の大犬に相違ないと竹藪の中を恐る〳〵降つて行くと、直ぐに同家の表門に來た（福島氏は附近第一の豪家にして現に古里村の村長をして居る）。時計は未だ八時半を廻つた許りだが、雪夜の靜けさは隨分遲い樣な感じを與へ、不意の闖入者に驚いた二匹の犬は盛んに吠え立てる、雪はます〳〵降つて來る、是から賴んで泊めて呉れゝば良いがと案じられ、そろ〳〵心細くなつて來た二人は、大聲で案內を乞ふと、中から「一寸待つて下さい、此犬は知らない人が來ると喰ひ付きますから」と答へて親切に犬を縛つて呉れた。漸く案內されて其家の土間へ這入り、自分達の目的を話して宿を乞ふと、親切な若い奥さんは、今主人は他出して居りますが、別段差支は御座いませんからと快よく承諾されたので一安心する、大きな爐端で濡れたものを乾かしながら、附近の地理に就て敎えて貰つた。

翌朝は雪晴れの好天氣と思の外の大雪で、しかも未だおいそれと歩みそうにもないので、すつかり氣を腐らして仕舞ひ、前夜留守だつた若主人と炬燵を圍んで四方山の話に花が咲く。主人は中々の話好で、中里介山が三田村の生れで、未だ土地の小學校で敎員をして居た時分のことから、小說大菩薩

峠にある脚の速い本宿七兵衞の家が未だ青梅の停車場近くにあることなど、話はそれからそれへと盡きさうにもない。

十一時頃になつて漸く雪も歇み空も明るくなつて來たので、親切な此家の人々に別れを告げて外へ出た。雪は一尺以上も積つて、昨夜通つて來た竹藪には太い竹が幾本も折れてゐた。前夜は暗闇の中を來たので、始めて舞臺の幕が開けられた樣な明るい心持で附近の雪景色に見恍れる。殊に山ノ神附近から眺めた御前山の姿は實に美しく感じた。

其後四月十九日、岩井君は單獨で峯から川乘山へ登り、尾根傳ひに仙元峠へ出て其日に影森から歸京された。其時の記事は本誌第十九年一號の通信欄及び霧の旅第十六號に掲げられてゐるが、自分も五月三日同じ行程をとつて歸京する事が出來た。三角點附近一帶が伐採の魔手に殆んど見る影もなく荒されて仕舞つてゐたのに、憤慨すると同時に自分の大きな期待を裏切られた樣な失望を禁ずる事が出來なかつた、その時の記錄は本誌第十九年三號の通信欄に載せられてあるから茲には略して置く。

四、大丹波川を遡る

其後いつであつたか東京驛前で遇然木暮さんに御目にかゝつた、その時多摩郡村誌に雷電山或は雷電岩山と記載してあるものが、地圖の川乘山に相當するものらしく、其中腹に一奇巖ありて、其形恰も獅子の口に似て居る處から、之を獅子口巖と稱し其口からは常に清泉噴出し、夫が大丹波川の水源を爲すものであるといふ興味あるお話を伺つたので、機があつたら一度大丹波川を遡ぼり、獅子口の位置を究め、序に同誌に記載しある山毛欅山及大丹波川の支流曲ノ澤の位置も明かにして置きたいと考へて居る中に、梅雨期に入つて仕舞つた、併 何うしても梅雨霽れまで待つて居られない樣な心持

に襲はれてならないので、六月二十七日、此時期に有勝な厭な蒸暑い土曜日の午後、獨り新宿を出發した。

青梅線に乘換えてから又雨になつたが、四時半二俣尾へ着いた時は糠雨に變つて居たので雨合羽を着る程でもない、それにひどく蒸すのでリュックサックの輕いのにも拘らず、忽ち襯衣から上着迄汗で浸み通つて仕舞つた。多摩の河原では雨蛙が頻りに鳴いてゐる。御岳への岐れ路にある玉川屋では、新らしく路端に風呂場を建て、何とか鑛泉と書いてあつたが、御岳詣りの連中には嘸ぞ歡迎される事であらう。先月來た時は未だ梅が咲いて居たが、今日は梨の花に變り、それも最早盛りを過て路端に白く散り敷いて居る。雨も歇みそうになつて來たのでゆっくり歩く。

大丹波川の落口に架けてある大正橋は、いつの間にか白ペンキで美しく塗換られてゐた。時は忘れたが晴れた冬の日、此橋から棒折山南面の萱戸の殘雪に輝く美しい姿を眺めて、貴重な探しものを發見した時の樣な悅びに、暫し去り難い情趣に浸つた當時の思出がはっきりと浮んで來る。併し今日は其山はおろか、近くの山さへ全く雲に隱れて見えない。橋を渡つた處には、近頃深川の材木屋の別莊だとかいふ洒落な家が建てられて、大丹波への路は其上を登つて行く。

大丹波川の溪谷はかなり深く或は奔湍となり或は瀦をなして、兩岸から覆ひ被さつてゐる青葉の蔭に隱見する。多摩本流の荒み果た景色に引かへ、實に潤ひに充ちた景趣である。少規模でこそあれ何處となく整つた溪谷を形作つてゐる。暫くして溪聲は遠く離れ、桑畑や青々と伸びた麥の間を過ぎて、間もなく靜かな山村らしい大丹波の村に入つた。

豫め宿を賴んで置いた榎戸彌市氏方を訪れる、「今日は降つても御出でになるといふ御手紙でしたのでお湯を沸かして置きました」と、未知の旅人を心から優待するのであつた。丁度自分の小供の折暮した故郷を久方振りに訪れた樣な懷しい味をさへ覺えて、この純朴な溫かい接待に感謝の念を禁じ得な



タヲラヒ小谷附近より北望(向つて左てより)川乗山　舟井戸山
(峯ノ谷柱は山き遠)ウドンス狼　峯ノ谷ケ曲は或



タヲラヒ小谷より舟井戸　大多和　高指山　御前山を望む
影撮氏恭谷神

かつたのである。主人は此村での有力者らしく、五十近い好人物で、附近の地理に就ても詳しく、曲リ澤の位置や獅子口巖の在所も明かにする事を得た。その上木宮佐市と云ふ水源地附近の地理に明るい人を呼んで來て呉れたので、翌朝其人を案内に賴む事にして寢に就いた。

明れば六月二十八日、少り霧雨が降つて居るが、緣側に出ると大岳から日ノ出山へ續く山稜がはつきり見分けられる位だから大した事もあるまい。午前六時半約束の通り佐市が來て呉れる。今日はお天氣になると言ふので出發した。快い初夏の風に頰を撫でられて、翠綠したゝる大丹波川溪谷の右岸に沿うて暫く行けば、對岸黑山の下邊りに城岩と稱する岩壁を仰ぐ。それから左岸に渡ると立派な道があつて、直ぐ左手に眞名井澤の出合を見る。間もなく小さな流れを渡つた。これは大笹の布瀧より落て來るもので、瀧の高サ五十丈、水は途中で全く霧化し、實に美事だそうだが、見た處僅かな水量だし、足場の惡い徑を五丁も攀ると聞いては態々見に行く氣にもなれなかつた。そこから十五分も歩いて再び左岸に渡ると路の左手に百軒長屋を見る、是が大丹波最奥の人家で、一軒しか無い家を何故百軒長屋と言ふのか佐市も知らなかつた。

七時四十分權次入への岐れ路を對岸に見る、此路は棒折山の中腹を繞ふて名栗へ越ゆるもので、地圖には九七六米突の獨立標高點を有する棒ノ嶺の東南をめぐる小徑に當つてゐる、途中山ノ神があつて、そこには畠山重忠が携へて居たといふ棒の一片の化石したものを祠つてあるとのこと。棒折山といふ名の起源もそれに基因するものではあるまいか。佐市の話に據ると畠山重忠が鎌倉へ駈せ向ふ途次此山にかゝり、携へた杖の折れた一端を大丹波川に、他の一端を名栗の谷に投げ捨てたのださうで、名栗側へ降る途中にも同じく山ノ神が祠られて有さうである。尙ほ權次入の奥には千丈の瀧と云ふ素派らしい瀧があると聞いたが、之も其名程大したものではあるまいと思つたので見に行かなかつた。

そこから徑は大丹波川の左岸を稍高くうねり〳〵登つて行く樣になり、視界漸く開け、空は晴れわ

たり、時々白雲が夢の如くに飛んで行く。行手に日向澤附近が青々として見え、對岸には狩懸(カリカケ)ノ峯(ウラ)（地圖に古里村と示されてある「里」の字の上の峯）の萱戸が美しく初夏の陽に輝いてゐる。狩懸澤を過ぎ河原小谷を對岸に見ると直ぐ四十八瀧を俯瞰する、其名の如く數多の岩塊重疊した中を大丹波川が幾つかの小瀧に壞き分られて奔下してゐるもので、それを細かに數へると四十八有るそうである。間もなく徑はだら〳〵降りとなり、澤胡桃の美しい森林を過ぎ、獨木橋を右岸に渡りて、小山の如き巨巖の下を廻る、巖は山躑躅、馬酔木等の小灌木に覆はれてゐる、是が大丹波川の丸巖と云ふ有名な巖で、地圖に依ると狩懸澤の下手大丹波川の右岸に圓く巨巖の位置が示されてあるが、佐市はそれに對し否定して居た、地圖の位置は誤つて居るものらしい。

そこから暫く足場の悪い小徑を登る、行手が狹く廊下のやうになつて溪は左右に岐れ、孰れが本流であるか迷ふ位左の澤は大きい、これが曲り澤で、地圖に川乘山の三角點より東に派出された尾根と、其北へ續く一三〇〇米突の隆起を有する尾根との間に、比較的大きく曲つて入込んで居る澤が夫である、大丹波川に入る小澤の中最も悪い澤だといふ。

曲り澤の落口を左に見て、本流に沿うて岩や石の上を飛び〳〵に行く內轟轟の響が聞える、吊し橋の瀧に來たのである。高さは一丈にも足りないが、水量の豐富なだけ立派なもので、下に碧色の釜を形造つて居る。昔は其岩崖に棧橋が吊されてあつたそうであるが、今は瀧の下を左岸に移つて瀧の直ぐ上を通るやうになつて居る。徑は再び右岸に渡り、裸巖(ハダカ)を對岸に仰ぎ、五分も經たぬうちに岩ザクと呼ばれる巨巖を振り仰ぐ、この岩壁は實に立派なもので、高さ四五丈もあらうか、幅は二三十間、其襞は岩躑躅の若葉に點綴せられて美しく、「秋來て御覽なさい、紅葉して實に綺麗です」と佐市は頻りに自慢して居た。

更に二三十分許り遡ぼると、本流は再び二分せられ、右なるが日向澤で、自分達は左から來て居る

跳り小谷に沿うて幾度か左右に渡り、程なく右手から落て來る八小谷（ハチゴヤ）を渡つて十五六間も登り、雜草の生ひ繁つたじめ〳〵する所を踏んで行くと、左手から少さな澤が流れて來て居る、これこそ尋ねる獅子口巖から湧き出して來る清泉であつて、大丹波の溪谷も此邊は全く谷らしい面影はなく、附近の樹林は一本も殘らず伐り盡され、徒らに唯雜草のみ初夏の炎天に生ひ茂つて居るに過ぎない。餘りに甚しい荒れ方には實際失望して仕舞つた。併し目的は獅子口にあるので、其流れに沿うて行くと間もなく獅子口巖に達する事が出來た。巖は相當大きいものであらうが、露れてゐる部分は獅子の口のみで、幅六尺高サ三尺餘、獅子口とは實によくも名づけたもので、中を覗けば上顎にも下顎にも名の知れぬ苔が附着して何となく薄氣味惡く、僅かの水量なれど湧出する水は氷の如く冷やかであつた。佐市の語る所に依れば、廿年許り前には此附近一帶が椈の老木で晝尙ほ暗く、獅子口の水量は今に數倍して實に物凄い位であつたそうであるが、其時代を想像すると現在の獅子口は將に死に瀕して哀れみを求めて居るかの如くに觀らるゝのであつた。此獅子口の上に熊の穴と稱する底知れぬ穴があつて、昔大熊が住んで居つたとか。尙ほ佐市は跳り小谷の源頭を指してあれがダイゼン岩ですと言つて敎えて呉れた。ダイゼンは雷電の訛りかと思ふ。遠望したので確かな大さは言へないが、高さ二三丈もあつて獨立して居るそうである。

右の如く獅子口の位置と雷電岩の所在から推して、是等を包含する山即ち川乘山から北へ續く一三〇〇米突の隆起を有する附近一帶を郡村誌で雷電山或は雷電岩山と言ふのではあるまいか。尙ほ舟井戸の頭即ち三角點から東に派出された一三〇〇米突の圈を有する山を大丹波で椈（ブナ）山と言つて居た處から想像して見ると、この一三〇〇米突の山と現在の川乘山とを一つものと看做して、郡村誌では椈山と呼んで居るのではあるまいか。果して自分の解釋が妥當であるか否か、後遊の士の御判斷に任かせ度い。

獅子口の側から其上の急傾斜を攀ると見覺えのある尾根傳ひの徑に出た、南方に川乘山を仰ぎ、西空遙かに雲取、白岩の連脈が望まれる、暫く尾根を南に傳ふと徑は二分する、右を行けば三角點から東へ派出された一三〇〇米突の山の西を搦んで三角點或は舟井戸を經て棚澤へ降り、左へ行けば其東側を搦んで同じく舟井戸に合するものである。此東側を搦む徑は頃新道と呼ばれ、非常に眺望の好い處で、晴れた日には遙かに東京灣まで見晴らす事が出來るさうである。脚下は深く曲ノ澤の源頭に落ち込み、徑は其上をうねつてタラゴヤと云ふ乘越の樣な處へ出る、此處も眺望の勝れた地點で、大岳、御前から甲武國境の山々、其上に富士の秀峯さへ望む事が出來た、近くは峯の福島方の屋敷がはつきり見えてゐる、あの恐ろしい大きな犬に吠えられた其夜の事が思出される。そして先月登つた徑がはつきり指點され、多摩の河原が光つてゐる、多分川井邊であらう。自分達は徑を離れ、川乘山から東に派出した尾根を傳ふて大丹波まで降らうといふので、巖の伸びた草地を暫く辿つて稍廣い草地へ出た、大平（ダイラ）である、日向澤山より棒折山へ續く郡境の尾根を近く眺め、有馬山の肩から武甲山が覗いてゐる。こゝで尾根は二つに岐れ、東南に續く脈は眞名井澤ノ峯より桃ノ木平を經て、九二四米突の三角點を有する赤杭（アカグイ）山を起こし、六九〇米突の頭窪山に終つてゐるものと、三道山から正南に派出せる萱戸の大倉山となり、峯川と大藏川との合流點に終るものとあるが、自分達は唯一途に東へ〳〵と尾根傳ひに藪の中を潜つて狩懸ノ峰まで來ると立派な路に出た、そこからは惣岳山を經て大丹波まで實に呑氣な降りで、眺望も展け、殊に棒折山は奈良の若艸山を想はせる樣な優しい姿で、黑山のドス黑い姿と對照して一際目を惹いた。

この惣岳山は三田村に在る七四二米突の惣岳山と同神を祭つたものであるといふ。其祠に厚く敬意を表し、たつた一本植えられてあるバラモミの根元で暫く憩ひ、大丹波へ歸着したのは午後四時を過ぎた許りであつた。時間があるので序に岩茸石山へ登り、尾根傳ひに高水山から二俣尾へ出たいと思

つたが、岩茸石までの登りが可なり急だから、又この次にしたらばと頻りに留められたので、遂に割愛して歸京する事にした。尤もその時リュックサックさへ輕かつたなら、或は行つたかも知れないが、獅子口附近で珍らしい奇石を慾ばつて大少五個も採集して來たので、荷が重い爲に押切つて登山を決行する勇氣もなかつた。其石は水盤に入れて、今尙我家の床の間を飾る好い記念品となつて居る。

仙元峠附近

武田久吉

仙元峠については、已に本誌第一年第二號及び第三年第二號に、梅澤君の記事が登載されて、殆んど剩す處なき迄に、記述されてゐる。

奥秩父に比しては山の淺き憾があるし、加之東京から往復するには、存外多くの時間を要するのと、宿泊地等理想的でない爲めか、割合に訪ふ人が多くないが、それでも近頃は、川乘山あたりも幾分注目されて來た樣子であるから、この附近を歩いた數回の經驗から、雜駁ではあるが、何か書いて見ることにする。諸君の御叱正を得れば幸である。

此の邊の山岳について記したものゝ中で、最も纏まつて、そして正確であるのは、『秩父號』(本誌第十一年第一號)に揭載された、「武藏通志」で、秩父の山岳を研究し又は跋涉する人の、必ず參考す可きものである。惜むらくは、往々にして潛入した誤寫と誤植らしいものがあつて、その爲めに時折意外な迷惑を感ずる。

仙元峠は、「武藏通志」にある通り、淺間峠と書くのが正しい。これは嶺上から遙に富士山を望むが爲めに、淺間大菩薩を勸請したに由ることと考へる。多摩の日原から秩父の浦(裏)山に越える路で、昇り約三里、降り約二里の路である。日原から約一里急に昇つた所を、茶屋と俗稱する。その上の一三一〇米の三角點は、日原の小字一原によつて、一原と命名されてゐるが、山名は瀑ノ入峯といふのだと思はれる。

この峯から南に向つて出る小澤は、中途で素晴しい岩壁の間を、無理に水路をこしらへて流れ落ちる。この岩壁は日原橋を渡る手前からよく仰ぐことが出來る。土地ではこれをアブラメンと呼ぶが、意味も語原も不明である。これよりも稍下手で、丁度前記の峯の尾の南端が、日原川に臨む所に大岩壁があつて、それが右岸の岩壁に對立して、左右から門扉の樣になつて居る。日原川はその間を穿つて流れるのである。この岩壁を俚稱トボウイハと呼ぶ。意味は戸或は戸口といふことであると土人は說明した。トボウを又トンボウといふ者もこの地方にあるから、慌てゝ飛棒などゝいふ文字でも配そうものなら大間違ひになる。

トボウといふ名稱は、十文字峠の秩父側にもある。白妙山といふのがそれであるが、多分あの峯の西方にある岩壁でもかく呼ぶので、やがて山名もトボウ山となつたのではあるまいか。

茶屋から枹ノ木休場を經て、天目峯迄、縣界の山稜に略直角に走る尾根には、橫篶尾根の稱がある樣だが、土地では平常この名を用ひることは寧ろ少い樣である。

天目峯は、橫篶尾根が、多摩川と荒川との分水嶺をなす縣界の山稜にとりつく所に立つ、三尖峯で、東南から西北に三峯が列なり、その中央の峯に一五七六米の三角點がある。三角點の名稱は日原といふので、それが山名と如何に沒交涉であるかを知るに足らう。天目は一に三ツドッケの稱を有すること、「武藏通志」に記す通りである。地圖にその遙か西北方の、一七一八米の峯に天目山の名を記すの

は、大なる誤で、この峯は酉谷山（トリダニ）と呼ばれ、峯頭には二等三角點、「小川」がある。これ蓋し大日谷川（オホビヤ）の源流なる小川（ヲガハ）に因つて名けたものであらう。

ミツドッケの上は、中々眺望がよい。西方には日原川上流の兩岸に蟠る山峯が手に取るが如く望まれ、白岩の三角櫓さへ肉眼に映ずる程である。縣界の山稜について西北に傳ふと、左側は主に伐採の結果であらう、茅戸で、秩父側は木立である。小い瘤を二つ三つ上下し、時に僅な樹林をくぐりなどして後、籠（スダレ）といふ一峯に達する。「武藏通志」に、犬劍籠峯となつて居るものである。スダレ（アクセントはスにある）は元來、このあたりの字で、可なり廣い區域らしい。それで、この約一六五〇米の峯は、大日谷川の支流イヌムキ谷のセリに當るが爲めに、特に犬劍（イヌムキ）と冠したものらしい。イヌムキは動物の犬とは何の關係もなく、恐らく梵語で瀑布に關係のある文字らしいが、未だ明解を得ない。

スダレから東北に支脈が派出され、その上の最高點一六〇三米の峯は、大平山（オホダヒラヤマ）と呼ばれる。この峯は、鳥首峠（トリクビ）から見ると、細久保（ホソクボ）谷の上に巖然と控へるもので、山頂の西南が皆伐植林してあるの外、闊葉樹の密林である。スダレの東北面に似た調子で、たしかブナも交つて居たかと記憶する、林中にはスヾタケが生ひ繁り、縱橫にかけ歩くわけには行かない。私は積雪の爲めに、地圖に記してある細徑を見出し得ずして、林道を大久保谷に下つたが、このあたりは圖上にない林道が盛につけてあるから、巧にこれを利用すれば、意外な利得を得るが、下手をすると、飛でもない廻り路をさせられた上、目的以外の地に連れて行かれる。

蕎麥粒山（ソバツブヤマ）は、仙元峠の東南に續き、そこから僅か十分以內で達せられる。山頂に一四七三米の三角點（名稱は仙還）があつて、その周圍には燧石質の岩が狼籍たる有樣が一寸異樣である。その爲め秩父で火打山と呼び、又形狀から三角山とも呼ぶ由。しかし三角形をソバツブは面白い。同名の山は、尙他に遠州周智郡の奥にもある。

蕎麥粒山から南に、倉（正しくは畠）澤谷と、川乘（正しくは苔）谷との間に派出された細長い峯は鳥屋戸山で、その南端に一二五九米の三角點（名稱、北ノ澤）がある。こゝは舊鳥屋戸官林であつて、今でも西面は木立であるが、東側はおほむね伐採されて、赤裸な慘らしい狀態である。

蕎麥粒から東南に平らな山稜を辿ると、北に有馬山を經て武甲山に連なる長大な脈を接續する地點に來るが、南側シホヂ谷の山側が伐採されてしまつたに反し、北面は木立で見通しが利かぬからして、その very spot を發見するのは、相當困難である。

有馬山は、その兩側共に、近年全部伐採され、炭に燒いたり醋酸を取つたりして、あとは御定りの杉林に變化してしまつた。廣河原谷では造林も未だ一向見る可きものがないが、有馬谷では中々盛に杉材を出す樣である。この山は登攀の興味も甚だうすく、唯こゝからでなくばよく見えぬ山峯でも撮影する目的の外、登る可き所ではない樣である。强て登山を欲する人は、廣河原谷から、三角點の北方を、有馬谷に越す路にでも由られたら宜しからう。

有馬谷には中々よく道がついてゐる。河又から一里半程奥迄は、車も通ふ程で、山小屋等も要所要所にある。此の谷の奥には、有馬の大淵と呼ぶ深潭がある由、『新篇武藏風土記稿』秩父郡卷三には、圖を挿むで永々と記述してある。卽ち

有馬淵。有馬山ノ谷間ニアリ人里ヲ離レテ行コト數里有馬川ノ流ニ添ヒ兩岸ヲアナタコナタニ移リ巨石ヲ並ヘタル所ヲ通ヒ又ハ路ナニ所ヘハ丸太木ヲ藤モテツナキ棧道ノ如シテ渉リ又ハ川ヲ離レテ小高キニ登リ又下テ行ケハ巨石ノ中斷ヘシ所ヨリ落ツル瀧アリソノ一ハ三尺許落テ淵トナリ其一ハ五尺許リ落テ淵トナレリ上ノ淵ハ三間四方モアリ下ノ淵ハ五間四方モアルヘキ土人コレテ女男淵ト呼ヘリ是ヨリ以西十町程モ同ク難所ヲ渉リテ此大淵ニ至レリサテ此淵ヨリ奥入リ一里半許ニ二丈餘ノ瀧アリ是ヲ瀧口ト呼ヘリ夫ヨリ一條ノ水路窒谷ノ間ヲ曲折シテ以テ注ケハ無數ノ溪澗ヨリ湧出セ



レダス東北面の樹林



天目峯より望めるに谷山(左)とレダス

武田久吉氏撮影

ル細流各處ヨリコノ水路ニ尾合スルユヘ斯ル此大淵ノ邊ニ至リテハ水勢イトツヨク磐岩ヲ穿テ七八尺許ノ飛瀑トナリ響ヲ洞壑ニ傳ヘテ雷鳴ノコトク或ハ潰沫ヲ吐或ハ霧ヲ生シ激怒シテコノ淵ニ瀉キ落レハ水ハ自ラ碧色ヲ含テ滃沅タリ方量ハ八九間四方アルヘケレトソノ底際ハ量ルヘカラス是ヲ有馬ノ池トモ呼ヘリコノ邊ノ形勝ヲ云ハヽ怪岩巨石競峙チ杉檜雜木森々ト立茂リイト物スコキアリサマナリ傳ヘ稱スコノ淵ニハ龍神スミテ靈淵ナリト奇驗アルコトヲ土人モノ語リセリ此日モ既ニ淵ノ別當龍泉寺ヨリ所化僧ヲ出シテ側ナル行屋ニテ讀經シ釋氏ノ血脈ヲ投スレハ率爾ニ盤渦シテ中央ヨリ水底ニ沈メルアリサマサスカ龍神ノ感應ナルヨシヲ示スコヽニテ雨乞スレハイカナル旱年ニモ雨ノ降ラサルコトハナシト云テ近クノ鄉村ハ云フモサラナリ遠クハ十里外二三十里ニ及フマテモ聞傳ヘキヽツタヘ尋來リ彼龍泉寺ニ就テ雩祭ノ讀經ヲ請ヒ索ムルモノ旱年ニハ日々夕ヘマナシト云最モソノ奇驗アレハ人々恐怖レテ崇敬スルコト他ニ異ナリト云。

こゝは河又から一里半許の上流といふから、巖山からの澤の本流に合するあたりであらう。有馬山の脈は、北に向つて鳥首（トリクビ）峠に低下する。「武藏通志」には、この峠を鳥久保嶺としてある。その方が正しいのかも知れないが、現今では、俚人は鳥首と稱して、トリクボとは呼ばない。そして冠（カムリ）岩（イハ）の南を流れて、浦山川に注ぐものを鳥首川と稱する。峠は可なり急で、まづ難路と稱す可きものであらうが、春四月カタクリの花咲く頃には、萬更悪くもない。

こゝと武甲山の間にある一峯は、東京郊北から可なり立派に見えるが、未だ登攀した人のあるを聞かない。山名は横瀬村では、モチ山と呼び、最高點を大（オホ）モチ山、その北の稍低い突起を小（コ）モチ山と稱する。「武藏通志」に載る大持山、小持山がそれと首肯出來るが、モチは持ではなく黐に相違ない、而もそれはソヨゴ科のモチノキから起つたものではなくて、フサヾクラ科のヤマグルマから出たもので、この木は、秩父山塊には甚だ多く、方言をモチといふのである。この山には昔行者が住たといふが、

今はその跡もない。

縣界の山稜と有馬山の脈と接する地點の東南二三丁の地點で、山勢は急に南に曲り、川苔山に續いて行くが、縣界の山稜は急に高度を減じ乍らも依然東走する。この二脈に岐るゝ所は、大丹波川の水源に近い支流日向澤のツメに當る處から、日向澤頭の稱がある。又一方川苔谷の一支流シホヂ谷の頭になるので、氷川村内では、鹽地谷山と呼ぶ由、「武藏通志」に記してある。

日向澤頭から南折する脈は、火打石谷が正面に喰込むが爲めに、間もなく二叉し、西のは火打石谷と鹽地谷との間に伸びて、丸山（一二四〇餘米）となつて終り、東のは急に低下して、川苔山との間の鞍部なる踊平となる。こゝは大丹波川の源流の一なるヲドリゴヤの澤のツメで、火打石谷への乘越となり、細徑が通じてゐる。

川苔山へはこの踊平から南に昇り（「武藏通志」に電雷岩とか、雷電山とかいふは、この邊らしいが、確めるを得なかつた。大抵の俚人はこの稱を知らない。）村界の尾根の兩側、即ち横茅谷に面した斜面を東南に辿つて達することが出來る。この邊は棚澤方面から日々炭燒の通行するものがあるから、路はよく踏めてゐる。

川苔山は、北から西へかけては、横茅、足毛谷の谷が、そして南面は逆川の谷が深く喰ひ込み、東南は古里附橋に落ちる入川の源流が、そして東は大丹波川の支流曲り茅が彎入し、山勢甚だ怪異で、好奇の心を唆るに十分であるが、近年引續いて伐採と製炭が行はれ、山は赤裸となり、亞鉛萓の小屋が谷間に出來るなどして、探勝者を失望させること一ト通りでない。しかし一方には山腹に細徑が縱横に走る樣になつた爲め、足毛谷の岩峯を初め、鹽地谷の離岩、松岩、山伏岩等の岩峯を眺めることも易々たるものであるし、輕裝すれば、川苔谷の百尋瀑、山伏瀑、子ノ權現瀑や、逆川の出會のヒデリ瀑や、その下流の大根岩等も見物出來る。川苔谷といふ名稱は、カハノリが生ずるに因るので、七

八月頃それが繁殖した時採集し、抄いて販賣する。「川乘」といふ文字は、測量部あたりの、例によつて無理な、宛字に相違ない。

川苔山の續きには、種々の小字がある。「武藏通志」にもある山毛欅山（ブナヤマ）といふのは、逆川の水源に當るもので、氷川での稱呼。一に曲リ茅峯（マガリガヤ）（「武藏通志」曲ケ谷に作ル）又は舟井戸山（フネイド）といふは、曲り茅澤のツメに當る爲めで、前者は大丹波で、後者は棚澤での稱呼であらう。山は棚澤分のものである。

山毛欅山の東南で山脈は二派となり、西南に伸びるものは一二四〇餘米の高熊山となり、一旦九九〇米の鞍部に達してから、南に昇つた突起は、燒多亡山（ヤケタボヤマ）（約一一〇〇米）で、その東面に穴入（アナイリ）といふクエがある。又高熊山の麓には早瀑があり、その下には有名な布瀑がある。

燒多亡の西南に續く一二二五米の高峯は、高指山（タカザス）と呼ばるゝもので、その西に續く一〇六〇餘米の瘤起が本仁田山（ホンニタヤマ）といふのだと考へる。棚澤ではこの高指を鐵砲指（テッポウザス）とも稱するらしいが、或はそれに連接した別の峯であるかも知れない。高指から東南にひく脈は、一〇四三米の一峯筑摩山（ツクマヤマ）（又池坪山）となる。

山毛欅山の東南で二岐してから東に向ふ脈は、入川の水源黄蘗窪（キハダクボ）の後の狼住所（オホカミスン）を經て、間もなく眞名井澤（マナキ）の頭（約一二四〇米）で更に二分し、東稍北に走るものは、「武藏通志」にもある通り、馬乘石（マノリイシ）といふ大巖、新藏指ノ丸（シンゾウザスノマル）といふ瘤起、總岳山（ソウガクサン）を經て、眞名井澤と大丹波川本流との間に終つてしまふ。又東南に赴くものは、一一〇〇餘米の桃ノ木平（モヽノキダヒラ）といふ一峯を起すが、「武藏通志」の三道山とはこれのことかと思はれる。こゝから東南に低下するものは、赤杭山（アカクナヤマ）（九二四米、三角點名稱、大渡）から、三之戸山（ミノト）（八〇七米）となり、蟬澤（ミヽザワ）の右岸を南走して頭窓山（ソウガク）（六九〇米。三角點名稱、小丹波）となり、終に大丹波と多摩本流との間に終つてしまふ。上記の總岳山は、澤井の總岳山の姉妹神を祀つたものであつたとかで、昔はヒジリ權現と稱したのを、今は村落内に移して青木神社と崇めてある由で

ある。

日向澤頭から東走して、荒川と多摩川との分水嶺をなす山脈について、その大要を記すと、「武藏通志」によつて最初山梨山なるものを擧げなければならないが、これは終に確めることが出來ずに終つた。恐らくは一〇〇〇米の圈の東端あたりでゞもあらうかといふのだが、これは後遊の士の探究に俟つ外ない。但し同書に襟巖として記すものは一名岩ザクともいひ、上記の位置附近にある巨岩である。

地圖に嶺上破線を記すあたりは、廣く槇ノ尾と呼ばれ、その中九五八米の三角點（名稱、井戸地）の置かるゝ峯は長尾ノ丸と稱する。この邊では長尾をナゴウと發音するから、ナガヲノマルと讀んだのでは通じない。これを逆に考へて、名栗の字名郷も、元は長尾から來た名稱と推測する。

その東に續く九四〇餘米の突起を、それから南に流下する槇ノ尾澤から、槇ノ尾山と特定する。その東方には稍高い九七六米の童山がある。これを地圖には棒ノ嶺と名けてあるので、去る有名な旅行家(?)がこれを棒ノ嶺又は棒嶺山等と呼んで、夢更怪まない處がひどく面白い。これは「武藏通志」に棒折山と記す通り、棒ノ折である。それを耳の良い御役人が棒ノ嶺と譯(?)した御手際には敬服せざるを得ない。由名は由腹にある石の棒の折れから導かれたもので、傳說によると、畠山重忠が杖についた棒の折れ端だ、といふのであるが、慥に人工の圓柱ではあるが杖とは受取り難い。去りとて石器時代の石棒の破片とは尙更考へられない。秩父の方にもその一方がどこかにあるとかいふが、大丹波側約六〇〇米附近に安置してあるものは、高さ一尺一寸、上端の周圍八寸、下端の周圍六寸を算し、年代その他文字は何もない。考古家が一覽されたら何とか解決出來るであらう。この棒の折れの傍を上り、秩父に越す峠をゴンジリ峠と稱する。名は峠路が沿うて昇る澤の名から導かれたもので、その意味は不明である。

棒ノ折山から山脈は東南に曲り、一旦低下してから黑山（八四二米）を起す。こゝで山脈はまた二

岐し、東に走るものは縣界を劃し、一里程で小澤峠に達する。その脈上で、黒山三角點の數町東の平地を、馬乘馬場と稱する。常盤御前が馬に乘つた場所といふ傳説もあるが、その直南麓に常盤といふ小部落があつた事からでも附會した説に相違あるまい。

東南に赴く分水山脈は、八六〇米程の、常盤ノ前山といふ峯を經て、やがて名坂峠に達する。この峠は成木から大丹波に越す道である。峠の東南に當つて、七九三米の三角點（名稱岩嶽）のある三角形の一峯がある。その南面にある岩壁を岩茸石と呼ぶことから、峯を石茸石山と稱する。この山には屏風岩とか、障子岩とかいふ岩壁があつて、イハタケだのひねくれたツヽジ等が生ずる。

石茸石山の東南には、有名な高水山があつて、山頂に鎭座する波切不動には、賽者の踵を絶たないといふことである。分水山脈は益々東南に向ひ、二股尾の西北の雷電山等を經て、青梅町の北方に走つてゐる。

石茸石山から南に連なる脈は、やがて七〇〇餘米の馬佛山を起す。山中に享保三年戊戌七月吉祥日に建てた馬供養塔が一基あるが、そのいはれを詳にしない。

馬佛山の直南に續くのが、頂に鄕社青渭神社を祀る總岳山で、山頂の杉林は遠くから目につき易い。これは澤井の總岳山で、澤井上分の小字平石から登るのが本道である。こゝに立派な石鳥居が建ち、傍に「竹木ヲ切ルコト、魚鳥ヲ捕フルコト、車馬ニ乘入ルコト」を禁止した東京府の制札嚴しい。鳥居をくゞつて坂路を登ると、數丁にして小部落があつて、そこに神職の家がある。立寄つて聞くと祭神は大國主命とのことである。然るに、『新編武藏風土記稿』多摩郡卷之廿八によると、大己貴命となつてゐるので、聊か困つたが、高頭君の『御國の咄し』を拜見すると、異名同神とのことに、吾々歷史の「知識を缺く」者もそれで大安神。山歩きをする者もこの書は是非一部机上に備へる必要があるとつく〳〵感じ入つた。それはともあれ、『風土記稿』の記事を抄出すると、

青渭神社　除地山林一町五段四畝廿二歩村ノ北大丹波村ノ山堺ニアリ山上ヘ登ルコト十八町山路曲折ス社說ニ云總嶽ハ山ノ名ナリ故ニ總嶽山青渭神社ト號スト云門ハ道ノホトリニアリ神主ヲ宮野若狹トイフ入間郡北野村栗原左衞門カ配下ナリ本社六尺ニ九尺巽ニ向フ昔ハ拜殿及ビ鳥居ナトアリシモ先年火災ニカヽリシヨリ今ニ至ルマテナヲ再立ニ及ハス抑當社ハ延喜式神名帳ニ載ル所ニシテ祭神ハ大己貴尊ト云サレト古キ記錄ノ徵トスヘキコトアルニモアラス又タシカニ口碑ニ殘リタルコトモアラサレハ正シクソレトモ云カタシ承平四歲次甲午仲春十八日記セシト云緣起アレト年代アハスウタカハシキコトノミニテトルニタラサレト古キモノナレハ全クステンモホイナシ其中青渭ト社號ヲ命セシヨシアリ是モウケカヒカタキ說ナレト暫クソノアラマシヲ記シテ一說ニソナフ昔人皇六十一代朱雀院ノ御宇下總國ニテ平將門王命ニソムキ自僭シテ親王ト稱ストキニ鎭守府將軍源經基武州ノ守護タリシカハ追討ノ勅ヲウケタマハリ軍旅ヲ發シテ當國ニ下リ先多磨川ノ邊リヲスキタモフトキ水色俄ニ變シテ藍ノ如クナリシカハ將軍奇異ノ思ヲナシ此所ニ暫クタヽスミタモフニ此神社ノホトリヨリ忽然トシテヒトリノ童女現ハレ出將軍ニ向テ君此度東國ノ逆亂ヲ追討シタマフ靈神ノ擁護アルナレハ勝利疑ナシト云ソレヨリ進發シテ遂ニ將門ヲ追伏シタマフシカルニ當社イマタ定マレル社號ナケンハカノ河水ノ瑞兆ニトリテ青渭神社ト崇メタマフト云々サレト延喜式ハ延長五年十一月左大臣藤原忠平等カ上リシ所ナレハ天慶三年將門誅伏ノ年ヨリ八十餘年モ前ノコトナルニ此緣起ニヨツテ見ルトキハ此時始テ社號ヲ命セシト云且コノ緣起イヨイヨ承平四年ニ撰セシモノナレハ是亦將門追討ヨリ前ニ記セシモノナリカヽル信シカタキコトノミヲ取ニタラサレハ其全文ヲ略シヌ式內神社考ニハ青渭ノ神社ハ澤井村ニアリトイヘリ今按ニ渭ノ字多クヌマト訓スルトキハアヲヌマトイフニヤ又アヲヌノ神社トイフヘキニヤ土人ハ青ナミト號ストイフ郡中深大寺村深大寺境內ニ青波天神トイフアリ是青渭ノ神社ナリ然ルニ青波ト稱スル謂レハ社前ニ池アリテ青波常ニ社邊ニタ

タヨヘハイツトナク波ノ字ニ書カヘタルナリトコレモウキタル説ナレハ信シカタクマチマチナレトイツレモ明證ナケレハイカニトモ今日ニハ定メカタシ例祭ハ十八日ニテ三月六月九月一ケ年ニ三度アリ

とある。今は例祭は一年一回、四月十八日とか。

澤沿ひの道を離れて、左に尾根路を辿る頃、右手稍下方に、マッコウ(幕?)岩といふが望まれる。路はやがて尾根の上に出て、多摩川越しに御岳の方がよく見える。暫くして木立に入り、やがて尾根の左に出て、少し上ると井戸の上に小祠を安んじ、眞名井大神を祀つてある所に達する。路は地圖に示したものとは稍異つて、丹繩澤の源頭をよぎり、西南面から頂上に昇ることになる。杉林の下に、神さびた社が立ち、その周圍では眺望がないが、社後數歩を出でると、高水、石茸石、馬佛、棒ノ折レ以西、川苔方面など、寔によく見渡される。北に下ると、この邊の原始時代の遺物ともいふ可き、ツガ、アセビ、イモノキ、ミツバツヽジ、イヌブナ等の立つ岩があつて、イハウチハが少し許りその下にこびりついてゐる。

仙元峠の附近だけをかいつまんで記す筈のが、以外な所まで遠走りしてしまつた。山名の羅列はこの位で止め、都人士のあまり足を入れない大丹波川上流について略記して、此の稿を終ることゝしよう。

大丹波川(オホタバガハ)の下流には、時に右岸時に左岸に、大丹波の人家が或は散在し或は聚落する。川井から大丹波の村落には、初めは右岸を半里程も遡るのであるが、その間に西北三之戸(ミノト)山の方から流れ來つて、大丹波川に注ぐ支流は蟬澤(セミザハ)と呼ばれる。これを過ぎてから數丁、對岸に馬佛山(ウマホトケ)の方から流入する澤が熊澤(クマザハ)である。やがて大丹波の本流を渡つて、直に右手に少し逆行する位にして農家の傍から、山腹に登る細徑がある。これを昇れば馬佛山の北の鞍部に出る。こゝから南すれば馬佛を經て惣岳山への上

りとなり、北すれば一小峯を越してから右に廻り乍ら、高水山（タカミヅサン）に達することになる。元に戻つて、本道は橋の少し上手で二岐する。右するものは名坂澤（ナザカザハ）の左岸に沿うて成木（ナリキ）に越す名坂（ナザカ）となり、左するものは學校の下を通つて、上流に向ふ。大丹波の村家は、こゝから尚半里程上まで點在する。

十丁も上ると、左手對岸に合流するのが眞名井澤で、モゝノキタヒラの方から出て、赤杭山（アカクナ）や三之戸山の北背を流れるものである。間もなく右黒山（クロヤマ）の方から出る小澤は逆川（サカサガハ）と呼ばれ、この尚上手迄人家がある。最奥の人家を後にしてから數丁で、道は板橋で右岸に移る。この邊までは車を通ずることが出來る位で、伐採した杉材や杉皮を車で搬出する。

道が急に狹くなつてから、左岸に渉ると、ゴンジリ峠の路となるが、山仕事の細徑があるから、注意しないと迷はない限りでない。棒の折れは路の左り側に安置してある。尚傍に奇形の石塊等を置き、向つて右にカラマツ、左にヒサカキを植え、背後に小紙幣を立てゝあつた。

本流に沿ふ路はよく踏めて居る。杉の植林や雜木の間を行くのであるが、左からタケ澤の合流する下手であつたか、景のよい所もある。やがて左岸に移つてから一としきり上り氣味に行く。槇ノ尾澤を過ぎてから、地圖にガレの記號のある所に來る。水潛（ミツクグリ）と呼ぶ所で、別に雜や崩れではない。その對岸には、カリカケの澤と、直ぐその上手にマチクボといふ小澤がある。路は依然左岸を行き細溪四流をこしてから、カハグルミの小林の所で二岐する。左をとつて川原に下る途中、こゝカハグルミの林内で小憩し、中食でもするには持て來いといふ場所である。こゝで本流を渡つて南に入れば河原小屋の澤に入つてしまふ。

右をとつて行けば、カハグルミの小林の上手で右岸に渉ると炭釜がある。右岸を辿つて長尾（ナガヲ）ノ丸（九五八米）を過ぎると、右手正面に廣い窪が現れて、その中腹に巨巖が立つ。澤は屋穴小屋澤、（岩穴小屋澤の訛？）巖は丸岩。



仙元峠頂上より三ッケ岳(白石山)及び雲取山の遠望



仙元峠頂上(左)と蕎麥粒山の西南面(右)

武田久吉氏撮影

水流はこゝから西に折れる。路は矢張り右岸について居るが、谷が狹まつて、終には河床の岩の間を行く様になつてしまふ。こゝで舟井戸山の方から出て來るのが曲リ茅（マガヤ）の澤で、落口は甚だ狹い。この合流點の少し上手で、路は左岸に上る様になる、その脚下の淵がツルシ橋の淵と呼ばれるもので、昔は立木も多かつたし、中々凄然たるもので行者が血脈（けちみやく）を投じて雨乞をしたこともあると聞いた。

河原小屋澤の合流點から上は、水量も略半減する大丹波川は、曲リ茅の上手に來ては、更に減少してしまふ。小規模乍ら峽谷的で感じのよいのは、何と言つても曲リ茅の合流する前後であるが、その上手のヨウヘイギの澤の合する附近ではまた開けて、景も面白くなくなつてしまふ。路はまた右岸を辿るが、幾何もなくして、谷が著しく開けてしまふ所に來る。こゝが俚稱廣河原で、炭釜が設けてある。正面には尾根が一筋谷の中央に突出して、水流を二分する。向つて右のは日向澤と呼ばれるもので、これを數丁上れば、屏風岩と呼ばれる巨巖を見る可く、日向澤頭の下二三丁の所には檜山といふ黒木の山がある。

左に本流を溯れば、間もなく左から日陰澤が合流する。そのヒラは元官林であつた爲め、今でもその名を呼んで居る。日陰澤を過ぎると、もういよいよ大丹波川の水源地で、氷川村堺の會根が眼の前に低い半圓を描き、そこまで一氣に駈上れそうに見える。谷も亦全く淺くなつて、山のヒラに皺の如く或は條痕の如く、鳥渡谷筋がわからない程淺くなつてしまふ。然し注意してその窪を物色すると、中央西稍南に向ふ一筋と、その右西北に向ふものと、左略正南に向ふものとの三つが、殆ど同一地點で合一する。右のはハチゴヤの澤で、中央のが踊（ワドリ）小屋、左のは有名な獅子口の澤なのである。

左に上ること若干、左右に奇岩の立つ空溪に入ると、その右岸に沿うて獅子口の怪巖が蟠まり、その口から清泉渾々として流れ出で、こゝに大丹波川の源頭をなして居る。岩の側面は數間、終に山腹に沒して土砂に掩はれてしまうが、そのすぐ傍の谷には平常一滴の水もないのが奇である。岩の正面

は左右約一丈、それに開いた獅子口は、左右約五尺、上脣と下脣との間隔約二尺、中に長大な一舌を有し、水は舌上を流れて、下脣の間に落ちて滴え、之を掬するに清冽無比と稱するの外ない。岩上には薜苔厚く敷き、そこにツルデンダを宿し、又濕木の生ずるものがある。又口邊水濕多き地には、チヤルメルサウ密生し、春期花穗を林立せしむるも面白い。

獅子口を一覽してから、踵を舊路にかへすもよし、或は踊小屋を上つて踊り平に達し、こゝから南して川苔山に向ふもよし、北して日向澤頭に昇り仙元峠から日原へ至り、又は廣河原谷に下つて裏山に出づるもよし、又は火打石谷に入つて川苔谷を探るもよい。

踊小屋を昇れば、その八合目とも稱す可き所に巨巖がある。これを大丹波では大善岩と呼び、棚澤では妙ノ岩となづける。（完）

左に揭ぐる記事は、郡村誌の多摩郡の條から主として山川に關する者のみを抄出したものである。元より「山岳」誌上に揭載する目的で採錄して置いた譯ではないから、記事の缺けてゐる所があるのも止むを得ない。然し多摩郡の著名な山嶽は大抵網羅してゐるので、參考として重要な役目をなすものであることは言ふ迄もあるまいと思ふ。唯これは明治初年の編纂であるから、今日とは多少山澤の名稱が變つてゐるものがあるかも知れない。其點は注意を要する。尙ほ郡村誌の如何なるものであつたかは、本誌十八年一號の雜錄欄に簡略なる記事がある、就て參照されたい。

本文は全部片假名であるが、便宜上之を平假名に改めた。

文中に「何村の誌に詳なり」といふ記事がある。對照の便を計つて其處に頁數を割注して置いたけれども、印刷の都合上不可能の箇所もあつたので、終りに山澤名の索隱を添えることにした。

（木暮理太郎）

多摩郡の山川

南多摩郡

上長房（ナガフサ）村

小佛嶺　高凡そ二百六十丈、西方に聳ゆ。絕頂より西は相模國津久井郡千木良村に屬す。山脈西北の方津久井郡小原驛及本郡上恩方村諸山より連り、東の方小下澤山に延亘す。雜樹疎生し、登路一條あり、甲州街道に屬す、中央より西面して登ること二十二町四十間を經て嶺上に至る。此より千木良村へ通ず。

小佛嶺と稱する濫觴は、往古僧行基此地に錫を止め、大日佛の小像を安置し、小佛山寶珠寺と號せしにより、地名を斯く稱すと云々。其後野火寺中へ入て、堂宇悉く灰燼となる。應永年間華翁和尙之を再興すと云。申十五度、字小佛第千七百八十五番地にあり。

景信山（カゲノブ）は小佛嶺の北部なる最も高き處にして、元龜年間北條氏照八王子城に居るや、遠望臺を玆に築き、横地監物景信をして之を守らしめ、以て武田氏に備へしより、里俗に景信山と呼ぶ。

山下澤山（ヤマゲサハ）　高凡そ百六十丈、西北に位す。嶺上より北は同郡上恩方村に屬す。西の方小佛嶺の脈を受けて、東の方村内駒木野山に延亘し、檜及雜木疎生す。登路一條あり、寅六度字小下澤より西北に面して登ること二十九町七間にして絶頂に至りて止む。其他數條あれども頂上に通ぜず。

駒木野山　高凡そ四十丈、東北に位す。絶頂より北は同郡元八王子村に屬す。山脈西の方村内小下澤山より連り、東の方同郡下長房村に延亘し、雜木繁生す。山徑樵路あれども、各村へ通ぜず。

小佛川　源を申十五度字小佛の溪澗に發し、盤屈し、中央を東流すること二十五町三十五間、寅七度字小下澤に至り、同郡上椚田村と疆界をなし、三町四十二間、寅十二度字摺指（スリサシ）にて村内に入り、彎流すること十六町二十間、寅二十度字駒木野にて亦同村と分界し、環流すること九町五十間、寅十度に至りて同郡下長房上椚田兩村界に入る、總長一里十九町二十七間、幅上流狹き處三尺下流廣き處十二間、最も深き處二丈五尺水深一丈五尺。淺き處八尺水深一尺。急流にして清し。舟筏通ぜず。

上椚田（カミクヌギダ）村

高尾山　高凡そ二百三十丈、中央より稍々西方に位す。周回二里十五町二十九間、峨々たる嶮山にして、嶺上に巨刹あり、藥王院と稱す、天平十六年甲子僧行基の開闢に係ると云ふ。松杉樅の老樹蒼翠し、登路一條あり、元標より丑十度字坊ヶ谷戸より西方に嚮ふて登ること二十六町三十一間にして絶頂に至る。其他山徑數條あれども嶺上へ達せず。

大平山　高凡そ二百六十丈、西方に位す。嶺上より西は相模國津久井郡千木良村に屬し、南は同國同郡三井村に屬す。山脈西北の方本郡上長房村小佛嶺より聯絡し、東南の方中澤山に延亘し、椴松疎



蓼麥粒山絕頂より仙元峠頂上（右近景）三ッドケッ（左中景）
瀧谷山（左遠景）スダレ（中遠景）及大平山（右遠景）を望む



日向澤頭より望める蓼麥粒山（右）三ッドケッと横篶尾根（中）瀧谷山
白岩、芋ノ木ケット及天祖山の一部（左）前面の谷は火打石谷と桂谷
武田久吉氏撮影

生す。登路一條あり、申二十八度より西面して登ること二十四町二十七間にして絶頂に至る。此より西方千木良上長房兩村界に通ず。

西多摩郡

日向和田村

矢倉臺（玉川派源日記には雲雀臺に作る。）丑の方にあり、高二百六十丈三尺（バロメートルにて測量。）峯頭より三分して、西南は本村字三谷（ミヤツ）津に、東は青梅町字上裏宿（カミウラジュク）に、北は黒澤村字上柄谷（カミトチヤ）に屬す。山脈は雲取山の脈本郡と秩父の疆界を亘るもの、大丹波と上成木上分の間に分れて、岩茸石山、高水山、辛垣山等を經、亥子の方北小曾木、黒澤、二俣尾の三村界、三方山より南に分岐せる一脈にして、二俣尾村物見山より南し、又折れて辰の方本村と黒澤の境界を亘り、突起して此山をなし、餘脈東方黒澤と青梅の境界を延き、坊主山に連續し、支脈未の方天王山をなし、東北は柄谷澤に臨む、山中茅叢にして樹林なし、溪水一は東谿村界に湧出し、青梅町と疆を限り、多磨川に注ぐ、之を楯之澤とす。一は北谿黒澤部内に起り、東北へ流下して、黒澤川の上流柄谷澤に會す、之を櫻窪と云ふ。登路村内字楯ノ柵跡より西北へ上る十町餘にして頂に達す、頂上に凡三十五六坪許の平地あり。西北は本郡及び秩父の峻嶺、東南は多磨川の長流武藏野の曠原を望むべし、眺觀頗浩豁明美なり。天文永祿の頃、三田彈正少弼綱秀二俣尾の辛垣城に居りし時、遠望臺を設けし跡なりと云ふ。惣岳山（澤井。）を戌の五度、物見山（二俣尾。）を戌の十七度、岩茸石山（一名鷹ノ巣山。上成木上分二俣尾の界より、大丹波、澤井にまたがる。）を戌の十四度、高峯（御嶽村、大久野境界。）を申の二十八度半、覗岩ノ峯（柚木下村大久野界。）を申の二十三度、二ッ塚峠（駒木野、上長淵、大久野界。）を巳の十度、坊主山（青梅、勝沼界。）を卯の四度、愛宕山（一名高岩山。黒澤、上成木下分界。）を丑の六度に望む。

川井村

東北隅にあり、海面より高二百五十八丈二尺（バロメートルにて測量、以下亦同し。）峯頭より三分して馬佛山（ウマホトケヤマ）大丹波にては向ヒ山とも云。未の方は本村字沼澤に、東は澤井村字森ノ腰に、西北は大丹波村字熊澤に屬す。山脈其他澤井村の誌○缺。に詳なり。

神塚山　寅卯の間にあり、字神塚と丹繩、沼澤の三字に跨る、高二百二十五丈二尺。山脈は雲取山の支脈岩茸石山、馬佛山より巳の方に向ひ、澤井村の惣岳山に連るもの、又申の方へ分岐せる一支脈にして、此所より餘勢未の方丹繩澤（澤井村界。）と沼澤川の間を亘り、字尾崎にて多摩川に屈る。山中松杉雜樹蓊叢す。小溪（無名）西南谿に起り、申の方へ流下して沼澤川に合す。登路は字尾崎より北へ上る、頗險阻なり。惣岳山を寅の七度半、馬佛山を丑の一度、常盤ノ前山（一名逆川ノ丸。上成木上分、大丹波村界。）を亥の二十四度、棒之折山（大丹波と秩父郡下名栗村界。）を亥の十七度、峯戸（ミノト）山を戌の十一度、頭窓山を戌の二度、高指（タカザス）山（一名本荷駄山。棚澤、氷川村界。）を酉の十九度、城山（白丸、棚澤、海澤界。）を申の十五度、御前山（境村、檜原界。）を申の三度、甲籠（カロウ）山（御嶽、海澤界。）を未の八度半に望むべし。

峯戸山（大丹波及小丹波にては共に三之戸山と書す。）　西北隅にあり、高三百〇六丈、山上より三分して辰の一方は本村字蟬澤に、東北は大丹波村字南平及梨ノ木窪に、西南は小丹波村字指に屬す。山脈は雲取山の支脈本郡と秩父の疆界に延亘するもの、西北の方氷川村及大丹波村と、秩父郡下名栗村の界より東南に分岐せる一支脈にして、日向澤峯（ヒナタザワウラ）（一名鹽地谷山。大丹波氷川界。）雷電山（境界同上。）曲ケ谷（マガリヤ）山（一名山毛欅山。大丹波、氷川、棚澤界。）三道（サンダウ）山（一名海老小屋山或は布瀧ノ峯とも云。大丹波、小丹波、棚澤界。）桃木平（大丹波、小丹波界。）笹平ノ丸等を經て、此に來り、餘勢巳午の間頭窓山に連り、山趾東は大丹波村なる大丹波川に抵り、西南は小丹波村三澤に至る。山中大木なく、矮小の雜樹灌茂す、溪水東溪に湧出

し、東南へ流れて大丹波村と境界を限り、大丹波川に會す、之を蟬澤川とす。榛之折山（前にあり。）を子の十八度、コカハヅル山（一名黒山。大丹波及上成木上分と秩父郡下名栗界。）を丑の八度半、常盤ノ前山を丑の二十三度半、岩茸石山（一名鷹ノ巣山。上成木上分と二俣尾界。）を卯の六度、高水山（境界同上。）を卯の九度、馬佛山を卯の二十三度半、惣岳山（澤井。）を辰の一度、神塚山を辰の十一度、愛宕山（柚木。）を辰の十六度、頭窓山を巳の十七度、甲籠山（前にあり。）を午の十度半、大嶽（檜原、海澤界。）を午の十六度半、御前山（前にあり。）を未の十六度、高指山（前にあり。）を酉の三度、眞名井澤（マナヰサハ）峯（一名黄檗久保ノ峯。ウラ大丹波、棚澤界。）を戌の十一度半に望むべし。

頭窓山（ヅマド）（小丹波にては指ノ尾根或は辨當尾根とも云ふ。）　西北部にあり、高二百八十五丈二尺、嶺上より兩分して東は本村字蟬澤に、西は小丹波村字指（サス）に屬す。山脈亥子の間峯戸山より連接し、餘脈南方雨乞平より岐して二となり、一は漸く東南に向ひ、堀口澤の上頭より終に村内に入り、琴平山、御伊勢山をなし、一は南して小丹波村に支出し、字櫻ノ久保にて多磨川に至り、東は蟬澤に臨む。山東本村分凡八合迄は茅叢にて、以下は杉、檜、雜木茂生し、山西小丹波分は、檜、椹、栂、松、杉其他雜樹蕃叢す。小溪西方小丹波部内に發し、申の方へ流れて三澤川に合す、之を栃久保澤とす。

琴平山　申の方字松葉と穴澤の界にあり、高さ多磨川より凡四五十丈。山脈亥の方頭窓山より連り、西は堀口澤、東は井戸入澤に臨み、南は多磨川に至る。山中松、杉、雜樹叢茂す。山岬に村社八雲神社あり。

御伊勢山　申酉の間字穴澤にあり、琴平山より稍高し。山脈は西北頭窓山より琴平山に連る所の中間より巳の方へ分岐する一支脈にして、東北は大丹波川、西は井戸入澤に臨む。南は多磨川に抵る。山中松、杉、雜樹茂生す。小溪西方琴平山との谿間に起り、南流して多磨川に歸す、即ち井戸入澤是なり。

大丹波川（オホタバ）　北の方大丹波村より來り、山間を南に奔り、村の中間を貫きて地勢を兩分し、字竹之花と沼澤の間より多磨川に注ぐ。長六百四十三間、川幅廣き處十三間狹き處三間、深平均一尺二三寸。水勢急にして清し。筏通し難しと雖、材木散流（方言クダナガシ。）の用に供すべし。

沼澤川　東北隅馬佛山の西南谿に發し、西南より終に南に廻り、多磨川に歸す。長九百四十二間、幅六尺より二間半、深平均六七寸。水勢上に同じ。

蟬澤川　西北隅峯戸山の東谿大丹波村との疆界に湧出し、東南に奔りて同村と分界し、大丹波川に赴く。長八百十一間、幅六尺より三間、深平均四五寸、水勢同上。

掘口澤　西の方小丹波村との境界山間に起り、南して同村と分界し、多磨川に合す。長三百五十三間、幅三尺より二間半、平時は水なし。

井戸入澤　同方御伊勢山と琴平山の谿間字穴澤に起り、南下して亦多磨川に會す、長五百三十三間、幅三尺より三間、深平均一二寸。

丹繩澤　寅の方澤井村上分の彊界惣岳山の西谿に湧出し、南流して同村と分界する長七百三十二間にして、亦多磨川に赴く。幅三尺より二間、深平均四五寸、水勢同上。

二階瀧　中部より稍東方沼澤川の中流にあり、二層に飛瀉す、上段は高五丈幅二尺、其瀧壺より溢れて復落るものを大瀧と云、高十丈餘。其上部より凡一丈許の所にて巖石に礙へられ、分れて數百條となり、縷々注下して恰も千條の白絲を垂るゝが如し。其下流凡五十步許にて又一瀑をなす、高二丈幅三尺許、之を小瀧と云。

精進瀧　南方字神塚なる沼澤川の下流にあり、高三丈幅二尺、下流凡一町餘にして多磨川に注ぐ。

大丹波村（オホタバ）

山梨山　西北の方字井戸地にあり、海面より高三百九十丈七尺（バロメートルにて測量。以下亦同じ。）嶺上より兩分して南は本村、北は秩父郡下名栗村に屬す。山脈は雲取山の脈を承けて、戌の方氷川、日原（ニツバラ）及秩父郡浦山村の境界蕎麥粒山（一名三角山。）より連續し、餘脈東に奔りて黑（クロモ）椴山、長尾ノ丸、槇之尾山、棒之折山、コカハヅル山等に延亘し、以て本村と秩父郡下名栗村との疆界を劃り、山趾北は下名栗村の名栗川に、南は村内日向澤の溪澗に臨めり。山中檜椴躑躅樹其他雜木欝葱たり。嶺上に獵夫炭燒の纔に通行すべき一蹊蹤あり。山東に接して少しく突起せるものを黑（クロモ）椴山とす。其東方少し低下せる所の嶺上に厩（ウマヤ）之峠と呼べる所あり、横凡二間許、奥行三間許、高四五尺、三方は石を疊みて一口を開くもの二ヶ所あり。里老云、往古畠山重忠上成木上分の常盤に居住せし頃、此地に乘馬を飼ひし厩の遺跡なりと、其說信ずべからずと雖、かゝる深山の嶺上に石垣など築きしは、其何の爲にせしを知らず。或は炭竈の跡ならんといへど、炭竈は炭材を伐下すの便と飲水の利とによりて、多くは谿間に作るものなれば、かゝる不便の嶺上にあるべき謂れなしと云。又南谷の半腹に巨巖あり、高五六十丈、幅百五六十間、之を裸岩（ハダカイハ）と呼ぶ、全巖矮小の栂楓躑躅岩芝シノブ草等交加叢生し、景致奇絕なり。

長尾ノ丸　亥の方字井戸地の東邊にあり、高三百六十一丈六尺。嶺上より分界して北は下名栗村に、南は本村に屬す。山脈西の方山梨山より來り、東方槇之尾山に接續し、南は大丹波川に北は下名栗村名栗川に臨む。山中雜木暢茂せり。山梨山を酉の三度、逆川ノ丸を辰の十度半、鷹ノ巢山（一名岩茸石山。上成木上分、二俣尾界。）を辰の十六度、惣岳山（澤井村上分。）を辰の二十三度半、大嶽（檜原、海澤界。）を午の六度に望む。

槇之尾山　北の方にあり、高三百六十丈二尺。亦嶺上より兩分して北は下名栗村、南は本村字槇之尾に屬す。山脈西方長尾ノ丸より連り、辰の方棒之折山に延亘し、山趾北は下名栗村名栗川に、南は本村大丹波川に臨む。山中雜木茅萩の灌叢に屬す。小溪南谿に起り、南流して大丹波川に注ぐ。

棒之折山　東北の方にあり、高四百六十九丈五尺。亦嶺上より分界して東北は秩父郡下名栗村に、西

南は本村字權次入（ゴンジリ）に屬す。山脈戌の方槇之尾山より連續し、巳の方コカハヅル山に繇亘し、支脈東北下名栗村に分出して名栗川に、西南は村内大丹波川に抵る。山中樹林なく、總て茅叢に屬す。小溪數條各南谿に發し、相合して西南へ流下し、大丹波川に入る。頂上眺望活闊、八州の山川曠野を睫眉の間に收む、氣象千萬の壯觀なり。武甲山秩父郡。を亥の十六度半、槇之尾山を戌の八度、蕎麥粒山前にあり。を酉の十九度半、日向澤峯（ウラ）を酉の十五度、雷電山を酉の四度、曲ケ谷峯（マガリヤミネ）を申の二十度半、三之戸山を午の十九度、大嶽前にあり。を午の十九度半、惣岳山前にあり。を巳の五度半に望む。

コカハヅル山上成木上分にては黒山と云。　寅卯の間にあり、高三百十九丈二尺。嶺上より三分して、西は本村字權次入に、東南は本郡上成木村上分字常盤に、北及東は下名栗に屬す。山脈亥の方棒之折山より連り、此處にて岐して二となる。一は巳の方本村と上成木村上分、二俣尾村、澤井村上分、下分。川井村との疆界に聯綿して、逆川ノ丸、名坂峠、障子岩山、馬佛山等をなし、一は辰の方上成木村上分と秩父郡の境界に延亘し、山趾西南村内大丹波川に抵る。山中茅萩の叢莽中矮小の雜木を交えり。委しくは上成木村上分黒山の條○缺。に記せり。

逆川の丸上成木上分にては常盤ノ前山と云。　卯辰の方にあり、高三百十七丈三尺。山上より兩分して、東北は上成木上分字常盤に、西南は本村字中茶屋に屬す。山脈其他上成木上分○缺。に詳にせり。

障子岩山　辰の方字名坂と八桑の間にありて、上成木上分と二俣尾村との境界鷹之巣山二俣尾にては岩茸石山と云ふ。の西方山肩にして、頂上は前の二村に屬す。上成木上分の誌○缺。に詳記せり。

馬佛山一名向ヒナタヂ山。　東南の方にあり、高二百五十八丈二尺。峯頭より三分して、西北は本村字熊澤に、東は澤井村上分入會。下字森ノ腰に、未の方は川井村字沼澤に屬す。山脈其他澤井村の誌○缺。に詳にす。

日向澤峯（ヒナタヂノウラ）氷川にては鹽地谷山と云。△方言淡水の源頭にある峯を何澤の「ウラ」と云。關東の方言、物の尖端即ち樹枝或は竿頭を「ウラ」と謂ふが如し。　戌の方偏隅にあり、高五百二十丈三

尺。嶺脊を分界して、東は本村字日向澤に、西は氷川村字鹽地谷に屬す。山脈は雲取山の脈日原と氷川及秩父郡浦山村の境界蕎麥粒山（一名三角山。）より辰の方山梨山に連亘する嶺脈の中間、本村と氷川及下名栗村の界より分れ、南方僅に二十間許上りて此山の巓をなし、南方雷電山より東南に向ひ、村の西南境に蜒蜿して曲ヶ谷峯（ミネ）、眞名井澤峯（ウラ）、海老小屋峯（ミネ）、桃ノ木平、笹平ノ丸、三之戸山等をなし、氷川、棚澤、小丹波の三村と脊梁を分ち、山趾西南氷川村川苔川に抵り、東南は村内日向澤と大丹波川上流との間に支出し、兩溪相會する所に至る。山中雜木深鬱、其樹皆蒼古にして老蘚を被らざるなし。登路村内字南平より大丹波川を左右して、深谿の間を北又西に攀躋し、其間溪を涉り棧を越え懸崖を横ぎり、日向澤の上流に至るまで長二里十七町四十四間にして、通路斯に谷まる。是より樹枝を援き藤蘿に縋り、攀上ること五町餘、始て頂上に達す。其險尤甚し。溪水東谿に涌水し、東南へ流下し、雷電山獅子口より發する溪水と合す、即ち大丹波川の水源なり。山梨山を卯の十度、棒ノ折山を卯の十五度、曲ヶ谷峯を巳の五度半、蕎麥粒山を戌の十度、小雲取山を酉の十一度に望む。

雷電山　同方部にあり、高四百五十九丈、峯上より兩分し、東北は本村字瀧ノ入に、西南は氷川村字鐘石谷に屬す。山脈北方日向澤峯より連接し、巳の方曲ヶ谷峯に延亘し、山趾西南氷川村の川苔川に至り、西は同村の溪澗に、東北は村内瀧ノ入の谿谷に臨めり。山中雜樹深茂し、瀧ノ入の官林と連る、其樹皆蒼古なり。各所巨巖突兀し、夏時雷雨大抵此所より發す、故に之を雷電岩と名くと云。山東半腹に奇巖あり、一の洞窟を開く、之を獅子口巖と呼ぶ、清泉泌沸洞口より迸出し、東流して日向澤と會す、即ち大丹波川の水源なり。

曲ヶ谷峯（マガリヤミネ）　酉戌の間字瀧ノ入と曲ヶ谷の界にありて、嶺上より東北は本村に屬し、氷川にては山毛欅山、棚澤にては舟井戸山と云。

他の一方氷川村にては、同村と棚澤及本村の三界にて、古來同村字逆川に屬し、山毛欅山（ブナトヤマ）　山上に山毛欅の大木あ

るより名く。と稱す。しかるに明治八年地租改正地圖編製の時、氷川の村吏は之に立會はずして、棚澤村の吏員に委托し、當時誤て此地を棚澤村の地に編入ありしも、深山の事にて深くも意を注がざりしを以て、其棚澤村に編入ありし事は今日まで之を知らざりしも、嶺上の西部は元より氷川村の地なりと云ひ、棚澤村にては此地全く同村に屬し、本村と界を接するのみ、氷川は之に關せずと云ひ、互に紛論して未だ其判決を知らず。されど地形を以て按ずれば、氷川、棚澤、本村の三境界とする方適當ならん歟。若し棚澤村の言ふ所に從へば、嶺を越えて逆川上流の谿間にまで跨ることとなるべし。山脈亥の方雷電山より連り、崛起して頗る高峻をなす、高四百九十四丈六尺。此所にて大脈分れて二となる。一は巳の方眞名井澤峯（ウラ）に連り、一は未の方棚澤と氷川の村界に延亘して、鋸山より高指山（一名本荷鉢山。）をなし、小支脈東方村内曲ヶ谷澤と大丹波川の間に支出して、兩溪相會する所に至る。山中雜樹深鬱たり。溪水一は東南に湧出し、寅の方へ流下して大丹波川に會す、之を曲ヶ谷澤と云。一は西北谿に發し、西南へ奔下して氷川村の川苔川に合す、之を逆川とす。一は南谿棚澤部内に起り、南又東南へ流下して多摩川に歸す、之を入川とす。大嶽（檜原と海澤界。）を巳の二十五度、御前山（檜原と棚村界。）を午の二十四度、蕎麥粒山（前にあり。）を戌の二十二度、雷電山を戌の二十七度、日向澤峯を亥の五度半に望む。

眞名井澤峯（ウラ棚澤にては黄蘗久保ノ峯と云ふ。）　西の方にあり、高四百六十二丈六尺。嶺上より兩分して、東北は本村字眞名井澤と曲ヶ谷の界に、西南は棚澤村字黄蘗久保に屬す。山脈亥の方曲ヶ谷峯より連亘し、此所にて岐して二となる。一は巳の方海老小屋山に接續し、一は寅の方より馬乘石山、東して新藏指（サス）ノ丸、東南して惣岳山をなし、村内大丹波川と眞名井澤の中間に延亘して、兩溪相會する所に止る。山中雜樹繁蔚たり。溪水一は東谿村内に湧出し、辰の方へ流れて眞名井澤となり、大丹波川に會す。一は巳の方棚澤部内に起り、西南へ流れて入川に合す。



冠岩附近より三ッケッ　スダレ　大平山の北面を望む



冠岩附近より廣河原谷を距てゝ蓼麥粒山と仙元峠の北面を望む

山口成一氏撮影

海老小屋山（小丹波にては三道山、棚澤にては布瀧ノ峯と云。）　申の方にあり、高四百二十三丈九尺。峯頭より三分して、東北は本村字眞名井に、西南は棚澤村字布瀧に、巳の方は小丹波村字大渡に屬す。山脈其他小丹波村三道山の條（〇八七頁。）に詳にせり。

笹平（サヽダヒラ）ノ丸（小丹波にては赤クナ山と云ふ。）　午未の間字眞名井にあり、高三百五十三丈六尺。嶺上より西南は小丹波村字赤クナに屬す。山脈其他同村の誌（〇八八頁。）に詳にす。

三之戸山（川井村にては峯戸山に作る。）　南の方字梨ノ木澤と南平の界にあり。峯上より三分して、東北は本村、西南は小丹波村字指に、東南は川井村字蟬澤に屬す。山脈其他川井村の誌（〇八七頁。）に詳にせり。

馬乘（ノリイシ）石山　西部字眞名井と曲ヶ谷及雁掛の界に跨る、高四百四十八丈八尺。山脈は眞名井澤峯より寅の方へ分岐せる一支脈にして、東方新藏指（シンザウザス）ノ丸に連り、山趾南は眞名井澤に、西北は曲ヶ谷澤の溪澗に臨めり。山中雜樹深鬱岩石仄立す。

新藏指（シンザウザス）ノ丸　戌の方字雁掛（カリカケ）と眞名井の界にあり、高三百五十四丈二尺。山脈西方馬乘石山より連り、東南惣岳山に延亘し、山趾南は眞名井澤、東北は大丹波川の深谿に臨めり。山中茅叢にして樹林なし。

惣岳山　村の中部字奥中茶屋と眞名井の界に跨る、高三百二十六丈九尺。山脈西北新藏指ノ丸より連り、東南眞名井澤の大丹波川に會する所にて盡く、山趾西南は眞名井澤、東北は大丹波川に臨めり。山中雜樹蓊生す。山上に近時まで青木の神社ありしが、明治五年字入屋ヶ谷に移し、今は廢地となり、唯舊社を存するのみ。登路一條眞名井橋を渡り、西北へ上る十六町餘にして巔に達す、甚險なり。

大丹波川　水源二あり、一は戌の方偏隅日向澤峯の東谿に湧出し、東又辰の方へ流下す、長七百八十六間、幅六尺より三間。一は雷電山の東腹字瀧ノ入獅子口巖の窟中に湧出し、東流する五百二十間

にして前溪と會す、川幅同上。是より東又漸くして東南、又漸くして南に流下し、川井村に入る、合流より村界まで長四千七百四十六間、幅廣き處二十五間、狹き處三間、深淺不定、舟筏通じ難し。該川絶壁巖盤の間を奔下するを以て、激湍雪を飛し、各所に瀑布をなす、水勢極て俊快、水質極て清澄、多く鰍魚を産すと云。上流は奇巖怪石頗る多し、其最賞觀に堪ふる者を圓岩と云、惣岳山の北谿本川の南岸字雁掛にあり、高四十餘丈、周圍凡三町餘、岩頭に古松あり、岩間各所に紅楓紫藤躑躅岩芝シノブ草等補綴叢生し、頗奇景なり。此他ザナレ岩、稻村岩、中岩、釣橋ノ岩等あり、各奇狀を呈す。

曲ケ谷澤　酉戌の間曲ケ谷峯の東南谿に發し、寅の方へ流下して、大丹波川に歸す、長七百四十九間、幅六尺より三間。水勢急激なり。

眞名井澤　西方眞名井澤峯の東谿に發源し、辰の方へ奔流して、字厳平と梨ノ木澤の間より大丹波川に會す、長一千八百九十三間、幅廣き處八間、狹き處二間。水勢駿激なり。

常雲川（ジヤウウン）　辰の方字名坂の谿間に起り、西南へ流れて大丹波川に歸す、長五百廿六間、幅廣き處三間、狹き處二間。水勢同上。

熊澤川　東南の方馬佛山の西北谿に發し、西流して亦大丹波川に注ぐ、長五百二十間、幅一間より二間半。水勢同上。

蟬澤川　南の方三之戸山の東谿川井村との境界に湧出し、東南へ流れて同村と分界し、大丹波川に入る、長八百十一間、幅一間より三間、水勢同上。此他小溪無數枚擧に遑あらず。

魚留瀧（イヲドメノタキ）　中部の稍東北字與中茶屋と櫛次（ゴンツリ）入の間、大丹波川の中流にあり。高二丈餘幅七尺。

四十八瀧　魚留瀧の上流凡廿町許の所にあり、此邊大丹波川の幅頗打開けて、凡一町許の間大小の岩石累々突出して水勢を激し、溪水岩間を逆飛して大小の瀑布をなす、其高さ凡六尺より一丈四五尺

に及び、幅一尺より六尺の者あり、其瀑無數一所に並列するより、四十八瀧の名ありと云。

雨乞瀧（一名釣橋ノ瀧。）　四十八瀧の上流凡十五町許を距つ、高二丈五六尺、三條相並びて飛瀉す、左は幅二尺、中央は九尺、右は六尺餘。

布瀧　辰の方字中茶屋なる大笹澤の上流にあり、二段に飛瀉す。上層は高三丈、下層は高七丈、幅各三尺許。飛沫雪を噴きて山谷爲に朦朧たり。下流凡八町許にして大丹波川に注ぐ。

新發智瀧　中部の稍北字奥中茶屋惣岳山の北麓新發智澤の中流にあり、高四丈幅四尺餘。下流凡四十間にして大丹波川に入る。

井ヨウツノ瀧　西北の方字井戸地なる井ヨウツ澤の下流にあり、四層に瀉下す。上段は高一丈五尺、次は一丈七尺、次は二丈。下段は一丈五尺餘、幅各三尺。直に大丹波川に落つ。

曲ケ谷ノ瀧　同方字曲ケ谷澤の下流にあり、高二丈五六尺、幅六尺。下流凡一町餘にして大丹波川に注ぐ。

小丹波村

三道山（サンダウ）（大丹波にては海老小屋山、棚澤にては布瀧ノ峯と云。）　又三道尾根とも云。亥の偏隅にあり、海面より高四百二十三丈九尺（「パロメートル」にて測量、以下亦しかり。）峯上より三分して、東南は本村字大渡に、東北は大丹波村字眞名井に、西は棚澤村字布瀧に屬す。山脈は雲取山の脈本郡と秩父郡の疆界に蜿蜒するもの、蕎麥粒山（ソバツブ）（大丹波、下名栗界。）より山梨に連る嶺脈の中間即ち氷川、大丹波及秩父郡下名栗村の境界より南に分岐する一支脈にして、亥の方大丹波と氷川、棚澤との境界日向澤峯（ウラ）（一名鹿地谷山。）雷電山、山毛欅（ブナ）山（一名曲ケ谷峯或は舟井戸山とも云。）眞名井澤峯（ウラ）（一名黄檗久保ノ峯。）等の諸峯を經て此に達り、餘勢辰の方桃ノ木平より漸く東南して赤グナ山に延亘し、山趾巳未の間本村と棚澤村の界を限り、入川に抵り、東北は大丹波村眞名井澤、西南は棚澤村布瀧、

巳の方は村内深澤の溪澗に臨めり。山中椴其他雜樹深鬱たり。溪水一は巳の方谿間に湧出し、同方嚮へ流下して入川に會す、之を深澤とす、即ち大藏川の水源なり。一は未の方棚澤村部内に發し、未の方へ奔流して布瀧の瀑布をなし、亦入川に合す、之を布瀧澤とす。棒之折山（大丹波、下名栗界。）を寅の六度、眞名井澤峯（ウラ）を戌の二十五度半、山毛欅（ブチ）山を戌の九度半、高指山（ザス）（棚澤、氷川界。但氷川にては本荷駄山と云。）を未の二十五度、御前山（ゴゼン）（境村と檜原界。）を未の二度、大嶽（檜原、海澤界。）を巳の二十七度、貧之山（御嶽村と大久野村界。）を巳の正中に望むべし。

赤グナ山（大丹波にては笹平ノ丸と云。）北の方にあり、高三百五十三丈六尺。嶺上より兩分して西南は本村字赤グナ、東北は大丹波村字眞名井に屬す。山脈戌の方三道尾根より連續し、東南三之戸山に緜接し、山趾西南は村内三澤川に、東北は大丹波村眞名井澤の溪水に臨めり。山中樹木なく、茅叢中矮小なる雜木の灌莽するのみ。溪水西南谿に發し、南流して入川に歸す、之を三澤川とす。棒之折山（前にあり。）を丑の十二度、常盤ノ前山（一名逆川ノ丸。大丹波、上成木村上分界。）を寅の二十一度、岩茸石山（一名鷹之巣山。上成木上分と二俣尾の界より澤井、大丹波にまたがる。）を卯の十八度、惣岳山（澤井村上分。）を辰の五度、三之戸山を辰の十五度、大嶽を午の九度、御前山を未の八度、高指山（前にあり。）を申の十八度、三道尾根を戌の二度、眞名井澤峯を戌の九度に望む。

三之戸山（ミノト）（川井にては峯戸山に作る。）子丑の間にあり、高三百六丈、山上より三分して西南は本村字指（サス）に、東北は大丹波村字南平と梨ノ木澤の界に、辰の方は川井村字蟬澤に屬す。山脈其他川井村の誌〇七八頁。に詳にせり。

指之尾根（サス）（一名辨當尾根。川井村にては頭窓山と云。）丑の方にあり高二百八十五丈二尺、嶺上より兩分して東は川井村字蟬澤に、西は本村字指に屬す。山脈其他川井村の誌〇七九頁。に詳にす。

榜杭山（バウゲヒ）（御嶽にては大塚、海澤にては白岩山と云。）南隅にあり、高四百十三丈、頂上より三分して、北は本村字御嶽道に、西南は海澤村字東久保に、東南は御嶽山字富士峯に屬す。山脈は御嶽山より分岐する一支脈にして、

巳の方富士峯を經て此に連接し、此所にて岐して二となる。一は西北又北に廻りて本村と海澤の村界を劃り、越澤川と寸庭川の相會する所に至る、之を廣澤尾根と云。一は東北して本村と御嶽村梅澤村の三界なる中之棒山より復分岐し、其寅の方に亘るものは御嶽梅澤の村界に延きて多磨川に至り、其北するものは本村と梅澤丹三郎二村の界を分ち多磨川に抵る。山中茅叢にして樹林なし。溪水一は北谿に湧出し、北に奔りて越澤川に會し、多磨川に歸す、之を寸庭川とす。一は東谿御嶽村字瀧本入に發し、御嶽山なる富士峯の北谿より發する一水と合し、東北に流下して琴澤川と會し、瀧本川となる。登路一條村内字寸庭平なる多磨川の寸庭橋より南へ上ること二十五町五十三間にして頂に達す、險なりと雖本村より御嶽山へ至る捷徑なり。御嶽山（本社の頂上。）を巳の十九度、大嶽を午の二十三度、御前山を申の十二度、大雲取山（日原と秩父郡大瀧村界。）を戌の二度半、高指山を戌の二十度半、天目ノ峯（日原と秩父郡鴨澤山界。）を戌の二十五度、指之峯を子の一度半、岩茸石山（前にあり。）を丑の十一度、物岳山（澤井。）を丑の二十度、貧乏山を辰の十度、富士峯（御嶽山。）を辰の二十三度に望む。

丹三郎平（ヒラ）ノ尾根（梅澤にては三田窪山、御嶽にては御嶽山と云。）　南部宇御嶽道と丹三郎平（ヒラ）の界にあり、高三百八十四丈二尺。頂上より二分して、西は本村、東北は梅澤村宇三田窪に、東南は御嶽村宇瀧本入に屬す。山脈其他梅澤村の誌（○缺。）に詳にせり。

多磨川　西の方棚澤村より來り、同村と分界する四百三十六間にして村内に入り、村の中間を東へ貫流する五百二十五間にして又村界に出で、丹三郎村との境界を經る二百三十三間、同村と川井村の間に入る、幅十五間より二十間、深澤一丈七八尺、淺端二三尺、水勢駛にして清し、桴筏通ずべし。兩岸各所に奇嵓突立す、其名ある者を鵜取岩（一名女夫岩。）烏帽子岩、算筒岩等とす。

入川　西北の方棚澤村より來り、村の西北境を限りて同村と分界をなし、東南又南へ奔下して多磨川に會す、長一千七百九十二間、幅三四間より十一二間、兩岸岩壁急流清漾、桴筏通じ難し。但出水の

時は材木散流方言クダナガシ。の便あり。

大藏澤　上流を深澤と云ふ、亥の方偏隅三道尾根の東南谿に湧出し、巳午の間へ流下して入川に注ぐ、長九百九十一間、幅六尺より二間に過ぎず。水勢同上。

三澤川　北の方赤グナ山の西南谿に發源し、南流して亦入川に會す、長八百七十九間、幅六尺より九尺許。水勢同上。

覆澤（コボレ）　中部ノ稍東北字黒指の山間に起り、南して多磨川に合す、長四百八十八間、幅六尺より九尺、平時は水なし。

堀口澤　東の方字妻戸と川井村との境界に起り、南して同村と分界し、多磨川に合す、長三百五十三間、幅三尺より三間。平時は水なし。

越澤川（コエザハ）　西南の方海澤村より來り、丑の方へ流下して同村と分界する九百二十三間にして多磨川に會す、幅二間より五間、深處二三尺、淺處三四寸。水勢急にして清し。

寸庭川一名西川又御蔵澤とも云ふ。　南隅榜杭山の北谿に濫觴し、北流して字寸庭平と鈴野の界より越澤川に合す、長一千百十二間、幅四五尺より二三間、深處二尺、淺處二三寸。

石積澤（イシヅミ）　丹三郎村より來り、南方字向山の東邊を北流して同村と分界する僅に四十二間にして多磨川に入る。幅一二間、深平均四五寸。

廣澤ノ瀧　未の方字廣澤の谿間にあり、高五丈幅一尺。下流五六十間にして越澤川に注ぐ。

神萩（カムハキ）ノ瀧　西南の方字寸庭平なる寸庭川の下流にあり、高一丈三四尺、幅二尺。

瞼ノ瀧　同方前瀑の下流凡一町許にあり、高三丈幅三尺。下流三四間にして又一瀑をなす、之を明王瀧と云。高二丈五尺、幅三尺。直に越澤川に注ぐ。

石積瀧　南部字向山と丹三郎村との界石積澤の下流にあり、高三丈幅三尺。下流十五六間にして多磨

川に入る。

垢離附瀧　西の方入川の下流棚澤村との境界甲州道垢離附橋の北にあり、三層に懸る。上段高三丈五尺、之を童子瀧と云。中段高二丈餘、之を不動瀧と云。下段は高一丈を過ぎず、幅各六尺、下流三十間許にして、多摩川に注ぐ。

笹尾ノ瀧　北方字後山と曲尾の界なる三澤川の下流にあり、高一丈二尺、幅二尺。

深澤ノ瀧　亥の方字大渡なる大藏川の上流に懸る、高五丈、幅一尺。

棚澤村

山毛欅山　一名舟井戸山。大丹波にては曲ケ谷峯と云。高四百九十四丈六尺（パロメートルにて測量、以下亦同。）山脈其他大丹波村曲ケ谷峯の條〇八三頁。に詳にせり。

黄檗久保ノ峯　大丹波にては眞名井澤峯と云。北方字黄檗久保にあり、高四百六十二丈六尺。嶺上より兩分して、西南は本村に、東北は大丹波村字眞名井澤と曲ケ谷の界に屬す。山脈其他同村の誌〇八四頁。に詳記せり。

布瀧ノ峯　大丹波にては瀧老小屋山、小丹波にては三道尾根と云。丑の方にあり、高四百二十三丈九尺。峯上より三分して、西は本村字布瀧に、東南は小丹波村字大渡に、東北は大丹波村字眞名井澤に屬す。山脈其他小丹波村三道尾根の條〇八七頁。に詳にす。

高指山　一名燒タオノ峯。氷川にては本荷駄山と云。戌の方にあり、高五百二十四丈一尺。山嶺より兩分して、東は本村字燒多亡に、西は氷川村字堰除澤に屬す。山脈は雲取山の脈本村と秩父郡の疆界に蜒蜿するもの、蕎麥粒山　氷川、日原、浦山界。より山梨山　大丹波と下名栗界。に亘る嶺脈の中間より巳の方へ分岐し、大丹波氷川の境界日向澤峯　一名鹽地谷山。雷電山より山毛欅山に連るもの、復分れて未の方に向ひ、本村と氷川の境界に延亘する一脈

にして、丑の方鋸山を經て此に來り、崛起して頗峻嶽をなし、此所より餘勢分れて數派となる。一は巳の方池坪ノ峯より白丸と氷川の境を劃り、數馬の切通にて多摩川に遮斷せらる。一は西して氷川村の中部を横斷し、日原村字平石にて日原川に抵り、一は未の方氷川村除澤の西を亘りて亦日原川に至る。山中概ね茅萩に屬す。但西南氷川部内の溪間には、雜樹の林莽を見る。溪水東谿に湧出し、村内を東南へ奔流して多摩川に會す、之を西川とす。蕎麥粒山（前にあり。）を亥の十九度、淺間嶺（日原、浦山界。）を亥の十一度、天目ノ峯（同上。）を戌の二十五度、犬剃籠ノ峯（同上。）を戌の二十一度、酉谷ノ峯（日原、大瀧界。）を戌の十五度、大雲取山（同上。）を酉の二十四度半、小雲取山（日原と秩父郡大瀧村及甲州都留郡丹波山村界。）を酉の十五度、狩鞍山（一名不老山。日原、氷川、境村界。）を申の二十二度、三之木戸山（境村氷川界。）を申の三度半、三頭山（河内、檜原と甲州西原界より小菅村に跨る。）を午の二十七度、御前山（境村と檜原界。）を午の六度半、天地山（氷川、海澤、檜原界。）を午の二度半、御嶽を辰の二十四度、池坪ノ峯を巳の三度半、城山を辰の二十三度半、荏ノ久保山を卯の二十四度、コカハヅル山（上成木上分、大丹波、下名栗界。）を寅の二十一度に望む。

池坪ノ峯（白丸及氷川にては鎖藤山と云ふ。）西の方にあり、高四百四十四丈三尺。頂より三分して東北は本村字永久保に、西は氷川村字除澤に、東南は白丸村字戌亥頭と東山の界に屬す。猶白丸村誌（〇九三頁。）に詳にせり。

疣高山　西北の方字杉之尾と燒多亡の界に跨る、高四百四十八丈五尺。山脈西方本村と氷川村の疆界鋸山より高指山に連る嶺脈の中間より東に分岐する一支脈にして、東南の方西川と入川の兩溪間を延亘して荏ノ久保に至る。山陽は茅萩の叢莽に屬し、山陰は雜木灌茂す。小溪東谿に發し、東北流して入川に入る、之をブス平ノ澤と云ふ。

荏ノ久保山　辰の方字後久保と堂ノ澤及荏ノ久保の界にあり、高三百六十二丈九尺。山脈西北の方疣高山より連り、巳の方多摩川に抵り、東北は入川に、西南は西川に臨めり。山中椹、檜、栂、杉等



蕎麥粒山絶頂



日向澤頭より長尾ノ丸　槇ノ尾山　棒ノ折レ山　黒山　常盤ノ前山
高水山及石茸石山を望む　　武田久吉氏撮影

繁生す、但未だ大材をなすに至らず。小溪未の方に發し、南流して多磨川に歸す、之を堂ノ澤とす。

城山（ジヤウ）　南の方多磨川の南岸にあり、高三百六十九丈七尺。山頭より分界して、東北は本村字八味指（ハチミザス）に、北は白丸村字向東に、南は海澤村小吹（コブキ）山ノ神、中石津、上リ坂の三字に屬す。山脈は南方大嶽より甲籠山（御嶽の奥宮。）に連る嶺脈の中間鍋割山（一名芥場峯。）より北へ分岐する一支脈にして、海澤村小川と越澤川との間を延亘して此に來り、突起して該山をなし、餘勢一は戌の方海澤と白丸の村界を限り、數馬の切通の對岸にて多磨川に抵り、一は東北本村内越澤川の多磨川に會する所に止り、北は多磨川に枕めり。山中檜、杉、椴其他雜木繁蔚す。小溪北谿白丸部内に起り、北流して多磨川に注ぐ、之を城山澤とす。此地は承平の頃平將門一時本村に住せし時の城寨の跡にて、近時まで山中に井戸の遺址などありしが、今は埋沒せりと里人語れり。

西川　西の方高指山の東谿に涌出し、重嶂の間を東南へ奔下して、字鳩之巣より多磨川に注ぐ、長二千二百二十四間、幅六尺より十間に至る。水勢同上（○多磨川の條「水勢驟激にして清冽なり」と有り。）

入川　北隅山毛欅山の南谿に發源し、南して疣高山の北より漸く東南に向ひ、字池向に至り村界に出づ、其長一千三百十六間、是より東南又南に奔り、小丹波村と分界する一千七百九十二間にして多磨川に會す、幅五六尺より十二三間に至る、深平均一尺四五寸。重山絶崖の間を奔下するを以て、各所岩磐に激して瀑布をなし、水勢頗る俊快なり。

越澤川　巳の方海澤村より來り、多磨川南部の東邊を丑の方へ流れて小丹波村と分界し、多磨川に歸す、長九百二十三間、幅二間より五間、深平均三四寸。水勢急にして清し。

白丸村

筑摩山（棚澤村にては池坪ノ峯と云ふ。）　亥の偏偶にあり、海面より高四百四十四丈三尺（バロメートルにて測量、以下亦同じ。）頂より三分して東

南は本村字戌亥頭（カシラ）と東山の界に、西は氷川村字除（ヨゲ）澤に、東北は棚澤と氷川村の疆界高指山（一名燒多亡山。氷川にては本荷駄山とも云ふ。）より連接し、此所にて岐して二となり、一は南して本村と氷川の境を限り、コンザス山より數馬の切通を經て多磨川に抵り、一は東南本村と棚澤の界を亘り、亦多磨川に止る、之を花折所（ト）ノ尾根と云、東北は棚澤村西川の溪澗に臨めり。棚澤部内は概ね茅萩の叢莽、本村部内も亦茅叢なれど、谿間は雜樹林蔟し、西方氷川部内は松、椴、栂其他雜木蓊蔚たり。溪水一は巳の方本村部内に湧出し、東南へ流下して多磨川に注ぐ、之をクサギ澤とす。一は西南溪氷川部内に發し、西南へ流れて日原川に會す、之を除（ヨゲ）澤とす。御前山（境村と檜原界。）を午の十七度、天地山（氷川、海澤、檜原界。）を午の十三度、大嶽（檜原、海澤界。）を巳の二十六度半、甲籠（カロウ）山（御嶽山、海澤界。）を巳の十七度、御嶽山（本社の頂上。）を辰の二十五度、愛宕山（柚木。）を卯の二十五度、惣岳山（澤井村上分。）を卯の八度、高水山（上成木上分、二俣尾村界。）を卯の正中、高指山（氷川、棚澤界。）を亥の三度半、棒ノ折山（大丹波と秩父下名栗界。）を丑の二十八度、三道（サンダウ）尾根（一名海老小屋山或は布瀧ノ峯とも云ふ。大丹波、小丹波、棚澤の境界。）を丑の一度、荏ノ久保山（棚澤。）を卯の五度、頭窓（ヅマト）山（一名指ノ尾根。川井、小丹波界。）を卯の一度に望む。

城山（ジヤウヤマ）　東南隅にあり、高三百六十九丈七尺。山頂より三分して、北は本村字向東に、南は海澤村字小（コ）吹（ブキ）山ノ神、中石津、上（アガ）リ坂の三界に、東北は棚澤村字八味指（ヘチミザス）に屬す。山脈其他棚澤村の誌（○九三頁。）に詳にせり。

數馬澤（一名久能澤。）　西南の方數馬山の東南谿に發し、東南へ流下して多磨川に會す、長二百九十七間、幅三尺より四間、平時は水流を見ず。

柚入澤　戌の方根岩山の東南谿に發り、同方嚮へ流れて亦多磨川に會す、長四百四十二間、幅三四尺より五間半、平時は水流甚少し。

清水澤　中部の稍西北字丸ノ内なる山間に起り、東南流して亦多磨川に入る、長二百七十間、幅三尺

より三間、水流同上。

臭木澤（クサギ）　亥の方筑摩山の南谿に發し、巳の方へ流れて亦多磨川に歸す、長五百八十九間、幅三尺より四間、深平水二三寸。

瀧ノ澤　北の方字東山なる白水山と三本木山の谿に起り、巳の方へ向ひて多磨川に注ぐ、長四百二十間、幅三尺より二間、深同上。

城山澤　東南の方城山の北谿に發り、亥の方へ向ひて多磨川に合す、長三百八十八間、幅三尺より二間、平時は水流甚少し。

海澤村

天地山（テンチヤマ）　頂を割岩と云。　西南隅にあり、高四百八丈五尺餘（バロメートルにて測、以下皆同じ。）嶺より三分して、東北は本村字天地澤に、西北は氷川村字大澤入に、南は檜原村字神戸に屬す。山脈は三頭山（檜原、河内及甲州西原村界。）の東脈にして、申の方月夜見山、御前山（ゴゼンヤマ）、大平峯（オホダヒラミネ）一名鞘口山、又太耶平指山とも云。を經て、此に連り、東南の方大嶽に延亘し、支脈北に奔りて、本村と氷川村との疆界を分ち、多磨川に抵る。該嶺脈は惣て巉巖突兀凹凸頗る多し、因て之を鋸山と云。頂に梅の大樹立てり、其他雜木深茂す。但西南は茅叢の所あり。溪水一は東北高岩山との谿間に發し、東流して小川に會す、之を天地澤とす。一は西谿氷川部内に起り、西北へ流れて大平峰より發する溪流と會し、大澤川となる。一は西南谿檜原部内に湧出し、西南へ流下して大平峯より發する溪水と合し、赤澤となる。大平峯を申の九度、御前山を申の十三度、大嶽を辰の十二度、甲籠山を卯の五度、蕎麥粒山（氷川、日原、浦山界。）を亥の二十九度、鹽地谷山（一名日向澤ノ峯。氷川、大丹波界。）を子の五度、高指山（一名本荷駄山。氷川、棚澤界。）を子の二度半、棒ノ折山（大丹波、下名栗界。）を丑の一度、江戸小屋山（一名本谷入山。氷川、境村界。）を酉の二十度、九龍山（一名坂入向山。境界同上。）を戌の三度に望む。

大嶽　巳の方にあり、高五百四十四丈九尺。嶺より分界して、南は檜原村字大嶽に、北は本村字船ヶ久保と若宮澤の界に跨る。全山巉岩嵬巍、檜、杉、椵、樅其他樹木深鬱、石皆蒼古、老蘚を被り、奇狀言ふ可らず。嶺に大嶽神社の奥宮あり。山脈其他檜原村の誌に詳にせり。

鍋割山（御嶽山にては芥場ノ峯と云。）　東南の方にあり、高四百九十丈二尺。嶺上より兩分して、北及西は本村字尾平と長尾の界に、東南は御嶽山字芥場（アクバ）に屬す。山脈午未の間大嶽より連接し、寅の方甲籠山より御嶽に延亘し、支脈北に分岐して村内越澤川と小川の中間を緜延して城山に連り、多磨川に抵る。山中雜木深茂す。小溪西谿字長尾に起り、西流して大嶽より發する小川の上流に合す。御嶽を未の九度、御前山を酉の正中、天地山を酉の十度半、高岩山を酉の二十六度半、甲籠山（カロウサン）を寅の正中、富士峯（御嶽）を丑の十九度、貧乏山（御嶽村、大久野村界。）を寅の二十六度、麻生山（大久野より發澤にまたがる。）を卯の十七度に望む。

甲籠山　同方字尾平にありて、前山の寅の方に接續す、即ち御嶽の奥ッ宮の在る所にて、男具那（ヲクナ）ノ峯とも云。而して本村に屬する分は、頂上より西北凡五間餘を下りし所より以下なり。山勢其他御嶽山の誌○九頁。に詳にす。

白岩山（御嶽にては大塚、小丹波にては椿杭山と云。）　東の方にあり、高四百十三丈。頂上より三分して、西南は本村字東久野に、東南は御嶽山字富士峯に、北は小丹波村字御嶽道に屬す。山脈其他小丹波村の誌○八八頁。に記載せり。

城山（ジヤウヤマ）　村の北部にあり、高三百六十九丈七尺。山頭より分界して、南は本村字小吹山（コブキ）ノ神、中石津、上リ坂の三界に、北は白丸村字向東に、東北は棚澤村字八味指（ハチミサス）に屬す。山脈其他棚澤村の誌○九三頁。に詳にせり。

高岩山（タカイヤサン）　西南部字丸山、横壜指（ヨコマヽザス）、澤入の三字に跨る、高三百八十六丈。山脈は天地山より鋸山に連る巖脈の内、天地山の北凡四五町許の所より、寅の方へ分岐せる一支脈にして、南北共に谿谷に臨み、峻峯峭拔、全山巉巖を以て成り、椵梅其他雜木擁掩し、景趣奇絶の一峯なり。山趾一は東して小川

に抵り、一は東北小川と駒澤の間に支出し、一は北して駒澤と大賀澤の間を亘り、多摩川に屆る。

鋸山（ノコギリヤマ）　西方にあり、最高き處二百八十八丈四尺、嶺上より兩分して、北は本村、西は氷川村に屬す。山脈は天地山より北に分岐せる一支脈にして、餘勢北の方氷川村愛宕山に至り、山崖西は氷川村大澤の溪澗に、東亦村内大賀澤の深壑に臨めり。該山脈惣て山骨を露出し、岩鋒突兀、松檜梅檜等翁蔚深茂し、頗る奇景を極む。嶺上巖缺の處、峭仄壁立、東西亦懸崖なるを以て、此に到るには甚迂路を取らざる可らず。

小川（コガワ）　巳の方大嶽の北谿字若宮澤と白瀧の間に發源し、重山壑谷の間を蜿蜒盤回して、北偏西に奔り、村の亥の方字上り坂と下野の界凡八町許の間砂底を潜流し、復出て西より北に廻り、字神庭と柿平の界より多摩川に會す。長一里三丁十四間、幅狹き處三四尺、廣き處十八九間、淺瀬五六寸、深潭は測るべからず。水勢同上（〇多摩川の條に、「水勢駿激にして冽清、筏通し難し」とあり）。出水の時は材木を散流するを得べし。

越澤川（コイサハ）　辰の方御嶽山の社北丸井戸に發源し、五町許を經て村内に入り、村の東部山間を西北より北に廻流して、字澤向と小吹山ノ神との界より小丹波村に入る、長千百九十五間、幅廣き處三間、狹き處四五尺、深き處一丈、淺き處二三寸。水勢同上。

大賀澤　申の方高岩山の西北谿字澤入に起り、村の西部を北流して、字大賀と神庭の間より多摩川に注く、長八百五間、幅狹處三四尺、廣處二間、深平均二三寸。水勢同上。

駒ノ澤　上流を西澤とも云。西の方字箒久保の谿間に起り、北流して小川に入る。長六百九十三間、平時は水なし。

堀切澤　辰の方字尾平と御嶽山の境界即ち御嶽本社の山後に發し、亥の方へ流れて同山と分界する百二十二間にして村内に入り、又百九十八間を經て、越澤川の上流に合す、幅三四尺より一間、降雨

の時は急激なれど、平時は水なし。

孫八澤ノ瀑　辰の方甲籠山の北谿孫八澤の中流にありて、本村より御嶽通路の下方に懸る、高二丈餘、幅四尺。下流凡四町許にして越澤川の上流に歸す。

神庭ノ瀑　西北の方字神庭と大賀の間なる大賀澤の下流にあり、二級に懸る、上は高一丈八尺、幅七尺。下は高一丈餘、中間にて巖鋒に截れ、分れて三條となる、幅各二三尺、直に多磨川に注く。

三釜瀑　南の方字姫松尾と長尾の界小川の下流にあり、三層に飛瀉す。下級は高二丈幅六尺、中段高六七尺幅五尺、上段高七八尺幅五尺。

捩瀑　同方前瀑の上流凡一町餘にあり、二段に落つ。上は高二丈餘、下は一丈餘、幅各四五尺。

大瀑　捩瀑を距る凡四十間許にあり、高三丈餘幅六尺。

不動瀑　大瀑の上流凡二十間許にあり、高二丈餘幅六尺。

白瀑　不動瀑の上流凡八町許を距つ、高五丈餘幅一丈。

天狗岩ノ瀑　南の方字姫松尾と川入の界井戸ノ澤の下流にあり、三級に懸る。下段は高一丈五六尺、中段一丈、上段二丈餘、幅五尺、直に小川に落つ。

布瀑　西南の方字丸山と川入の間なる天地澤の下流にあり、高二丈幅四尺。下流小川に歸す。

古(コ)瀑　布瀑の上流凡一町(デクチ)許にあり、高三丈幅四尺。

女房瀑　村の中部字出口なる小谿の下流にあり、高三丈幅四尺。直に小川に注ぐ。

御嶽山

芥場峯(アクバ)海澤にては鍋割山と云。　申の方にあり、海面より高四百九十丈二尺(バロメートルにて測量。以下又同じ。)嶺上より分界して、東南は本村字芥場按に芥の字は堊の字の誤なる可し、近時まで山下にて堊石を燒て石灰を製したる所なればなり。に、北及西は海澤村字尾平と長尾の界に屬す。

山脈其他海澤村鍋割山の條○九六頁。に詳なり。

甲籠山（カロウサン）一名男具那ノ峯（ヲクナ）。同方字男具那ノ峯にあり、高四百六十三丈。峯上より西北凡五間許下りし所より以下は、海澤村字尾平に屬す。山脈は三頭山（ミトウサン）の分脈を承けて、未の方大嶽より芥場ノ峯を經て此に連接し、寅の方御嶽山に延亘す。北は海澤村の深谿に、南東又瀧ノ澤の溪間に臨めり。巉巖突兀、樹木蒼古、就中檜栂白蹈躅を多しとす。小泉一は南谿に湧出し、南流少間にして瀧ノ澤に合す。一は北谿海澤部内に發し、北流する又幾許ならずして越澤川に會す、之を孫八澤と云。峯頭に天津社あり、之を奥の奥宮と云。又峯の東南に男具那の祠あり、之を御嶽社の攝社奥宮とす。登路は御嶽本社の門内銅華表の前より左に分れ、羊腸曲折、西南へ躋る十一町五十三間にして奥宮の前に達す、險甚し、峯上は猶其上にあり。大嶽檜原海澤界。を未の九度、御前山境村、檜原村界。を申の二十四度、小雲取山日原、丹波山、大瀧村界。を戌の正中、大雲取山日原、大瀧界。を戌の七度、小中入澤ノ峯一名檜澤峯。境村、日原界。を戌の四度、日向谷ノ峯日原、日野界。を戌の二十五度、天目ノ峯日原、浦山界。を亥の正中、蕎麥粒山日原、氷川、浦山界。を亥の六度半、高指山（タカサス）一名ホンニタ山。棚澤、氷川界。を亥の二度、筑摩山白丸、棚澤、氷川界。を亥の一度半、三之戸山大丹波、小丹波、川井界。を亥の二十一度半、常盤ノ前山一名遠川ノ丸。大丹波、上成木村上分界。を子の二十七度、高水山上成木村上分、二俣尾界。を丑の八度、惣岳山澤井村上分。を丑の七度半、大塚山を子の二十八度、高岩山（タカイヤ）海澤村。を酉の十九度に望む。

御嶽山　本山の中部字圓山なる本社の後峯即ち大口眞神の社の在る所なり、高四百十五丈二尺。山脈申の方甲籠山より連接し、東の方御嶽村と大久野村との疆界日之出山一名貸乏山。に縣亘し、支脈一は亥子の間富士峯より大塚山に抵り、一は東南して瀧ノ川と御嶽村なる花水澤の中間に支出す、之を長尾と云。峯東に縣社御嶽神社あり。山中老杉古檜深鬱として萬章天を擾す。溪水一は東谿に發し、少許にして御嶽村に入り、東南へ流れて瀧ノ川に合す、之を花水澤とす。一は寅卯の間二所より湧出

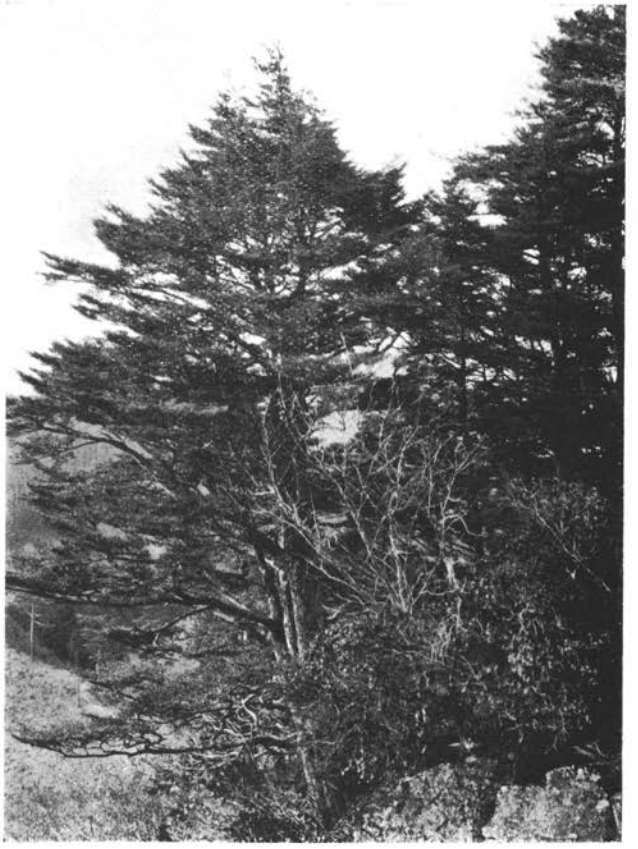
し、少許にして亦同村内に入り、相合して琴澤川となる。一は本社の北方丸井戸に發源し、流出して澤ノ川の名を得、少許を經て海澤村に入る、之を越澤（コイザハ）川の水源とす。登路は道路の部に詳にす。富士峯　本社より子丑の間字富士峯にあり、高三百九十五丈七尺。山脈は午未の方御嶽山より分岐せる一支脈にして、餘勢亥の方大塚山に連り、小支脈東北して御嶽村なる琴澤川と瀧本川の間に支出し、兩溪相會する所に至り、東南は琴澤川、西は海澤の越澤川に臨めり。山上檜及雜木を生ず。溪水北谿御嶽村界に發し、東北へ流れて同村と分界する少許にして、大塚山より發する一水と合し、瀧本川となる。甲籠川を未の十三度、御嶽山を午の十七度、大塚山を戌の二十三度、日之出山を辰の五度半に望む。

大塚山（小丹波にては榛杭山、海澤にては白岩山と云。）　本社より亥子の間にあり、高四百十三丈。山上より三分して、東南は本山に、西南は海澤村字東久保に、北は小丹波村字御嶽道に屬す。山脈其他小丹波村榛杭山の條。（〇八頁）に詳にせり。（〇小丹波村の誌には榜杭山に作る。）

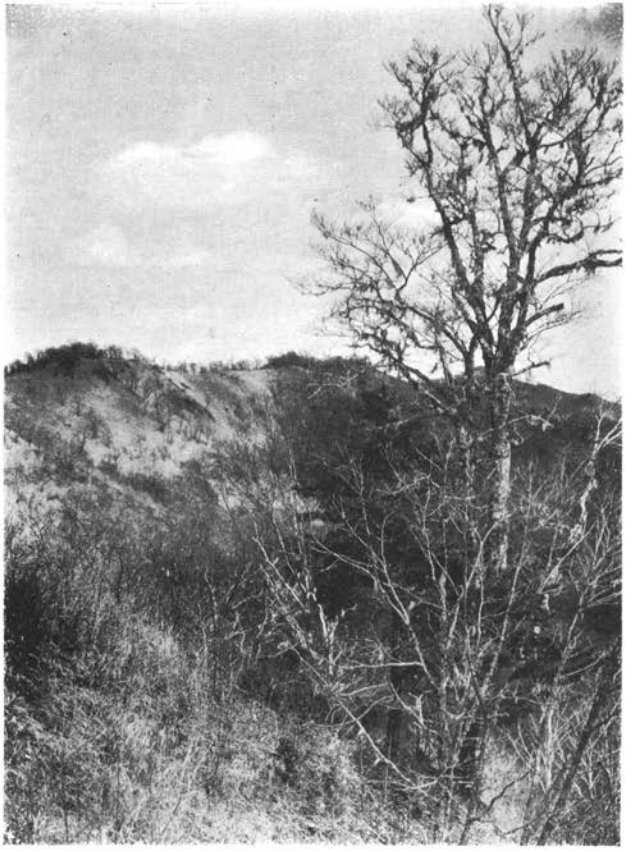
瀧ノ川（養澤にては御嶽澤と云。）　西南隅芥場ノ峯より大嶽山へ至る嶺上經路の東即ち字芥場と養澤村との疆界谿間に湧出し、縈徊盤曲、辰の方へ流下して、養澤村と分界し、終に同村に入る。境界に係る間長一千二百六十二間、幅上流三四尺、廣き處五間、深處七八尺淺端五六寸、水勢急激にして清澈なり。下流大嶽澤と合して養澤川となる。

澤ノ川　中部御嶽本社の北傍丸井戸に發源し、流出して北より西へ廻流し、海澤村に入る、長二百九十七間、幅三尺より三間、深平均五六寸、水勢同上、之を越澤川の東源とす。

御嶽道　四條あり。一は東北の方御嶽村より瀧本川なる身潔（ミソギ）橋を經て、本山飛地字御坂に來り、是より本山と御嶽村との接境地を出入し、屈曲羊腸、西南へ上り、字圓山より山内に入り、社前に達す、長三十一町五十五間、道幅二間、之を本道とす。



惣岳山北背の木立　ツガ、アセビ、イモノ木、ミツバツヽジ等



横筈尾根北端より仙元峠頂上（中央）と蕎麦粒山（右の樹幹の間）を望む

武田久吉氏撮影

一は西方海澤村より來り、曲折東へ通して、字圓山に至り、本道に合す、其間長六町四十三間、道幅二三尺。

一は北方小丹波村より御嶽村屬地なる嶺上を經て、本山飛地字南御坂に來り、該地と御嶽村界及同村内を通過して西へ上り、圓山にて本道に合す、長八町四十八間、幅五尺。（此間一路を數ふ）之を八王子驛、五日市町邊より本山へ至る便道とす。

寶之瀑　七瀑又七代ノ瀑とも云。南方字猪打（シヽウチ）岩と養澤村境なる瀧ノ川に在り。本社を距る南方七町四十二間、七層に懸れり。最上級を渾沌（マコカシ）ノ瀑と云、高一丈。二級を天之瀑（アメ）と云、高二丈五尺。三級を地之瀑（ツチ）と云、高三丈五尺。四級を陰陽之瀑と云、高三丈五尺。五級を白木線（シラユフ）ノ瀑と云、高一丈以上、幅各五尺、是より第六級の間平流凡一町許、第六級を白絲之瀑と云、高四丈餘幅六尺。最下級を岩窟（イハヤ）之瀑と云、高六丈幅七尺。兩崖巖木奇古、境致幽邃、管内瀑布中此の如き奇觀の者多く其比を見ざる所なり。

綾廣ノ瀑　寶之瀑を距る上流凡六町許にあり、高三丈五尺幅四五尺。

鸚鵡岩　本社より甲籠山の奥宮に至る山路の傍にあり、屹立數百仞、頗る奇狀なり。岩に向て呼べば其聲相應和する咎嚇の如し、岩名因て起ると云。

氷川村

蕎麥粒山（ソバツブ）　一名三角山。秩父にては火打山と呼ぶと云。（カツタヤマ）　北隅にあり、海面より高五百四十五丈六尺（バロメートルにて測量、以下亦同じ。）峯頭より三分して、南は本村字桂谷（カツラダニ）に、西は本郡日原村倉澤の奥字長尾に、東北は秩父郡浦山村に屬す。山脈は雲取山の脈日原と秩父郡大瀧、日野、浦山との境界に蜿蜒するもの、戊の方天目（テンモク）ノ峯より淺間嶺（センゲンタウゲ）を經て此に接續し、崛起して頗る峻峯をなし、辰の方本村と浦山及下名栗との疆を亘りて盬地谷山に連

る。其鹽地谷山に至るの前、同山の少し西北浦山と下名栗の疆界を北に分岐するもの即ち武甲山、二子山等の脈とす。支脈一は南して本村と日原の境を限り、倉澤巖窟の東を延亘して鳥屋戸山に抵り、一は亜の方浦山村に支出す。峯頭に巉石質の巨岩突立す。其南少間の所は茅叢、其他は雜樹灌茂す。溪水一は南絲本村部内に湧出し、巳の方より漸く未の方へ廻流し、日原川に會す、之を川苔川とす。一は西南谿日原部内に發源し、未の方へ流下して亦日原川に合す、之を倉澤川とす。不老山を未の四度、檜澤ノ峯一名小中入澤ノ峯。境村と日原界。を未の六度、入臭山一名稲村岩ノ峯。日原、留浦界。を申の零度半、日陰名栗ノ峯一名中ノ谷ノ峯。境界同上。を申の五度、高丸山一名笹尾。境界同上。を申の十度、七ッ石山一名唐松谷ノ峯。日原と甲州丹波山村界。を申の十二度半、淺間嶺日原と浦山界。を戌の十一度半、天目ノ峯一名三ッ突剣。境界同上。を酉の十七度半、犬剱嶺ノ峯境界同上。を酉の二十八度、酉谷ノ峯一名黒突剣。日原と日野、大瀧界。を酉の二十二度、大雲取山日原、大瀧界。を酉の六度半、小雲取山前の二村と丹波山界。を申の二十七度、大嶽檜澤、海界。を巳の十七度、御前山境村と檜原界。を午の九度、瀧ノ入ノ峯日原村一石山洞窟の頂上。を申の三度、武甲山○秩父郡。を子の十二度半、棒之折山大丹波、下名栗界。を卯の十九度、高水山上成木上分二俣尾界。を辰の三度、山毛欅山を辰の十九度、本荷駄山を巳の二十度に望むべし。

鳥屋戸山日原にては小岩山と云。　亥の方にあり、高四百八十四丈八尺、嶺上より兩分して、東は本村字鳥屋戸と細倉谷の界に、西は日原村倉澤の東邊字大持澤に屬す。山脈北の方蕎麥粒山より連亘し、餘勢南して村内川苔川の日原川に會合する所にて盡き、山趾東南は川苔川に抵り、西は倉澤川に臨む。山中官林にして雜樹蒂蔚せり。溪水未の方谿間に發し、同方へ流下して日原村と疆を分ち、日原川に會す、之を大持澤とす。

鹽地谷山大丹波にては日向澤ウラと云。　丑の方偏隅にあり、高五百二十丈三尺。嶺上より兩分して、西は本村字鹽地

谷に、東は大丹波村字日向澤に屬し、而して北方僅に二十間許下りて秩父郡下名栗村に接界す、山脈其他大丹波村日向澤峯（クラ）ノ條（〇八二頁。）に詳にせり。

雷電岩山　同方にありて前山の南に接す、高四百五十九丈。峯上より分界して、西南は本村字燧石谷に、東北は大丹波村瀧ノ入に屬す。山脈其他同村誌（〇八三頁。）に詳にす。

山毛欅（ブナ）山　大丹波にては曲ケ谷峯と云。棚澤にては亦舟非戸山とも云。東北の方字逆川にありて、前山の巳の方に連る、高四百九十四丈六尺。山脈其他同村誌（〇八三頁。）に詳記せり。

本荷駄（ホンニダ）山　棚澤にては高畑山或は燒多亡山とも云ふ。中部より稍寅の方にありて、前山の未の方に連り、本村字與除澤より東方棚澤村字燒多亡に跨る、高五百二十四丈一尺。山脈其他棚澤村高指山の條（〇九一頁。）に詳にせり。

筑摩（ツクマ）山　棚澤にては池ノ峯と云。辰の方にありて、前山の巳の方に連る、高四百四十四丈三尺。嶺上より三分して、西は本村字除澤に、東北は棚澤村字永久保に、東南は白丸村字戌亥頭（カシラ）と東山の界に屬す。山脈其他白丸村の誌（〇九三頁。）に詳にせり。

不老（フラウ）山　一名イヤ入澤ノ峯。境村にては小松ガタワノ峯と云。日原にては狩倉山、申酉の間にあり、高五百三十四丈九尺。山嶺より三分して、東は本村字不老に、南は境村字三之木戸の西北隅に、北は日原村字狩倉に屬す。山脈は小雲取山より巳の方七ッ石山を經、廻りて東に向ひ、日原村の南境と留浦、境の北境とを蜿蜒する一嶺脈にして、西方檜澤ノ峰（一名小中入澤ノ峯。）より六ッ石山を經て此に接續し、餘脈辰の方本村と境村の疆界を延亘して、三之木戸山より、其末本村内に入り、日原川の多磨川に會する所にて盡き、支脈東北日原村なる狩倉澤と檜澤の兩溪間に分出し、字大澤にて日原川にて遮斷せられ、南は境村小中入澤の上流谿澗に臨めり。頂の南少許の間は茅叢なれども、其他は雜樹蕃生せり。溪水一は東北谿日原部内に發し、東北へ流下して字小菅にて日原川に歸す、之を狩倉澤とす。一は東谿本村部内に湧出し、東北流し

て下流村界に出で、日原村と分界し、亦日原川に注ぐ、之をイヤ入澤とす。

三之木戸山　申の方にあり、高四百八十七丈八尺。嶺上より兩分して、東北は本村字峯畠に、西南は境村字三之木戸に屬す。戌の方不老山より連り、辰の方越路ノ森にて岐して二となり、一は東南本村と境村との疆を限りて、多磨川に至り、一は辰の方村内衣笠山、羽黑山等に連り、日原川の多磨川に會する所にて盡き、山趾東北は村内に支出して日原川に抵り、西南は境村小中澤の溪流に臨めり。頂上は茅叢なれども、七八合目以下は雜樹林茂す。登路は境村との界小名檜村より西北へ上り、不老山より日原と境及留浦の境界嶺上を經、七ツ石山より雲取山に上るべし、險甚し。此地は承平の頃平將門城砦を構へし所にて、境村の方は其大手口ならんと云、今形跡按ず可らず、されど山の東方本村分に字城（ジヤウ）と呼べる地あり、又越路（コイヂ）ノ森と云所は、將門の始め來りし時、其地を越えて今の境村と日原の境なる大堀に至り、宿陣せし故に名くと云ひ、衣笠山は金笠山の訛りにて、將門が金の陣笠を懸し所など土人語れり。又此嶺脈の續きにて、戌の方境村と日原の界なる高山を城（シロ）山と云ふ、此所より凡二里許を距てり、其東方なる嶺上の平地を馬責場（ウマセメバ）と呼び、將門が一夜城の跡なりと云傳へり。

大平峯（オホダヒラ）　一名深ダワノ峯。境村にては鞘口山、檜原にては太郎兵衛指山と云。　南部の偏隅にあり、高四百三十丈三尺。峯頭より三分して、東北は本村字大澤入に、西北は境村字本谷入に、東南は檜原村字神戸（カノト）に屬す。山脈は三頭山の分脈を承けて西方御前山より連り、寅の方天地山に接續し、支脈一は北して本村と境村の疆を延亘して、江戸小屋山、九龍山等をなし、多磨川に抵り、一は南して檜原村に支出す、委細は境村の誌〇一一頁。に記せり。山東天地山との中間嶺脈に凹所あり、之を大ダワと呼ぶ、一蹊あり、村内字小留浦（コトヅラ）より大澤川に傍ひ、南へ上る三十三町許にして峠に達す、之を下れば檜原村字神戸（カノト）なり、之を本村より檜原村及五日市町に至る捷徑とす。

天地山（テンチ）　巳午の間字大澤入の東南隅にあり、高四百八丈五尺。山上より分界して西北は本村、東北は海澤村字天地澤に、南は檜原村字神戸に屬す。山脈申の方大平ノ峯より連り、東南大嶽に延長し、支脈北に奔りて本村と海澤の界をなし、多磨川に抵る、之を鋸山（ノコヤリ）の脈とす。猶海澤村の誌〇九五頁。に詳にせり。

江戸小屋山　境村にては本谷入山と云。　南部字大澤入にあり、高三百七十七丈。嶺上より兩分して、東は本村、西は境村字本谷入（ホンタニイリ）に屬す。山脈は南方大平峯より分岐する一支脈にして、北方九龍山に連り、西は境村栃寄澤に、東は村内大澤川の溪澗に臨めり。山陽は茅草灌木の雜叢にて、山陰は槭及雜樹茂生す。一小溪東側に發源し、東北に流れて大澤川に會す、之を池ノ平ノ澤と云ふ。

九龍山（クリヨウ）　境村にては西入山と云。　同方部同字の内にあり、高三百六十丈六尺。亦嶺上より分界して、西は境村字栃入向に屬し、東は本村なり。山脈南方江戸小屋山より連り餘勢亥の方本村と境村との疆を延亘して多磨川に抵り、山跡西は栃寄澤、東は村内大澤川の溪流に臨めり。山中槭及雜樹深鬱たり。小溪東谿に發し、東北へ流れて大澤川に合す、之を柿ノ香窪と云。大平峯を巳の六度半、天地山を辰の四度半、御前山を午の十八度、本荷駄山を丑の一度、山毛欅山を子の十七度半、蕎麥粒山を子の十三度半、三道山海老小屋峯或は布瀧の峯とも云。大丹波、小丹波、棚澤界。を丑の三度半、笹平ノ丸一名赤ケ山。大丹波、小丹波界。を丑の十五度、惣岳山澤非を寅の十三度、岩茸石山二俣尾と上成木上分の界より大丹波、澤非にまたがる、一名鷹ノ巣山とも云。を寅の六度半、高水山二俣尾、上成木上分界。を寅の八度、常盤ノ前山一名逆川ノ丸。大丹波、上成木上分界。を丑の二十四度に望む。

鋸山（ノコヤリ）　巳午の間字大澤入にあり、最高き處二百八十八丈四尺。亦嶺背より分界して、西は本村、東は海澤村に屬す。山脈は南方天地山より分岐せる一支脈にして、餘勢北の方愛宕山に至りて盡き、山崖西は大澤の谿谷に、東は海澤村大賀澤に臨めり。此山脈惣て巉巖を以て成るを以て、嶺上岩鋒突兀、

空を攙し、松、椹、栂、檜等蓊蔚茂生し、其奇景名狀すべからず、然れども嶺上屢缺の處峭仄を極め、東西兩崖亦絕壁なるを以て、此に到るには頗る迂路を取らざるを得ず。

愛宕山　南方甲州道より多摩川を隔てゝ南に聳立し、字登計と長畠の界に跨る、高多摩川より直立凡三十餘丈。山脈南方鋸山より連り、北方直下は多摩川に、東西は共に谿谷に臨めり。全峯巉嵓にして、松、椹、栂、檜等欝生し、景致絕奇なり。登路一は山の西南字登計より北東へ上る凡三町、一は東南字長畑より西へ上る六町、山の半腹に相合し、夫より猶上る一町許にして頂に達す、上に愛宕の小祠あり。

大澤川　南隅字大澤入大平ノ峯の東北谿に發源し、北流して字大澤より多摩川に注ぐ、長千八百十一間、幅三尺より四間に至る、深處五六尺、淺瀦五六寸、水清くして急激なり。

蘆澤　未の方城（ジヤウ）の山間に湧出し、東南へ流れて字南氷川に至り、多摩川に歸す、長五百五十三間、幅上流二三尺、下流二間を過ぎず、水流少し。

日原川（ニツパラ）　西北の方日原村より來り東南へ流れて本村字大持澤の西南邊を限り、日原村と分界する六百五十一間、復日原村部内に入り、再び出て本村字不老に來り、又同村と分界する二百九十一間、終に村内に入り、仍東南へ奔流して、字南氷川と大氷川の界より多摩川に會す、其間長一千三百九十七間、幅廣き處二十間、狹き處八間、深處一丈、淺瀦二尺餘、其水清麗にして頗る急激なり、材木散流すべし。

川苔川（カハノリ）　北隅蕎麥粒山の南、字桂谷の幽谿に湧出し、東南より漸く西南の方へ廻流し、下流に至りて本村字西澤と日原村字平石と分界し、日原川に會す、長三千二百二十二間此間日原村と分界五百六十八間。幅上流三四尺、下流は六間、深處一丈、淺處一尺、水勢急にして清し、川中川苔を産す。

鹽地谷川（シホデタニ）　北方鹽地谷山の西北谿間に發し、未の方へ流れて、川苔川の上流に合す、長五百八十五間、

幅三四尺より八間、深平均七八寸。

燧石谷川（ヒウチイシガー）　丑の方雷電山の西北谿に發し、未の方へ流れて川苔川に會す、長六百九十三間、幅三四尺より三四間、深平均一尺。

山伏谷川　北の方宇山伏谷の深谿に起り、東南へ流れて亦川苔川に歸す、長七百八十八間、幅三四尺より四五間、深同上。

逆川（サカヤ）　東北の方山毛欅山の西谿に發源し、未の方より漸く西へ彎廻して、川苔川の中流に合す、長一千五百六十三間、幅六尺より八間、水勢急激、深同上。

山葵澤（ワサビ）　同方鋸山と本荷駄山との谿間に發し、西流して亦川苔川の中流に合す、長六百四十四間、幅五尺より五間、深平均七八寸。

大持澤（ダイモツド）　亥の方鳥屋戸山の西南谿に起り、西南へ流下して日原村と分界し、日原川に注ぐ、長六百八十三間、幅三四尺より二間、深平均四五寸。

イヤ入澤　申の方不老山の東南谿に發し、寅の方へ流るゝ二百四十三間にして村界に出で、日原村字栗原と分界する四百三十九間にして、日原川に入る、幅五六尺より六間、深平均五六寸。

峯畑澤　西南の方三之木戸山の東南谿に發し、東北へ流れて日原川に歸す、長五百九十五間、幅三四尺より五間、深平均三四寸。

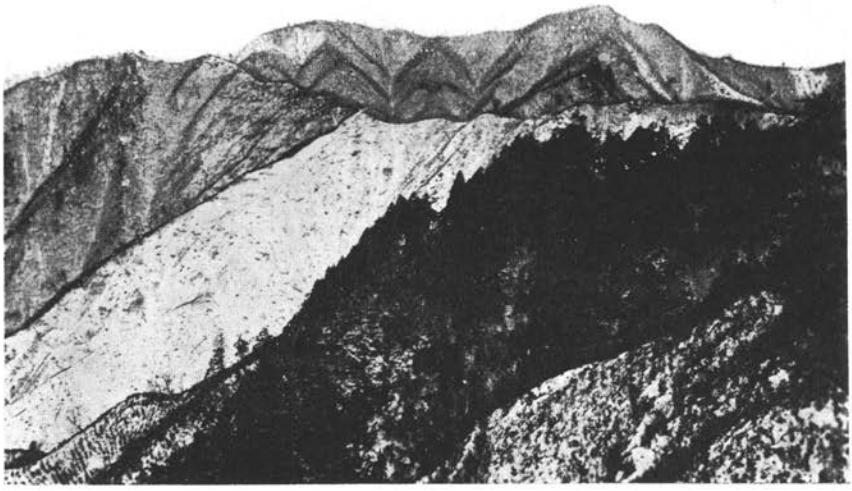
除澤（ヨケ）　辰の方筑摩山の西南谿字奥除澤に起り、西南に流下して日原川に會す、長八百二十五間、幅三四尺より五間、深平均六七寸。

境　村

水根山　一名盜人坂の峯。又日原にては寒巢山、留浦にてはヒヤマコノ峯と云ふ。　西北隅にあり、海面より高六百二丈九尺　バロメートルにて測量、以下亦同じ。峯頭より

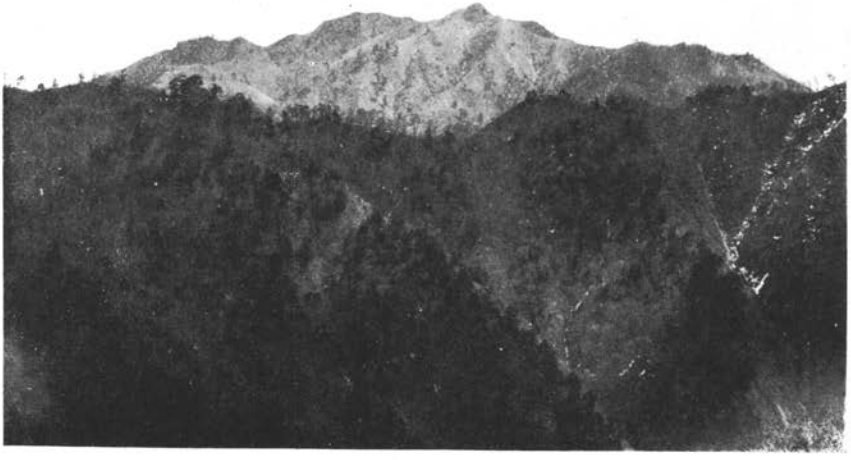
り三分して東南は本村字水根山、西は留浦村字ヒヤマゴと入奥澤の界に、東北は日原村字巳の戸に屬す。山脈は小雲取山の南脈七ッ石山より廻りて東に向ひ、日原と留浦の境界に蜿蜒するもの、亥の方入奥山（一名稻村岩ノ峯。日原、留浦界。）より此に連り、岐して二となる。一は東方城山に接し、一は南して榧ノ木尾よりモヂリ山に延亘す。頂は茅叢、九合目以下は山毛欅、赤皮樹、栂、椵等の老木深鬱たり。溪水一は東南谿本村部内に湧出し、巳の方へ流下して水根澤となり多磨川に會す。一は東北谿日原村部内に發し、丑の方へ流れて巳の戸澤と合し、日原川に歸す、之を蘆ノ澤とす。蕎麥粒山（氷川、日原、浦山界。）を丑の二十四度、天目ノ峯（一名三ッドッケ、日原、浦山界。）を丑の六度、犬剝籠ノ峯（境界同上。）を子の二十度、日向谷ノ峯（日原、日野界。）を子の十三度、小雲取山（日原と甲州都留郡丹波山村及秩父郡大滝村界。）を戌の三度、七ッ石山（一名唐松谷ノ峯。日原丹波山村界。）を酉の十三度、入奥山を戌の二度半、榧ノ木尾を巳の二十八度、三頭山（檜原、河内、西原界。）を午の七度、月夜見山（京道山或は菌岩山とも云。檜原、川野、原村界。）を巳の二十五度、城山を卯の正中、小中入澤の峯を卯の二十一度、山毛欅山（一名曲ケ谷の峯。氷川大丹波、棚澤界。）を寅の十四度に望むべし。

城山　同方部にあり、高五百五十三丈五尺。嶺上より兩分して、南は本村字水根山に、北は日原村字巳ノ戸に屬す。山脈西の方水根山より連接し、辰の方小中入澤の峯に延亘し、支脈一は丑の方日原村蘆ノ澤と杜松ノ澤との間より日原川に至り、一は東北して同村杜松ノ澤と涸澤との間に支出し、亦日原川に抵り、南は村内水根澤の深谿に臨めり。山陽少許の所茅叢、其他は山毛欅、赤皮樹等雜樹蓊茂せり。溪水丑の方に發し、同方へ流下して日原川に合す、之を杜松ノ澤とす。此山を土人將門の一夜城と呼ぶ。承平の頃相馬將門の一時城砦を構へし所といへり、今は形跡の考ふべきものなし、されど此山の東なる嶺上の平地を馬責場と云。又此嶺脈の中、本村と氷川の境界に三ノ木戸山の名あり。又日原村の人傳ふる所によれば、十數年前同村の人此山中に於て、短刀、矢の根等拾ひ得し



日向澤峯より南に川苔山を望む

木暮理太郎氏撮影



横篶尾根北端より島屋戸山の脈を距てゝ川苔山を望む

武田久吉氏撮影

事ありと云。大嶽(檜原、海澤界。)を辰の十一度半、御前山を辰の二十八度、三頭山(前にあり。)を午の十五度、小中入澤の峯を辰の四度、樫ノ木尾を未の六度に望む。

小中入澤ノ峯(日原にては樽澤ノ峯と云ふ。)　亥の方にあり、高五百四十五丈八尺。亦嶺上より分界して、南は本村字小中入澤に、北は日原村字樽澤に屬す。山脈戌の方城山より延亘し、此所にて復岐して二となる。一は東の方小松ガタワノ峯より、東南に廻りて三ノ木戸山より多磨川に抵り、本村と日原及氷川との境界を限り、一は南して村内榛(シン)ノ木尾より、又辰の方へ曲折し、多磨川に至る。頂上は茅叢、七合以下は南北共に雜樹繁茂せり。溪水一は巳の方六石山との溪間に發し、東南へ流下して多磨川に歸す、之を小中澤とす。一は西北谿日原村部内に湧出し、丑の方へ流れて日原川に會す、之を樽澤川とす。蕎麥粒山(前にあり。)を辰の七度、天目ノ峯(同上。)を子の十四度、酉谷(トリヤニ)の峯(一名黒ドッケ。日原、日野、大滝界。)を亥の十五度、稻村岩ノ峯(前にあり。)を戌の正中、御前山を巳の五度、大嶽(前にあり。)を辰の十二度半、甲籠山(カロウザン)(御嶽と海澤界。)を辰の一度、御嶽(本社の頂上。)を卯の二十八度、惣岳山(ソウガク)(澤井上分。)を卯の五度、高水山(タカミッサン)(上成木上分、二俣尾界。)を卯の一度半、岩茸石山(一名鷹ノ巢山。前兩村の界より大丹波及澤井に跨る。)を卯の正中、本荷駄山(一名高指山。氷川、棚澤界。)を寅の二十度、山毛欅(ブナ)山(前にあり。)を寅の一度に望む可し。

小松ガタワノ峯(日原にては狩鞍山、氷川にては不老山と云。)　亥子の間にあり、高五百三十四丈九尺。嶺上より三分して、南は本村字三ノ木戸の西北隅に、北は日原村字狩倉に、東は氷川村字不老(フラウ)に屬す。山脈其他氷川村不老山の條(〇一〇三頁。)に詳にせり。

三ノ木戸山　子丑の間にあり、高四百八十七丈八尺、氷川村と分界す。山脈其他同村の誌(〇一〇四頁。)に詳にす。

樫(カヤ)ノ木尾(キヲ)(留浦村にてはシホ窪山と云。)　戌の方にあり、高五百七十九丈六尺、嶺上より兩分して、東は本村字樫ノ木尾

に、西は留浦村字長久保入とアリサメとの界に屬す。山脈北方水根山より分岐して此に連り、餘勢巳午の間に延きてモヂリ山をなし、多磨川に至り、支脈西北して留浦村の苧川に抵り、東北は村内水根澤の溪水に臨めり。山中雜樹蕃生す。

モヂリ山　境界二村にては倉戸山と云。　西の方にあり、高四百四十丈三尺。嶺より三分して、東北は本村字モヂリと桑の木平との界に、東南は原村字小槇戸平と室澤の間に、西北は留浦村字堋澤に屬す。山脈其他原村倉戸山の條〇一一二頁。に詳にす。

榛ノ木尾　西北の方字半ノ木尾にあり、高五百二十九丈三尺。山脈北方小中入澤ノ峯より分岐して此に連り、餘勢南より廻りて、村の中部を辰の方に向ひ、多磨川に至る。頂上は茅草及小篠叢生し、八合以下は雜樹繁生す。

水窪山　檜原にては惣岳山と云。　南隅にあり、高四百七十九丈六尺、嶺より三分して、東北は本村字荒指に、西北は原村字水窪に、南は檜原村字藤原に屬す。山脈は甲州大菩薩嶺より、檜原村と河内及甲州都留郡西原の境界但、山肩以下小菅三頭山に連るもの、東へ分岐する一嶺脈にして、戸澤峯一名孤山。月夜見山京道山又南岩山とも云。天神山等を經て此に來り、東の方御前山に接續し、支脈一は西北して本村と原村の疆界を分ち、多磨川に抵る、之を大山毛欅ノ尾根と云。一は北方村内に支出して亦多磨川に至り、南は上澤俣川の深谿に、西北は水窪澤の幽谷に臨めり。山中雜樹深鬱たり。溪水一は西北谿原村部内に發し、西より漸く亥の方へ廻流し、多磨川に會す、之を水窪澤とす。一は南谿檜原村に湧出し、南流して北秋川に注ぐ、之を上澤俣川とす。山西檜原と原村の堺嶺上の凹所に一徑を通ず、五日市檜原邊より原村小河内溫泉へ至る捷路なり。之を小河内峠と云、頗る險なり。

御前山　巳午の間にあり、高四百九十八丈二尺。山上より兩分して、北は本村字味噌桶谷と荒指の間に、南は檜原村字藤原と神戸の界に屬す。山脈三頭山の分脈を承けて、西方水窪山より連り、東方轉

口山に聯接し、支脈南して檜原村北秋川に至る、之を御前尾根と云。北は村内味噌桶谷の深谿に臨めり。山中雜樹鬱茂す。溪水一は東北谿に發し、北流して檜原澤となり、味噌桶谷ノ澤と合して栃寄澤に會す。一は北谿に起り、丑の方へ流るゝ少間にして檜原澤に合す、之を味噌桶谷ノ澤とす。一は巳の方檜原村字神戸の深谷に湧出し、東南へ奔流す、之を水ノ戸とす、下流赤澤と合して神戸澤となり、北秋川に會す。巓より少しく未の方へ下り、檜原部内に大山祇神社の小祠あり。大雲取山（日原大滝界。）を戌の二十度半、小雲取山（前にあり。）を戌の十三度、七ッ石山（同上。）を戌の七度、入奥山（同上。）を戌の二十二度半、櫂ノ木尾を戌の十五度、榛ノ木尾を亥の一度、水窪山を戌の一度、大嶽（前にあり。）を卯の十二度、甲籠山（同上。）を寅の二十五度、三ノ木戸山を亥の十五度に望む。

鞘口山（氷川にては大平ノ峯又深ダワノ峯と云。檜原にては太郎平指山と云。）　巳の方にあり、高四百三十丈三尺。巓より三分して西北は本村字本谷入に、東北は氷川村字大澤入に、東南は檜原村字神戸に屬す。山脈西方御前山より連り、寅の方天地山より折れて東南に向ひ、大嶽に延亘し、支脈一は北して本村と氷川の疆界本谷入山、栃入向山等をなし、多磨川に屆り、一は巳の方檜原村水ノ戸澤と赤澤の間に延亘して、兩溪相會する所に抵る、之を中尾根と云ふ。山中栂其他雜樹深鬱たり。溪水一は西北谿本村内に湧出し、亥の方へ流下して多磨川に合す、之を栃寄澤とす。一は東北氷川部内の谿間に發し、北流して亦多磨川に歸す、之を大澤川とす。一は東谿檜原部内に濫觴し、天地山の西南より發する一溪と合し、巳の方へ流れて赤澤となり、水ノ戸澤と合して神戸澤の名を得、北秋川に會す。大嶽を卯の二十四度、甲籠山を寅の二十八度半、天地山を寅の七度半、高水山（所在前にあり。）を寅の正中、岩茸石山（同上。）を丑の二十六度、蕎麥粒山（同上。）を子の二度、鹽地谷山（一名日向澤峯。氷川、大丹波の界より秩父郡下名栗にまたがる。）を子の十三度、御前山を申の十四度に望む。

本谷入山（ホンダニイリ）（氷川にては江戸小屋山と云ふ。）　東南の方にありて、前山の北に連る、高三百七十七丈一尺。嶺上より兩分し

て、西は本村字本谷入に、東は氷川村字大澤入に屬す。山脈形勢等氷川村江戸小屋山の條（一一〇五頁）に詳にせり。

栃入向山（氷川にては九龍山と云ふ。）　同方部にありて前山の亥の方に連る。高三百六十丈六尺。亦嶺上より分界して、西は本村字栃入向に、東は氷川村字大澤入に屬す。山脈其他同村誌（一一〇五頁）に詳記せり。

水根（ミヅノネ）澤　西北隅水根山の東南谿に涌出し、巳の方へ流下して、下流原村と分界し、字西久保の西邊より多磨川に歸す、長二千五百四十五間、幅三間より八間、深き處五六尺、淺き處一尺。水勢急激にして清し。

小中（コナカ）澤　亥の方小中入澤ノ峯と六石山の谿間に發源し、辰の方字境と大向の間より亦多磨川に注ぐ。長千五百三十間、幅一間より八間、深處四五尺、淺瀦七八寸。水勢同上。

シダグラ澤　南の方水窪山の北谿字シダグラに發し、北流して板小屋向と梅久保向の界より亦多磨川に會す。長八百二十間。幅一間より六間、深處三尺、淺處四五寸。水勢同上。

栃寄（トチヨリ）澤　巳の方鞘口山の西北谿に涌出し、亥の方へ奔流して、字大谷（オホ）下と日向指（ヒナタザス）の間より亦多磨川に注ぐ。長千五百四十九間、幅一間より八間、深處三四尺、淺處五六寸。水勢同上。山葵を産す。

此外小溪無數枚擧に遑あらざれば省きぬ。

原村

倉戸山（境村にてはモヤリ山と云ふ。）　亥の方にあり、海面より高四百四十丈三尺。峯頭より分界して、東南は本村字小槇戸平（コマキドダヒラ）と室澤の界に、東北は境村字桑ノ木平とモジリの間に、西北は留浦村字棚澤に屬し、而して西南凡二十間許下りて、河内村倉掛に屬す。同村にては其所を倉掛山と云。山脈は小雲取山の脈留浦、日原、境村の三境界水根山（一名鷹巣山或は盜人坂ノ峯とも云。）より南へ分岐する一支脈にして、亥子の間境村と留

浦の疆界樫（カヤ）ノ木尾一名シホ久保山。を經て、此に來り、山趾南は多摩川、東は境村の水根澤、西は留浦村の苧川に抵る。山中雜樹深茂せり。小溪東南谿に湧出し、南流して多摩川に會す、之を室澤とす。其水源卽ち此山巓の東南凡三十間許に一小泓あり、常に清水を湛え、久旱の時も涸渇する事なしと云。小雲取山日原、大滝、丹波山界。を戊の十七度、七ッ石山一名唐松谷ノ峯。日原、留浦村界。を戊の八度半、高丸山一名イモリ谷ノ峯。日原、留浦村界。を戊の十四度、中ノ谷ノ峯ノ峯一名日蔭ナガリ。境界同上。を戊の二十四度、入奥山一名稍村岩ノ峯。境界同上。を亥の八度、樫ノ木尾を亥の十三度、榛（ハン）ノ木尾境村。を丑の十八度、甲籠（カロウ）山御嶽の奥宮卽ち同山と海澤村界。を卯の十四度、大嶽檜原、海澤界。を卯の二十五度、御前山境村と檜原界。を辰の五度、戸澤（トサハ）峯一名砥山。河内村飛地と檜原界。を午正中、三頭（ミトウサン）山河内村飛地及檜原村、甲州西原村界より小菅村に跨る。を午の二十度に望む。

京道（キヤウドウヤマ）山川野にては菌岩山檜原にては月夜見山と云ふ。未の方偏隅にあり、高四百八丈六尺。峯上より三分して北は本村字手澤に、西は川野村字菌岩に、東南は檜原村字藤原と倉掛の界に屬す。山脈甲州大菩薩嶺の脈三頭山より東へ分派する一脈にして、檜原と河内村飛地及川野村との境界を廻りて、未の方風張（カザハリ）嶺より北に連り、寅の方天神山に延亘し、支脈亥の方本村と川野及河内村飛地との界を域る、之を大仁田ノ尾根と云ふ。其末復分れて二となり、一は東北して村内に支出し、一は西北より北へ廻りて、川野、河内に出て、多摩川に抵る。山中雜樹深鬱たり。溪水一は北谿に發し、丑の方亥の方へ曲流して、多摩川に會す、之を蛇澤川とす。一は辰の方檜原村の幽谿に涌出し、東南へ流下す、之を月夜見澤とす、卽ち北秋川の本源なり。一は西方風張嶺との谿間に起り、西北より北へ流れて鮎澤（クキ）川に會し、多摩川に歸す、之を後澤とす。巓より未の方戸澤峯との中間嶺脈中の凹所に一路あり、之を風張嶺と云。甲州都留郡神金、丹波山及本郡（四多摩郡。）留浦、川野、河内の諸村より、檜原を經て五日市町へ出る便路にして、牛馬通ずべし。小雲取山を戊の二十六度半、三頭山を未の二十七度、戸澤峯を午

の二十九度、水窪山を寅の七度、御前山を寅の十三度半、大嶽を寅の二十九度に望む。

天神山　巳午の間にあり、高三百六十九丈六尺。嶺上より兩分して、西北は本村字天神山に、東南は檜原村字藤原に屬す。山脈三頭山の分脈を承けて、西方京道山より連り、寅の方水窪山に延亘し、南は檜原村月夜見澤の深溪に、西北亦村内の幽谿に臨めり。山陽檜原部内は概ね茅叢、山陰本村分は雜樹蕃蔚せり。溪水西北谿に發し、北流して蛇澤川に合す。其谿間に天神の小祠あり、山名因て起ると云ふ。蕎麥粒山（ソバツブ）一名三角山又火打石山とも。日原、氷川、鴻山界。を子の十八度半、山毛欅（ブナ）山一名曲ケ谷ノ峯。氷川、柳澤、大丹波村界。を丑の正中、倉戸山を戌の二十七度半、入奥山一名稻村岩ノ峯。日原、留浦界。を亥の九度、中ノ谷ノ峯一名日影ナグリ峯。境界同上。を戌の二十九度、高丸山一名イモリ谷の峯。境界同上。を戌の二十七度、小雲取山を戌の二十二度、七ッ石山を戌の十七度半、三頭山を申の三度、戸澤峯を未の十八度、京道山を申の二十度半、水窪山を寅の一度、御前山を寅の十度、今熊山上川入村。を卯の二十六度に望むべし。

水窪山　檜原にては物岳山と云。　卯辰の間なる偏隅にあり、高四百七十九丈六尺。峯上より分界して、西北は本村字水窪、東北は境村字荒指（アラザス）に、南は檜原村字藤原に屬す。山脈其他境村の誌〇一一に詳にせり。但登路は村内多摩川の東南岸字栃寄より東南へ攀躋する一里二十餘町にして、巔の少し西方嶺脈中の凹所に達し、檜原村に通ず、之を小河内峠と云ふ、五日市檜原邊より、村内の溫泉へ來る捷徑なり。

多摩川　西の方河内村より來り、村の中部の稍西北を蜿蜒盤曲、寅の方へ流下し、字水根澤と平ケ谷（タヒラヤ）の界より境村に入る、長二千二百五間、幅廣き處五十五間狹き處七八間、深潭二丈の所あり、淺瀨三尺許。水清麗にして甚急激ならず、舟筏通じ難し。沿流砂洲中に水流縷入して、汀渚をなすもの二所あり、一を花折戸ノ池、一を傘淵ノ池と呼ぶ。又上流河内村を距る凡一町許、甲州道の下方に巨巖雙立して、水流を夾む、之を石門巖一名端岩。と云、南巖は河内村の部分にして、斷巖高二十餘丈、北巖は本村に屬し、高五六丈。岩上平夷にして、縱十五間橫七八間、二株の檜と七八株の稚松及草卉

を生じ、傍に一岩あり、高五六丈周圍七五丈、岩頭に松樹一株を生ず。北の山崖甲州道との中間に自然の泓池をなすもの、縦十間横三間許あり。南方岩間甚窪まりて、其間僅に七間許、多摩川此を經過して、奔湍琴筑を鳴らし、其下流凡十間許に又一巨巖あり屹立す、之を蓬萊岩（一名辨天岩或は雨乞岩とも云。）と稱す、高凡三丈餘廣五間に十間許、巖上古松五六株及矮木草卉巧に巖間を補綴し、松根の盤まる所、市杵島の禿祠あり。此邊小溪岩木の布置委曲景致を極む、化工の妙人をして低徊去る能はざらしむ。

水根澤　北の方境村より來り、本村北境を限りて辰の方へ流れ、境村と分界する五百六十二間にして多磨川に會す、幅三間より八間、深潭一丈餘淺瀦二尺、水勢急にして清し。

水窪澤　卯辰の間水窪山の西麓に涌出し、村の東部を西北へ流下して多磨川に注く、長一千七百四十八間、幅平均二間、深處四尺餘淺處三四寸。水勢同上。

蛇澤川　午未の間京道山の北麓字手澤に發源し、丑の方へ流れて、天神山より來る溪流を合せ、廻りて亥の方へ流下し、多磨川に歸す、長一千三百八十九間、幅三尺より二三間、深處三四尺淺處三四寸。水勢同上。

大（オホ）ムソ澤　申の方河内村飛地より來り、村の西部を東北へ流下して多磨川に入る、長五百二十六間、川幅平均二間、深處二三尺淺處三四寸。水勢同上。

室（ムロ）澤　亥の方倉戸山の東南麓に發し、南流して多磨川に歸す、長六百二十一間、幅三尺より六七間、深平均七八寸。水勢同上。

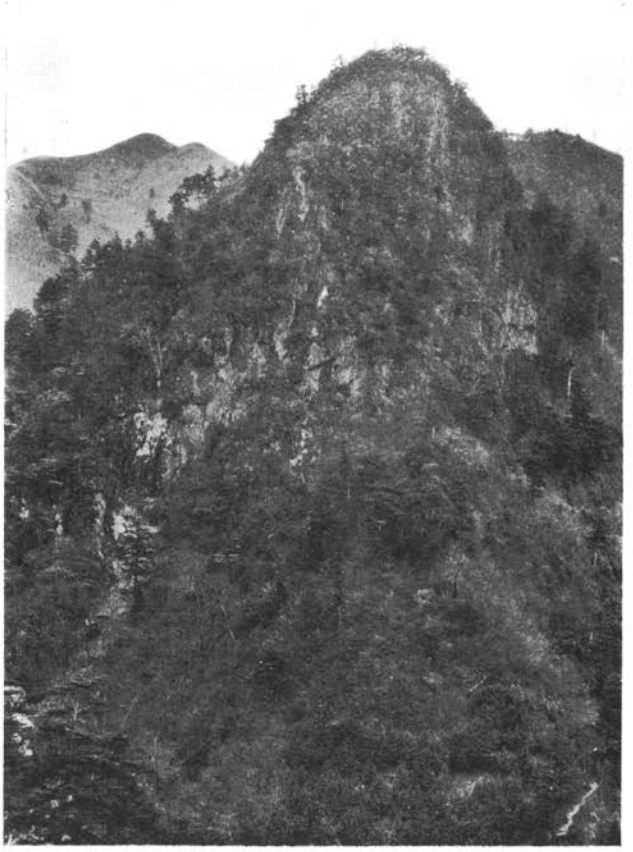
湯澤　戌の方河内村字湯澤の谿間に發し、少許を經て村内に入り、村の西部を南流して多磨川に注く、長四百八十七間、幅一間より二間、深平均六七寸。水勢同上。

河内村

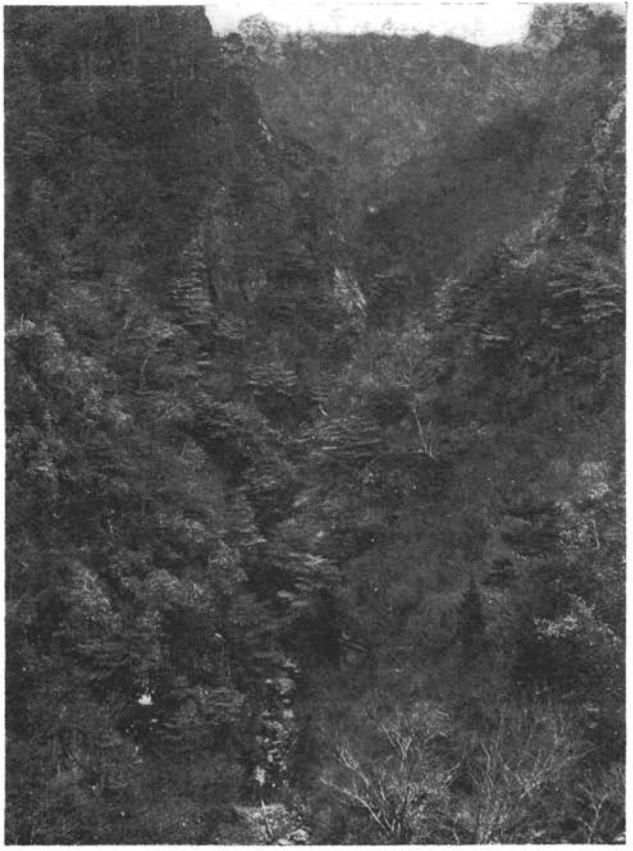
倉掛山　丑の方字倉掛にあり、即ち原村境村留浦村の境界倉戸山の南方山肩にして、東は原村西北は留浦村に屬す。餘勢西南に延ひて、本村と留浦の疆をなし、苧川に抵る。山中雜樹茂生せり。

三頭山（ミトウザン）　未の方飛地にあり、海面を抽つる高六百二十八丈三尺（バロメートルにて測量、以下皆同じ。）嶺上より三分して、北は本村飛地の内字入小澤に、東南は檜原村字數馬に、西南は甲州都留郡西原村に屬し、而して西北嶺上凡十間餘を距てゝ、同國同郡小菅（コスゲ）村に屬す。山脈西方甲斐の大菩薩嶺より來り、此に至りて崛起して頗峻嶽をなし、大脈岐して二となる。一は東南に蜿蜒して甲武二州の分界をなし、一は東して戸澤峯、月夜見山、御前山、大嶽、御嶽等の諸山に連亘し、支脈亥の方入小澤ノ峯より東北し、繩指（スカザス）ノ峯をなし、多磨川に抵る。山中官林にして山毛欅其他雜樹深鬱たり。猶檜原村の誌に詳記せり。

戸澤（トザハ）ノ峯（檜原にては砥山と云。）　巳午の間にあり、高五百四十五丈一尺、嶺上より分界して、西北は本村飛地の内字戸澤に、東南は檜原村字數馬に屬す。山脈西方三頭山より連り、丑の方風張峠を廻りて、月夜見山（菌岩山或は京道山と云。）に延亘し、其間風張峠より東南檜原村に分岐する嶺脈を淺間嶺とす、嶺上に通路あり、本村近傍の數村より五日市町へ出る捷路に係る。山中は雜樹深茂す。溪水一は西北谿本村飛地に涌出し、西北へ流下して戸澤川となり、三頭山より發する小澤（コザハ）川と會して鮎澤川の名を得、多磨川に歸す。一は東方檜原部内風張峠との谿間に發し、南流して南秋川に合す、此邊良好の砥石を産すと云。三頭山を申の二十四度、小雲取山（日原と秩父郡大滝村及甲州都留郡丹波山村界。）を亥の二度、七ツ石山（一名唐松谷ノ峯。日原、丹波山界。）を戌の二十六度、高丸山（一名イモリ谷ノ峯。日原、留浦界。）を亥の十一度、入奥山（一名稲村岩ノ峯。境界同上。）を亥の二十四度、菌岩山（キノコイハ　月夜見山）を子の二十九度、水窪山（一名惣岳山。原、檜原三村界。）を丑の二十四度、御前山（境村、檜原界。）を丑の二十九度、大嶽（檜原、海澤界。）を寅の十九度に望む。



足毛谷の岩峯　左方遠景は川苔山頂



桂谷の落ち口　（右岸は松岩の一部左岸は離岩の一部）

武田久吉氏撮影

入小澤ノ峯（川野にては檜尾ノ峯と云。）　西南の方にありて、三頭山の亥の方に連る、高五百三十四丈、嶺上より三分して、東は本村飛地の内字入小澤に、北は川野村字檜尾に、西南は甲州都留郡小菅村に屬す。山脈其他川野村檜尾ノ峯の條〇一一七頁。に詳にす。

糠指の峯　同方にありて、同山の丑の方に連接す、高四百六十丈八尺。山上より分界して、南は本村飛地の内字入小澤に、北は川野村字上室久保と糠指谷との界に屬す。山脈其他同村誌〇一一八頁。に詳にせり。

戸澤川　南の方本村飛地戸澤ノ峯の西北麓に發し、亥の方へ流下して、風張峠より發する小溪及西口澤を合せ、川野村に入る、長九百七間、幅一間より二三間、深七八寸より一尺四五寸。水清くして急なり。下流川野村にて小澤川と合し、鮎澤川となる。

川野村

東南隅にあり、海面より高四百八丈六尺。山上より三分して西は本村字菌岩（キノコイハ）山（檜原にては日夜見山、原村にては京道山と云。）菌岩に、北は原村字手澤に、東南は檜原村字倉掛及藤原に屬す。巔の南方嶺脈の凹所に一路を通ず。之を風張峠と云。即ち本村及河内留浦等より五日市八王子縣廳等へ至る捷徑なり。山脈其他は原村京道山の條下〇一一三頁。に詳にせり。

檜尾ノ峯（河内にては入小澤ノ峯と云。）　西南ノ偏隅にあり、高五百三十四丈。山上より三分して北は本村字檜尾に、東は河内村飛地字入小澤に、西南は甲州小菅村に屬す。山脈は巳の方三頭山（ミツトウザン）より分岐する一支脈にして、甲州小菅と河内村飛地との疆界を亥の方へ延きて此に連り、丑の方糠指ノ峯に連接し、支脈西北に岐して本村と小菅の境界（トホザス）をなし、小菅川に抵る、之を境之尾と云。山中雜樹深叢たり。溪水一は北麓に發し、村内字美遠指（ミトホザス）を西北に流下して美遠澤となり、小菅川に會す。一は辰の方河内村

飛地字入小澤の谿谷に涌出し、辰の方へ流れて小澤川に合す。三頭山（ミトウザン）檜原及河内村飛地、甲州西原の界より小菅村に跨る。を巳の九度、戸澤ノ峯一名砥山。檜原と河内村飛地界。を卯の二十三度半、御前山（ゴゼンヤマ）檜原と境村界。を寅の十八度半、入奥山一名稲村岩ノ峯。留浦、日原界。を子の十度、中之谷ノ峯一名日陰ナグリノ峯。境界同上。を亥の二十七度半、小雲取山日原と秩父郡大瀧及甲州都留郡丹波山界。を亥の九度、樽澤峯一名小中入澤ノ峯。境村日原村界。を丑の二度に望む。

糠指（ヌカザス）の峯　同方にあり、高四百六十丈八尺。峯上より分界して、北は本村字上室久保と糠指谷の間に、南は河内村飛地字入小澤に屬す。山脈未の方檜尾ノ峯より連り、餘勢一は北して村内橋澤の東を亘り、多磨川に抵り、一は寅卯の方本村栃谷部（トチヤベ）澤と河内村飛地小澤川の中間即ち同村飛地と本村の疆界を延き、其末端村内に入り、岫（クキ）澤川に至る。山中栃、山毛欅、栂其他雜樹深茂す。溪水一は東北谿村内に發し、寅の方へ流れて岫澤川に入る、之を栃谷部澤とす。一は東谿河内村飛地に起り、卯辰の方へ流れて小澤川に注ぐ。檜尾ノ峯を午の二十八度、三頭山を巳の二十五度、戸澤ノ峯前にあり。を辰の五度、菌岩山を卯の零度半、御前山前にあり。を寅の二十一度半、大嶽檜原海澤界。を卯の正中、水窪山一名惣岳山。檜原、原村、境村界。を寅の十八度、樽澤峯前にあり。を丑の二度半、入奥山同上。を子の八度、小雲取山同上。を亥の七度半、高指（タカザス）山一名燒多亡山又本荷駄山とも云ふ。棚澤、氷川界。を丑の二十一度、山毛欅（ブナ）山一名曲ヶ谷ノ峯。棚澤、氷川、大丹波界。を丑の十五度に望む可し。

雨乞場（アマコヒバ）ノ峯　北方にあり、高三百九十七丈一尺、嶺上より兩分して、南は本村字雨乞場と岩之平の間に、北は留浦村字塔澤と大久保の界に屬す。山脈は小雲取山の脈七ッ石山より東に向ひし嶺脈中日原留浦の境界大躑躅の峯より南に分岐する一支脈にして、留浦村なる境川と峯川との中間を亘り、南して大森尾根より赤指（アカザス）山を經、漸く東南に廻りて此に來り、餘勢東南走して多磨川に抵り、山趾東は峯川南は多磨川に臨めり。山中栂樹其他雜木繁生す。溪水西谿留浦村部に發し、少許にして同村に入り、未の方へ流下して多磨川に注ぐ、之を塔澤と云。

小菅川　水源は甲州都留郡小菅村の内小名薊澤（アヅミ）の深谿に發し、西の方同村より本村字庄ノ指（ザス）と美遠（ミトホ）指の間に來り、村の西部を屈曲東北へ流れて、字穴畑と七久保の界より多摩川に會す、長一千百三十五間、幅廣き處十五間、狹處十間、深處七八尺淺瀨一尺許、水勢急にして清洌なり、舟筏通し難しと雖、木材散流の用に充つべし。

鮎澤（クキサハ）川　水源二あり、一を戸澤川と云ひ一を小澤（コザハ）川と云ふ。戸澤川は巳の方河内村飛地戸澤ノ峯の北谿に發し、西北流して下流村内に入り、亥の方へ流るゝ四百二十六間。小澤川は午未の間亦同村飛地三頭山の北谿に涌出し、同飛地を東北へ流れ、末流村内に入りて越卷澤の名を得、東流する二百八十二間にして戸澤川と合し、是より始て鮎澤川の名を得、村の辰の方なる一部を北へ流下し、字立畑と鳥平の間より多摩川に會す。戸澤と小澤の兩溪會流より長八百二十八間、幅二間より七八間、深處六尺淺處三四寸。水勢同上。

栃谷部（トチヤベ）澤　南部樣指ノ峯の東北谿に發し、寅の方へ流れて字鮎澤向に至り、鮎澤川に合す。長七百五間、幅一間より三間、深平均四五寸。水勢同上。

橋澤　西南の方糠指ノ尾根と室久保尾根との深谿に涌出し、北流して字橋澤に至り多摩川に歸す。長一千三間、幅一間より三間、深平均七八寸。水勢同上。

美遠（ミトホ）澤　西南隅檜尾ノ峯の北谿に起り、西北へ流下して字美遠指（ミトホザス）より小菅川に會す。長六百三十五間、幅六間より八間、深處三四尺淺處七八寸。水勢同上。此溪水を一に玉川と呼ぶ、之に因て調布玉川物圖には、之を多摩川の本源ならんなど記せり、其非なるは固より論なし。

塔澤　亥の方雨乞場ノ峯より西谿留浦部内字塔澤に濫觴し、少許にして本村字八石澤に入り、西南へ流下して字竹ノ花より多摩川に注ぐ。長五百五十五間、幅二間より五間、深處一二尺淺處二三寸。水勢同上。

此他小溪無數枚擧に遑あらざれば略しぬ。

留浦村

大躑躅ノ峯（日原にては蜎谷ノ峯と云。）亥の方にあり、高六百五十六丈四尺（バロメートルにて測量、以下亦然り。）峯頭より兩分して、南は本村字茂久保に、北は本郡日原村字檜尾に屬す。山脈は雲取山の脈を承けて、西の方日原と丹波山村との境界七ッ石山（日原にては唐松谷ノ峯とも云。）より連接し、本脈は東して高丸山、中ノ谷ノ峯、入奥山、ヒヤマゴノ峯に連亘し、以て日原村と疆界を分ち、支脈南に分岐して、村内字峯川（下流は即ち苧川なり。）と國界境川との中間を南偏東に奔りて、大森赤指等の嶺脈をなし、雨乞場ノ峯より終に多磨川に抵り、北は蜎谷（イモリ）溪澗に臨めり。巓は茅叢、山の陰陽ともに山毛欅及赤皮樹栂椴其他雜樹深茂す。溪水一は西方七ッ石山との中間嶺脈なる紫ノタワと呼ぶ所の南溪に湧出し、本村と甲州丹波山村との疆界を限り、南流して多磨川に會す、之を境川とす。一は北谿日原部内に發し、北流して唐松谷ノ澤に合す、之を蜎谷ノ澤と云。小雲取山（日原、丹波山、大瀧村界。）を戌の二十二度、大雲取山（日原、大瀧界。）を亥の十五度半、芋木ノトッケ（境界同上。）を子の八度、割谷（ワルタニ）ノ峯（日原、浦山界。）を丑の七度、日向澤ノ峯（日原、日野界。）を丑の四度、酉谷ノ峯（日原、日野、大瀧界。）を子の廿八度、中ノ谷ノ峯を卯の十度、入奥山を卯の四度、大嶽（海澤、檜原界。）を辰ノ二度、七ッ石山を酉の八度に望む。

高丸山（日原にては檜尾と云。）亥子の間字茂久保の東北隅より日原村字檜尾に跨る、高六百七十三丈二尺。山脈西方大躑躅ノ峯より連接し、東南の方中ノ谷ノ峯に延亘し、支脈東北は日原村日影名栗澤と檜尾澤との間に支出して、日原川に抵り、南は本村谿谷に臨めり。巓の南凡九合目許に下る間は茅叢なり。其以下と山陰日原部分とは、共に山毛欅及赤皮樹栂椴其他雜木深欝せり。溪水一は南谿字茂久保に

發源し、南偏東へ流れて、村の中央を奔下す、其上流を峯川と呼び、下流苧川の名を得、多磨川に歸す。一は東北谿日原部内に起り、東北へ流下して日原川に會す、之を檜尾澤と云。小雲取山を戌の十度半、大雲取山を亥の一度、大躑躅ノ峯を申の十二度、芋木ノトツケ境界前に出せり。を子の正中、酉谷ノ峯同上。を子の二十三度半、日向谷ノ峯同上。を丑の正中、割谷ノ峯同上。を丑の三度半、犬剝簾（イヌムキスゲレ）ノ峯日原浦山界。を丑の十二度、天目ノ峯同上。を寅の正中、蕎麥粒山日原、浦山、氷川界。を寅の十度、入奥山を卯の十五度に望む。

中ノ谷ノ峯日原にては日影名栗ノ峯と云。子の方にあり、高六百六十八丈八尺。嶺上より兩分して南は村内字中ノ谷に、北は日原村字巳の戸谷（トタニ）に屬す。山脈西北高丸山より連續し、東の方入奥山に延亘し、支脈東北は日原村なる日影名栗澤と巳ノ戸澤との中間を延きて、日原川に抵り、巳の方は村内峯川と中ノ澤との間に支出す。溪水一は南谿村内字ボウヅ谷に發し、巳の方へ流れて峯川に會す、之を中ノ澤とす。一は西北高丸山との谿間日原村部内に湧出し、東北へ流下して、日影名栗澤となり、日原川に歸す。山巓より南八合目許へ下る間は茅叢、其以下及山陰日原部内は樹木深蔚するもの高丸山の如し。小雲取山を戌の十度半、大雲取山を亥の一度、高丸山を戌の十度、割谷ノ峯前にあり。を子の二十二度、芋木ノトツケ同上。を亥の二十三度、シボ久保山を辰の十二度、御前山境、檜原界。を辰の十五度、甲籠山御嶽、海澤界。を卯の二十二度に望む。

入奥山日原にては稻村岩ノ峯と云。丑の方にあり、高六百四十八丈六尺。亦嶺上より分界して、西南は本村字入奥澤に、東北は日原村字巳ノ戸と巳ノ戸澤との界に屬す。山脈西方中ノ谷ノ峯より連なり。巳の方ヒヤマゴノ澤の間に支出す。其山岬に巨岩屹立す、溪水より高凡二十餘丈、之を稻村岩と云。南は村内谿谷に臨めり。山巓の南西少許の間は茅叢、其他は山毛欅、赤皮樹梅椴等の老樹深欝せり。溪水一は南谿に起り、未の方へ流れて峯川に合す、之を入奥澤とす。一は北谿に湧出、東北へ奔りて巳

之戸澤となり、稻村岩の下にて蘆ノ澤と會し、日原川に歸す。城山（境、日原界。）を卯の廿六度、樽澤ノ峯（一名小中入澤ノ峯。境界同上。）を辰の正中、シボ久保山を巳の十六度、御前山（境、檜原界。）を辰の二十二度半、月夜見山（蕗岩山又京道山とも云。）を巳の二十三度半、三頭山（河内、檜原、川野、原、檜原界。）を午の五度、中ノ谷ノ峯を酉の正中、高丸山を酉の十五度、小雲取山を戌の正中、大雲取山を戌の十八度、蕎麥粒山を寅の正中に望むべし。ヒヤマゴノ峯（一名盜人坂ノ峯。又境にては水根山、日原にては鷹巢山と呼べり。）東北の方字ヒヤマゴと入奥澤の間にありて、前山の巳の方に連る、高六百二丈九尺。巔より三分して西は本村、東南は境村字水根山に、北は日原村字巳ノ戸に屬す。山脈其他境村の誌（〇一〇七頁。）に詳にせり。

シボ久保山（境にては樅ノ木尾と云。）東の方にありて、前山より南に分岐せる支脈に係る、高五百七十九丈六尺。嶺上より兩分して西は本村字長久保とアリサメの界に、東は境村樅ノ木尾に屬す。山脈其他同上。

倉戸山（境にてはモヂリ山と云ふ。）辰の方にありて前山の南に連る、高四百四十丈三尺。峯上より三分して西北は本村字棚澤に、東南は原村字小槇戸（マキドヒラ）平と室澤の界に、東北は境村字桑ノ木平とモヂリの間に屬す。山脈其他原村ノ誌（〇一一二頁。）詳にせり。

赤指山　申の方字赤指と峯の界に跨る、高四百五十二丈。山脈は雲取山の脈本村と日原の彊界大踏躅ノ峯より南偏東に分岐せる一支脈にして、境川と峯川との中間を亘り、大森の嶺脈を經て此に連り、東南の方雨乞場山に延亘す。山陽は概ね茅叢、山陰は栂及雜木繁生せり。

雨乞場山　南部字大久保と塔ノ澤の界より、川野村字雨乞場と岩ノ平の界に跨る、高三百九十七丈一尺。山脈其他川野村の誌（〇一一八頁。）に詳なり。

大寺山　未の方字大寺にあり、高四百五丈二尺。山上より三分して、西南は甲州都留郡小菅村に、西北は同郡丹波山に、東は本村に屬す。山脈は甲州大菩薩嶺の支脈にして、西の方丹波山小菅の彊界を延亘して、此に來り、西北は多摩川南は小菅川の兩溪水に臨み、東方川野村部内兩水相會する所

に抵りて盡く。頂は茅叢、各所に松樹疎生し、東に面する谿間は杉檜及雜木あれど、猶大樹をなさず、小溪二、一は東北谿小名中尾に發し、東北に流下して多摩川に歸す、之を栃澤と云。一は東南川野村部内字大藏の谿間に湧出し、東南へ流れて小菅川に合す、之を大藏澤と云。頂上頗平闊凡八千四五百坪。里人相傳ふ、往古此地に巨刹ありしが、元龜天正の頃廢頽に歸し、其本尊たりし地藏の木像は、今の村内廣德寺に藏する古佛是なりと。又大寺の字も此より起れり。山頂の土を穿ちて擂鉢其他陶器の破片など往々掘出せしことありと云。又此より東南凡三町許、川野村に屬する地に字小寺、又其より二町餘小菅川の方へ下りし地に、比丘尼寺の遺稱あり。又頂の東栃澤の上流に、凡四千坪許の稍凹形をなせる所あり、之を穴藏ダワ（方言山上低凹の處を「タワ」と云。）と云。此等の遺稱によれば、古へ梵刹のありしは疑ふべからざるものゝ如しと雖、其寺名及興廢の事は詳ならず。

境川（加茂澤川又小袖川とも云。）　西北隅甲州丹波山村七ツ石山と本村字茂久保なる大蹲蹰ノ峯との中間嶺脈なる紫ノタワ（即ち本村と日原村、丹波山村の疆界。）の南谿に湧出し、山脚の間を曲折南奔して、本村と丹波山村との疆界（即ち武甲ノ國界。）を限り、字堀端の西邊より多摩川に會す、長三千五百八間、川幅廣き處二三間狹き處一間、深處五尺淺處七八寸。水勢駿激にして清澄、桴筏通じ難し。

峯川（下流河内村に入りて苧川と云ふ。）　亥の方字茂久保なる高丸山の南谿に發源し、村の中間重山の間を南偏東に盤流し、字坂本と坂本向の間より河内村に入る、長四千七百二十九間、幅上流三四尺、下流は十間に及ぶ。淺處七八寸深處三四尺。水勢同上。

中ノ谷澤　北方中ノ谷ノ峯の南谿字ボウヅ谷に涌出し、南偏西に流れて字ノメリ坂より峯川に合す、長一千三百六十七間、幅三四尺より三間、淺處五六寸深處二三尺。水勢同上。

入奥川　東北の方入奥山の南谿字入奥澤に起り、南偏西へ奔下して、字三澤に抵り峯川に會す、長一千八百三十七間、幅三四尺より三間、深以下同上。

雨降川　東の方シボ久保山の西南谿に發し、西南へ流れて、字雲不老（クモブラウ）に至り峯川に歸す、長九百九十一間、幅三四尺より二間、深處二尺淺處三四寸、水勢上に同じ。

坪澤　未の方赤指山より雨乞場山に連る中間嶺脈の南谿字上坪澤に發し、中の方へ流れて字坪澤より多磨川に會す、長七百七十一間、幅三尺より一間、深平均六七寸。

此他小谿無數、枚擧に遑あらず。

日原村

小雲取山（コゲモトリ）　西隅にあり、海面より高七百二十八丈一尺（バロメートルにて測る。以下亦同じ。）峯頭より三分して、東南は本村字雲取に、北は同國秩父郡大瀧に、西は甲斐國都留郡丹波山に屬す。山脈戌の方秩父郡と甲州山梨郡及都留郡との疆界より來り、此に至て崛起して峻岳をなし、大脈岐して二となる。一は丑の方大雲取山に連り、一は巳の方唐松谷ノ峯に延亘し、山趾東して村内唐松澤と日原川との間に支出し兩溪相會する所に抵る。頂上少間の所は茅叢、其他は栂、椴、山毛欅、赤皮樹楢等、其外雜樹深欝、樹皆蒼古、老蘚、猿尾ガセを被らざるなく、曠古未だ斧斤に逢はざるものゝ如し。此に攀躋せんとするに、本村よりするものは頗る險難にして且つ迂なり、即ち登口より村の南西境の嶺上を經過し、巓に至るまで凡七里ありと云。留浦村より七ツ石山（即ち唐松谷ノ峯。）を經るもの較便にして近し、同村より巓迄凡五里と云。溪水一は東谿に發し、大雲取山より發する溪水と會し、東より漸く東南に流れ、村の中央を奔下す、之を日原川の水源とす。一は東南谿に涌出し、東より廻りて東北に向ひ、日原川に會す、之を唐松澤とす、但上流を小雲川と云。一は北溪大瀧村部内幽谷に發し、大洞山と三ツ峯の谿間を北流して、荒川の上流に會す。唐松谷ノ峯を巳の六度半、稻村岩ノ峯を辰の正中、イモリ谷ノ峯を辰の二十二度、大剝簾（イスムキスダレ）ノ峯を寅の十度、酉谷ノ峯を丑の二十八度、天目ノ峯を寅の二十二度、蕎麥



廣河原谷の平



山亡多燒び及山指高　山摩筑るげ仰りよ近附澤棚

武田久吉氏撮影

粒山を寅の二十七度、三頭山（ミトウザン）檜原、河内、西原界。を巳の十一度、大嶽檜原、海澤界。を辰の六度に望む。

大雲取山　戌の方にあり、縣内第一の高山にして、海面を挺つる七百三十九丈五尺、嶺上より分界して、東南は本村字長澤、西北は秩父郡大瀧村に屬す。山脈未の方小雲取山より連亘し、寅の方芋木ノトッケに接續し、支脈北に分岐して三ツ峯をなし、荒川に至る。樹木深茂、景況上に同し。此邊殆んど人跡を絶し、獵者も來ること稀なりと云。溪水南谿に涌出し、東南へ流下して小雲取山の溪水と會し、日原川となる。

芋木ノトッケ　方言峯の尖頭謂てトッケと做す。　同方部字長澤にあり、高六百九十六丈、亦嶺上より分界して、東南は本村、西北は大瀧村に屬す。山脈申の方大雲取山より連接し、丑の方長澤ノ峯に聯る、樹木景況上に同じ。溪水南谿に發し、東南流して長澤ノ峯より來る一溪と合し、長澤川となる。

長澤ノ峯　西北の方にあり、高六百七十五丈四尺、嶺上より南は本村字長澤に、北は大瀧村に屬す。山脈未の方芋木ノトッケより連り、辰の方水松谷ノ峯に接續す。樹木景況上に同じ。溪水南谿に起り、芋木ノトッケより發する一水を併せ、南流して長澤川となり、日原川に會す。

水松谷ノ峯（アラマキダニ）　同方にあり、高六百五十三丈六尺、嶺上より兩分して、南は本村字長澤と孫想（マゴサウ）の界に、北は大瀧村に屬す。山脈戌の方長澤ノ峯より連接し、東の方瀧谷の峯に繇亘し、支脈東南に分岐し、崛起して白石山（クセキザン）をなし、北は大瀧村の深谿に臨めり。山陽本村部分は概ね篠篶の叢莽にて、山陰大瀧部内は雜樹深茂す。溪水辰の方幽谷に湧出し、東南より南へ廻流して日原川に會す、之を孫想谷とす。

瀧谷ノ峯　亥の方にあり、高五百九十二丈四尺、亦嶺上より分界し、西北は大瀧村、東南は本村字孫想と簾の界に屬す。山脈西の方水松谷ノ峯より連り、丑の方酉谷（トリダニ）峯に延亘し、支脈東南へ分岐して、孫想澤と小川（ヲガハ）の間を亘り、日原川に抵る、之をタワ尾根と云。北は大瀧村の幽谷に臨めり。山中栂、

椴、赤皮樹其他雜樹深鬱たり。小溪一は南谿に起り、南して孫想澤に合す、平時は水なし、因て之を涸瀧（カラタキ）と云。一は東谿に發し、東流して小川の上流に合す、之を瀧谷と云。

酉谷（トリダニ）ノ峯（秩父にては黒ドッケと呼ぶと云ふ。）　北隅にあり、高五百九十八丈六尺、峯頭より三分して東南は本村字籠に、西は秩父郡大瀧村、東北は同郡日野村に屬す。山脈未の方瀧谷ノ峯より連り、東の方日向谷ノ峯に接續し、支脈北方に分岐して大瀧と日野の疆界を分ち、南は小川の源頭谿に臨めり。山陽本村に屬する部分は概ね篠靁叢生して樹林なり。山陰兩村部内は雜樹深茂せり。溪水南谿に涌出し、巳の方より東南又未の方へ廻流して數溪を合せ、日原川に會す、之を小川とす。瀧谷ノ峯を未の五度半、水松谷ノ峯を未の二十六度半、長澤ノ峯を申の十一度、芋木ノトッケを申の八度、大雲取山を申の九度、小雲取山を未の二十八度、檜尾を午の二十四度、稻村岩ノ峯を午の四度、御前山（檜原と境村界。）を巳の十一度、高指山（タカサス）（一名本荷駄山或は燒タホ山とも云。氷川と棚澤の境界なり。）を辰の十七度半、日向谷ノ峯を卯の一度、割谷（ワルダニ）ノ峯を卯の十二度半に望む。

日向谷（ヒナタダニ）ノ峯　北部にあり、高六百二十六丈五尺、嶺上より兩分して南は本村字籠に、北は秩父郡日野村に屬す。山脈西方酉谷ノ峯より遠り、辰の方割谷ノ峯に接し、南は村内小川の深谿、北亦日野村の幽谷に臨めり。山陽は篠靁の叢莽、山陰は雜樹深茂す。小溪南方割谷ノ峯との谿間に發し、同山の南谿より發する割谷ノ澤と合し、南して小川に會す、之を日向谷ノ澤と云。瀧谷ノ峯を未の二十四度、水松谷ノ峯を申の五度、長澤ノ峯を申の十四度、芋木ノトッケを申の十一度、大雲取山を申の一度、イモリ谷ノ峯を未の四度、檜尾を未の正中、稻村岩ノ峯を午の十一度、白石山を未の十一度半に望む。

割谷ノ峯　子丑の間にあり、高五百九十七丈四尺、嶺上より北は秩父郡浦山村に、南は本村字籠に屬す。山脈戌の方日向谷ノ峯より接續し、東南犬剝籠（イヌハキスガレ）ノ峯に聯亘し、該山と日向谷ノ峯との中間嶺脈

より北に分岐し、日野浦山の境界を亘るものを大黒山、若御子山の脈とす。東北は浦山の深谿に、南は村内小川の幽谷に臨めり。山陰浦山部分は雜樹深蔚、山陽村内は概ね茅篶の叢莽なり。但谿間は檜、栂、椴、川胡桃等の樹林を見る。小溪南谿に涌出し、南流して日向谷ノ澤に合す、之を割谷ノ澤と云。日向谷ノ峯を酉の二十八度、瀧谷ノ峯を申の四度、長澤ノ峯を申の二十度、大雲取山を申の十五度、小雲取山を申の四度、白石山を未の十八度、犬剝籠ノ峯を辰の十度半に望むべし。

犬剝籠（イヌムキスダレ）ノ峯　丑の方にあり、高五百九十二丈八尺、嶺上より分界して、北は浦山村南は本村字籠に屬す。山脈西北割谷ノ峯より連り、辰の方天目ノ峯に延亘し、支脈一は南して村内割谷ノ澤と犬剝ノ澤の間を延きて、小川に抵り、一は北方浦山村に支出す。山陽は茅篶の叢莽、但谿間は栂椴、赤皮樹等茂生し、山陰は雜樹深欝たり、小溪巳の方より起り、同方へ流下して小川に會す、之を犬剝ノ澤と云。日向谷ノ峯を戌の七度、酉谷ノ峯を酉の二十五度、大雲取山を申の二十二度、小雲取山を申の十度、唐松谷ノ峯（一名七ツ石山。）を未の二十度、三頭山（ミツトウザン）（檜原、河内、西原界。）を午の十二度、御前山（ゴゼンヤマ）（前に檜原、海澤界。）を巳の三度半、甲籠山（カロウザン）御嶽奥宮。を辰の二十七度、御嶽本社の頂上。を辰の二十四度、高指山（前にあり。）を辰の二十三度、天目ノ峯を辰の十度、蕎麥粒山を卯の二十八度に望む。

天目（テンモク）ノ峯　秩父にては三ツドツケと呼と云。　東北の方にあり、高五百九十二丈七尺、亦嶺上より分界して、東北は浦山村、西南は本村字小川に屬す。山脈戌ノ方犬剝籠ノ峯より連り、此に來りて三峯をなす、中央最高く（高度方位此にて測る。）峯上巨巖屹立せり、其丑の方にあるものは浦山村に屬し、巳の方にあるものは本村と浦山の境界に係る。山脈巳の方の一峯より東して、淺間嶺、蕎麥粒山に連るもの之を本脈とす。其支脈南に分岐して村内小川（ヲ）と倉澤川の間を延亘し、横篶（ヨコスマ）尾根より瀧ノ入ノ峯をなし、終に字一原に至り、日原川に遮斷せられ、中央の峯より分岐するものは、丑の方浦山村に支出す。山陽凡八合目迄は茅篶叢生し、以下は樹林翁蔥、山陰は惣て雜木深茂せり。小溪未の方より發し、南より西南へ廻流し

て、小川に會す、之をカロウ川とす。日向谷ノ峯を戌の八度半、酉谷ノ峯を戌の二度、芋木ノトッケを酉の十四度、大雲取山を酉の三度、小雲取山を申の二十二度、日陰ナグリノ峯を未の二十三度、稲村岩ノ峯を未の十四度、檜澤ノ峯を午の十四度、瀧ノ入ノ峯を午の十五度半、小ノ岩山を巳の二度、高指山を辰の二十八度に望む。

淺間嶺　寅の方にあり、高五百二十六丈一尺、嶺上より西南は本村字長尾に、東北は浦山村に屬す。頂上に一大檜樹あり、下に淺間社の小祠を建つ。山脈西方天目ノ峯より連り、辰の方蕎麥粒山に接續し、南は倉澤川の上流深谷に、北方亦浦山村の幽谷に臨めり。山中山毛欅、楢等の老樹其他樹木鬱茂す。嶺上に一徑あり、村内字一原より北に向ひ、瀧ノ入ノ峯、横篶尾根を經て、天目ノ峯の少し東より右折し、浦山村との境界嶺上を過ぎ、終に同村内に入る、長二里十五町、之を本村より秩父郡大宮郷への捷徑とす、本村より氷川道を除くの外他村に通ずるもの、獨此一徑あるのみ。天目ノ峯を酉の十二度半、瀧ノ入ノ峯を未の二十五度半、狩鞍山を午の二十九度、甲籠山を巳の八度、高指山を巳の十六度半、小ノ岩山を午の十六度に望むべし。

蕎麥粒山　一名三角山、秩父にては火打山と稱すと云。　寅の方偏隅にありて、淺間嶺の辰の方に接す、高五百四十五丈六尺、峯頭より三分して、西は本村字長尾に、南は本郡氷川村字桂谷に、東北は浦山村に屬す。山脈其他氷川村の誌○一○に詳にせり。

白石山　一名立岩山（タテイハヤマ）。　西北の方字孫想と長澤の界に跨る、高六百三十二丈二尺、山脈西北水松谷ノ峯より東南に分岐する一支脈にして、此に來り崛起して頗る峻岳をなし、山趾南は日原川、北東は孫想川に抵る、頂上に白石神社の奥の宮天祖神の祠を建つ。山中樅、栂、赤皮樹、山毛欅其他雜木蓊鬱たり。山の東北孫想川に臨んで巨巖峭立す、高凡三十餘丈、之を立岩と稱す、下に大窟あり、頗る空闊、千疊敷と呼ぶ。村内字一原より頂まで登路凡二里二十餘町と云ふ。



レ　　折　　ノ　　棒



（景近中）山佛馬　（景近右）山石茸石　りよ頂山岳惣井澤

む望な（景遠左）山レ折ノ棒び及（景中左）黒山

影撮氏吉久田武

瀧ノ入ノ峯　東の方字小川より長尾に跨る、高四百五十二丈六尺、山脈北方天目ノ峯より横篶尾根を經て此に來り、餘勢南して字一原にて日原川に遮斷せられ、山趾東は倉澤川に、西は小川に至る。此西麓小川に臨む所即ち一石山の洞窟とす。頂の南は概ね茅萩の雜叢、西及北は山毛欅、赤皮樹等の雜木深茂せり。

小ノ岩山（ヲイハ）　氷川にては鳥屋戸山と云。　卯辰の間にありて、蕎麥粒山の南に連る、高四百八十四丈八尺、山上より兩分して、西は本村字倉澤向に、東は氷川村字鳥屋戸（トヤド）と細倉の界に屬す。山脈其他氷川村鳥屋戸山の條○一○二頁。に詳にせり。

以上諸山は小雲取山の東脈にして、村の北境及日原川の北に蜿蜒するものに係る。

唐松谷（カラマツ）ノ峯　丹波山村にては七ツ石山と云ふ。　申酉の間にあり、高六百七十六丈一尺、山上より兩分して南は甲州都留郡丹波山（タバヤマ）村、北は本村字雲取と檜尾の界に跨る。山脈亥の方雲取山より連り、東の方イモリ谷ノ峯、檜尾、日陰ナグリノ峯、稻村岩ノ峯、鷹巢山、城山、檜澤ノ峯、六石山、狩鞍山等に蜒亘し、村の南境に蜿蜒す。雲取山の脈中、此脈本縣中最も高度を占むるものなり。山陽丹波山部内に七箇の巨巖屏立す、其下に七石明神の祠あり。山中山毛欅、赤皮樹、椴、椹等雜樹深蔚たり。登路は留浦村より丹波山との境界小袖川に從ふて上り、七石社の前に至るまで凡三里餘ありと云。溪水一は東北路に發し、同方へ流れて小雲取山の南路より發する小雲川の溪水に合し、唐松谷ノ澤となる。一は未の方丹波山村部内に湧出し、南流して小袖川に會す。小雲取山を亥の六度半、鷹巢山を卯の十三度、イモリ谷ノ峯を卯の八度、蕎麥粒山を寅の十二度半、大劍簾ノ峯を丑の二十度、御前山（境村と檜原村界。）を辰の七度、天神山（原村と檜原村界。）を辰の十七度半、倉戸山（一名モヤリ山。原、境、留浦界。）を辰の八度半、戸澤峯（一名祇山。檜原と河内村飛地界。）を辰の二十六度、大寺山（留浦と甲州丹波山及小菅界。）を巳の十九度に望む。

イモリ谷ノ峯（留浦にては大蹈ノ峯と云。）　申の方にあり、高六百五十六丈四尺、峯上より兩分して北は本村字檜尾

に、南は留浦村字茂久保に屬す。山脈其他同村大躑躅ノ峯の條〇一二頁。に詳にす。檜尾（ヒノキヲ）（留浦にては高丸山と云。）同方にありてイモリ谷ノ峯の寅卯の間に連る、高六百七十三丈二尺、嶺上より南は留浦村字茂久保（モクボ）に、北は本村字檜尾に屬す。山脈其他留浦村高丸山の條〇一二頁。に詳にせり。日陰ナグリノ峯（留浦にては中谷ノ峯と云。）西南の方にありて、檜尾ノ東南に連る、高六百六十八丈八尺、嶺上より分界して北は本村字巳ノ戸谷（トダニ）に、南は留浦村字中之谷に屬す。山脈其他同村中之谷ノ峯の條〇一二頁。に詳記す。

稲村岩ノ峯（留浦にては入奥山と云。）未の方にありて前山の東に連る、高六百四十八丈六尺、亦嶺上を分ちて、北は本村字巳ノ戸と巳ノ戸谷の界に、南は留浦村字入奥澤に屬す。山脈其他同村入奥山の條〇一二頁。に詳にす。

塵巣山（一名盜人坂ノ峯。又留浦にてはヒヤマゴノ峯、境村にては水根山と云。）南部にありて前山の巳の方に連る、高六百二丈九尺、嶺上より三分し、北は本村字巳ノ戸、西は留浦村字入奥澤とヒヤマゴの界に、東南は境村字水根山に屬す。山脈其他境村の誌〇一〇七頁。に詳にせり。

城山　同方にありて前山の東に連る、高五百五十三丈五尺、嶺上より北は本村字巳ノ戸、南は境村字水根山に屬す。山脈其他同村誌〇一〇八頁。に詳にす。

檜澤ノ峯（境村にては小中入澤ノ峯と云。）巳の方にあり、前山の辰の方に連る、高五百四十五丈八尺、嶺上より兩分して北は本村字檜澤に、南は境村字小中入澤に屬す。山脈其他同村誌〇一〇九頁。に詳記せり。

狩鞍山（カリクラ）（境村にては小松ガタワノ峯、氷川にては不老山と云。）同方にあり、高五百三十四丈九尺、嶺上より三分して北は本村字狩鞍に、東は氷川村字不老（フラウ）に、南は境村字三ノ木戸の西北隅に屬す。山脈其他氷川村不老山の條〇一一三頁。に詳にせり。

唐松谷ノ峯以下の諸山は雲取山の東南脈本村南境に盤亘するものに係る。

日原川（ニッパラ）　水源二あり、一は西隅小雲取山の東谿に發し、寅の方へ流るゝ千百十二間、一は戌の方大雲取山の東南谿に涌出し、東南へ流下する九百二十間、前流と合して一となり、重巒絕壑の間を東より漸く東南へ盤廻奔流して、數十の溪流を會し、字平石より氷川村に入る、合流より村界まで長八千九百五十五間、幅狹き處六間、廣き處二十四五間、深潭三丈許の所あり、淺瀨五六寸、絕壑巉嵓の間を奔下するを以て、到る所激越洶湧、飛沫雪花を漲らし、勢甚俊快に、水色極て清冽、多く鰍魚を産す。桴筏通じ難し。

長澤　西北の方長澤ノ峯の南谿に發し、南流して芋木ノトッケより發する一溪を合せ、日原川に歸す、長千五百二十六間、幅一間より五間、深平均一尺、水勢急激にして清し。

唐松谷（カラマツ）ノ澤　上流を小雲川と云。西の方小雲取山の南谿に涌出し、辰の方へ流下して唐松谷ノ峯より發する一溪を併せ、轉じて東北へ廻流し、日原川に會す、長二千九百十間、幅一間より五間、深平均六七寸。水勢同上。

檜尾澤　申の方檜尾の東北谿に發源し、東北へ流下して、白石山の對岸より日原川に注ぐ、長一千四百五十一間、幅一間より三間、深平均二三寸。水勢同上。

日陰ナグリノ澤　西南の方日陰ナグリノ峯の北谿に起り、東北へ流下して字八町の西邊より日原川に歸す、長二千百七十間、幅一間より四間、深平均三四寸。水勢同上。

孫想（マゴサウ）川　亥の方水松谷（アラギダニ）ノ峯の辰の方幽谿に涌出し、白石山とタワ尾根との谿壑を東南より南へ廻流し、日原川に注ぐ、長二千六百十八間、幅一間より六間、深平均三四寸。水勢同上。

小川（ヲ）　北隅酉谷ノ峯の南谿に發源し、東南より未の方へ廻流して、數小溪を集め、一石山と籠岩の間を經過して、日原川に入る。長四千九十四間、幅一間より九間、深平均五六寸。水勢同上。

巳ノ戸澤　未の方稻村岩ノ峯の北谿に發し、東北へ流下して蘆ノ澤と合す、其間長千二百五十一間、其より百八九間を經て、日原川に會す、幅一間より四間、深平均二三寸、水勢同上。該溪と蘆ノ澤と會合する所に巨巖屹立し、頗る峭絶なり、高凡二十餘丈、之を稻村岩と云ふ。

蘆ノ澤　南の方鷹巢山の東北谿に發し、丑の方へ流下して、巳ノ戸澤に合す、長千百九十六間、幅一間より五間、深平均三四寸、水勢同上。

杜松ノ澤　南の方城山の東北谿に發し、丑の方へ流れて日原川に入る、長八百二十二間、幅一間より三間、深平均二三寸。水勢同上。

檢澤川　巳の方檢澤峯の西北谿に起り、東北へ流下して、日原川に注ぐ、長千九十五間、幅一間より五間、深平均四五寸。水勢同上。

倉澤川　上流を長尾川と云、寅の方蕎麥粒山の西南谿に涌出し、南流して數小溪を合せ、倉澤民居の東を經過して、日原川に會す、長二千五百四十三間、幅一間より十間、深平均五六寸。水勢同上。

大持澤　辰の方小ノ岩山の西南谿氷川村との境界に起り、西南へ流れて同村と分界し、日原川に歸す、長六百四十四間、幅五尺より五間、深平均七八寸、水勢同上。

川苔川　東南の方氷川村の山間より來り、本村字平石の北邊を限りて西に流れ、同村と分界する五百六十八間にして、日原川に合す、幅八間より十間、深處六七尺、淺處四五寸、水勢同上。

狩鞍澤　巳の方狩鞍山の東北谿に發し、東北へ奔下して、小菅民居の南を經過し、日原川に注ぐ、長八百八十九間、幅一間より四間、深平均二三寸、水勢同上。

イヤ入澤　同方部、亦氷川村の山間より來り、本村字栗原の東南を限りて、同村と分界し、寅の方へ流るゝ四百三十九間にして、日原川に注ぐ、幅一間より五六間、深平均五六寸、水勢同上。

明王ノ瀧　辰の方倉澤川の下流字倉澤にあり、高二丈幅三尺。下流十間餘にして日原川に入る。

マヒモウヅノ瀧（一名螺貝ノ瀧。）　明王瀧を距る上流凡十五六間にあり、二層に落つ、上方高一丈五尺、下方高一丈、幅各三尺餘。

安穩（アンノン）瀧　前瀑の上流凡二町許にあり、高二丈幅四尺餘。

魚留（イヲドメ）瀧　前瀑を距る上流凡十二町許にあり、高三丈幅三尺餘。

長尾ノ地藏瀧　東方字長尾なる茅尻澤の下流にあり、高七丈幅一尺五六寸。下流一町餘にして、魚留瀧の上方倉澤川に注ぐ。

檜澤瀧　東南部檜澤の下流二所に懸る、一は氷川道檜澤橋の上方にありて、二段に落つ。上層高一丈幅五尺、下層高一丈五六尺幅六尺。一は其下流凡二十間許を距つ、高三丈五尺、幅五尺、直に日原川に注ぐ。

障子瀧　中部より稍巳の方杜松（ネズ）澤（ヤシ）の下流字巳の戸にあり、高四丈幅二尺餘、下流二十間許にして日原川に入る。

地藏ノ瀧　同方同字蘆ノ澤の下流にあり、高五丈幅六尺、下流一町許を經て巳ノ戸澤に合す。

巳ノ戸ノ大瀧　南の方前瀑の上流凡六町許を距て、二段に瀉下す、上階高三丈、下は高一丈、幅各三尺。

銚子口の瀧　中部の少し東方一石山の稍下方小川の下流にあり、高一丈五六尺、幅一間、下流四町餘にして日原川に注ぐ。

小川ノ大瀧　同方一石山の稍上方前瀑を距る上流凡四町許にあり、二層に落つ、上は高三丈五尺、之を雄釜（ヲガマ）と云、下は高二丈、之を雌釜（メガマ）と云、幅各四尺。

カヂガ瀧　中部字八町と孫惣谷の界日原川の中流にあり、二段に飛瀉す、上は高三丈幅六尺、下は高一丈幅七尺、之亦上を雄釜、下を雌釜と云。

弓山瀧　中部字八町なる八町澤の下流にあり、高六丈餘、幅三尺、下流六町許にして日原川に注ぐ。

大魚留の瀧（一名栃平ノ瀧。）　西方字槍尾と孫想谷の間なる日原川にあり、高八丈幅六尺。

小魚留の瀧　同方字雲取と長澤の間日原川の上流にあり、前瀑を距る上流凡八町許、高四丈幅六尺。

唐松（カラマツ）澤の瀧（一名野陣ノ瀧。）　同方字槍尾なる唐松澤の下流にあり、三段に懸る、高各五丈許、幅四尺、下流三町許にして日原川に會す。

附記

一石山神社　村社、中部の稍東方（元標より亥の方。）字小川千五百十三番地にあり、社、東西十二間南北二十五間、面積二百六十坪。天照皇太神、稜威尾走命を祀る。神官の傳ふる所に據るに、文武天皇の四年庚子四月八日役行者小角の開創する所にて、其後平城天皇の大同四年己丑八月二十四日弘法大師之を中興し、文徳帝の天安元年丁丑慈覺大師之を再興す。昔時は神社佛閣頗る莊嚴を極めたりしが、天正十八年庚寅豐臣北條の兵亂の時、別當祠官等散亡して、頗る荒廢に及びしを、慶長十七年壬子に至り、羽州羽黒山より四十八本の梵天及三頭の獅子頭を勸請し、爾後稍賽詣の人も多かりしが、維新後頓に衰微に屬すと云。昔時は一石山大權現と稱し、江戸東叡山寛永寺に隷屬し、別當大寶寺、社家原島氏之が祭祀を掌りしが、大寶寺は維新前既に廢寺となり、江戸芝高輪如來寺兼帶せり。明治二年己巳神佛甄別の時社號を改め、別當寺を廢す。社地は字一原の民居を距る亥の方凡十八町、小川の西岸にあり、社地の傍嵓山皆壘石を以て成り、巉巖壁立削るが如く鏤るが如く、峭拔仄絕、各所に無數の洞穴を開く、山岩奇絕、樹木蒼古、溪泉清冽、圖畫も及び難く、凡そ此に臨むもの、頓に塵界出離の想あらしむ。其著名のものを左に序記すべし。

梵天岩　本社の東北小川の溪流を隔てゝ、洞窟の稍北にあり、巨巖削立鋒の如く、溪流を挺づる凡三十餘丈。此邊兩崖峭仄、仰で天を望むに其甚窄きを覺ふ。

籠岩（カゴイハ）　梵天岩の西岸に傍ひ、棧を渡り、岩角を攀ぢ、行くこと凡四町許、タワノ尾根の東崖小川に臨みて斷岩側立し、横凡二十間許の間、刻むが如く鑿つが如く、攻むが如く巧むが如く、大小無數の穴隙をなし、之を望むに全山惣て最良の太湖石の如く、天工此に至て奇絶妙絶、之を賞する唯絶叫の一あるのみ。

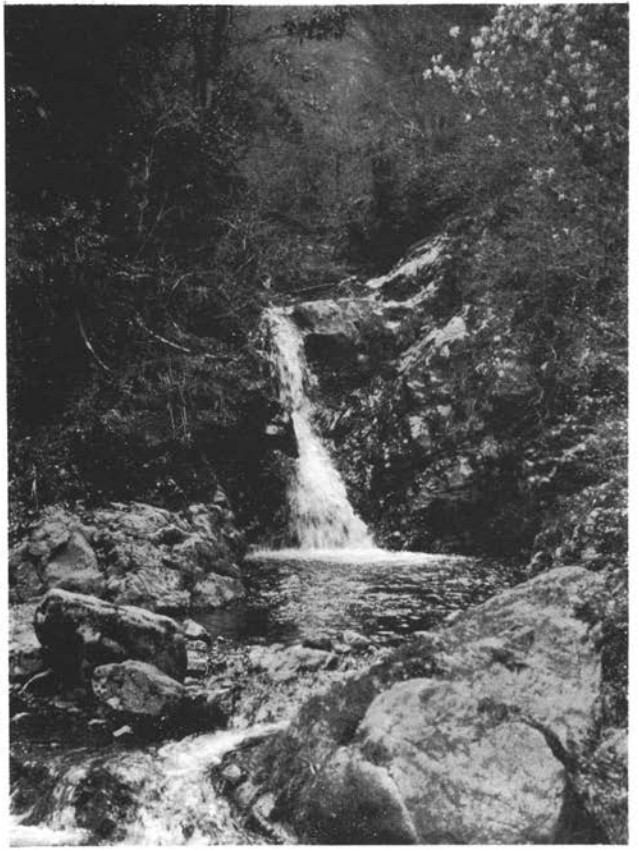
新宮洞　本社の東、小川を渡りて山麓にあり、洞口西南より入る。行くこと二十一歩にして左折す、其間甚窄く、匍匐して行く、左折の所より岩隙頗る促まり、體を側てゝ蟹行する三十四歩、又匍匐する五十七歩、始て空闊となり、立行すべし、其所より左右に分る、右は行くこと二十二歩、上に大なる蓮蕾の下垂せる如き岩あり、之を弘法大師親作の蓮花と云、此邊下に水を湛えり。又三十二歩にして上下相窄る。又匍匐する三歩許、腹摩（ハラマヽ）ノ場と云、三十九歩、上に一洞を分つ。本洞は左に向て行くこと二十三歩、頗る廣闊なり。右の上に大洞あり、之を劍ノ峯と云、深凡十間許にして窮る。本洞は又左に入る二十九歩、左傍に圓形の段階あり、其下低凹水を湛ゆ、階を弘法ノ學文所と云、泓を弘法ノ硯水と云。二十八歩、左傍に下陷せる一窟あり、底に水あり、血ノ池と云、行くこと二十九歩、是より洞中廣闊となり、廣き處は六間餘の所あり、此邊を彌陀ノ原と云。又四十歩にして砂磧あり、三途ノ川と云。是より上る五十八歩、死出ノ山と云、此邊最廣闊、横七間縦九間許もあらん。十八歩、右傍に多く岩片を堆積す、賽ノ河原と云。其右の上方に多く飛白の如き白條を見はす、十三佛ノ懸軸と云。十四歩、右の隅に岩あり、不動尊ノ形と云。是より急に下る一百四歩より五六歩の間、左傍に小なる岩疣十二所に突起す、十二ノ藥師と云。此先深邃其窮極を知らず。曾て藤澤上人あり、之を行くこと七日にして大川あり、渉るを得ずして歸り來ると云、導者は出羽の湯殿山に通ずと云へり。歸路蓮花石の先二十二歩、洞口へ出る道より又左に入る二十七歩、須彌谷と云、谷の盡る所上に數多の岩乳の小點附著す、天上星辰ノ形と云。是先濕泥沼

の如く、人是より進むものなし、其深測るべからずと云。凡洞中小川の溪流より深く地下に入るものゝ如し、黒暗寂寞到る處岩端水を滴らして、各所の湛泓に落つるもの淅瀝として心耳を冷かならしむ。各洞孰れも蝙蝠多く、通常に比すれば頗る大に且赤し、其兩翼を張れば徑凡一尺に至るものあり。

弘法ノ窟　前洞を出で、小川の水涯より叉道を左に取り、樹根に縋り、岩角を攀ぢ、棧を渡り、登ること三町餘にあり、洞口西南に向ふ、入ること二間、左傍の中間に平石あり、上より二箇の岩柱垂れて之に接着し、其形懸棚の如し、之を弘法ノ護摩壇と云、行くこと九歩、右傍に下垂せる岩乳あり、之を撃つに鼓聲をなす、鼓石と云、其先一間餘、洞奥の穴中に僧の背後を見る如きの岩あり、弘法石と名づく、其前に上より下垂せる岩乳あり、獨鈷石と云、該洞は此にて窮る。

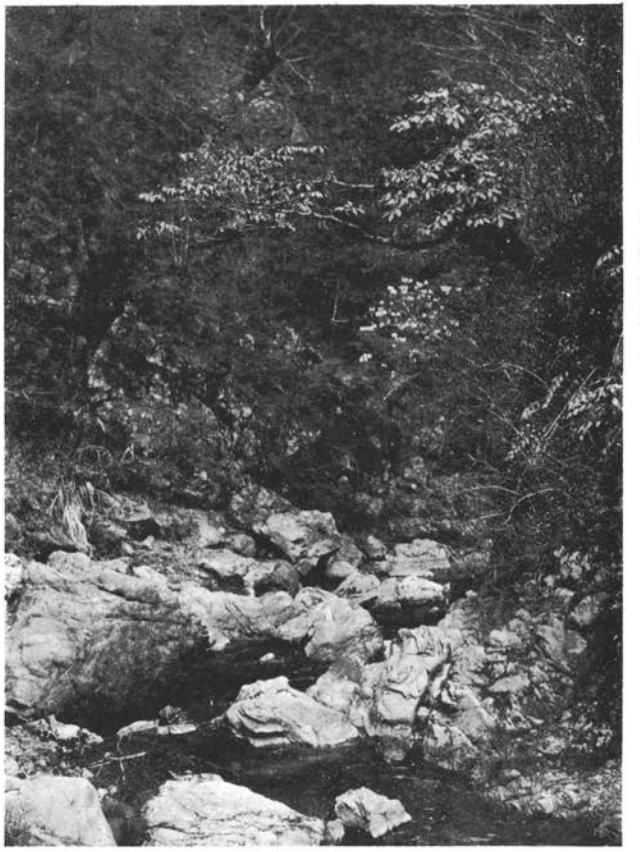
仁王ノ窟　前洞を出で、未だ幾ばくならずして路を右に取り、下ること一町許にあり、洞西北に面す、入ること三間許、右傍に下陷せる一窟あり、無間地獄と云、其深測る可からず、炬を其中に投ずるに暫く火を見る。是より登ること十二歩、上より下垂せる大石乳あり、之を撃つに大鼓の聲をなす、大鼓石と云、其下急に降る二間許、其右傍岩角削るが如し、劍ノ山（ツルギ）と云。是より上下相牽り匍匐して行く六歩、又闊となる。九歩、右傍に數小孔あり、多く錢を帖附す、孝行ノ錢附石と云。其左なる登路の傍に岩柱突起す、之を手掛不動と云。此より復窄く、匍匐して攀登る十六歩にして、復闊、其所左右に岩柱あり、仁王ノ力足と云、其左傍に陷穽あり、深一丈餘、是より十五歩にして山崖に出づ、即ち行貫（ユキメ）ケノ穴なり、此洞口は西南に面せり。

母の胎内潜（クヾリ）　前の行貫ノ穴を出で、下ること六間許にして、道を右に取り、又上る二十一間の所にあり、洞口西南に向ふ。洞に入る二間許、階子を設けて登路に便す、之を上る二間餘、其間頗る窄且陰なり。此を過て始て闊となり、立行すべし。十五歩、左傍に又一洞を分つ、之を父の胎内潜



大丹波川吊シ橋の淵

武田久吉氏撮影



吊シ橋より下流を見る

と云、甚窄。凡十五間許にして窮る、之を出で前路に歸り、行くこと二間、洞を出づれば其口南に面す、是亦行貫（ユキヌケ）なり。

奥ノ宮大日ノ窟　前洞を出で階子を傳ひ、鐵鎖に縋り、岩角を攀ぢ、左へ上る三十餘間にあり、洞に入りて五十五歩、泓あり、横一間半縦四間許、其水極て清洌、其極奥に立佛像の如き岩あり、之を大日の水行石と云。

荒神の窟　前洞を出づれば其左傍にあり、入ること凡三間許にして下陷す、深さ測る可からず。

武藏名勝圖繪に云、大日谷巖窟、日原村より此所迄十八町許、岩窟を稱して一石大權現と號せり、廣大なる石山にて岩穴數ケ所あれども、都て一石なるを以て一石山と唱ふ。中略。別當は大寶寺と號す、天台宗東叡山末なるが、寛文年中より廢寺となり、江戸芝高輪如來寺の兼帶なり、社家原島右京、又倉澤の岩穴の社家原島淡路といふ、是は右京が家より分家して倉澤の社家職なり、下社家二人あり、是は右京淡路が支配なり。偖別當兩社家並に岩窟の掟等も惣じて東叡山執事所の指揮なり。中略。巖窟を禪定せんと欲する者、社家原島氏の宅へ行きて其事を賴みければ、社家より先達の者を出し、夫が案内にて西の方なる山の中腹を三町許にて路側に制札あり、是より一石山の界限なり、夫より數十歩にして日原川（恐らく小川の誤ならん。）を渡り、高低の阪路十八町許を歷て、大日谷に至る、大日谷川の際平地十五六間に幅七八間の中央に大日堂あり、二間半に一間半、本尊大日銅佛の坐像一尺二寸許、簷際に半鐘を掲ぐ、側に行人小屋あり、長三間横一間、此所にて先達のもの行衣を著し、禪定の行裝をなす、神酒を携へ爰に置けり、是は下山の時に各傾けんが爲なり。夫より窟に赴くに、大日堂の後より谷へ入ること二十歩許にして、川岸に出れば、向ふに梵天岩突兀として空を凌いで峙立す、此所にて丸木橋を渡る、長五間程幅一二尺、丸木を藤蘿を以て編付たり、至て危し。夫より斷橋二ヶ所を越て、對岸に至れば、大石十圍二十圍の怪岩を攀

ぢ、又危石を踰て登ること十五六歩にて、仁王の窟あり、又磐石を傳ひ、梯子を登る所二三ヶ所、又鐵のくさりを探り行所は誠に危急の地にして、足の下は數十丈の空谷故、他を望み見る事ならず、畏怖する事多ければ、烟管にて烟を吹事もなり難し、偖窟にいらんとする時、洞口にて先達の者燧を取て松明を附るを見るに木皮也、是はウダイと云ふ木皮なりといふ、梓に似たる皮なり、其火あきらかにして、消さんと欲すれども消ざるが如し、是を以て禪定せり。云々。

祠掌原島巖彦所藏、舊時一石山の掟書あり、左に採錄す。

其一

一石山之掟

一、當山者役行者之草創、慈覺大師之再興也。彌天下安全の御祈禱無懈怠可相勤事。

一、別當一人社家四人之儀、慈覺大師如御定相違有間敷事。

一、湯殿參詣之最花四拾八文、如先規別當ヱ可收納。付道者賄料百五拾文、先達錢拾八文者、兩社家ヱ可收納事。

一、如先規牛王札守之儀、從別當可出之事。

一、表口裏口如先規、爲社家兩人隔年仁道者可賄之事。

一、權現拜所之近所道筋之貰木一圓不可伐採事。

右條々堅守、此旨至永代不可有違犯之旨、依輪王寺宮一品法親王之仰、執達仍如件。

寛文十二壬子年極月十日

觀理院　舜　盛　花押

圓覺院　諶　泰　花押

別當　大寶寺

社家　原島淡路

同　同　右京

其二

掟書追加

一、封內與境內之境、近來令紛亂候付、今度見分之上、任往古之定、大瀧之峯通境ニ相極候事。

一、封內並御岩屋參詣之道筋ニテ、立木ハ勿論、雖爲根返リ或朽木、一切不可伐採、雖然參詣之道筋塞ニオヰテハ取除之、往來遮障無之樣可仕事。

一、近年先達共相背古來掟、參詣之道者ヨリ鳥目貪取候由相聞、不屆之至候。兩社家ヨリ先規之通、先達錢十八銅宛相渡之外貪取候ハヽ、可爲曲事候。依之此度制札六枚差遣候間、御定之所々ニ立置之、永無退轉可相守之事。

御岩屋側　封內入口　倉澤　大寶寺　兩社家

右六ヶ所ニ可立置之。

一、於境內朽木枯木風折レ根返被下之、氏子百姓トモ山稼先規之通御免許之上者、任古來掟、二季登禮之砌、野火之節、又者道橋普請等、人足役急度可相勤、縱雖爲小木、立木一切不可伐採并箸木掃出候儀、堅令停止之事。

一、社家并氏子百姓之內江他所之者召抱、猥山內江入申間敷候、但不依何事願訴訟有之候節ハ、先規之通別當迄可申出事。

右追加條々御先代所被定置條目、雖爲嚴重、猶又今般委悉被仰出候間、此旨至永代不可違犯之旨

輪王寺一品宮御氣色之處也、仍下知如件

享保六年辛丑四月

功德院　尙　志　花押

○多摩郡の山川

倉澤神社　雜社、辰の方字倉澤向五百八十三番地より五百八十二番地に跨る。境内百五坪、社殿なく、洞窟中に祀れり、祭神は天照皇太神、豐受大神、草創再興等一石山に同じと云。舊倉澤權現と稱し、江戸東叡山寬永寺に屬し、同山より別當大寶寺を置き、社家原島氏と之が祭事を掌りしが大寶寺は維新前廢寺となり、江戸芝高輪如來寺兼帶す。明治二巳神佛分離の時亦廢す。拜殿は字倉澤五百七十七番にあり、假殿なり、社地は一大洞窟にて、倉澤川の南岸にあり、倉澤の民居を距る東北凡十二町、全山聖石を以て成り、岩壁削立、頗る峻嶮なり、倉澤川の溪涯より獨木橋を渡り、巖角を攀上る凡一町餘にして、洞口に至る、洞口北に向ひ、縱四間橫一間餘あり、洞に入る二間許にして、二洞に分る、右を新宮洞、左を本宮洞と云、新宮洞に入る六間許、三洞に分る、此前檐下陷、深遠行く可らず、其三洞に分るゝ所の右角に大日如來を安ず、其右左に小口あり、左を金剛界右を胎藏界と云、金剛界に入る六間許にして下陷す、無間ヶ谷と云、棧を架して人行を通ず、之を下る五間、又左右に岐す、右を母ノ胎内と云、左に入る五間にして窮る、其上四間許に小口あり、仰て青空を望む可し、之を新宮洞の極所とす、之を出て本宮洞に入る、該洞頗る闊なり、彌陀ノ原と云、其間凡三間半、左傍に小穴あり、仁王ノ窟と云、凡一間許にして窮す、之を出れば亦棧を架せり、棧を上る凡四間、劍ノ峯と云、左傍に岩角五所に突出す、五智如來と云、上面に數條の岩脈露れて圓形をなす、之を九條ノ袈裟と云、是より上る三間、岩角左右より迫る、右を五大力菩薩、左を荒澤不動ノ火焔と云、各形似を以て名く、五大力菩薩の上に一石あり、擊てば皷聲あり、皷石と云、是より二間にして又二洞に分る、右は四間餘にして左洞と通ず、之を胎内潛と云、左は行くこと八間、左右に數多の小穴を穿つ、月山籠山籠之目と云、又行く七間餘、又岩角左右より促る、此所名けて極樂ノ一ノ門と云、又行く四間、又二洞に分れ、

住心院　覺　演　花押

其道亦相連通す、左を行く六間、右傍に一穴あり、未來ノ釜と云、之を經て一間、又左右に岐す、左を湯殿山行貫(ヌケ)の穴と云、深さ究極すべからず、右を行く十二間、右傍に岩片を推積す、賽ノ河原と云、河原の盡くる所に穴ありシッケノ淨土と云、又行く十五間許にして、下陷せる一穽あり、深知るべからず、之を過て十間、上に岩乳數點相並びて懸り著く、三ツ星九曜等の名あり、又行く十七間、岩面に數錢を帖附す、其上岩鋒刃の如し、劍ノ山と云、之を過て十間、蹈むに音あり、蓋し此下空洞なるべし、其左傍の小穴中に二小石を置く、夷子大黑と云、又行く二十一間、水を湛ゆ、三途ノ川と云、之を歷て十間にして下陷す、八萬地獄と云、即ち洞の極所とす、岩滴點下して遠く浙瀝の聲を聞く、下底水あるを知るべし、炬を投ずるに暫く炬火の左右に衝觸するを見る、歸路賽ノ河原の前より左に入る八間、險坂あり、死出ノ山と云、鐵鎖に縋りて上る三間、前道と相連り、洞口に出づ、洞中蝙蝠頗る多し、其狀一石山と同じ。

一、舊制札

其一

掟

當山者役行者之草創、慈覺大師之再興、自爾來爲殺生制禁之旨、天海大僧正被聞召、向後彌堅可相守之旨被仰付候、若於違犯之輩者可爲曲事者也。

寬永十六年正月十七日

右無相違彌急度可相守之旨、日光御門主被仰出候。

元祿二年二月二十七日　　別當

其一

掟

自」是内江女人幷穢多三病之類一切不」可」入候事。
御岩屋ノ内ニテ先達ドモ道者ヨリ一錢ニテモ取申間敷候、尤御岩屋望次第ニ可」致」案内」候事。
右之條々堅相守可」申候、若違背ノ輩ニオヰテハ曲事タルヘキ者也。
享保六年丑四月

別當
兩社家

網代村

西方宇城山にあり、最高處百六十八丈四尺餘（バロメートルにて測量。）峯上を分て、西は高尾村東は本村に屬す。山脈本村と上川口村の境界嶺脈より北に岐して此所に來り、餘勢本村内及高尾村に支出して、各秋川に至る。茅萩矮木の雜叢なり。登路は薉蕘の小蹊に過ぎず。小溪一は北麓に起り、北流して本村と高尾の境を限り、秋川に歸す、之を境澤と云ふ。一は西南高尾村部内に起り、戌の方へ流れて天王澤に會す。今熊山（上川口。）を申の十度、鹿子澤西ノ峯（一名窮澤東峯。小津界。）を申の一度、猪畑峯（シヽバタ）（御嶽村、大久野界。）を戌の二十度、高峯（同上。）を戌の二十九度に望む。山上に方十間許の平地あり、頂を下ること數十歩、四方に空湟の跡を存す。又山の東北村の入口を古來門口と稱す、想ふに古時城壁或は遠望臺など築きし所なる可し。里人も其由緣を傳へず、頂上眺望頗佳景なり。

戸倉村

盆堀川（ボンボリ）　南隅彈左衞門澤ノ峯の西北宇盆堀谷（ナツ）の深谿數所より發し、各幾許ならずして相合し、山岳の間を西北へ流れて千ケ澤と會し、盤紆曲折して亥の方へ流れ廻りて東北に向ひ、字下宿道下と日向（ヒナタ）

峯（ミネ）の間より秋川に會す。長四千二百八十二間、幅下流廣處十二間中流六七間上流六尺許、深潭五六尺淺瀨二三寸を過ぎず。水勢急にして清し、桴筏通し難し、但出水を俟て材木を散流す可し。

千ヶ澤　一名市道川。　未の方字千ヶ瀨なる千ヶ澤峯の東北窮谷に濫觴し、東北へ流下して盆堀川に入る。長六百六十一間、幅廣處七八間狹處二間、水勢急にして清し。

傳名（デンナ）澤　水源二つあり、一は申の方字千ヶ瀨臼杵山の東谿に湧出し、東流する四百三四十間、一は南の方同字石津窪山の戌の方に濫觴し、丑の方へ流れて前溪と會す、長相若く。夫より寅の方へ流下する長五百四十七間にして、盆堀川に注ぐ。幅廣處十四五間狹處二三間、深平均一尺二三寸。水勢同上。

刈寄（カリヨセ）川　東南の方字刈寄の幽谷に起り、村の東部を丑の方へ流れて、字西ノ谷戸と久保河原の間より逆川に會す。長一千七百八十一間、幅廣處五六間狹處二三間、深平均一尺四五寸。水勢同上。

逆川　上川口村棚澤入ノ峯の東北谿に湧出し、東北流して今熊山の西本村との界に至る。其間長六百十二間、夫より折れて西北に向ひ、村の東部に入り、東北部を西北へ奔流して、字日向峯と久保河原の間より盆堀川に會す。其間長九百二十五間、幅上流五六尺中流三四間下流六七間、深平均六七寸。水勢同上。

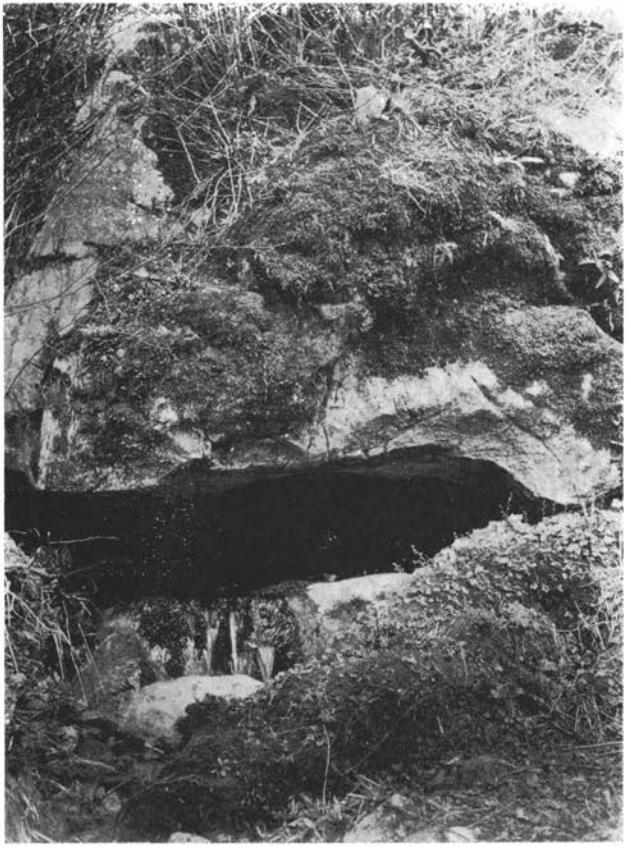
養澤村

養澤川　水源二あり、一は戌の方大嶽の南谿に發し、檜原村の窮谷を東流して本村字奥養澤に來り、村の西部山岳の間を辰の方に流れて、村の中央字上養澤にて御嶽川と會す。水源より合流まで長千五百六十間、幅廣處十間狹處四五間、之を大嶽川と云。御嶽川は西北間甲籠（カロウサン）山の南方芥場（アクバ）と呼ぶ地と、本村字奥養澤との境界幽谷の間に湧出し、盤曲して東に流れ、御嶽山と分界する千二百六十二

間にして、字奥養澤と大野の間より村内に入り、東南又は南に奔下して大嶽川と合す。水源より合流まで長二千九百三十八間、幅廣處十四五間狹處五六間、是に於て始て養澤川と稱し、村の中間山岳の間を東南に流れて、字海入道（カイニフダウ）と向養澤の間より村界に出て、是より乙津村の境界を出入して、字養澤の西邊より終に同村に入る。兩溪會合の處より長二千三百一間、幅廣處十七八間狹處八間、深潭一丈許の所あり、淺瀦五六寸を過ぎず。合流以下は材木散流の用に供す可し。水勢急にして清冽なり。

乙津村

光明神社　村社。社地東西六十間二尺南北四十七間八寸面積二千九百四坪、亥の方字高嶽千五百八十三番地光明山の頂にあり、天御中主尊、伊弉冊尊、伊弉諾尊を合祀す、大永六年丙戌六月の創建に係る。例祭三月三日、舊は熊野權現と稱せしを、明治二年今の社號に改む。境内松杉檜等の老樹蓊鬱深茂す、其中社前石燈の下左傍にある老杉の如きは、圍三丈五尺あり、内部空洞、内に入りて仰ぎ見るに、樹梢の折損せし所より上天を望むべし。登路は村の東部字下軍道より路を西に取り、漸々西北に向ひ、漸く上りて杉檜陰森、路の左右を夾み、石磴七八級を經て籠堂あり、夫より又石磴二十一級を上り、本社の前に至る、登口字下軍道より長二十町十五間あり。本社の地は凡六十坪許の平垣なり。社の後は巉岩側立して屏障の如く、皆堊石なり。社頭の四面は杉檜蒼古、四望を掩翳す。本社の東南少しく下りて、籠堂の東に凡四百坪許の平地あり（今は杉林となれり。）之を讃岐屋敷と云、想ふに神官などの居宅跡にや。或は云、此地は古時光明寺と云へる古刹の廢蹟にて、近時まで本社熊野權現の本地佛とて安置ありし彌陀藥師觀音の金銅佛は、此地より掘出せりと。登路鳥居の少し前に高岩、又四五町許上りて馬蹄石、鞍石と呼べる岩石あり、夫より又上に清泉あ



獅子口岩の正面

武田久吉氏撮影



側面より見たる獅子口岩

岡田喜一氏撮影

り、御手洗の井と云。本社及御嶽に賽詣するを三山ガケと稱す。

檜原村

三頭山（ミトウザン）一名三頭御前と云。　戌の方偏隅にあり、海面より高六百二十八丈三尺。（バロメートルにて測量、以下亦同じ。）嶺上より三分して、東南は本村字數馬に、北偏東は本郡河内村飛地字入小澤に、西南は甲州都留郡西原村に屬し、而して西北嶺上凡十間餘を距て、同郡小菅村に屬す。山脈西方甲斐の大菩薩嶺より來り、此に至り崛起して一の峻岳となり、餘勢岐して二となる。一は東南に蜿蜒して、村の西南境を限りて、甲武二國の分界をなし、一は東して漸く寅の方に縣亘して、村の西北及北境を限り、砥山、風張嶺、月夜見山、天神山、惣岳山、御前山、太郎平指山、天地山等の諸岳より、大嶽山に抵り、三田領諸村と脊梁を分ち、支脈亥の方檜尾ノ峯（一名入小澤峯。）をなし、河内、川野と甲州小菅の疆界より、多磨川及小菅川に至る。多磨川西南の諸岳中最高峯なり。山中官林にして、山毛欅其他雜樹深鬱す。登路一條、山の東南字數馬より西北に攀躋する一里二十町許にして、絕巓に達す可し、險甚し。溪水一は東南檜本村部内に發し、三頭瀑（一名民部ケ澤。）をなし、東南に流下して南秋川となる。一は北檜河内村飛地に湧出し、北又東北へ流れて小澤川となり、戸澤川と會して蛇澤川の名を得、多磨川に注ぐ。山東凡三町許、本村と河内村飛地界の嶺上に小祠あり、大山祇命を祀る、之を三頭御前と云、陰暦十月七日に當る日を以て祭典を行ふと云。稻村岩ノ峯（一名入奥山、日原留浦界。）を子の七度、曲（マガリ）ケ谷峯（一名山毛欅山又舟井戸山と云。大丹波、氷川、棚澤界。）を丑の十一度、阿夫利山大を巳の六度、富士山を未の八度、小雲取山（日原と秩父郡大滝及甲州都留郡丹波山村界。）を亥の十一度、日影名栗ノ峯（一名中ノ谷ノ峰。日原、留浦界。）を亥の二十六度に望むべし。

笹ケ峠（タワ）ノ峯　西南の方にあり、高四百七十三丈五尺。嶺上より兩分して、北及東は本村數馬と入里（シンボリ）の界に、南及西は甲州都留郡西原村に屬す。山脈西北の方三頭山より連り、東南の方丸山に延亘し、

山趾西南は西原村に跨り、東北は村内大鳴澤と森ノ澤の兩溪間に支出して、南秋川に抵る。山中茅萩の雜叢にして樹林なし。溪水一は北谿に發し、東北へ流下して南秋川に會す、之を大楢澤とす。一は東谿に涌出し、寅の方へ奔下して亦同川に歸す、之を森ノ澤とす。山の西北嶺上の低所に本村數馬人里より甲州西原に至る徑路あり、之を笹ヶ峠と云。

丸山　未の方にあり、高四百六十四丈一尺。巓より三分して、東及北は本村字人里に、西は甲州都留郡西原村、南は同州同郡桐原村に屬す。山脈西北の方笹ヶ峠ノ峯より連續し、辰の方笹平ノ尾根に聯接し、山趾西南は西原と桐原との疆をなし、東北及北は村内に支出して、各南秋川に至り、申の方一谿澗を隔てゝ、西原村の大ムレ山と相對す。山中樹林なく、惣て茅萩等の叢莽に屬す。溪水東北谿間に涌出し、丑の方へ流下して笛吹川となり、南秋川に歸す。西北笹ヶ峠ノ峯との中間嶺上の低所に一徑を通ず、本村より西原村への通路なり、之を大日峠一に笛吹峠と云。三頭山を戌の十九度、御前山を子の十六度、天地山を子の二十八度半、大嶽を丑の十二度、臼杵山を寅の二十九度、軍茶利山を辰の一度、熊倉山を辰の正中、小雲取及七ッ石山（日原丹波山界）を亥の三度半に望む。

笹平（ダヒラ）ノ尾根　南部にあり、高四百十九丈。嶺上より兩分して、北は本村字入里に、南は桐原村に屬す。山脈戌の方丸山より連り、東方栗坂峠より折れて東南に向ひ、熊倉山に延亘し、山趾南は桐原村に跨り、北は村内南秋川に抵る。山中茅萩の雜叢なり。山東に村内字入里（ンボリ）より桐原村に通ずる小徑あり、溪水丑の方谿間に發し、東北へ流下して坂東澤となり、南秋川に會す。

熊倉山　同方部にあり、高三百九十五丈八尺。嶺上より兩分して、東及北は本村字南郷に、西及南は甲州桐原村に屬す。山脈戌の方笹平ノ尾根より連り、東南三國山より本村と相州津久井郡佐野川村との疆界軍茶利山、茅丸、連行峯等に延亘し、武相の國界をなし、山趾東北は村内熊倉澤の上流二溪の相會する所に至り、西南は桐原村に支出す。東北本村に屬する所は官林にして、ソロ、山毛欅、

栗等の雜樹蓊欝し、下方谿間は欅、檜等の良材あり。西南棡原部内は概ね茅萩の雜叢中雜樹の疎生するを見るのみ。溪水一は山北に、一は山東三國山との谿間に起り、幾何ならずして相會し、熊倉澤となり、矢澤に合して南秋川に歸し、一は南谿棡原部内に湧出し、西南に流下す。巓の西北笹平ノ尾根との中間嶺脈の低所に、棡原村を經て甲州上野原へ至る徑路を通ず、之を栗坂峠と云。笹平ノ尾根を戌の一度半、丸山を酉の二十九度、笹ヶ峠ノ峯を戌の二度、三頭山を戌の十度、泉澤山を丑の三度半、大怒田山を丑の二十三度、茅丸を辰の四度、軍茶利山を辰の十四度半、三國山を辰の二十二度、經ヶ嶽（愛甲郡萩野田代煤ヶ谷界。）を巳の一度に望む。

三國山（ミクニ）（又三國峠或は三國嶽に作る。）南部にあり、高三百八十丈五尺。嶺上より三分して、北は本村字南郷に、東南は相州津久井郡佐野川村字生藤山（シヤウトウサン）に、西は甲州都留郡棡原村に屬す。山脈其他佐野川村の誌（○缺。）に詳にす。但、登路村内字南郷の内柏木野より、南へ上る一里十餘町にして嶺上に至る、險甚し、之を本村より相州に出る捷路とす。

軍茶利山（グンダリ）（佐野川にては生藤山と云。）同方部にあり、高三百八十四丈九尺。峯頭より兩分して、北は本村字南郷に、南は佐野川村字生藤山に屬す。山脈其他佐野川村の誌（○缺。）に詳にせり。

茅丸山　巳午の間にあり、高三百九十九丈九尺。峯上より兩分して、北は本村字南郷に、南は佐野川村字生藤山に屬す。山脈其他上に同じ。

連行峯　巳の方にあり、高三百九十四丈二尺。亦嶺上より分界して、北は本村字南郷と本宿（モトシユク）との界に、南は佐野川村字左連行（サレンギヤウ）に屬す。山脈其他上に同じ。

灰燒平（ハイヤキダヒラ）ノ峯（佐野川にては鷄冠尾根、上恩方にては篠窪峯と云ふ。）巳の方にあり、高三百三十七丈七尺。峯頭より三分して、西北は本村字本宿に、西南は佐野川村字白澤に、東は上恩方村字醍醐に屬す。山脈其他上に同じ。

イツポチ山（一名醍醐峠。戸倉にては市道山或は千ヶ澤峯とも云ふ。）東南の方にあり、高三百〇六丈八尺。山上より三分して、東南は

上恩方字醍醐に、東北は戸倉村字千ヶ澤に、西は本村字本宿に屬す。山脈は武相國界の嶺脈中、未の方本村と佐野川村上恩方の境界、灰燒平ノ峯より分岐せる一支脈にして、丑の方へ向ひ、本村と上恩方との界を延亘して此に來り、復岐して二となる。其東するものは戸倉と上恩方の境界を亘り、其北するものは本村と戸倉の疆をなして臼杵山に連續し、山趾西北は村内コザカシ澤に至り、東南は上恩方の醍醐川に臨めり。東北戸倉部内は、雜樹繁生し、其他は概ね茅萩の雜叢に屬す。溪水一は西北谿村内に湧出し、西北へ流下してコザカシ澤に會す、之を漆ヶ谷ノ澤とす。一は東北谿戸倉村部内に發し、東北へ流れて盆堀川に合す、之を千ヶ澤とす。一は東南谿上恩方部内に起り、東南へ流れて、醍醐川に歸す。登路山の東北戸倉村の内傳名（デンナ）澤の邊より盆堀川及千ヶ澤に沿うて、南又西南へ上る三十餘町にして嶺上に達し、此より本村と上恩方の境界嶺上を傳ひて、灰燒平に出て、佐野川を經て甲州上野原村に通ずべし、之を市道或イツボチと呼ぶ。三頭山を酉の二十七度、御前山を戌の二十三度、大嶽を亥の十二度、茅倉尾根を亥の二十五度半、泉澤山を子の正中、臼杵山を亥の十九度半、貧乏山（大久野御嶽界。）を子の三度、光明山を子の五度、景信山（上長房千木良界。）を辰の二十五度、南峠（城山或は毛無山とも云。境界同上。）を巳の一度、陣場峯（佐野川、澤井、上恩方界。）を午の十二度、灰燒平を午の二十七度、連行峯を未の二十七度、熊倉山を申の十七度、大怒田山を酉の十度、丸山を酉の十二度半に望む。

臼杵山　辰の方にあり、高三百五十四丈二尺。山上より三分して、西は本村字本宿に、東は戸倉村字千ヶ澤、北の一部は乙津村字奥ノ中山に屬す。山脈其他乙津村の誌（○缺。）に詳にせり。

砥山（河内村にては戸澤ノ峯と云。）　戌の方にあり、高五百四十五丈一尺。嶺上より兩分して、東南は本村字數馬に、西北は河内村飛地字戸澤に屬す。山脈其他同村戸澤ノ峯の條（○一一六頁。）に詳にす。

月夜見山（原村にては京道山、川野にては菌岩山と云。）　同方部にあり、高四百〇八丈六尺。山上より三分して、東南は本村字倉掛と藤原の界に、西は川野村字菌岩に、北は原村字手澤に屬す。山脈其他原村京道山の條（○一一三頁。）に

詳にす。

惣岳山（ソウガクサン）　境及原村にては水久保山と云。　亥の方にあり、高四百七十九丈六尺。亦山上より分界して、南は本村字藤原に、西北は原村字水窪に、東北は境村字荒指（アラザス）に屬す。山脈其他原村水久保山の條〇二頁。に詳にす。

御前山　同方部にあり、高四百九十八丈二尺。亦嶺上より分界し、南は本村字藤原と神戸の界に、北は境村字味噌桶谷より荒指に跨る。山中其他境村の誌〇二頁。に詳にす。

太郎平指山　境村にては鞘口山、氷川村にては大平ノ峯或は深ダワノ峯と云。　亥子の間にあり、高四百三十丈三尺。峯上より三分して、東南は本村字神戸に、西北は境村字本谷入に、東北は氷川村字大澤入に屬す。山脈其他境村鞘口山の條〇二頁。に詳にす。

天地山　北の方にあり、高四百八丈五尺。亦山上より三分して、南は本村字神戸、東北は海澤村字天地澤、西北は氷川村字大澤入に屬す。山脈其他海澤村の誌〇九頁。に詳にす。

大嶽　丑の方にあり、高五百四十四丈九尺。山上より兩分して、南は本村字大嶽に、北は海澤村字船ケ久保と若宮澤の界に跨り、而して東北凡五町許を距てし山肩を本村と養澤海澤の境界とす。全山巉岩嵬峨、檜杉椹梅其他雜樹深茂、樹石皆蒼古、老蘚破帶して、奇古言ふ可らず。頂上に大嶽神社の小祠あり、之を奥宮と云。其東南凡四町餘下りし所に本殿あり、其間巉巖峭然攢立して、危險甚し。登路村内字三都郷より、崎嶇羊腸北へ攀躋する一里十餘町にして巔に達す可し。山脈三頭山の分脈を承けて、西の方砥山、月夜見山、惣岳山、御前山、太郎平指山、天地山等の諸岳を經て此に來り、乾然聳拔して特に高峯をなし、又岐して二となる。一は子丑の方鍋割山より寅の方に向ひて、甲籠山、御嶽に連り、夫より東して貧乏山、高峯、覗岩ノ峯等の嶺脈をなし、終に萬字峠より多摩川に抵る、之を本脈とす。一は未の方村内を廻りて、養澤村との疆界大怒田に出で、東南に亘りて黍岩、茅倉尾根、泉澤山等より乙津の光明山に連る。溪水一は南方本村部内の幽谷に涌出し、出て養

澤村に入り、御嶽川と會して養澤川となる、之を大嶽川とす。一は北緯海澤部内に發し、西北へ奔下して多磨川に歸す。之を小川とす、三頭山を申の二十度、御前山を酉の十二度、七ツ石山（日原丹波山界。）を戌の一度、小雲取山（日原、丹波山、大滝界。）を戌の六度、大雲取山（日原、大滝界。）を戌の十三度、稲村岩ノ峯（一名入奥山。日原留浦界。）を戌の九度半、狩鞍山（彌入澤ノ峯、或は小松ガタワノ峯とも云。日原、境村、氷川境。）を戌の十八度、酉谷ノ峯（日原、日野、大滝界。）を戌の二十九度、蕎麥粒山（日原、氷川、海山界。）を亥の十七度、高指山（一名本荷嶽山。氷川、柳澤界。）を亥の十五度半、甲龍山（カロウザン御嶽、海澤界。）を丑の一度、不二峯（御嶽）を丑の十二度、麻生山（大久野。）を寅の二十九度、ヅマド山（指ノ尾根或は辨當尾根とも云。小丹波、川井界。）を子の十六度、高水山（上成木上分、二俣尾界。）を丑の十四度、樫ノ木尾（一名澁久保山。境、留浦界。）を戌の二度に望むべし。

高黒山（サン）　寅の方宇三都郷にあり、高凡三百二十餘丈（バロメートルを用ゐず。）山脈は亥の方大嶽の分脈本村と養澤の疆界大怒田に出で、夫より巳の方へ分岐せる一支脈にして、東は千足川に臨み、山趾南は北秋川に至る。全山巉岩峭絶、松檜各所に疎生し、東谿千足川に傳ノ瀑、天狗瀑をなし、景致頗る奇拔幽清なり。

茅倉尾根（養澤にては葛籠石山と云ふ。）　東部にあり、高三百二十七丈九尺。山上より兩分し、西南は本村字三都郷と下本郷（シモモトガウ）の界に、東北は養澤村字三ツ合と鏡澤との界に跨る。山脈其他同村葛籠石山の條○缺。に詳にす。

泉澤山（イヅサハ）（養澤及乙津にてはマヅカリ山と云。）　同方部字下本郷にあり。嶺上より三分して、東南は乙津村字奥（オキ）大澤に、北は養澤村字鏡澤に、西南は本村に屬す。而して本村分は峯頭より稍下れり。山脈其他乙津村マヅカリ山の條○缺。に詳にせり。

平茅尾根（タヒラガヤ）　中部より稍東南字南郷と小澤の界に跨る、高三百十八丈六尺（バロメートルにて測量。）山脈は戌の方砥山

と月夜見山との中間嶺脈風張峠より分岐する一支脈にして、巳の方より漸く辰の方へ廻りて此に連り、東方南北兩秋川の相會する所に抵る。該山より風張峠に至る三里餘の間に於て、著しき隆窪なく、嶺上に一條の通路あり、之を淺間尾根通と云。留浦、川野、河内、原邊より風張峠に係り、五日市へ出る捷徑とす。嶺上の道程凡三里五町三十八間、其南北は即ち南北兩秋川の深渓にして、該山脈を劃斷せり。渓水一は北谿に湧出し、東北又東へ流下して北秋川に會す、之を弗澤とす。一は西南谿に發し、南流して南秋川に會す、之を上川乗澤とす。一は南谿に起り、南流して亦同川に注ぐ、之を出野澤とす。

秋川又秋留川と云。　水源二あり。一は西隅三頭山の東南谿に湧出し、淺間尾根の南を繞廻して東に流れ、辰の方字本宿より北に轉じて橘橋に至り、北秋川に合す。其間長一萬一千九百七十五間五尺、幅廣處十二三間、狹處六七間、之を南秋川と云。一は戌の方字藤原と倉掛の境界月夜見山の東南谿に濫觴し、淺間嶺の北谿を盤紆して東に流れ、東部橘橋の北に出で、南秋川に會す、其間長七千二百間三尺、幅廣處十二三間、狹處五六間、之を北秋川とす。是に於て始て一となり、卯辰の間へ奔下して乙津村に入る。合流より同村界まで一千二十三間、幅廣處十七八間、狹處十二三間、深處六尺、淺瀬一尺、水勢駿にして清し。桴筏通し難しと雖、材木散流の用に供す可し。

中山川　辰の方臼杵山の北谿、乙津村との界に發し、北流して同村と境界を限り、字下東郷の東邊より秋川に會す。長七百八十一間、幅廣處五間狹處一間、深處二尺淺處四五寸、其深潭の如きは八尺餘の所あり。水急にして清し。

泉澤川　寅卯の間字下本郷茅倉尾根の南谿に湧出し、南へ流下して秋川に注ぐ。長八百四十九間、幅廣處五間狹處一間、深處一尺四五寸淺處五六寸。水勢同上。

弗澤（ホッサ）又欲澤に作る。　上流を瀬戸澤と云。中部稍辰の方平茅尾根の北谿字小澤に發し、東北又東へ廻流して、

字本宿より北秋川に會す。長一千六百十一間、幅廣處六間狹處一間、深處三尺淺處六七寸。水勢同上。

茅倉澤（カヤグラ）　寅の方茅倉尾根の西谿字三都鄕（ミツガウ）に起り、西南に流れて北秋川に合す。長七百五十五間、幅廣處四間狹處一間、深處一尺淺處三四寸。水勢同上。

千足川（センゾク）　東北の方高黑山と貉岩との谿間字三都鄕に起り南流して北秋川に入る、其下流を柳澤と云。長一千六百五十間、幅廣處七間狹處一間三四尺、深處二尺淺處五六寸。水勢同上。

八割川　下流を暮沼澤（クレスマ）と云。東北の方大怒田の西南谿字三都鄕に起り、南流して北秋川に注ぐ。長八百七十八間、幅廣處六間狹處一間三尺、深處二尺淺處四五寸。水勢同上。

大嶽川　丑の方字大嶽なる大嶽山の南谿に發し、東流すること八百十六間にして養澤村に入り、御嶽川と會す、即養澤川の源流なり。幅廣處六間狹處一間、深處二尺淺處四五寸。水勢同上。

神戸澤（カノト）　上流を赤井澤と云。北方字神戸なる天地山の西南谿と太郎平指山の東谿とに濫觴し、幾許ならず相合し、東南へ流下して神戸と三都鄕との境界より北秋川に注ぐ。長二千七百六十七間、幅廣處十間上流狹處一二間、深處三尺淺處一尺、水勢急にして清し。材木散流の用に供す可し。

水之戸澤　亥子の間字神戸御前山の東南谿に起り、東南へ流るゝ一千四百八十六間にして、赤井澤と合し神戸澤となる。幅廣處八間狹處一間、深處二尺淺處四五寸。水勢同上。但流材し難し。

湯久保川　同方字小澤の內湯久保と樋里の間、御前尾根の南谿に起り、東南へ流れ、村の中部にて北秋川に會す。長一千百八十一間、幅廣處五間狹處一間、深處一尺四五寸淺處四五寸。水勢急ならず。

上澤俣川　亥の方字藤原惣岳山の南窮谷に涌出し、南奔して北秋川に注ぐ。長一千五百十五間、幅廣處十間狹處一間、深處一尺四五寸淺處五六寸。水勢同上。

倉掛澤（又白岩澤と云。）　戌の方字倉掛風張嶺の東谿に發し、東南又東へ廻流して、字藤原より北秋川に合す。



笠山の肩より白石峠　川木澤ノ頭　丸山を望む



劒ノ峯より川木澤ノ頭　大野峠　丸山を望む

松本善二氏撮影

長一千六百二間、幅廣處十一間狹處一間、深以下同上。

蜂螯澤（ハチサス）　申酉の間字數馬の山谿に發し、東流して南秋川に會す。長一千三百八十三間三尺、幅廣處七八間狹處一間、深處三尺淺處四五寸。急流にして清し。

南谷澤　申の方同字の山間窮谷に發し、東北に流れて南秋川に注ぐ。長一千七百五十三間、幅廣處六間狹處一間、深處二尺淺處四五寸。水勢同上。

大栖澤（オホナル）　西南の方同字笹ヶ峠ノ峯の北谿に起り、東北に流下して南秋川に注ぐ。長八百四十八間、幅廣處四間狹處五六尺、深處一尺四五寸淺處四五寸。水勢同上。（又大鳴澤に作る）。

森ノ澤　同方字入里（ンボリ）笹ヶ峠ノ峯の東谿に涌出し、東偏北に流れて南秋川に入る。長一千三十一間、幅六七間狹處一間、深處二尺淺處以下同上。

笛吹澤（ウソフキ）　同方同字丸山の東北谿に發し、丑の方に流下して南秋川に落つ。長七百四十八間、幅廣處六間狹處一間、深以下同上。

古寒場澤（コカンバ）　未の方同字の山谿に發し、丑の方へ流下して南秋川に合す。長九百四十三間、幅廣處七八間狹處一間、深以下同上。

大澤川　中部の稍南方字入里（ンボリ）の內、上平淺間嶺の南谿に發し、巳の方へ流下して南秋川に會す。長七百九十八間、幅廣處七間狹處一間、深處一尺七八寸淺處五六寸。水勢同上。

坂東澤　南部笹平尾根の北谿字南郷に起り、東北に流れて南秋川に入る。長七百三十五間、幅廣處四五間狹處五六尺、深處一尺四五寸淺處五六寸。水勢同上。

坂本澤　南の方字栗坂嶺の北谿に涌出し、北流して南秋川に注ぐ。長五百五十一間、幅廣處二三間狹處四五尺、深平均五六寸。水勢同上。

上川乘澤　中部より稍巳の方平茅尾根の西南谿字南郷に發し、南流して南秋川に注ぐ。長一千八十四

間、幅廣處七間狹處五六尺、深處一尺五六寸淺處三四寸。水清くして緩急相半す。

出野澤（イデノ）　中部より稍東南平茅尾根の南麓字南郷に湧出し、南流して南秋川に合す。長七百五十六間、幅廣處六間狹處五六尺、深處一尺淺處二三寸。水勢同上。

矢澤　巳の方同字連行峯北麓に濫觴し、亥の方へ流下して、軍荼利澤及熊倉澤を併せ、南秋川に會す。長二千百八十五間、幅廣處八間狹處五六尺、深處一尺五六寸淺處四五寸。水勢同上。

熊倉澤　巳午の間同字熊倉山の北麓及東方三國山との鞍間とに發し、幾許ならずして合して一となり、北流して矢流に合す。長一千五十三間、幅廣處六間狹處五六尺。水勢同上。

コサカシ澤　上流を本澤と云。東南の方字本宿連行峯の寅の方灰燒平との鞍間に湧出し、宛轉北流して南秋川に注ぐ。長三千二百七十九間、幅廣處九間狹處一間、深處二尺淺處四五寸。水勢急にして清し。

中山瀑　東方字下本郷中山川の中流にあり、二級に瀉落す。高各六尺餘、幅四尺。流下五六町許にして秋川に入る。

鮎跳瀑（アユオドリ）　又中山の大瀑と云。東方字下本郷（シモモト）秋川の上流にあり、高七尺餘、幅一丈二尺、其下碧潭盤渦を湛らす。毎年四月中旬より三伏に至るの間、香魚千群、此所に集輳して、瀑水を跳踰んとする者數次、漁者此時を期して提網を以て之を捕ふ、頗奇觀也。

弗澤ノ瀑（ホッツハ）　弗澤又欲澤に作る。又雨乞瀑と呼ぶ。東方字本宿城山の西北麓弗澤川の中流にあり、三級に飛瀉す。上層及中層は高各二丈許、幅三尺餘、下層は高五丈餘、幅同上。飛沫霧を噴て山谷空濛、近く就て之を觀ること難し、殊に上中二層の如きは、巖角頗峭絶にして、樵夫と雖も之に近づく克はずと云。乃ち里人の語に就て其槩略を記す。

天狗瀑　寅の方字三都郷千足川の上流にあり、舊中里組の千足より漸に上る事十町許にして、巍然たる絶壁高三十丈許、其嵓根より懸泉東に向ひ、瀉落すること十丈餘、幅三尺許。巖木蒼古として幽

趣掬す可し。流下十四町餘にして北秋川に合す。

綾之瀑　同方同字前瀑の上流凡三町許にあり、高五丈餘幅六尺餘。水線縷々條々として練絲を繰出すが如し、是瀑名の由て起る所なり。水源は舊中里組猪子倉の東巖根に湧出し、該瀑に至るまで水路十町許なり。

八割（ヤワリ）ノ瀑　東北の方字三都郷舊白倉組。八割川の上流にあり、高四丈幅一尺餘。南に流下する十五六町にして北秋川に注ぐ。

不動瀑　寅の方同字北秋川の南岸阿照（アテラ）澤の下流にあり、高二丈餘幅三尺許、直に北秋川に注入す。

酉待戸ノ瀑　丑の方字神戸舊字中岩山。赤井澤の支流崩澤の中流にあり、高十丈許幅二尺餘。流下十二三町にして赤井澤に入る。

鈴ヶ尾瀑　一に七瀑と稱す。東北間字大嶽なる大嶽澤の支流鈴ヶ尾澤の中流にあり、七層に飛瀉す。最下層は高五丈餘幅二尺。其次第二級。は高一丈許、其次第三級。は一丈二尺。其次第四級。は五丈餘。其次第五級。は六丈餘、其次第六級。は二丈餘。最上層は九丈餘。幅各二尺許。下流東北に奔下する九町許にして大嶽澤と會す。

大瀑　同方大嶽澤の養澤村に入る所にあり、高十三丈許幅三尺。瀑口より凡九尺許にして嵓石に激し、飛簾の如し。年旱すれば遠近の人瀑水に浴して禊事をなす。流下三町許にして養澤村に入る。

小岩瀑　村の中部字樋里舊小岩組。淺間嶺の北谿北秋川の南岸なる瀧ノ澤の中流にあり、二條に飛瀉す。高各三丈許幅二尺許。下流六七町にして北に奔り、北秋川に注ぐ。

熊倉ノ瀑　南の方字南郷熊倉澤の中流にあり、高十丈餘幅二尺四五寸。下流九町許にして矢澤に合す。

三頭ノ瀑　西隅字數馬南秋川の上流三頭山の深谿にあり、高二十一丈許幅四尺餘。瀑勢頗壯大にして

壑谷爲に撼く。此邊人跡甚稀なり。

附記

大嶽神社　鄕社。社地東西三十七間南北六十七間一尺八寸、面積二千四百九十坪。東北間字大嶽八千百八十九番地にあり、大國主命、少彦名命、日本武尊、廣國押武金日尊及東照宮を祀る。神官の家屢祝融に遭ひて、什器文書蓋燼に屬し、往古を徵するに由なしと雖、社說里傳に存するものに據れば、上古は大國主少彦名の二柱のみ鎭座なりしを、日本武尊東征の時土民其功德を景慕し、山上に社を建て鎭護の社とす。其後天平十九年丁亥神官吉野氏の遠祖高安なる者、大和の吉野山より廣國押武金日尊を奉請して舊社に合祀し、因て大嶽金峰山藏王大權現と稱し、大國主、少彦名、日本武の三柱を神秘三座と稱せり。其後關東擾亂して、社頭も隨て頹廢に及びしを、永祿中北條氏康當村の城主平山氏をして、社殿を造營せしめ、稍舊觀に復するを得たり。德川氏東遷に及びて、社領十五石の朱璽を附與す。慶安中東照宮の靈を其相殿に祀ると云。或は古時御嶽山の奥宮とも云へり。社地大嶽山の高峻を占て、巉岩嵬峩、杉檜蒼古、神仙の會する所とも謂つ可き勝景あり。例祭正月十五日田植祭、二月八日祈年祭、四月八日大祭、六月晦日大祓、九月廿九日大神事、十月十日新嘗祭、十二月晦日大祓の七回とす。

奥津宮　本社より酉戌の間四町餘を距てゝ大嶽山の絕巓にあり。此所にも大國主少彦名日本武の三柱を祀れり。本社より巖角を攀ぢ、藤蘿を縋る言ふ可らざるの危險を蹈て、始て其地に達するを得可し。社地は僅に六坪許の平坦なり。

檜原城墟（一に平山城とも稱せしと云。）　東方字本宿（舊上組字城山。）五千五百七十五番及五千五百七十六番の山林にて、本村吉祥寺の所有地なり。該城は武藏七黨の一なる日奉姓平山氏數世の居城地にして、建仁中は平山左京大輔、同藏人、建武の頃は平山守吉、應永の頃は平山三河入道、永祿の頃は平山左衞門尉綱

景、天正の頃は平山伊賀守氏重等相繼で此に居住す。綱景氏重は北條氏に屬し、天正十八年庚寅豐公東征、北條氏滅亡の時、氏重其子新左衞門尉氏久と共に自殺す、時に七月十二日と云。城地淺間嶺の東端を占めて、西北は弗澤川と北秋川を縈らし、東南に南秋川を帶び、城地の東にて兩秋川相會し、東に奔て自ら深湟をなし、西は淺間峠の高嶺に接す、實に險要の金湯と稱す可し。吉祥寺の後より登路あり、是古の大手口にして、其西方西門口と呼ぶ地即ち淺間嶺道の上り口より岐して南へ登ること六町餘、中腹に堀切の趾あり。絕頂に方五十間許なる平坦あり、其西七八間下り、五間に三間許切平げたる所あり。又一段下りて同平地あり。頂の北少し下りて古井あり、今は水涸れて僅に其形跡を存す。城地更に石垣の跡もなく、全く荒蕪して樹林となれり。此山中より時として古器皿など堀出すことありと云。又東に續きたる峯を城ヶ峯と稱す、五千五百八十五番地にて、是古の牙城の趾なりと云へり。又東南に方りて殿ノ向など呼べる地あり。

小岩ノ關趾（コイハ）　村の中央字樋里（舊小岩組。）淺間嶺の山上にて、檜原城墟より西の山續きにあり、天正の末頃まで此地に關所ありしと云。然れば平山氏檜原在城の時の設なる可し。其遺趾の邊に長一尺許の石地藏あり、屢野火の爲に燒損したれども、刻字隱然として、天正四平山伊賀守氏重の數字を存せり。

口止番所趾（クチドメ）　東方字本宿（舊下組。）にあり、即今の掲示場是なり。該所は元和九年癸亥設置する所にして、代官福村長右衞門其事を董し、舊里正吉野郡次の祖先吉野九郎右衞門以來累代里正を以て關吏を兼、其事を主管せり。其地南秋川の下流橘橋の東岸にありて、本村南北兩部の咽喉を占め、甲州郡內及相州津久井等へ通ずる間道の要鑰たり。實に一夫之を守れば萬夫も通ずる能はざるの要所と謂可し、明治二年己巳官命によりて之を廢毀す。

神戸岩（カノト）又戸岩とも云。　丑の方字神戸なる神戸川の中流東西兩岸にあり。峻山深谿の間、兩岸の山脚より巨巖

屹然並立して、其狀門戸の如く、東巖最高くして、水底より岩頭に至るまで高三十丈幅九尺餘、西巖は稍低く、高廿五丈許幅三十餘丈、兩巖の間空闊九丈許、赤井澤の溪泉之に注ぎ、奔湍白雪を噴く、奇景言ふ可らず。西嵓の北側水面より高七尺許の所に、長八間幅五尺許の平坦あり、土人之を弘法大師の護摩壇と稱す。其上四尺許に岩洞あり、小禿祠を安し、龍神を祀る。護摩壇の前を雨乞淵と呼べり。此邊川苔、岩茸を産す。

雜錄

○多摩川水源の山脈に就きて

田島勝太郎

多摩川は源を甲斐國に發し、東に流るゝこと三十五里にして羽田沖に注いでゐる、而して、その水は古來東京市民の飲料水となつてゐるのは周知の事實である。然し、その源頭たる甲斐の北都留、東山梨の兩郡は、山岳重疊交通不便のために、最も關係深い東京市民すら、多くはその實際を詳かにしない。近時山岳熱勃興と共に、中央沿線の諸山は相當に登攀者を出し、殊に三峠山の如きは數萬を算ふるといふ、多摩水源の諸山中でも、大菩薩の如きは相當の登山者を見る次第であるが、他の諸山に至つては極めて寥々たるものである。これ一は交通の不便なるためにも由るであらうが、他の一原因は事情不明なるの致す所も頗る多いと思ふ。本題の諸山につき玆に予の淺薄なる研究を述ぶる所以は、短時日の閑暇を利用して山岳を跋渉し趣味と健康とに資せんとする一部の傾向に滿腔の敬意を表するが故に、多少その參考に資するを得ば望外の仕合せと思ふからである。唯然し、極めて短かい經驗と僅かな參考記錄とによつて本篇をなしたのであるから、地圖を文章に直した案内記じみたものになつて、杜撰の責は固より甘んじて受くる所である。

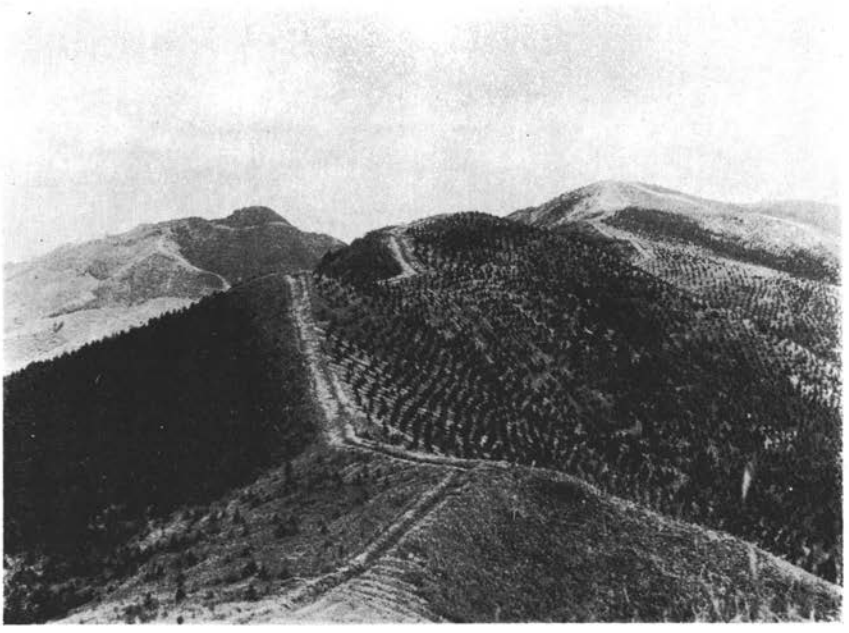
本題にいふ多摩水源の山脈とは、大菩薩の南方天狗棚附近に初まり、柳澤峠より雁峠に至り、唐松尾、將監、飛龍を經て雲取に及ぶ諸山とその支脈とを總稱する、即ち、甲斐國内を流域とする諸川が合して丹波山川となり、次いで、武藏に入つて間もなく小菅川を合せる、それまでの範圍について述べてみたいと思ふのである。而して、本篇に最も關係ある本誌の記事は、武田博士の『多摩川相摸川の分水山脈』(十五年第一號)であつて、不幸上篇だけで止まつてゐるが、小菅川關係の分は殆んどこれに盡きてゐる、從つてその部分は補

足を試むるに止まる。その他の部分については木暮氏の記述が最も詳細を極めてゐるので、本篇はこれに蛇足を加ふるに過ぎない。記述の便宜上、鹽山より丹波村に通ずる山梨縣道が、本山脈を通過する柳澤峠を分界とし、南北に分つことにしたい。尙本篇は、殆んど二十五年來山梨縣落合に在勤し、甲斐に屬する東京市有林全部を擔當せる東京市水道局の中川金治氏に負ふ所最も多い、茲に記して謝意を表する。

▽柳澤峠以南

柳澤峠は、山梨縣道青梅街道の、大菩薩連嶺を横斷する地點である。同街道は明治八年より同十二年の間に開通したもので、その以前は親不知即ち舊大菩薩峠、葡萄澤峠又は天庭峠等を通行したものである。柳澤峠より南多摩川水源域の山脈の基幹たる大菩薩連嶺は、東嶺より東南に大菩薩嶺を經て小金澤嶺に至るものであるが、これより出る支脈の第一は、東嶺より北標高一五八七米を經、ハンノ木峠を過ぎ横手山（一七一〇米）を起して鷄冠山に至り、更に柳澤、一ノ瀨兩川の合流點に終る分脈で、柳澤川と泉水谷とを分ち、第二大菩薩嶺は始んど北東にその長い尾根を出し、以て小室川と泉水谷とを分ち、第三は、大菩薩峠（一九八七米）の北方から出た丹波山、小菅兩村界に略ぼ一致して殆んど東に走り、終に國界を越えて武藏に入つた山脈で、小菅川と丹波山川とを分つものである、第四は、石丸峠（宛字、武田博士の小菅大菩薩にして鹽山と小菅村とを連絡する道路）附近より奈良倉山（一三四七米、武田博士の御坊山）に至る山脈で、小菅川と葛野川とを分つてゐる。以上の四分脈が柳澤峠以南に連亘するものである。

先づ基幹たる大菩薩連嶺について述べる。東嶺（一六六〇米）は三本木と稱するもので、東嶺などといふ洒落れた名はない、恐らく陸地測量部の命名であらう。六本木峠は東嶺の東北直下にあつて、柳澤峠から西南方に通ずる東京市林道にある二三道路の分岐點である、即ち、東松尾根（標高一五八七米測點）鷄冠山及び舊黒川金山に通ずるもの、北落合に通ずるもの（御屋敷を經て）等が分岐し



劍ノ峯より堂平山及笠山を望む



大野峠ノ頭より高篠峠　川木澤ノ頭及堂平山を望む

松本善二氏撮影

てゐる。この峠の東北方の小丘は、富士の遠望極めて佳く、多摩流域も一望の下にある地點だ。

三本木を北から東に廻ると、其の南のタル（一六四〇米測點）を葡萄澤峠といふので、六本木峠から五丁である、甲府から黑川金山に通ずる武田信玄の開いた舊道で、現今は殆んど廢道に歸してゐる。峠の南方五丁にして石英閃綠岩の大集團地があつて、廣さ十數町歩に及んでゐる、地元の住民はこれを『大ゴッ』と稱してゐる、ゴッとは岩石の集團地の謂である。昔は大沼で、大蛇の棲んだ所だと傳へられてゐる、立入れば方向を失ひ出道を誤る虞があるので、かくの如き傳說を生んだものと思はれる、今は林道開通して此處を通過する必要はない。

天庭峠は、更にその南一六六〇米測點と一六八〇米との間の凹所（實測一六二〇米）にある。舊時御料局の泉水谷經營時代に甲州から通行した駄馬道であるが、今は殆んど通行するものなく荒廢に歸せんとしてゐる。寺尾峠は、一六九六米三角點の北一六八〇米測點附近を通過する峠で、泉水谷から鹽山方面に通ずる駄馬道である。次に丸川峠に至る（實測一六七二米、圖上點線の道路あり）同じく鹽山、泉水谷間の重要通路である。御料局時代から東京府時代にかけ、泉水谷に事業を經營した際この地點を經て鹽山方面に架空索道を通ぜんと試みたことがある。此處から雲峰寺へは一里に過ぎぬ。丸川は名の如く殆んど川のやうな窪地の隘路である。丸川峠の南の比較的曲線の緩やかな突起はクニウチ御殿といふ、武田勝頼が天目山に敗戰した後此處に籠つて、米飯を焚き、瀧の如く下方に流し、示威運動をしたなどとの傳說がある。此處から北泉水谷の方向に派出した支脈の一五五三米測點附近はエンマ御殿と稱する。兩御殿共に土器を發見したことがある。尙後に戻るが、柳澤峠の北方落合近くに、地圖に御屋敷とある場所にも矢の根を見出すこと屢々である。何れも考古學的研究に多少の資料を提供し得るかも知れぬ。

大菩薩嶺（三等三角點二〇五六・九米）は丹波山では舊來大黑茂のセリ又は大黑茂山といひ、大菩

薩嶺などといつたものはない、これも恐らく陸地測量部員が氣を利かして命名したものであらう。以前は現三角點の南東の岩石地（地圖の嶺の字の下方で多少岩の記載あり）に妙見大菩薩を祀つたもので、從つて同岩を妙見岩と稱するが（甲州にてはカミナリ岩と稱す、夕立に緣あればならん）舊御料局で實測をした際は、妙見岩に三角點を設けこれを大菩薩三角點と稱した、陸地測量部に至つて三角點を現在の地點に移しその名稱を襲用したのである、從つてこれを山名としたのであらう。大菩薩嶺から丸川へ分水界の尾根を行くのであれば切開けが一のタルに下るよりも不充分で、且尾根も丸く明かでないことを注意しなくてはならぬ、結局、北方に向へる一のタルへの尾根を下り、一のタルから林道によつて丸川に出るが早く又誤りがない。

大菩薩嶺から石丸峠附近（佐野峠への山脈の分るゝ點）までは色々議論の餘地が多い、妙見岩から東に向つて分水山脈を進むと、間もなく小室川谷と小菅川谷とを分つ丹波山、小菅兩村の境界線の山脈の分岐點に會する、この地點は實測一九八〇米ある（地圖の高距線は多少異る）山名はまだ聞かない、即ち、小室川のセリである。親不知はこの突起から二十米低い山腹である、昔の大菩薩峠であつて、風强く、現に一帶恰かも積の有樣で、土も草も木もない場所である、冬期寒風の强い時には毎年凍死者が多かつたので、明治八年より九年の間に新道落成現在の地點に移轉したといふことである。この邊小室川側は針葉樹の密林で岩山であるから小室天狗棚の稱がある、棚は普通の棚と同義であつて、地方では岩石の階段地を意味する、即ち、天狗の住居するやうな嶮阻の場所の義である。若し、附近の地名を山の名に借用するものならば、前に擧げた分岐點の一九八〇米の山は、小室天狗棚山とでもいふべきであるがそれにも及ぶまい。

親不知と大菩薩峠との間の小突起は大體野山で、東北面は植林地、西南面は原野である。小菅方面ではこの區間を熊澤と呼ぶから、地方では熊澤山と呼んでゐる者もある。然し、是非とも山名

を有たねばならぬ程に必要な地點でもなし、又顯著なる遠見を有つ譯合でもないからその儘に置いても差支はない。甲州方面で熊澤と呼ぶ地域は、大菩薩附近から雨澤三角點（二〇一四米、小金澤山の名を與へてゐる人もある）邊りまでも及ぶので、從つて案内者やなどで山名を開かれると、この間の山に對しては勝手に熊澤を振廻はしはせぬかと恐れる、案内者が知らざるを知らずとして吳れゝば誠に有り難いが、可い加減な、或は多少は據り所があつても確實ではない答をして吳れる場合が尠からずあるからだ。

大菩薩峠の南に一九八〇米の測點を有する一突起がある。武田博士はこれを川入山と記載されてゐる。小菅では小菅川の上流を全部川入と稱してゐる、これは多摩上流によくある稱呼で、何川入と稱するのは何處にもある、只小菅には一本の小菅川を有するのみであるから、單に川入と稱すれば小菅川の奥を稱することになるので、從つて川入といふ名稱は廣い範圍を稱するもので、一九八〇米の山のみが川入山の稱呼を專有するものでない。現に一四二九米の三角點で、武田博士が權の尾山と記載されてゐる山も、川入三角點の名稱を有し、小菅上流の天狗棚も小室天狗棚と區別するために川入天狗棚と稱してゐる位である。鹽山方面では前述の廣漠たる熊澤の稱呼に因んでか、この山を熊澤山と唱ふるものもある。然し、これは前述した通り、廣い場所の名で、この山の名に命ずるは適當でない氣がする（本稿々了後武田博士が川入山を熊澤山と改められたとの話を傳承した）この山は前の大菩薩峠の北の小突起と異つて、高さも相當に高く、頂上まで黑々と樹林をなしてゐて、遠望は可なりに顯著である。石丸峠（實測一九三六米）はこの山の南を通過して、地圖の一九四〇米の圈を有する山の北方を水平に搦んで東に進んでゐる、而して小金澤と小菅川との分水山脈を分派する地點は、石丸峠の南に、僅かに同峠より八米高い實測一九四四米の立木地と禿山との界であつて、その南に尙高き事十米の扁平なる頂上は石丸峠の頂上をなすものである。

一九八〇米の山は遠望顯著でもあり、名稱を附

するを便とするならば、寧ろ天狗棚山としたならばどうであらうかと思ふ、これはこの山の東北斜面が、例の川入天狗棚で有名な場所である、そのツマリであるのみならず、小菅方面で、現にこの山を天狗棚と稱してゐるからである。(甲州方面から見ると、この山は遠望極めて顯著で、石丸峠の山よりも遙かに重要である、從つて、甲州地方でこの地方の一般字をこの山名に充當することは自然であるかも知れぬ、多摩川方面よりも同樣顯著の山で、名が欲しいから字の天狗棚を名稱に持つて行くのもこれも亦自然である、さうすると武田博士の主張と予の主張とは、結局、鹽山側の一部の者のいふ名と小菅方面の名との違ひといふことになるかも知れぬ。稿了後附記)

土宝、小菅兩川の分水界の起點も、今日地理的にいへば非常に重要であるが、地方ではそれ程に必要を感ぜず、從つて別段の名もない次第である、武田博士は、天狗棚の北峰、南峰と稱せられたが、附近の名を借用するのならば、石丸峠といふ通稱が既にあるのであるから、石丸峠の山(極めて可笑しいやうだがこれが通用し易いと思ふ)を、山脈の分れる地點とでもして置いてはどうか。實地に於ける感は、一九八〇米の山とその南の山との間には立派な窪地があり、且峠道がこれを南北に分つてゐて、別々の山であるといふ感が盛んになる、從つて、天狗棚山の中に加へたくないから石丸峠の山としたので、又事實それで通用する、强いて異說を立てる譯ではないが卑見だけを申述べる。

更に元に歸つて、基幹よりの各分派につき述べる。第一の横手山脈とも稱すべき山々は、黑川金山の古址を有する山脈である。前述六本木峠上より尾根筋を通ずる道が松尾根(一五八七米)に至ると、尾根東南面横通より下ること二丁にして松尾根の小屋がある。縱、栂の大木の散生した下にある造林小屋で、利用して差支はない(鷄冠山半里、落合一里、泉水谷小屋二十丁、柳澤峠一里半、黑川金山跡一里)黑川金山跡は、圖上の點線の道を黑川谷の記載ある澤に出會つた附近で、多數の舊坑がある。現在は極めて貧鑛であるが、同鑛石

の性質として、間々自然金の肉眼に見得るやうなのを附着したのがある。信玄時代には相當の良鑛もあつたであらうが、勞銀の廉い、或は殆んど强制勞働でやつてゐたので、今日の經濟狀態と同一に論ずる譯に行かぬ。二十年前、採掘權を得た者があつたが、水道の源を汚毒するといふので、東京市との間に爭が起り、結局、東京市が買收して結末をつけたのである。金山跡附近に『遊女平』と稱する平地もあり、別に、附近柳澤川には『おいらん淵』があつて昔を偲ばせる。黑川谷には、圖の如き道は今日はない、澤に沿うて下るのである。澤を靑梅街道が渡る所は黑川橋である（橋より丹波山一里半、落合一里半、おいらん淵三十丁）

前述、丸川峠から北面に、よく踏めた道を下ること二十丁にして泉水谷の小屋に至る（寺尾峠より出る寺尾谷と丸川峠より出る牛首谷との合流點の少しく下流の右岸にある、牛首谷の小屋とも稱する）圖には、此處から泉水谷を沿うて三條橋に至る徑路がある（三條橋は靑梅街道七五二米測點附近泉水谷に架した橋で、實測は七六八米）處が、下流は事實道がないのであるから、大菩薩よりこれを下つて年々難澁する者が尠くない、そこで少々路線を記してみると、泉水谷を下り、小室川の合流點までは、不動瀧及ヒゲスリの難場がある、ヒゲスリは一三四三米三角點（泉水三角點と稱す）の下の河岸にある。然し、何れも通過は出來る。ヒゲスリより下ること一丁にして、大菩薩から北に走る尾根を攀んでゐる小道が澤に達する（圖九〇〇米の記載ある所）左岸に岩窟がある、岩小屋といひ、野營に適する。岩窟から一丁、澤を下れば合流點で、これより半丁程下流から左岸に上れば小道に出る、これが三條橋に至る近道で又安全な道である。右岸は合流點附近で道が二分する、左は崩壞あり危險、右は八兵衞坂と稱する、これを登るとサカサ澤（三條橋の南右岸の凹所）の源頭に達し、澤を下つて三條橋に出る道がある。この澤の下方にサカサ澤小屋がある、木組だけで屋根はない。泉水小屋から三條橋まで二里强。

第二の大菩薩の尾根の、泉水、小室兩川の合流點に至るものについては、格段の記すべきものが

ない、只、一のタル、二のタル、三のタルと稱して三つの肩がある。從つて、西方丸川又は東嶺附近から眺めると、これが大菩薩に大分威嚴をつけ加へる。一のタルは一九〇〇米の記載ある直北にある、林道の通過點である。この尾根の西方の澤は大黒茂谷で、『モ』は樅の略だと聞いたこともあるが、此處には、栂が黒色を呈してゐて樅は全くない。總じて、郡内では樅、栂に關はらず針葉樹の黒い集まりをクロモと稱する、必ずしも樅の略とのみはみられないやうである。

第三の小室、小菅兩川の分水をなしてゐる山脈は、東方大田和峠の所で少しばかり例外がある外、大體に於て丹波山、小菅兩村の村界である。現在の大菩薩峠から丹波山に行くには、半ばこの尾根を通るのだ。この道が峠から半里の所で尾根を分れて、小菅に下る所から丹波山への道が分れる。この地點をフルコンバと稱する。東京市の造林小屋がある、即ち、フルコンバの小屋だ。近頃、大菩薩登山者で、この小屋を利用するものが頗る多い。飲用水は小室川の側に下ること半丁の所にある。この分岐點に石佛が安置されてゐる、妙見岩にあつた二體の一つで、他の一つは現在の大菩薩峠にある。甲斐國志に『峠ニ妙見大菩薩二ツアリ、一ハ屬小菅、一ハ屬萩原』とあるは、即ち、この二體の石佛の由來する所であらう（丹波山三里、小菅二里半）これから小菅への道は圖に明記してあるが、丹波山への道は、記載がない、今これを記せば分岐後暫らく尾根を行き、一五四一米三角點の南は約一四〇〇米位の所を搦み、三角點の東直下のタルを北に越へ、同じく山腹を搦んで、間もなく東北に走る尾根に取りつき、これに沿うて、丹波山の對岸七四四米の記載ある所邊りに出るのである。

一五四一米の三角點は、白絲山と記載してゐるのもあるが、白絲瀧の上だから山と瀧と取替へて見たので、矢張り案内者の機轉であらう。右の場所は、山葵谷のツマリで山葵谷山と稱する。山葵谷は、丹波山の對岸に注ぐ鞠子川の源頭である。尾根は山葵谷山から二分し、左は丹波山道の通じてゐる尾根であるが、右の方は村界の尾根である。

これを東に進んで一三一四米三角點は中里三角點、更に大田和峠を經て東方一二八八米三角點はシシクラ山で、尙進めば武藏國に入つて了ふ。

第四の石丸峠の南から分岐する尾根については、武田博士の詳細なる記事があるから、玆には只二三のことを附加するに止めたい。一四二九米の三角點の名稱は、前にいつた通り川入三角點で、一三六五米の牛ノネ山といふは、小菅地方ではこれを單に牛ノネと呼んでゐる、多分牛ノ根であらう、これを牛の寢通りと稱し、牛がゴロリと寢て休息したといふものもあるが、恐らくは附會の說で、この道路が牛ノ根を通つてゐるから、それを以て通路の名に命じたものである。一四〇九米三角點は山澤入三角點と名づくる、小菅の山澤の入であるからだ。この山の西のタルは大ダワノと稱する。三角點から東北に尾根が出てゐるのが大マドイ尾根と稱する。これは、石丸峠から來ると、佐野峠に行く心算なのがよくこの尾根に迷ひ込んで小菅に出ることがある、そこで大マドヒ、即ち、大に迷ふ尾根なることを示したもので、武田博士の大マテー山は、大マドイ山の訛りである。大ダワノから田元に出る途中、一二八〇米の圈を有する高サス山のサスは燒畑の意で、丹波山、小菅地方では燒畑のことをサス又はソーリといつてゐる、即ち、高サスは燒畑となり得る高い山地の意である。一三四九米の御坊山と稱するのが奈良倉山のことであることは別に『多摩秩父行』にこれを說いた。奈良倉山の西方のタルは、舊佐野峠である。新道が出來て、東方の現在の個所に移轉した。舊佐野峠から植林地內の中尾根通りを下り、右の澤に下れば小屋場があり(木組だけ)小屋場から四丁下流に奈良倉瀧がある。一見してもよい。

東京市の環狀林道は、本題の水源林を殆んど一周してゐる、大體、五千二百尺から五千三百尺の間を通過してゐるが、これは造林の限界をなす高さであるからである。從つて、造林可能の場所によつては今少し高きに上る場所がある。柳澤峠から佐野峠までの林道は六本木、丸川、一のタルを經、大菩薩峠の五六丁下を通過し、石丸峠を距る二十丁位から奈良倉山までは、殆んど尾根を通過

してゐる。柳澤峠から大菩薩峠下まで二里二十九丁、大菩薩峠下から佐野峠まで四里である。

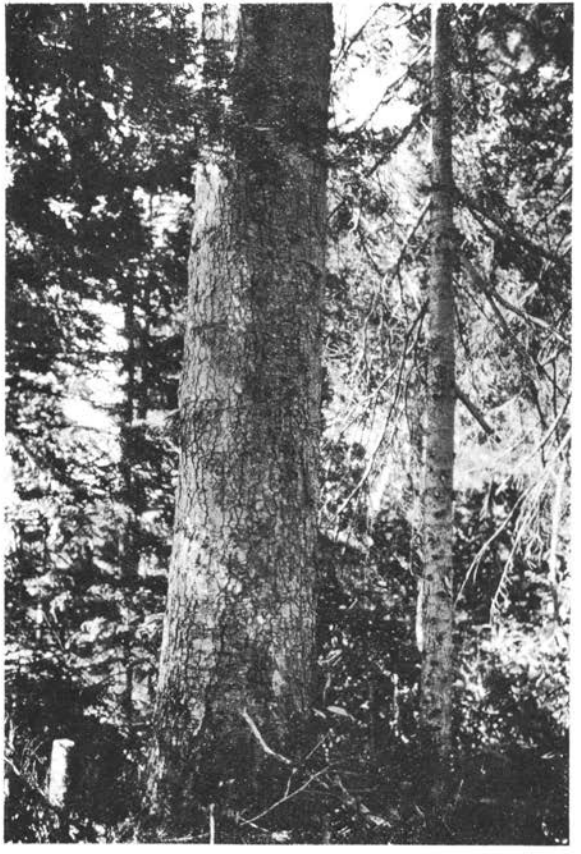
▽柳澤峠以北

柳澤峠以北の、多摩笛吹分水嶺山脈の基幹たるものは、柳澤峠から雁峠に至り、更に多摩水源中の最高點唐松尾（二一〇九米）を起し、牛王院平（將監峠）を經て、飛龍、雲取に至るもので、雁峠より雲取までは、所謂、秩父山系の主脈の一部をなすものである。而して、これより分派する山脈を順序に擧ぐれば、第一、倉掛山附近から起つて落合に至る小尾根で、柳澤川と高橋川とを分つ。第二は、鳥小屋（一七五一米測點）から石保戸山（イシヤスドにしてイシホドにあらず）犬切峠を經て藤尾山に至るもので、高橋川と一ノ瀬川とを分つてゐる。第三は、飛龍からその肩に當る飛龍權現のタルを經て、丹波村落の北方を東南に向つて走る天平尾根で、丹波山川から後山川を分つてゐる。第二と第三との間には無數の小尾根はあるが、別段特異の點もないからこれを省く。第四は、雲取から七ツ石に至り、殆んど直南に小袖川の西を走る尾根である。

先づ、基幹の山脈について述べる。柳澤峠の西嶺の名は、東嶺と同じく地方に關係のない命名である。無立木の突起で、セット頭又は半瀨ノ頭といふのが地方の稱呼である。半瀨は西嶺直北の澤で、多少水晶の産出があるが、採掘する程のものでない。林道は柳澤峠から此處の五丁位の下を横斷してゐる。次に一六六九米の測點ある所は板橋峠と稱する。落合の御屋敷附近よりの點線の道は圖にはないが進んでこの測點の所を通過し、三富、松里村界の線を三富の雷に通ずるのである。これからは數千町歩に亘る東京市の植林地である。地圖倉掛山直南の小圈は繪圖（エヅ）小屋山（宛字）と稱するもので、北方の一七七六米三角點と相並んで、三富方面から恰かも馬の鞍の如く見える、故に兩山を合せて鞍掛と呼ぶので、倉掛では意義をなさぬ。落合方面では、この一七七六米を墨川山と呼ぶ、三角點名稱も墨川である。次は川浦峠に至る圖上、高橋から三富村芹澤に點線の道がある。これが分水界を通過する地點である。



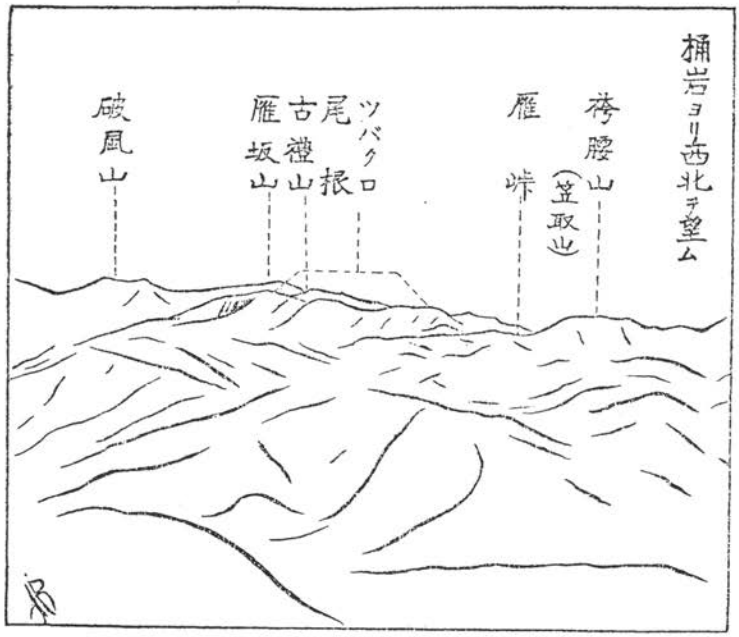
シラビソ（美濃戸にて）　地上三尺にて周圍五尺九寸



オホシラビソ（尾瀬にて）　左方の老樹は地上三尺にて周圍八尺二寸

武田久吉氏撮影

更に、北方の一七五一米測點の突起は鳥小屋と



稱する。この直南で、高橋から雁峠への道と、板橋峠から殆んど尾根の直下又は尾根を通つて來た林道とが合する。尙これから石保戸を經て、犬切峠に至る林道もある。更に北に進むと、圖上、廣川谷から點線の道路が分水嶺に會する點は籔澤といふ。これから澤を下つて一ノ瀨に小徑を通じてゐる。然し、盜伐時代の道で、今ではこれを通行する者が尠い。次に一八〇二米の三角點は、地名は籔澤であるから籔澤山と稱すべきであるが、三角點名稱は高橋三角點と稱する。これは、廣瀨方面でこれを高橋山と稱する者があるからであらう。現在は燒野原の頭である。間もなく道下に笠取小屋がある。雁峠に僅かに七丁で、水もあり、宿營地として極めて便利である。この小屋の上、道から少しく左へ入つた所に笠取沼がある。小面積の沼であるが、水の涸るゝことはない。雁峠及び袴腰等については『多摩秩父行』の中に述べたから省略する。尙笠取について、一ノ瀨地方の口碑に、昔、秩父との境界立會にこの邊にて出會ひ、笠を取つたからだと

の話もあるが、どうも附會の說のやうに感ぜられる。

笠取の東に、一九四〇米の圈を有する地點は黑槐（クロエンジュ）の頭（宛字）といつてゐる。唐松尾に三ノ瀨から登るには、普通の足で二時間半を要する。地圖の牛王院山は、地方では山ノ神といふ。同山の西に突起した岩は御殿岩と稱してゐる。而して、牛王院なる名稱は、地方で圖の將監峠（一八五八米）附近の、傾斜緩漫、殆んど平坦なる地方を牛王院平と稱してゐるのから借用したのだ。この地は、信玄が牛旁金を掘出した所だとの傳說があつて、現に摺鉢狀の、採掘せる堅坑類似のもの、各所に散在して數十個所ある。この平に小突起がある、榛名山といつて、榛名神の祠があり、老落葉松十數本散生してゐる。

將監峠については頗る異論がある。圖の將監峠は、峠でなくて寧ろ低地にある。然るに、一ノ瀨、高橋地方の者が將監峠を越えるといふのは、秩父に向つて、大瀧國有林中の二〇〇三米三角點を越え、三峰方面に向ふのをいふので、圖の峠と一里以上の差がある。これは、察する所、製圖者が國境に拘泥して、峠を國境に圖示したものではあるまいかと思ふ。恰かも小菅から猿橋に越す佐野峠の如く、峠の上の平道が一里近くも續くと、實際何處を峠といつて可いか判らなくなる。この峠もそれと同一かと思ふ。現在は、林道が三ノ瀨から龍ノ谷の源頭に向つて通じてゐる（圖の北都留、東山梨の境と國境との交叉點）今は、この龍ノ源頭に、將監峠の木標が建てゝある（一七八九米）蓋し、時勢の變止むを得ぬのであらう。即ち、この地點から、別に道が三峰に通じてゐる、その峠となつたのである。峠から數本の下る道があるが、何れも結局三ノ瀨に通ずる。尙峠の南西の窪、防火線を下ること二丁で將監小屋がある。東京市造林小屋で、堅固な生子板葺の建物である。井戸澤源頭に露營するよりもこの小屋に厄介になるが便宜だ。只注意すべきは峠からは小屋は見えない。水は龍ノ川の水源滾々として盡きることがない。これから富士の遠望極めて佳なるのみならず、白峰赤石、聖等も亦指點するを得て、絕好の眺望

である。二〇一一米の三角點は、大常木三角點と稱し、大常木山とも稱する大常木谷のセリである。大洞山（二〇六八米）は飛龍と稱するのが當然である。この點は木暮氏も同意見を述べられてゐる。この頂上北側に二丁下れば水がある。友人中川君は、二十數年前、境界測量の際、三十日以上もこの頂上に宿泊した經驗がある。

東京市の林道は、龍バミ谷の源頭（即ち新將監峠）から直接東に向はないで、三ノ瀨の方へ植林地中の林道を下ること二十丁で、東方に向ひ分岐するのが、丹波に向ふ新林道の起點で、最近の開通である。この附近をムジナノ巢と稱する。この分岐點から十丁進めばタテノ澤に達する。此處にタテノ澤小屋がある。生子板葺の造林小屋で、將監からムジナノ巢に下る道から望見することが出來る。林道は、更にこれから大常木三角點と飛龍との中間の尾根が南に彎入せる點から南に分派せる尾根（モリ尾根と稱す）の丹波圖幅中の一五三五測點の直北のタル（シナノキタル）を越え、更に横に東に溜んで、圖の大常木谷の『大』の字の邊に至り、會所小屋（木組のみにて屋根なし）に出會ふ。それから岩岳の東北方のタル（小常木タル又はハシカキノタルといふ）を一寸南に越え、更に西に岩岳を搦み、岩岳の南方一四〇〇米位の所に出で、尾根傳ひに漸次東南に向ひ、岩岳から出づる澤（ナメドロ川といふ）の右岸の尾根を傳ひ、同川が北より來る支流を合せる邊にて同川を渡り、直に餘慶橋に出でて本道に合する（餘慶橋は青梅街道が丹波山川を右岸より左岸に渡る點）。

茲に念のため柳澤峠から林道の距離を附記するならば柳澤峠、川浦峠間二里二十七丁。川浦、笠取小屋間二里九丁。笠取小屋、將監小屋間二里。將監、ムジナノ巢間二十丁。ムジナノ巢、タテノ澤間十丁、タテノ澤、餘慶橋間三里。餘慶橋、丹波山村間半里。即ち、柳澤峠、丹波山間十一里强となる。この林道中、將監、丹波山間は原始林の中を通過する場所多く、紅葉時は勿論、新緑時にも稱讃に値するものと思ふ。尙柳澤、雁峠間は、尾根通りを縱走するは、非常の籔を分ける必要があるのと、展望も充分でないから、林道をとるこ

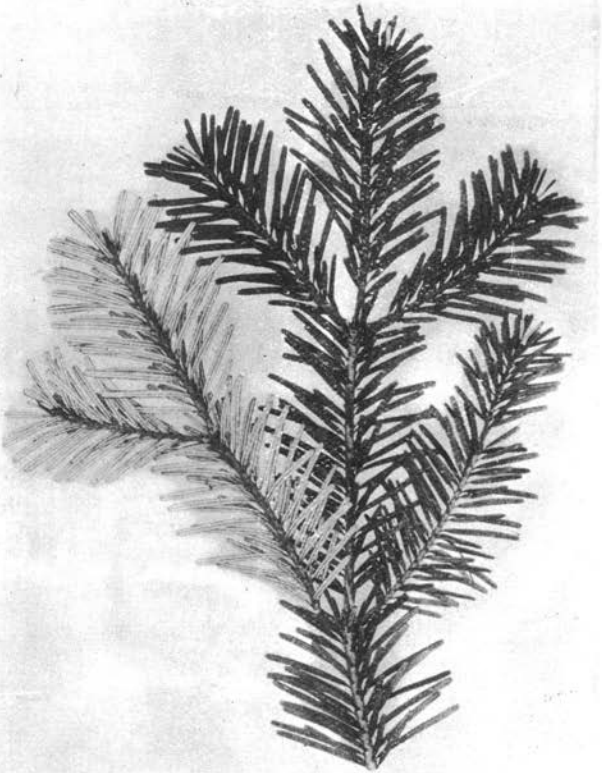
とをお勸めしたい。

次に分派せる山脈につき少しく記してみやう。第一の繪圖小屋山から落合への尾根には、峠から尾根を走る林道が落合に通ずる。第二の山脈中、藤尾山は事實フジョウ山でフジヲ山ではないが、フジョウは不淨で工合が惡いから、陸地測量部で藤尾と變へて呉れた。白舟溫泉が白骨溫泉になつたなどより餘程の上出來だ。同山の南斜面の上部に、岩石地の難場があつて、天狗棚と稱する。第三の天平尾根は、飛龍頂上より尾根傳ひに約十丁降ると、肩の直下に飛龍權現が安置される、これまでは切開けはあるが明かでない、權現から丹波山まで約三里の間は道路がある。天平尾根はタイラと名のつく位丸い平垣な頂上を有する蜿々たる尾根で、遠方から直に認識することが出來る。一名膳平又は田平ともいふ、膳、田共に平かであるからである。

天平尾根と雲取尾根との間の後山川の上流青石谷は、主として闊葉樹林の鬱蒼たる溪谷で、紅葉も立派であり、直北に飛龍、東に雲取があつて、晴天の展望誠に良好、特に、三條湯と稱する冷鑛泉もあつて、一二日の遊行に充分適當の場所である。圖の、青岩谷の記載ある澤から西に尙二條の澤がある。眞西のは權現の直下から發源するので權現谷、その次即ち中央が三條澤、此等の澤が合してから更に下つて西から合するのが御嶽澤である。更に下つて雲取から出て合する澤がシヲ澤である。この地方に有名な三條湯は、三條澤の合流點より同澤を少し上つた西岸にある。胃病、痔に特効があるとて、近所の入浴が盛んで、人は常住せぬが、湯舟と小屋はあるから何時でも入浴出來る。丹波山の部落から北に向つて天平尾根を越え(サヲウラ峠)三里、五時間位にして達する。道は相當に踏めてゐる。その他この溪谷には二三の冷泉があるが、何れも三條湯程便利でない。第四の雲取からの南下せる山脈については、堂所小屋を記さねばならぬ。同小屋は昨年建設せられた造林小屋だ。七ッ石神社から十五丁小袖川沿ひの道を下ると小平地がある。堂所と稱し、七ッ石神社祭禮の時よく焚火する場所である。これから西へ小



オホシラビソの枝



シラビソの枝

武田久吉氏撮影

屋まで一丁、路傍にその標示がしてある。終りに注意したいのは、東京市の小屋は何れも開放して、登山者の自由使用に委してあるから、その厚意を利用するがよろしい。林道は、所謂、歩道の監視路であつて、年々、多少の草拂等はするが、經費の關係上、充分な譯でないから、その心算で利用せられたい、路線だけは滅失することはない。尙、本篇中、地圖又は圖とあるは、陸地測量部五萬分ノ一地圖を謂ひ、實測とあるは、東京市の實測である。又、三角點の名稱は、陸地測量部の稱呼によつたものである。(完)

○小倉山

大島亮吉

小倉山(ヲグラサン)を最も立派に望み得るのは梅峠(ツガダワゲ)(約一六〇〇米但稱又此れを相木峠(アヒキタウゲ)と稱す。)の頂上よりならん。此の地點に於て小倉山の山容は最も近く我々の眼前に迫る。南方よりは寧ろ平凡、餘り我々の心を引くが如き山容ならず。然るに十石峠の上州側「ミヅノト」の茶屋に到る迄の平坦なる尾根上の道を上州側より登り來て、稍西南方を望めば、神流川源流、三國山より西に連亘する一七〇〇米より二〇〇〇米を上下する針葉樹黒々たる連嶺に續きて更に一段高く小なる破風形をなす小倉山の山頂を望見し得て、宛然此れ標高稍低き奥秩父の高嶺を想はしむ。

小倉山(ヲグラサン)は又北相木村(キタアヒキムラ)にては御座山(ゴザサン)と稱呼し、頂上に御座山神社及び御岳山神社を祭る。里人の參詣のために登頂する者又多くは北相木村より爲す。從て登路となすべきもの北相木村より二路あるに對し、南相木村よりは不完全なる一路あるに過ぎず。

北相木村字木次原(キッギバラ又は單にキッギ)より登るもの。坂上(サカウエ)山口(ヤマグチ)より登るものは前者の二路にして、南相木村上栗尾(カミクリオ)より唐澤(カラサハ)に沿ひて登るもの後者の一路なり。然して小生の實際採りしは木次原より登りて頂上に到り、降路を唐澤に求めんとして誤り一平澤(イッペイノサハ)を半途程下り、後唐澤に入りて上栗尾に降りたるなり。故に坂上山口

方面よりの登路の實際に就ては知る事無きなり。

木次原は北相木村最奥の部落なり。「名主木次シュウ藏なるものの「ウケチ」として開墾せしものなれば其の村名起れり」とは里人の語りし所なり。山村としては村家各所に點在してしつとりと其處に永年の生活の痕を見せて纏りたる感じなく、此の地方の他の山村と趣を異にす。開墾地の新部落なるを以つてなり。然れど落葉松林谿の全部を蔽ひたり。木次原は佐久鐵道小海驛より俚稱五里（實際は四里餘ならん）にして達す。然し小生は實際旅程上其れを歩まざれば、何等語り得る所無し。木次原より小倉山への登路は北相木川源流の極めて緩傾斜なる谷底に沿ひて行くものにて、伐採の幅廣き道路が傾斜緩なる間續き、其れより好く踏まれたる山道となる。木次原より約一里餘、時間にして一時間餘にして小字名「クマノアナ」なる地に杣小屋と板割（イタワリ）（屋根板となす薄き板片を作るを業とする者。）の小屋あり。陸測五萬十石峠圖幅にては其の地點は明示し難きも、大略左の地點なるべし。即ち同圖幅上「小倉山」なる山名の「小」の北上に小なる閉鎖曲線あり。該閉鎖曲線より大略正北方右手に派生する山稜あり。而して其の山稜に該閉鎖曲線右上より針闊混淆の林の記號ある餘り顯著ならざる澤あり。該地點は其の澤の一五六〇米の等高曲線の附近らしく思はれたり。杣小屋及び板割の小屋は登山道より右手に少しく登りて前記の澤に入るものにして、小倉山登山道（御座山林道を殆んど頂上近く迄利用せるもの。）は眞正に小倉山頂上東側より出づる源流を登りて頂上に到るなり。頂上近く十石峠圖幅上「小倉山」の「小」の字にて蔽はれた鞍部にて林道は西へ山稜を下りつゝ、坂上山口方面へと降る模樣にて、其の鞍部よりは梅の密林中に細き切開あり。其れが御座山登路にて同地點には標杭あれば誤導せらるる憂ひなし。切開路は可成り急に登り、稍傾斜緩となれば更に切開は左右に分る。左は彌次平（ヤジダイラ）（十石峠圖幅小倉山の東に連亘する山稜中獨立標高點一九九一米のある平坦なる山稜上の一地點を稱する俚稱。然れど同俚稱に對する里人の說明不分明にて以上は小生の彼れ等の說明を綜合しての結果の想

像である。）に導くものであり、右せば頂上に到る。木挽小屋より小倉山頂上まで一時間五十分を要したり。小生の登頂せしは四月下旬なりしが、同登山路は正北面のため鞍部以上は全く殘雪に蔽はれゐたり。上記の登行時間は稍〻急行せる傾向あり。其故二時間半と見れば充分にて、木次原より三時間半とせば可ならん。登山甚だ容易なり。

小倉山頂、殊に三角點と御座山神社の小祠ある高點は栂の密生せる山稜上に一段高き岩頂にて四邊開け、展望極めて廣く此の地方一帶の山川皆四周足下に指呼し得て極めて爽快なる事秩父諸山頂中金峯山兩神山に比するを得るものと信ず。殊に其の岩壁及び岩頂を小倉山頂西方二〇二〇米の小なる鞍部より望見すれば一層壯快なる趣あり。洵に一言を以つてせば「頂上らしき頂上」とも稱すべきものか。

上栗尾より唐澤を登り來る登路は唐澤を直登して小倉山西方二〇〇〇米の鞍部（二〇二〇米の鞍部の西方にあるものなり。二〇二〇米の鞍部と誤り易し）に達して、山稜を傳ひ頂上に到る由なり。該登路を降路と選びて下らんとせるも、前記二〇〇〇米の鞍部と二〇二〇米の鞍部とを誤認して小生は其の登路を下ることを得ざりき。即ち此は里人より聞きし御岳山神社の安置せられたる二〇四〇米の小倉山頂三角點の稍南方の小降起を其西方の二〇二〇米の隆起と誤り、其れより直ちに下降する該栗尾路を精査せしに甚だ不分明なる登路なるにや、或ひは又積雪のため蔽はれ居たるにや、兎に角發見せられず、依つて該路を求めずして唐澤を下りたる積りにて、其の實は一平澤を下りたるなり。一平澤は路無けれども栂の密林中の登降容易なり。澤水又可成り上方迄ありたり。一平澤を一六〇〇米の等高曲線邊迄降りたる所に又上栗尾の里人の板割小屋ありたり。同小屋より上栗尾に到る迄良く踏まれたる路あり。同路は該小屋より一平澤唐澤間に小倉山頂より派生せる山稜一六八〇米の平坦なる地點（里人はトリイ峠と稱し居れり。）を乘越して唐澤に下りて、十石峠圖幅上「唐澤」の澤の字附近に降り其れより谷底を上栗尾に出づるものなり。小倉山頂より板割小屋迄約一

時間、板割小屋より上栗尾迄同じく約一時間を要せり。降路又容易なり。

尚參考のため小倉山頂に登らずして木次原より栗尾三川方面に到る林道其他二三の峠路の事を記せん。右は小生の實地踏査せるものに非らざるも里人より聞き、又一部分歩める所なり。然れば大なる過誤は無からん。

木次原より北相木川源流を溯るに前記クマノアナの澤より數町下に於て御座山林道は左に更に一林道を分岐す。是れ彌次平（ヤジダヒラ）林道と稱せらるゝものなり。兩林道の分岐點には左の如く記したる標杭ありたり。即ち「字御座山巡視起點　右御座山林道ヲ經テ山口坂上方面　左丸岩及ビ彌次平林道ヲ經テ南相木村栗生三川方面」と記され、右の林道は小生の前述の如く小倉山登頂の爲め採りしものにして、左は丸岩（全く此の地點に就ては里人の言なし。故に全然不明なり。栗生側にて聞きたるに唐澤右上にある十石峠圖幅上に表はれたる岩崖を稱すと言ふも右にては前記標杭に記したる丸岩と符合せず。）及び彌次平林道を經てと記しある如く、御座山林道と分岐して北相木川源頭の左手の澤に入り、前出獨立標高點一九九一米の彌次平に到り、同點より南相木川に下りて、川沿ひに一路は上栗尾に到り、更に一路は南相木川と三川（ミカハ）間の山稜中獨立標高點一七四六米の右なる鞍部を越えて三川に下り、三川に沿ひて三川村に到るものの如し。右は木次原より上栗尾に來る最も近き路なりと上栗尾にて聞けり。

陸測五萬十石峠圖幅及び金峯山圖幅に跨りて長野縣南相木村三川村より三川を溯り獨立標高點一七〇五米の國境山稜上の凹部を越え、群馬縣多野郡上野村字中ノ澤に到る小徑は現今通行者絶え路痕なき程なりと同じく上栗尾の里人より聞けり。然るに十石峠圖幅上北相木村木次原より俚稱「ブド」（ブドは山名の由なり）峠を越えて前出中ノ澤に到る小徑は大正十二年九月甲府の山砲大隊が梅峠及び此のブド峠を通過せし際改修され、其後通行者增え、群馬側よりは長野側の牧場に夏期間送る放牧馬の通過迄出來得る程度の良き道路となりたり。小生は實地踏査せざるも小倉山頂より明劃



オホシラビソの毬果



八甲田山中石嵓を背景としてオホシラビソの獨立樹（枝頭に毬果累々たり）

武田久吉氏撮影

に是の道路の木次原側を望見せり。上州側より北相木村へ越す近路として通行せられ、十石峠のミヅノト茶屋より栂峠を越えるが如きは全くの迂路となりたり。

栂峠、上栗尾三川の部落を繋ぐ三川峠又は栗尾坂、三川より千曲川の谿に越す「ダイモン」峠、馬越峠の如きは敢へて記するに足らざるものなれど、山間の部落間を繋ぐ小なる峠路として又一種の興趣あり。殊に「ダイモン」峠に於て然り。三川と居倉とを繋ぎ、通行者も餘りなき此の小峠の細路は草原に石塊の散在する緩傾斜面より黒木の蔽へる岩骨露はなる山稜の一凹部の恰も自然の門の如き個所をかそけくも越え居れり。

○秩父笠山より丸山へ

松本善二

はしがき

東京方面より秩父の連嶺を望むと、北方は先づ武甲山迄で一段落をつげた形となり、其の北には更に低い山の一群がある、これが餘りに登山者諸君から忘られて居る様に思はれるので、其中で比較的特長のある笠山より丸山迄の二日の旅を至極簡單に紹介する事にした。（地圖。五萬分一熊谷、寄居、秩父大宮）

一、笠山（乳首山）

大正十四年秋十月の十二日、東上線であの静かな、小川の町へ下車したのは午前十時十五分頃であつた、町はづれで奥澤行の自動車を見附けたので、すつかり横着心が出て、遂に切通し迄厄介になる事になつた、途中堀ノ内附近から槻川を隔てて見た笠山は、僅に八四二米突に過ぎない地瘤ではあるが、中々に捨て難い風貌を備へて居る、十一時發の自動車は僅かに十五分で切通しの橋を渡つて止めてくれた。

其所からすぐ秩父街道に別れて南西へ入る、内出の女共が槻川の流で洗濯をして居る所など目新らしい景色で、のんびりとした氣分になる。小貝戸を過ぎてから道は益々西へ西へと曲つて行く、館の先で赤木へ行く道との分岐點に達す（十一時四十分）、其れを右へ取つて少さな橋を渡るとすぐ

登りに懸る、木立の中を凡そ二十五分も行くともう栗山の部落が見へ出した。少しく渦を覺えたので右側の農家を訪れた、すると何か取り込みでもあるらしく膳部など持ち運びなどして大分混雜をして居た、夫にも拘らず實に親切な人々で、直に茶菓の饗應をしてくれた上、何れへ參らるるやら、さぞかし困難ならん、暫し憩はれよと、くれぐれも勸められたが、其家の迷惑を察して時を移さず辭し去り、同じ村で笠山神社の神符を授けると云ふ福島榮太郎氏方を訪ねる事にした、福々しい人相をしたこの家の主人は直樣娘に茶の用意を命じて我々を請じ入れた、其の話に依れば、小川の靑山に土岐一丸と云ふ神官が居つて、毎年五月八日に大祭を執行するさうである。

午後十二時三十五分に其所を出て、村はづれの杉の植林のある所で徑が二岐して居る左を取り、澤を渡つてから電光形の登りにかゝる、約百米突位登ると、右側に笠山神社と書いた柱が立ててある、こゝを右へ入ればもう一本徑だ。直行すると平澤を通つて白石へ乘越して仕舞ふ。これからは、かなり急傾斜の木立の中を、約三百米突位登ると最後に小さな石段が出てくる、これがもう頂上である。八四二米突（午後二時）。此處には方九尺位の村社笠山神社の祠があるが三方共トタン張りであるのが頗る風致を害する樣に感じた。其れに周圍の掩ひ被さる樣な闊葉樹林の爲に到底眺望は得られない。併し此處から西へ岩の露出して居る尾根通しを少し行くと北側に切りはらつた所があつて、其所からは、小川の町は勿論遠くは兩毛の平野から日光及び奥上州方面迄も充分に展望する事が出來る。此尾根道は槻川村皆谷へ降つて居る。

再び頂上迄戻つて祠の後ろから尾根の南側を搦んで居る細徑を約半丁位行くと南へ分派した、すばらしい防火線の通つて居る尾根へ出る、此處からの南望は、すぐ眼の前の堂平山の尨大なる姿を始め、其の左に笹山、右に劍ノ峯、川木澤ノ頭、丸山、稍離れて武甲、兩神と殆ど息もつかせないといふ有樣だ。但し殘念な事には甲信境の方面は、雲が粘つて居るのではつきりしなかつた。

二、笹　山

防火線に附いて南へ急な斜面を降つて行くと鞍部へ出る、其所からすぐ東へつき出して居る七六〇餘米突の突起がある、それが即ち笹山であつて、笠山との間の平澤から一筋（これは栗山から）、堂平山との谷間から一筋（大椚村七重から）、都合二筋の小徑が乘越して來て、少しく下りに向つた所で合し、白石へ降つて居る。

三、堂平山

七重からの乘越しを過ぎて愈々堂平の登りに懸る。始めは尾根通しに小松と雜草の中を行くと西側を捲く樣になつてから電光形に少し登り、間もなく頂上三角點の櫓が見え始める、頂上の平は二段になつて居て中々廣い。高さ八七五米突八。（午後三時三十分）。

笠山とは反對に一面の茅戸である爲め、眺望は素的である。丁度馬糧の苅入れ時期と見えて、白石と大野との兩方面から上つた數名の土民が草を苅つて居るのに出會つた。日足の早い秋の日は、もう夕方に近づいて來たせいか、大分寒さを感じ出したので、少憩の後尾根通しを南へ降り、劍ノ峯との鞍部へ出て、五萬分の一秩父大宮圖幅に槻川村とある槻の字の邊より東へ降る細徑を目がけて降る事にした、檜山の下で大野の土民と別れ、七重を通り、都幾川畔の西平の宿迄飛ばして、午後六時お馴染の旅舍内田屋の客となつた。

四、劍ノ峯より白石峠

明くれば十月十三日、秋の空は飽くまで透徹つて、實に何とも云へぬすがすがしい氣分になつた、併し登山者の心持ちを理解し得ぬこの僻村の宿では、お定まりの通り朝飯が遲れ、七時四十分になつて漸く出發する事を得た。

前日降つた七重を通つて劍ノ峯へ着いたのが十時三十分であつた。頂上には塚の上になる新しい扁平石が立てゝあり、表面に摩利支天、劍の峯大神、大山祇命。裏面には大正六年十月十日、秩父郡大椚村字大野岩田保十榮長、比企郡高坂村芳州神社德次書。と刻んであつた。

眺望は堂平山と殆ど大差なく、同じカヤトではあるが唯尾根が痩せて居る。低山巡禮の樂な旅には別に急ぐ必要もなし、殊に惠まれたる好天氣に、

すつかり呑氣になつて、約一時間餘もミヤマ砂風呂を開業した。十一時三十分出發僅か七分で白石峠の鞍部へと降りついた。

五、川木澤ノ頭、高篠峠

白石峠よりの徑は、川木澤ノ頭の東面を捲いて居るが、徹底的に尾根を行く計畫なので、急峻な防火線を無暗に攀ぢ登つて一氣に頂上へと達した（十一時四十五分）。この頭から西北へ分岐して居る尾根がある、之れが朝日根と定峯とに跨る大霧山（七六六米突）を起して弼新田峠へと連つて居る。本尾根の方は大分藪が深いが東側だけが苅つてあるので比較的樂に八四〇米突の隆起を飛び越して約三十五分で高篠峠に達した。乘越しの少し手前に少さな石の祠があつたが中には何も無かつた、峠より五六間大野の方へ降つた所に二三本の杉の古木があつて、其の下に少さな祠がある所など、如何にも峠らしい趣を見せて居る。

六、大野峠、丸山、高篠山

大野峠とは、前記高篠峠から五萬分一圖に大野峠と記してある附近迄の總稱である樣に土民は云つて居るが、自分は大野で前記の場所を高篠峠と稱する點から考へて、高篠峠と大野峠とを區別して呼びたいと思ふのである。

高篠峠から大野峠への登り道は、始め尾根に附いて少し行くと、今度は東側を搦んで陳場平の西隅を通り、秩父側へ乘越すのであるが、自分はどこ迄も尾根通しの防火線を辿り大野峠の頂上に出た、（午後十二時五十分）八八〇米突。此處で尾根は丁字形をなして一は西へ曲つて丸山となり、一は東南へ岐れて、ハンネ石、檞峠、飯盛峠より面振峠へと走つて居る。夫を西へ取つて一本杉を過ぎ、此山脈での最高點である丸山の頂上へと達した、九六〇米突。途中北側は松を植林してあるが、南側と丸山の頂上以西は全く茅戸であるが爲め、頂上から眺望は充分に得られる。

約一時間半を休憩に費し、遙々平宿から持參した柿に舌鼓を打ちながら、心ゆく迄展望に耽つた。午後二時三十分出發、尾根通しを高篠山（九〇〇米突）迄行き、其れより尾根のすぐ南側に沿うて走る小徑を何處までも執拗に追ふて遂に尾根の終

る下郷へと降り切つた（四時二十分）。坦々たる村道を正丸街道へ出で、懐かしい秩父の町へ入つたのが五時五分前であつた。

此旅行の時間の記錄は、殆ど山へ遊びに行つた様な記錄で、實際は池袋發一番（午前六時十五分）で出立すれば、同じ行程を取つても少し急げば其日の秩父發（東京へ聯絡する）終電車にて歸京する事も不可能ではない。（終）

○高山植物雜記（六）

武田久吉

十四 シラビソとオホシラビソ。亞高山帶の針葉喬木林をなす種類は、山によつて多少の差異があるが、本州中部の高山には、よくシラビソとオホシラビソとが見られる。この兩種は外觀が大層酷く似て居るが爲めに、熟練しない人には、區別が容易でない。植物學者に質問すると、成熟した果實がなければいけないと斷はられる。然るに、果實は中々容易に得難いし、又一々高い梢の毬果を檢査しなくては、樹種が判明しないでは、吾々登山家にとつて、不便この上もない。

シラビソもオホシラビソも、樹皮は灰白色で、多少の皺はあるが、概して平滑と呼んで差閊あるまい。然しシラビソの方は、老樹に於ても、この性質に變りはないが、オホシラビソの方は、コメツガの膚の様に細かく破れ、加之褐色を帶びて、オホシラビソの中年樹に馴れた目には、一見それと識ることが困難な位である。その有様は寫眞に示した通りである。シラビソには滅多に巨樹がなく、今迄私が測つた最大のものは、八ヶ岳の美濃戸御料林中で、地上三尺で周圍十尺といふのであるが、こんなのは實に稀である。寫眞に示したものは同じく美濃戸官林内のもので、地上三尺で周圍五尺九寸を算した。斯かる巨樹でも、樹皮は中年樹と同様である。然るに寫眞に示したオホシラビソの老樹は、地上三尺で周圍八尺二寸を算したもので、これは尾瀨沼東岸の林中であるが、美濃戸官林内で、地上三尺周圍八尺四寸と測つたものもある。

樹形は兩種共相似て居るが、尾瀨の如き深雪地

では、オホシラビソの下方の枝が、寫眞で見る如く、著しく下向し、一見タウヒ屬の種類の樣に見える。尤もシラビソの稚樹でも、下枝が雪に壓されて、下垂することを、曾て日光女貌山で見た記憶がある。

枝先の葉の著いた部分は、共に褐毛があるが、オホシラビソではその毛が更に密で且つ稍長く、往々黑褐色を呈することさへある。枝をつまんで見ると、シラビソは何となく水氣があつて軟かいが、オホシラビソは堅い感じがする。これは一旦よく覺込むと、暗所でも、手觸りだけで兩種を區別することが容易である。

シラビソの葉は、一般に細長く、眞直で薄手であるに反し、オホシラビソの葉は、枝の元の方に向つて微に勾曲し、コメツガに類似した形を呈するし、尙葉頭が幾分廣くて圓味があるし、質は厚い。加之葉裏がシラビソに比して白色を帶びることが稍少い。その形狀は本號に挿んだ寫眞で比較して戴いた方が、下手な長談議よりも明瞭であらう。

以上の點丈けで兩種を區別することは、左したる困難がない筈である。

シラビソは元來南方種である。私の知る範圍では、甲州の高山、信州の高山、富士、日光諸山位であるが、赤石山系の南方に迄分布して居ようと思ふ。『植物名鑑』によると、伊豫の石槌山にもあるといふし、『吉野群峯』（一五三頁）に從へば、彌山にも生ずるそうである。オホシラビソは北方種で、南は赤石山系の中部以北（南端に有無は不明）から、富士西面（少量）、奥秩父、八ヶ岳山彙、信州の高山、日光の奥、尾瀬地方、越後の高山、會津の高山、吾妻山彙、岩手山から、北は八甲田山に迄及び、高度ではシラビソよりも高きに達し、往々ハヒマツに伍した矮樹を見ることがある。

シラビソは、甲信境地方では、單にシロと呼ぶことがあつて、それにオホシラビソをも含ませることが往々ある。然し詳しく言へば、シラビソはシロの「輕木」とし、オホシラビソを「重た」として區別する。これは材の性質から來た名稱で、伐木製板に從ふ徒の稱呼である。日光ではシラビ

ソをリウセンと呼び、オホシラビソをオホリウセンと稱する。林學者は大抵シラベと言てシラビソと言はない。オホリウセンにはまだ外に、ブサといふ名がある。これは甲州、秩父、越後、奥上州あたりの方言らしい。吾妻山彙ではモミと稱するが、それは本當のモミをよく知らぬ爲め、モミだと誤信して居るらしい。八甲田ではトヾマツと稱して北海道のトヾマツと同一と思つて居るらしい。それ故、植物學者は、青森地方のトヾマツと言ふ意味で、アヲモリトヾマツといふ長い名を製造したのである。それを林學者はアヲトヾと略稱するが本當のトヾマツのアヲトヾと混雜する恐れがあるから、斷然使用せぬ方がよい。信州の平穩村ではキソと稱する。これは元木曾から來た木であるといふ誤信からだといふが、變な話である。尙尾瀨ではこれをツガと呼んで居る。

シラビソの材は白色で輕く、建具等に用ひて良いといふので、甲信地方では需用がある。然し富士では水木であるとて、あまり喜ばないのは、使用法が適切でない爲めかも知れない。オホシラビソは、その材重く、幾分赤味が掛り、建具等には下品であるとして、喜ばれない。

シラビソとオホシラビソとが、混生する山もあるが、時にはその一のみが生ずるとか、又は混生しても量に於て甚しい差を見ることもある。富士山の如きは概してシラビソのみで、オホシラビソは、去る大正十二年の夏、私が西中道で少許を檢出した迄、產することが知られて居なかつた。八ケ岳では柳川の上流ではオホシラビソ多く、澁濕泉附近ではシラビソが多い樣に記憶する。鳳凰山の小武川谷では、混生するが、オホシラビソはシラビソよりも低所から、更にその上方に迄生じ、シラビソは何れかと言へば高所を選むと言ふが、俄に首肯出來ない。日光ではシラビソが多く、オホシラビソは唯高地に少量を見る位である。木曾の御岳ではシラビソが低位置に、そして上方に至るに從つてオホシラビソが增加する。尾瀨にはオホシラビソのみと稱して大過なく、シラビソは戶倉近くとかに數株あるのみと聞いたが、目擊しなかつた。面白いのは黑岩山から鬼怒沼に至る間のシ

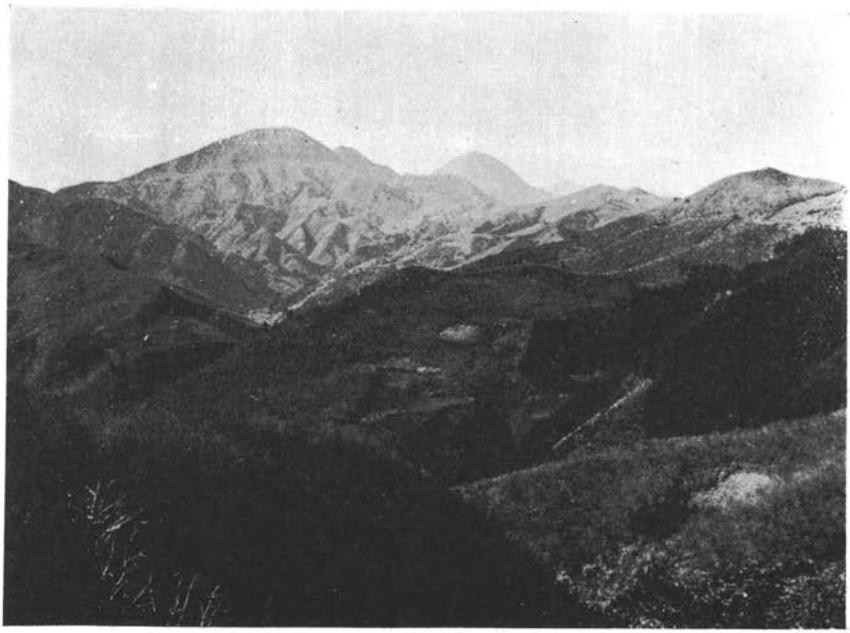
ラビソとオホシラビソの量の變化で、その詳細は『尾瀨號』六五頁に記されてある。私は先年荒川岳から仙丈岳迄の、あの長大な尾根を縱走した時、二日も針葉樹林内を終日歩いたが、あの倦き倦きする林は、主にオホシラビソであつた樣に記憶して居る。遺憾なことには、その時の手帳を上野驛の御荷で盜まれてしまつたので、今明確に記すことが出來ない。

シラビソの學名は、Abies Veitchii, Lindl. といふ。これは發見者英人ジョウン、ゴウルド、ヴィーチ（John Gould Veitch）の紀念として、英國の植物學者リンドレイ（Lindley）博士の命名したものである。ヴィーチといふ人は、當時ロンドンで園藝を營んだ者の息子で、若年にしてその業に從ひ、終にこの園藝商會を英國否世界有數のものとした努力は驚嘆す可きものである。その當時この商會が有名になつたのは、主に海外から珍植物を輸入することであつたので、その爲め一八六〇年二十一歲の青年の身を以て遙々日本に渡來し、その年の九月、當時英國公使で（最初の）あつたサー・ラザフォード・オルコック（Sir Rutherfod Alcock）に從つて富士山に登り、六〇〇〇—七〇〇〇尺の間にシラビソを採集して英國に送つた。その標本によつて翌年記載命名されたのがこの植物の學者に知られた最初である。ヴィーチは滯留約一年の後フィリパインに向ひ、こゝでまた多數の植物を採集して自園に齎した。（白井博士の『增訂日本博物學年表』には、一八五九年「英人エム、ベイチ來り園藝植物を探り文久二年歸國す」とあるが、何か謬があるのではなからうか）。

オホシラビソの學名は、Abies Mariesii, Mast. で、この方は一八七八年に、チャールス・メアリーズ（Charles Maries）といふ人が、八甲田山に採り又日光山に發見し、翌年種子をヴィーチ商會に送りなどしたので、その頃から英國の學者に知られて居る。名稱は一八七九年に、英國のマスタース（Masters）博士が、發見者の紀念にその姓をとつてつけたのである。



西御荷鉾山頂の不動石像



道祖神峠より西に東西御荷鉾山を望む

木暮理太郎氏撮影

○琴川を遡りて奥千丈岳へ

（付國師甲武信縦走）

吉澤一郎

琴川といふのは奥千丈岳の南から發して笹平で笛吹川に注ぐ川である。琴川を遡りてとは書いたが全部ではない事を一應お斷りして置く。

大正十三年の秋、自分は友人二名と例により盛澤山の計劃を約一週間分の食料と共にリュックサックの中へ積め込んで飯田町を出發した。

甲府で下車、上黒平まで嫌な御岳道を過ぎてしまふと猫坂となり段々山らしい趣となる。金峯から國師までの尾根が眞黒に針葉樹に覆はれて行手の空を東西に限つて居る。はじめの豫定では金峯から國師、甲武信と縦走し様といふ事になつて居たのだが急に風向きが變つて黒平峠と燒山峠を越して地圖に點線で示してある道から國師へ出やうといふ事になつた。明くれば十月の三十日、風は少し強く黒平の山村は何となく荒寥たるものがあつたが天氣が此の上もなく良いので朝めしもそこそこに出發する。

黒平峠までは間違へる様な道はなかつた。荒川にかゝる橋を渡つて、一度上黒平の村を對岸に見ると霜深い坂道を段々と辿る事になる。千代田牧場の入口の門を入ると平な所へ出た。此處からの西北望は可なり良かつた。低い前山の間から雪の裝ひも嚴めしく、憧れの白峯が自分等を威壓する。黒平を六時十五分に出てから四十分位で此處まで來た。黒平峠は他の時節は知らないが今頃は少くとも來る人々に滿足を與へないでは措かない事と思ふ。遠き山々の雪の姿、近き山の晩秋の淋しさ、足許に踏む枯葉のカサコソとなる音と長い霜柱の折れる音、總て淋しい中にも潤ひがある。

七時半峠を辭す。地圖通りの道をたどると暫くして桑島に出た。下から百姓のかみさんらしいのが籠を擔いで五六人登つて來て異樣な自分等の風體を見て「おめえさん等何しに來たゞあ」と聞くから正直に話してやつたら「フウン、呑氣なもんだなあ、いゝ身分だ、まあおでえじに」とさも呆れた様な顏をして峠路を登つて行つた。

鹽平（シホベラ）の部落が見えてからはすぐ村の小學校の前に出る。此の村には藤原といふ姓ばかりあるのを見ると何か歴史的に由緒あるのであらう。それに村の娘は皆美しい。

九時鹽平出發、皷川の本流を二三度渡りかへして乙女鑛山への分岐點で暫く休む。自分は皷川と琴川と笛吹川とを合せて見て妙に音樂的な名だなあと思つた。燒山峠も頂上近くなると可なり急になつて來る。十時四十分だゞつ廣い峠の頂に着いた。東寄りの方に地藏樣が西向きに立つて居る。白と赤の涎掛をかけて居るのも面白かつた。金峯は見えなかつたが劍ノ峯はピラミッド形でよく解つた。

奥千丈岳の南峯、二二三四米突の峯からは雄大な支脈を鳥居峠と大鳥山とへ分派して居る。暫くして下りはじめるとやがて琴川の一支流に出た。橋を渡つて左するとすぐ金峯泉だ。十一時半到着。此の湯の位置は自分の考へでは地圖の倉澤山の倉といふ字から東南に派出された尾根の末端の少し下流の左岸らしい。客は一人も居なかつた樣子、宿の前の廣場で犬と鷄が仲よく日向ぼつこをして居た。湯の方は副業らしい。おとなし相なおかみさんに賴んで晝飯の菜をこしらへて貰ふ。圍爐裏の緣に腰を下ろして飯を食ひながら附近の地形を聞くとあまり委しくは知らないが乳呑兒をあやしながら敎へて呉れた。柳平は此の家のヒックリカヘシの所で地圖に家の印があるがそれは昔は牧場があつて家もあつたが今はないとの事、澤の名は解らなかつた。琴川の上流には今ヘリ師が入つて居て小屋も四つばかりあるといふので今日は其處で泊めて貰ふ事にして幾らかのお禮をして午後の一時に出發。山の裾を捲いて琴川の本流へ出た。柳平といふのは此處だ。大變廣い道を造つて居る樣だつたが何の爲かは解らなかつた。鳥居峠は今は廢道で道は琴川に沿つて付けられてある相だ。柳平は馬鹿に廣くて道が又幾筋もあるので解り惡い。變に四邊がひからびて居る。

乙女鑛山へ行くらしい道を過ぎて琴川の左岸を少し川と離れた上部を爪先登りに行くといつか河原に出た。此處からはずつと川沿ひで炭燒の通る

道がよく踏まれてあつた。地圖の鹽山と金峯山との境あたりへ來たのは三時頃であつた。これから少し過ぎると琴川は東方へ曲る。地圖通りだ。一寸八ケ岳の美濃戸の中山の樣な氣分のする尾根が西北端を此處に終らして居る。此の邊はもう秩父の臭ひが濃い。苔蒸した岩石、立枯れた古木、又倒れ木など、眞ノ澤に道をつけた趣がある。

川は再び北に曲る。暫くして一寸登ると炭を燒いた釜の跡がある。本流を午後三時二十五分に渡る。茅戸を過ぎるとすぐ地圖の奥千丈岳三角點と二二四九米突獨立標高點の鞍部から出る澤にをりた。道が三方にあつてその中で眞中のものが一番よく踏んであるのでそれをとる。左手に「山本巡査巡視」と書いた札があつた。もう四邊には冷氣が泌み込んで來て道はカンカンに凍つて居た。立派な炭燒小屋が二軒あつたが自分等は上の方の少し上等な小屋へ行つた。今日はと呼んだが返事がない。然し粗末な風呂の下に炭がよくおこつて居たのでその周りに腰を下ろして主人の歸りを待つ事にした。自分は荷を置いて少し登つて見たが道は踏まれてあるので結局二一六〇米突の鞍部までついてるのだらうと思つて引返した。

暫くして二人の人が右手の斜面から降りて來た。一方は六十位、一方は四十位で此の小屋はお爺さんのものであつた。泊めて呉れと賴むと心よく承知した。四十位の人は暫く話してから狹かつたら下の小屋に來てもいゝと云ひ殘して下りて行つた。爺さんは自分等を小屋の中へ入れ炭火をどんどん起して呉れ夕飯の仕度までもして呉れた。ランプを點してからは世間話、山の話、炭の出來上るまでの話、甲斐の三升桝の事、ユカズといふのが信玄の裏言葉であつた話等それからそれへと盡きない。名は岸本彌十郎といひ西保村字北原の百姓だ相な。自分等は話を聞き乍ら明日の朝飯と晝飯とを造つて八時頃爺さんのお蔭で少しも寒さ知らずで深山の小屋に安らかな眠に入つた。

明くれば十月卅一日で自分等は奥秩父國境山脈縱走中最困難な所を通過しなければならないのだ。餘りいゝ心持ちで寢たので夜の明くるも知らず眼が覺めたのはもう午前六時過ぎであつた。爺

さんは今日里へ下るといふので葉書を書いて托す。味噌汁の中へ胡麻の油を入れたと聞いてもう食べる氣になれず早く切り上げて禮を無理に置き七時四十分小屋を後にした。昨日の茅戸を通り本流に合してから教えられた通り道を右にする。二三分も歩くと澤が左から入つて來るのに出遇つた。道は澤山（奥千丈岳三角點より南微西に出てる尾根即ち等高線の數字の入つた尾根）の東側へジグザッグに登つて居た。琴川の上流に「百間登り」といふのがあると聞いたがこれかなと思つて澤山に登つてから三角點へ行く事にした。後で考へると「百間登り」は此處ではなくて尚本流に沿つて行き、いよ〳〵水がなくなる點から登るあたりをいふらしい。八時半尾根についた。暫く休んで廣い尾根を北に下ると二三二〇米突の鞍部に着いた。此處には荒川方面から人が入ると見えて木を切つた跡もあるし道らしい所もあつた。これから北に二つばかりの峯を越えるまでは臘げ乍ら道はあつたが以後はいくら探してもそれらしいものにぶつからなかつた。倒れ木の難が始まつた。斃もある。倒れ木の上を歩き損ねて眞倒に落ちて起き樣とすると灌木が邪魔をする。實にひどい目に遇つた。然し地圖と磁石だけは眼から離さない樣にして居た、倒れ木の難を過ぎると木屑が澤山落ちてる所へ出た。人が入つた跡だ。金峯までの尾根が左手に見える。まだこれからも鳥居峠から來て居る道に出るには大變らしく、倒れ木が前に澤山はびこつて居る。成るべく荒川と琴川との分水界を離れない樣にして東北に藪を分け、倒木を乘り越える。右方には黒金山へ續く蘆毛山脈らしいのが見える。暫くして倒木渡りの輕業も終ると下生の少い針葉樹林に入つたので一息つく。今度は北に進路を採ると思はずも案外早く切明らしい道へ出た。宮内省の標石もあつた樣に記憶して居る。少し先の方に古い杭がありそれに「木幕平三郎、第七六號、山梨縣林業技手」としてあつた。（前十時半）

此邊を切明けてから年月經たものと見え藪がひどかつたが約卅分で地圖の奥千丈岳三角點に出た。周圍はさつぱり見透しが利かなかつた。ひよ

ろ〳〵した灌木が少しも切拂はれてなく、近頃人が通つた樣な形跡は無かつた。後遊の士の爲に少しばかり切つて置いたが、鉈で手を切つたには閉口してしまつた。まあ前途の望も得たので悠〻飯を食つて十一時半出發、專ら尾根の上をたどり暫く行つて右手を捲いて岩峯に出たがまだ少し高いのが北方にある。それで又右手に降りて直東から苔の斜面を登りつめると俄然展望が開けた。露出した花崗岩の周圍には久し振りに見參する偃松があつた。前人の記錄通り大嶽大權現の碑があつたが誰の惡戲か半分に缺けて居た。（到着午後零時半）

此處秩父の最高點に立つて絶大な展望を得た自分には、つい先までの惡戰苦鬪も煙の如く消え去るのを覺えた。

太陽が雲に隱れて風も出て來たので北方に下る。切明をぬつて出た所が三繁平であつた。木を削つて書きつけてあつた。平は想像したとは全然異り多少は平だが草地では無い。

栂の小さいのが無雜作に生えて居て野營などは出來相もない。晝飯にとりかゝつたが水がない。東にも西にも降つて探したが見當らなかつた。西澤の源にはいゝ野營地がある。仕方なしに水なしで飯を濟ませる。

午後一時四十分國師岳に向ふ。切明らしいのを東北に登ると西から二本道が來て居る。これが金峯から來るものである。國師岳一等三角點に着いた。草は無かつた樣だ、西北に八ヶ岳が全容を見せる。金峯と奥千丈の間に南アルプスの一部が顏を出す。秩父最高點の眺望と大差ないが戰場ヶ原方面がよく解つた。

すぐ出發、東に向ふ。少し北を捲いて一突起に出ると大きな丸い石の上に出た。黑金山へ續く尾根が見える。自分等は前人の記錄通り直北に降る。切明に從つて急な傾斜をドンドン降る。時々子酉川の上流釜澤あたりが木立の間から隱見する。暫くすると少し右へ曲つた樣な氣がしたが無理に下つてしまふと花崗岩の風化された急な斜面の上に出てしまつた。石塔尾根は直下百米突の下に迫つて東は二股の方へ落ちて居る。自分等は國境尾根

を行かねばならないので少し登り返してから北東に捲いて又切明に出た。所々に國境の標木が半ば朽ちて立つて居る。下の方へ來るとあまり判然とした切明では無く、ともすれば見失ひ易いものである。可なりの突起を捲いたり乘越したりして段々と二一六〇米突の鞍部に向つて降りて行く。暫くして尾根の上に新しい木屑が落ちてるのを見たので變に思つて木屑について信州側へ少し下つて見るとそこには小屋が三軒ばかりあつて人も居た。(午後三時半)國師の東端を出てから一時間半ばかりかゝつたわけだ。上から三軒目の人は年頃廿七八で信州南安曇の人だと聞いて何となく懐しく此處に泊めて貰ふ事にした。水はすぐ下の岩の下から出て居た。此處の水は確かに國師、甲武信縱走中最も尾根に近い所から出て居るものだらう。小屋は十日ばかりの内にこはして了ふと言つてたが後の人の爲には良好な幕營地となるであらう。國師方面から來る人は今言つた木屑に氣をつける事だ。國境尾根までは約五分である。甲武信方面から來る人はこれからの記事に依つて想像されたい。又此の南安曇の人の話では梓山まで此處から三時間で出られる相だ。地圖でいふと東股の頭の三角點の南なる信州澤から梓川に乘越す鞍部である。自分は此處を甲信乘越の野營地とでも云つたらいゝだらうと思ふ。或は又西股野營地でも良い。

惠まれた十月の末日も無事に明けて眼が覺めたのは午前六時を少し過ぎて居た時だつた。今日は深い霧が四邊を立込めて居た。

八時小屋を出て一度國境の切明まで登る。鞍部から北への切明も亦不明瞭、此處から確か三つ目の峯に宮内省の標石があつた。(八時廿三分)長野大林區臼田事業區四七七六大正元年九月と記した杭が傍にあつた。暫く行くと伐木の跡があつた。下り切つた鞍部に又宮内省の標石あり、これより倒木中の切明をたどり四、五峯を左に捲いて少し右へ行き(此の時八時五十分)登りきると國境の標木があつた。

眼前にある峯の左を捲く樣に切明けてあるのでその通り行くと又下りになつて了ふ。ふと右へ登

るらしい道があつたので石楠花をかき分けて頂に出て見ると此處に三等三角點の石が置いてあつた。(九時)東股の頭は此處で國師、甲武信縱走の凡そ中央に位する。眺望は一寸趣のあるもの。三角點の周圍は平になつて居て花崗岩が風化されて丁度奥千丈の最高點と良く似て居る。

北々西に小川山が据はる、その右に八ヶ岳、左は尾根が一度低下して鋸齒狀となり金峯に連らなる。此の間に雪白き山あり、問はずともこれは甲斐の白峯である。國師からの尾根が足許まで來て居て如何にも深さうだ。

東南方に眼を移す。富士は黒金山の右上に顔を出す。大菩薩附近の赤ちやけた尾根がせゝこましく彼方此方と走り戻りして居る。

東面には木賊が一番尨大に見え、その左に甲武信がチヨコンと置かれ、三寶は左端に落ちついて居た。秩父山脈の連嶺が遠く東に走つて居るのは實に雄大である。

北面を見ると北アルプスは遙かに遠い、既に雪を戴く彼方には冬の來た事を知らせる。妙高はすぐ前の樹で見えないが戸隱は白く雪をつけて判然する。小倉山は相變らず氣持ちが悪い。

九時廿分に出發、約十五分にして二二四〇米突の肩の宮內省の石標につく。途中左側にも一個あつた。東北に目立つた岩の露出があつた。

三寶は其の右にある。此の岩は富士見南方の峠の一つ手前のピークである。十分間の休憩後右方へ迂廻して下る。澤を左に見て登つて行く內倒れ木が非常に多い。一寸下り又登り一峯の左を捲き少し登りかへすと宮內省の標石にぶつかつた。(十時廿五分)木賊山は直東に釜澤上部のガレを見せる。十時四十五分出發した。此の邊は地圖には出せない小突起が澤山ある。下つて平な所を心持ち登つて行くと細い石の露出してる所を過ぎ(十時五十分)平となり長い登りとなり苦むした峯へついたのは十一時五分過ぎ、少し平で又登りとなる。道がやゝ右に降りるなと思ふ峯へ來た時、フト左を見ると宮內省の標石があつた。此處が富士見南方の峯なのであつた。(十一時十五分)此處にも臼田事業區の杭がある。

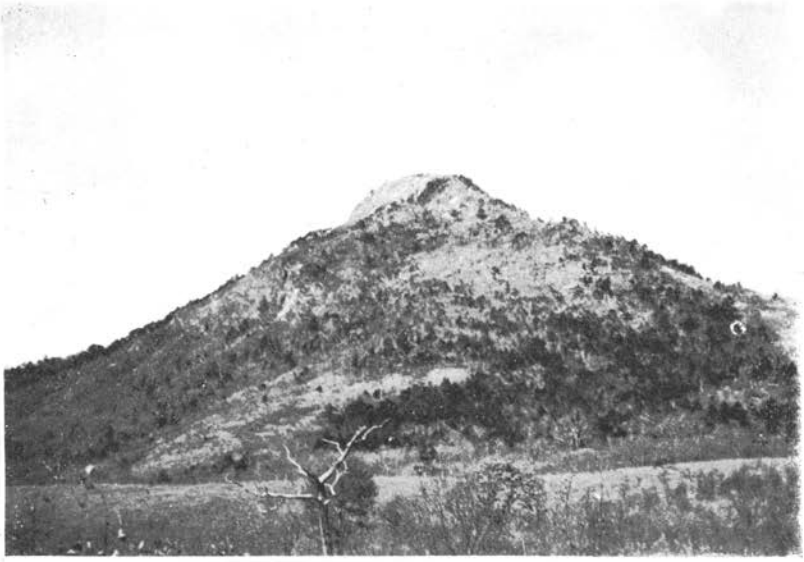
一寸休んで直ぐ下りにかゝる。忽ち切明にはぐれてしまつたので多少左へまくと出た。又無くなつた。南へと進路を變へて行く内に倒木の多い鞍部に着いた。國師らしいのが南に大きく一つだけ見える。此處で持つて來た水筒の水を沸かしてミルクを飲み、晝飯にした。午後零時半再び倒木の内に切明をたどる、五寸四方位の石が倒木に入つてゐるのを見た。暫く鵜目鷹目で歩いてる内にとても立派な切明に出た。一直線である。途中で又消えてしまつた。又倒木を越えて右方に行くと標石のある所へ出た。(一時五分)此處は「ミヅシ」である。それからは成るべく釜澤に面した方を登つて行く。ガレを二つ過ぎた。

甲武信の頂上に着いたのは二時少し過ぎであつた。頂上には一高の學生が三人立つて居た。甲武信の頂上からは木賊が見えなかつた。

三時頃いよ〳〵木賊に向つて尾根を下る。切明あり。今少しで鞍部に達しやうとする時に下から五人ばかり登つて來るのに遇つた。水がこつちには無いから甲武信の方で泊つた方がいゝでしようといふので又引返した。頂上に暫く休んで下る。林道に沿つていゝ加減の所まで行つてから左に樹林の内へ入る。目指す側師の小屋跡は中々なかつた。その中に自分は鉈目を見つけたのでそれに沿うと開いた所へ出て小屋の跡があつた。(四時廿分)ふと後を振りかへると「甲武信岳山道目標に注意すべし」とあつた。自分等も梓山へ降り樣と思つたが夜道が嫌だし、明日又如何に氣が變るか解らないので此處で天幕を張る事にした。

暫く自分等は信濃川の水源の傍に腰を落ちつけて話合つて居る内にポツリ〳〵と出發以來はじめての雨がやつて來た。周章てゝ焚火を起して夕飯を作り、天幕を張つた。

飯を濟して天幕の中へ入るともう明日又登らなほして雁坂まで行く元氣がなくなつてしまつた。後は後として明日は梓山へ行つて久しぶりで豪遊しやうといふ事になり、すつかり呑氣になつて天幕の外の雨を氣にしながらスリーピングバッグの中へもぐり込んだ。(終)



上南より見たる乾德山



下寒より見たる乾德山

冠松次郎氏撮影

○兩神、父不見、西御荷鉾

戸澤英一

大正十三年十一月十三日午後六時半秩父驛に下車。乘合自動車の最後は五時といふので、月夜にうかびでた武甲山を顧みながら人影の絶えた往還を約三里小鹿野町へ。

十四日。快晴、七時半出發、霜雪の如く爪先が冷い。町外れに「右八日見山へ三里左兩神山(リヨウカミ)へ四里」とあるは勿論山麓日向大谷(ヒナタオホヤ)迄の里數である。薄川に沿ふて道はただ一本しかない。迷ひたくても迷へないが固くて石がでてゐるのが閉口だ。嵯峨たる兩神山はひとしほ色黑く河原澤川に架けた橋上から人を招いてゐた。柿の秋だ。霜晴れの暖い日が皮をむかれて吊された柿の上にあたつてゐる。斜面畠の此處彼處に圓錐形の大きなやつが枝もたわわになつてゐる。そのうちに千米突にも及ばない丘陵性の山の懷に道は川と共に入つて行くので僅かな蒼空と色づいた樹樹と艸とが見えるだけなのも止むを得ない。この山深い村の家居は思ひの外豐かな生活をしてゐるらしく、庭先に亂れた小菊の樣もいい。三峰山道と分れるあたり、日を背にあびて眞黑なそちらの山が川原の向ふにたちふさがつてゐた。溯るにつれて川の緣を歩く。川はさらさらと流れる。霜にいたんだ桑の葉は足の音にさへ散り布く。さうした景色である。何處まで行つても大字薄で途中菓子を賣る店もない。二三度川を渡ると日向大谷の部落が高みに見える。こゝでまた兩神が見參にいる。小鹿野から丁度三時間かかつて十時半である。

此處に八日見神社がある。兩神山の神社だ。みすぼらしい社殿に何々講といふ文字が竝ぶ。熱い澁い茶が嬉しかつた。大根の莖の鹽漬けが添へてあつた。早い用意の麵麭をたべながら茫然と山を見てゐる。力弱い紅葉だ。役場へ照會した折ここで登山の準備が出來る、案內者はあつた方がいいとの返事だが其必要はない。若し日が暮れたときは一夜の泊りはできる。十一時に空身ででかける。念の爲道の具合をきいたら、山梨を切りながらかみさんが鳥居をくぐつて行けばいいと云ふ。その

鳥居を抜けて一旦谷へでゝ谷沿ひに上る。別にこれといつて感興をひく程の事もない。所々に落葉の中から石碑が立つてゐる。廿八丁と刻んだのが可なり上の方にあつたが何處から廿八丁なのか判らぬ。落木蕭散たる裡に岩壁が聳立してゐる。やがて「左三笠山を經て本社」の標木―そこから谷を全くはなれて山稜へでる。道々眼についた炭燒小舍の破れたのもなくなつた。神流川上流の山が初めて視野に入る。谷を隔てて兩神の頂上を仰ぐとなかなかに氣骨稜々としてゐる。この山はどうも親し味が薄い。まだ登りに一寸暇がかゝるなと立ちどまる。アカゲラが切りとたたいてゐる。黒木も交りだした。お社の暗い中を覗いてみてから名刺などをさがすと最近に登られた會員の大熊氏のがあつたので脇へ鉛筆で失禮する。左へ廻るともう一つある。出來のわるい石の狼が二匹。其後から尾根傳ひに三角點へでるとき秩父の連山が帽廂に迫るのを覺える。雄大を極めてゐる。木を伐り倒したあとに生えたのが一面に白綠色の筍の斜面はありがたくない。岩を渡つて頂上へ。谷では颯々と風が騒いでゐる。二時間半かかつた。

秩父の尤物は皆歷々指呼の裡に在る。殊に甲武信、三寶の一群は釜澤溯行後間もないこととて殊更懷しい氣がした。破風雁坂と眼を移すと和名倉が尨大な山容を太虛の中に据えてゐる。小倉山の右手に八岳から立科への連脈が寒さうに雪をつけて光つてゐる。淺間は悠々としてゐるとでも云ひたい。山腹に數條の雪の横線が入つてゐる。淺間と立科との間の遠い雪の山は判定しかねた。曾遊の荒船、鼻曲の後に白根から上越の白い山がたち竝んでゐるが頂上に雲が湧いてゐるのでどうにもならぬ。神流川を挾んだ山は眼下に霜に焦げて黄褐色である。日光の奥は霞が罩めてゐるのが殘念であつた。武甲に至つて三百六十度の眺望が一段落を告げる。この邊の山にも少し蓊鬱とした林相を望めないものだらうか。之では熊も鹿もゐるわけには行かないのは當り前だ。痩尾根だから八町峠へ抜けることは六ケ敷しくあるまい。廿分ばかし休でから下山。

三時半に日谷大谷をたつて背後の尾根を乘越し

て三田川村へでる。道を埋めつぶした乾反葉がかさかさと寂しくなる。落葉を踏む意識がまたなく嬉しい。夕寒の街道を五時半近くなつて尾ノ内の森本屋といふのに艸鞋をぬぐ。此處は日用品供給所である。炬燵の上で宿屋らしくない食事をしたあとで蓄音機をやつてくれた。三四丁下にも倉田屋といふのがあるが夕闇で判らなかつた。どういふものかこの村では稻が育たぬ、只桑畑とこの頃作りだした蒟蒻畑と貧しい雜木林としかない。獵はとても話にならず數日前迷ひ込んで來た羚羊を珍らしがつて二十人もかかつて擊つたといふ話だ。提灯をつけて二階へねながら明日の行程を考へる。

十五日。美晴、一時間遲へて七時に起きたら川の向うの雜木山に朝日が明るくさしてゐた。うまい朝食を終へて七時四十分に出發。數丁戻つて日向の部落から澤に從つて茅ノ坂峠へかかる。三百米突ばかり上る間に二子山の岩峰が眼をひく。南側だけ岩壁だから勿論登攀可能だ。兩神山が昨日とおなじ顏をだしてその後に秩父連山。龍膽の花。峠に公衆休憩所なるものがある。在鄉軍人と青年團の合作らしい名前だ。尾根を少し左へ辿つてからまた好きな土の色を見せない落葉道だ。山雀と四十雀とが遊びさつてゐる。おりきつた處に川があるのを向うへ上ると桑畑となり左をとつて心持上ると藤尾村へ下る。父不見(テヽミエズ)山が正面に平い幅廣な姿を橫へてゐるのが何か愉快になつてくる。白壁の土藏に長閑さうな陽がさしてその前で立話してゐる人達が足下に見える。湊屋(?)といふ宿屋兼雜貨商で茶を喫んでゐたら萬場へ行くときいて婆さんは私のリュックサックに不審をおこしてか世帶でも持つんですかと訊ねられたのには驚いた何處にも道しるべがあるので世話がない。玉蜀黍の黃色い果が軒先にぶらさがつてゐるのが奇麗で仕方ない。坂丸峠はわけがなかつた。峠から右に父不見へ山稜を辿るうちに矮林の中に入り茨の包圍攻擊を受けて頂上に立つた。僅か千米の標高しかないので近方の山だけ展望が利く。西御荷鉾山の山腹の草を刈つてこしらへた丸に大の字を見たり淺間の雪を眺めたり黑い秩父を顧みたりする。

十時半頃だ。杉ノ峠へ出る積りで叢の徑らしいのをさがして鞍部へでるとばつたり其行方が判らなくなつて棘の木やら蔓やらで毛氈苔に捕まつた蠅みたいにどうにも動きがとれなくなつた。山刀で切りながら山腹をあてどもなくからむでゐると道らしいものが遙かに見えたので炭燒に荒された岩片の洪水になつた急傾斜を徐々に下る。時間をひどく浪費して高原狀の山腹を萬場の見當へ道に從ふ。地圖にはないやつで萬場と生利との中間へでた。草原を歩きながら神流川兩岸の風光を見てゐると呑氣だ。一つ一つ置かれた様な家々の様子、白い往還、黄色の山、蒼い空、渾然として小春日和に適はしい。行手の山は赤久縄から東御荷鉾まで。萬場の空で午の汽笛がポーとなつた。生利の菓子屋で休んで一時に投石峠へ向ふ。之も一本道だ。然かも緩かに谷の上を縫つてゐる。叶山に氣がついて暫くそこらの景色を眺め入る。氣奈澤からの道はどこで合はさるのか判らぬ中に「右投石峠左不動尊」の岐路へでた。左を西御荷鉾の頭まで艸の斜面をひた上るので聊か息づかひが荒くなる。例の大の字の中を歩いてゐるらしい。三時近くに三角點。石佛が三つ四つ立つてゐるがいゝものはない。依然秩父が見えるが其陰になるのか富士はとう〳〵駄目だつた。東御荷鉾は藪で面倒臭くわざわざのぼる程でもあるまい。東へ投石峠へでて北をさして下りだしたら炭燒の烟が重く漂つてゐる。顚をきらしたやうな山相を呈してゐる中をどしどし下るのかと思つたら右へ左へと曲つて緩かな道だ。東御荷鉾の領分に入つてゐるらしく地圖とはどうも違ふらしい。日が遮られて肌寒い。馬糞の多い道とわかれて左へ半ば落葉した落葉松林に入つて金色の毛氈の上を歩く。五時に日野村へでた。赤赤と日は西の山の空を彩つて川原の色もほの白い。宿屋があるから泊つてはと途中で一緒になつた男から云はれたが豫定通りに小梨峠のいゝ道を空腹に閉口しながら、また何度もの峠でうんざりして仕方なしに登つて行つた。山鳩をきいたら急に夕暮の色が濃くなつたやうな氣がした。灯がついた。月がでないので眞闇の杉林を提灯つけて下る。下り切つたら新しく工事最中

の驛道になつた。吉井の驛前の茶屋で樽柿と蜜柑と鹽煎餅とで我慢しながら高崎行の終電車を待つことになつたのが七時五分前だつた。汗のかはいた肌が氣持わるく寒い。去年の今頃荒船山からの歸へりの事などが想ひだされた。(一九二四、一一、二九)

○乾德山から黑金山へ

冠　松次郎

大正四年頃、一度乾德山へ登つたことがあつた。奥秩父の山々を一眸の下に收め得らるゝこの山の眺望も、その西北に聳えてゐる黑金山の爲に、もう一息と言ふ處で、西澤の源流地や、その溪谷の幽邃を覗き見ることが出來なかつた。

彼處まで登つたならば、黑金の頂きに立つたならば、笛吹川の上流を近く眺め得らるゝことだと思ひながら、德和から一日で往復は無理であるし、別段泊る小舍とてもない不便な山なので、今日まで遂に登山を果さなかつた。然しそれにもかゝはらず、最も近く國師奥仙丈の連嶺の見える山。その前山では一番優秀な山であると云ふことが、妙に私の心を引きつけてゐた。

その黑金山へ、一泊で登山を試みたい爲、大正十三年十一月七日、最早、笛吹川の奥は紅葉が地に委して、滿目荒寥たる冬枯れの姿になつた頃、午前五時に鹽山に着いた、霜夜の曉、身體を引き締めるやうな寒さの中へ、鹽山の驛を出て、顧みると大菩薩連嶺は碧黑の色に肌寒く、まだ明けきらぬ上空には、明星のまばたきは眼を射る如く輝いてゐる、鹽山山を目印に向嶽寺の傍らを通り拔けて、漸く色あせた御坂山脈の上空を仰ぐと、ピラミッドの樣に雪の富士は大きく延び上つて、一抹の横雲がその頭を搖曳してゐる、甲府盆地に近い帶那山脈の裾合からも、富士川を挾む雪の連嶺が、白雲の樣にたゞなはつてゐるその空と溶け合ふ雪の色の美くしさに、私は幾度か足をとゞめては眺め入つた。

爽やかな秋晴の朝の氣分を味はいながら、人煙の起らない朝の街道を歩いて行くと、あたりはまだひつそりとして、僅かに人家の前の溝流れで顔

を洗つてゐる人達を見るばかりであつた。私も澄んだ流れで喉いで、夜來の煤煙を拭ひ、大きな溪谷の間に息づいてゐる畑、森林、山の端などの秋色を賞しながら、一縷の道を藤ノ木の村落について、右角の茶店で憩ひ、朝飯を認め、大きな柿を四ツ程求めて、尾根で水の代りにと、リュックサックの中に忍ばせる。

乾德山の頭に朝日がかゝると、群山は喜々として秋晴の空に浮び出て、小鳥の群がその山を越えて遠く流れて行くのが如何にも美くしい。溪流の音が脚下に響く樣になると、私等の氣分も漸く緊張し始める。

鹽山から約二里、一ノ橋を渡り、數町上つて德和道へ入る。まだこの附近の山々はかなり色づいて德和までは紅葉が美くしい。暫く上ると、路傍の石に腰を下ろして休んでゐる青年を見たので、乾德山から黑金山へ行く尾根の樣子を聞くと、乾德から黑金の間は殆ど人が入らないが、ボサ（榛莽）さへ我慢すれば通れるし、途中で一泊すれば尙尾根傳ひに三枚笹から鳥居峠、金峯鑛泉へも出られると云ふので。私は黑金山から山のつるを辿つて、黑金山二二三一、六米突から西方の二〇五三米突（大ダボ）二二四九（シゲリ）へ登り、二二三四米突（三枚笹）から、郡境の峯を南西に降り、鳥居峠の下にあたる、一四三五米突附近の金峯鑛泉まで、廻つて見たくなつたので、急に思ひついてその青年の兄と云人を賴んで行くことにした。晝食を認めたり、人夫を待つたりして德和で大分時間を費やし、十一時過ぎになつて乾德山の登りにかゝる。

德和の人家がつきて、二三町行くと、乾德山の里宮に出る。その右横を拔け、杉の茂つた山側を上り、尙ほ數町にして德和川に添つた山道と岐れ、山の鼻へ登ると、無造作に打つけた鳥居が建てられてある。この鳥居から、德和の人の云ふ奥山の一部、三枚笹、大烏山などを可なり壯大に仰望することが出來る。それから道は急に北にそれて登りとなり、楢栗の雜木林の間を山坂に曲折して付けられてある。殆ど落葉しつくした闊葉林の中は、眞晝の日が强烈に射し込むので、雨用意の

洋傘を擴げて日よけにして行く。乾德山の登りは夏は中々暑いことだと思ふ。一時間程も同じ樣な林の中を登り續けると、追々木が疎らになり、勾配が緩漫になると、急にカヤトの闊い原の上へ出る。その入口の處に楢の木が三株ばかり並んでゐる間を、右に細徑が分れて、その中を數間も入ると清水が草の窪から湧き出してゐる。この山へ登る者は、こゝより外に水がないので、時間が早くともこゝで中食をとらねばならない。この先には乾德は勿論黑金山でも、その先の山續きでも、谷まで降らなければ水は得られない。

茫々たる茅原の中を通じてゐる一筋の道を逐ふて緩傾斜の高原を行くと、その道の行きつまりに茅や芝の中から、一段高く田舍家のやうな建物が見える。やがて近づいて見ると、それはこの山へ登るものゝ爲の籠り堂で、その後ろの屏風岩の懷に祠が祀られて、その傍らに弘法大師の像が置かれてある。これが乾德山の前宮となつてゐる。眺望は可なり開けて來た、裾山の間から、甲府盆地の一部、鹽山山、鹽山の町などが箱庭の樣に小さく片付いて、その中を煙を曳いて汽車は蟲の樣に動いて行く。

乾德山は全容を高原の上になげかけて、その頂きの半ばは大きな岩壁の露出を以て、東奥山の谷に削り落されてゐる。然し登路の高原に向つた側と、東南方一七六四、一米突の丘のやうな美くしい草山に續く方とは、この附近には珍らしい程悠大な高原を延べてゐる。

前宮の右上を、乾德の頂上から引かれた山稜の、肩の處につけられた細徑を登りきる附近に、硯石と云ふ大石が、茅原の中に横たはつてゐる。その上の凹みに僅かばかり溜つてゐる水は、夏日の干魃の時でも曾て干たことがないと云ふ。肩から間もなく岩山の登りとなり、暫くの間は樹木が茂つて、勾配は漸次に急峻になる。累々たる巨岩の間に挺んでてゐる、落葉松、白樺、栂などの大樹の下は、灌木と笹の藪になつてゐるので頗る歩き惡い。路はこの岩山にかゝつてからは明瞭についてゐないが、上から上へと重なり合つてゐる岩の天上が、頂上になつてゐるので、迷ふこともなく、

攀ぢ登つて行けば自然に出られる。三十分にしては遠く、一時間にしては近い。頂き近くなると、木は皆矮くなり藪がなくなる代りに、岩石は益々壯大になり、旗掛岩、アミダ岩、鬢剃岩等と云ふ巨岩が重錯して、その間に針金を下げられた處もある。頂上は狹く岩の間に少さな祠が安置されて、それが丁度南方富士に向つて建てられてある。

眺望は甚だよい、最も近く相對してゐる黒金山は、黒絲威の様な森林に蔽はれて、その圓頂を、西澤の方へ向つて突き出してゐる。國師、奥仙丈の山容が悠大に波うつて、奥仙丈の南に連らなつてゐる、最も長大な支脈の間から、金峯山が肩から上を現はし、その五丈岩はイボの様な形をして少さく飛び出してゐる。國師から甲武信に續いてゐる山稜は黒金山に遮ぎられてゐるが、甲武信三山は急に高く突出して、その右に破風、雁坂、笠取と、蜒々として遙かに、大洞川上流の山々に續いてゐる。空は申し分なく晴れ渡つてゐたが、大分霞んだので、遠望はあまり鮮かでない。

風の少ない靜かな山頂で、思はず時を過して、午後三時に、裏側を黒金山に連らなる山腹に向つて降つて行く。裏側は表側より距離は短かいが、大きな岩の割れ目などがあるので、より險岨である。德利からついて來た犬も、こゝへくると前進が出來なくなり、遙か上の方で岩の上をまご〳〵しながら悲鳴を擧げてゐる。これから人夫は時々犬を抱いて難場を通してやる。

頂上から續く巨岩の累積を降つて、丸い隆起に出ると、一面のボサ（榛莽）つゞきで、白檜の矮林の間に、石楠花、ツヽジの類が密生してゐるので、隨分うるさい昇降をして行く。密叢に蔽はれてゐる隆起を二つ程越すと、漸く栂尾根となり、下生も少なく、深山らしい幽邃な氣分が漲ぎつてくる。

餘程以前、乾德山を中心として、五日間程山火事が續いて、周圍の森林を悉く燒き拂らい、その跡が德和寄の方では茅原となり、この方面では藪尾根になつてしまつたさうで、乾德山は裏側から見ると、荒寥たる枯林の中から、幾つもの岩角を突出させてゐるので、この附近に見られない程峨



淺間峠（仙元峠）峠頂上　　神谷恭氏撮影



乾徳山頂上　　冠松次郎氏撮影

峨たる山容を呈してゐる。

尾根は緩やかに、幅は中々闊く、立派な栂の森林になつて、稀に白檜や唐檜が見える。仆木はあるが、下生が疎らになつたので足取りがよい。一隆起を越えて暫く登つて行く内、短かい秋の日は何時の間にか奥仙丈つゝきの山影に沒し、山陰は暮色が深くなり、栂林の下は暗影がにじんで、足元が危ふくなつたので、風の當らない窪を選んで夜營の仕度を始める。午後五時、焚火の周りに集まつて、着のみ着のまゝ、僅かに用意した冬シャツ一枚を重ね、合羽を冠つて暖をとりながらまどろむ。今日は黒金山に登り、谷に降つて夜營をするつもりであつたのが、尾根の夜營をすることになつたので、水を得られないから、米味噌の用意があつたが、食事を我慢することにして、持ち合せた菓子などを食べて飢を凌ぐ。

初冬の夜營は恐ろしく長い氣持がした。晩飯をはぶいて、暗くなると直きに寐たので、隨分暫くの間休んだと思つて、目を覺まして時計を見るとまだ漸く八時である。これから曉方まで隨分時間があると思ふと、何となく心淋しい。

深山の夜は寂寥として甚だ寒く、焚火に面してゐる方はホテル程熱いが、影になる方は脊筋へ水を注がれた様に冷い。さすがに犬も寒いと見えて、私の合羽の中へもぐり込んで丸まつてゐる。時々衰へて行く焚火を盛んにして、目のさめてゐる者同志で山の話に耽る。遙か青笹川の下の方に一點の電燈が見えたのが何處のであるか妙に氣にかゝる。夜半から木枯が吹きすさんで、木と木の打ち合ふ音、枝葉の嘯く音がすさまじく、一しきり止んだと思ふ内、後からも〳〵轟々と尾根上をゆり動かして、谷の方へと消えて行く。その間の沈默が心を引き入れられる様に寂しい。

十二時頃から眠におちて、漸く夜明け近くになつたので、皆起き上つたが、湯を沸かすでもなく、飯を炊くでもない。私の飯入に殘つてゐた僅かな飯を皆で少しづゝ分け、藤ノ木で求めた柿を半分づゝ食つて漸く飢渇を醫し、午前六時に出發する。霜にいてゝゐる山稜の、苔深い森林の下を行くと、草鞋が埋まるほど土にめり込んでゆく。

肌を切る様な西北の風に、身體中が引き締まつて水の如く澄み渡つた大空を仰ぎ、四周をとりまく無數の尾根の重疊を眺めると何とも云へない壯快な感に滿たされる。

二十分程で小さな隆起の上に出て休む。林が矮くなつて、岩石が露出してゐるので眺望は中々よい。黒金山の頂はもう目睫の間に迫つてきた。この先に小さな隆起が一つあつて、それから頂上に續く登りになる、森林は矮くなつたが依然濃密を極め、尾根の幅は大分狹くなつてくる。

顧みると、今迄越して來た幾つかの隆起の上に、乾德山が峨々たる岩峯を擡げて、北の方へ向つて傾いてゐる。その右の肩を越して、富士が女神像の様に美しい裳をかゝけて、南天に聳えてゐる。その物優しい然し尊嚴な姿態は、恐らくこの尾根第一の美觀であらう。

小隆起を越すと、登りは益〻峻急になり、黒金山の頸あたりを攀ぢてゐるのであらうと思つてゐる内、傾斜が緩くなると、我等は茂みを脫して、平らな頂上の三角點の處に出た。夜營地から一時間、頂上は乾德山のよりも廣く、その中を四坪程平に均らされて、そこに三角櫓が柱一本丈殘つてゐる。東南は森林で蔽はれてゐるが、西澤寄の方は細かな破片岩が一面に露出して、その間を縫つて、ハヒヤクシンが蔓り、偃松も可なりの密叢となつて山頂の方へ押し寄せてゐる。三角點から西澤寄の方へ少し降ると、石を積んで宮の形ちを造つたものを三つ程見た、その處から西澤の源流は殊によく見える。

眺望は略ぼ乾德山に等しいが、里の方が見えなくなる代りに、奥秩父の山々は、西澤を隔てゝその豪容を展開する、最も悠大なるは奥仙丈から鳥居峠の方へ落走して行く大山脈で、秩父でこの位偉大なる支脈は少ない。その懷の西澤の源流地はカールの様な大きな窪を爲して、濃密なる闊葉林を以て埋めつくされてゐる。あざみ澤の谷も隨分大きくエグレて、それと東澤との間に丸い山の瘤を連らねた石塔尾根は雄大であるが、惜いことには鷄冠山の壁嶂は、木賊山の大きな山の平にへばりついて、その峨々たる特性を示してゐない。

南方を顧みると、富士山の頂は何時の間にか笠雲に蔽はれてゐる。天氣が變るかしらんと思ひながら、尙頂上の展望をむさぼつてゐると、霧雲が奥仙丈の山脈をからんで、簇々と奥秩父の方へと押し上つて來た。やがて破風の頭までそれが延びて私等のゐる頭上を薄雲がかすめたかと思ふと、四邊が急に暗くなつて、白い粉の樣な雪がちら〳〵と落ちて來た。支度もそこ〳〵、午前八時に黒金山の頂上を辭して、もと來た山稜を少し下り、分れて南西の山のつるを辿り、栂の森林の間の幅廣の尾根を下つて行く、奥仙丈の山稜を鳥居峠迄出て金峰鑛泉へ一泊して歸る豫定であつたが、何分天氣が變つて來たので、山上は昨日と打つて變つて、密雲に閉ざされて、急に晴れさうもない。たとへそこを行くとしても、肝甚な眺望もきかず、霧の中を雪に降られては馬鹿〳〵しくなるので、とう〳〵途中から德和川を降つて戻ることにしてしまつた。

黒木の茂つた隆起を一つ越すと、小さな笹原に出る、その先を山稜を行くと、前のよりも遙かに廣い草原へ出た、それから著しく登りとなつて、大タボ二〇五三米突の峯へ續いてゐるのだが、私等は鞍部になつてゐる笹原から、谷に向つて降つて行つた。白樺、楢、白檜なぞの林の中を笹原についてに降つて、約三十分程で、左から澤が落ち合つてゐる處へ出る。午前九時四十分。荷を下して、早速飯を焚き、味噌汁をこしらへる。まだ空に雲の往來が繁く、雪がちら〳〵と斷え間なく落ちてくる。谷川の岩の周りは氷りがはりつめて、顔を洗ふ手先は切れるやうに冷たい。昨夜からの空腹を炊きたての飯で滿たしたので、皆元氣を恢復した。天氣さへ好ければこれからでも、山稜に戻りたいのだが已むを得ない。

長い間休息して、午前十一時近くにそこを發ち、谷に添つて降つて行く。仰ぐと上流の山々は厚い雲で蔽はれてゐるが乾德だけは槍の穗先の樣な岩崖を突き出して、そこには雲が一點もかゝつてゐない。四面皆落葉林に埋められてゐる德和の谷は、案外深く大きい。濃密な枯林の末遠く、下流の山々を望むとき、私等は何とも云へない自然

に對するあこがれを感じさせられる。

私等は東奥山（ヒガシオクザン）――黒金山、及オホタボの間の山々を云ふ――の間から出る澤に添つて下つて來たので、西奥山（ニシオクザン）――大タボ、シゲリ、三枚笹――の間から出る澤と落合ふ頃には流れも可なり大きくなり、立派な道に出る、途中で一ケ所三丈程の瀧と、釜とを見た。それから下の落葉松の立派な林が美しく黄葉してゐるのを賞し、やがて山嘴を左へと大廻りして暫く行く内、昨日登つて行つた、乾徳山の登口の鳥居が見え、間もなく徳和の里に戻つた。午後一時、歸りは時間があるので、鹽山迄散歩氣分で降つて行く。

午後五時鹽山に着いた時分には、西の方には夕燒雲が盛んに流れて、空は拭つた様に澄み渡つてゐた、やがて日が暮れると明月は大菩薩の山の上にかかつて、氷冷の山の姿は、一層初冬らしい靜寂な趣を見せてゐた。

富士の笠雲は時雨の前兆位であつたのに、私は輕率に山から降りてしまつたのを殘念にも思つた。そして寂しい心を抱いて、歸京しなければならなかつたことを、今でさへ物足りなく思つてゐる。

○瑞牆山

大島亮吉

瑞牆山は本谷川にては以前瘤岩（コブイハ）と俚稱せるも、一般には「ミヅガキサン」として今日其の山麓諸村（勿論甲州側の）に通ずるが如し、其の山體、大部分は極めて急峻にして嵯峨たる花崗岩の怪奇なる形狀の岩峰の集合よりなりて、其の山容の著しく特異なるは秩父諸山中其の比を見ざる所ならん。其の望む方向によりて若し霧の山腹以下を埋むる時は宛然寫眞に見るドロミーテンの岩山に髣髴たるを感ぜしむ。小生は小川山頂方向を除ける諸方向より大略此の山を望みたるが、木賊峠頂上の廣濶なる凹狀傾斜地より望める山容に最も印象深きものありたり。

瑞牆山に登るには其の西麓にある北巨摩郡畜産組合所有の松平（「マツダヒラ」地名なり）牧場より爲すが最も近く且つ良好なり。金峯山里宮より

爲すも良く、又釜瀬川の黒森（クロモリ）の村より爲すも可なり。

松平牧場は陸測五萬分ノ一金峯山圖幅に於ける金山（カナヤマ）部落上方一五一八の獨立標高點より釜瀬川左岸迄瑞牆山西麓一帶の緩傾斜地を言ひ、釜瀬川の「釜」の字の地點に於て右に分岐する澤は「アマドリザハ」と稱せらる。松平牧場は此のアマドリザハを界にして北方を「舊牧場」、南方を「新牧場」と稱す。新牧場は愛すべき山麓の風景に富む。牧場内に於て宿泊すべき個所は牧場事務所なり。其の位置は金峯山圖幅アマドリ澤左岸一三〇〇と等高曲線に記入されたる地點なり。同圖幅上釜瀬川アマドリ澤合流點上の尾根上の小徑下方より登りて左手にある「家」の符號ある地點には何等家無く、又アマドリ澤上流右岸一四二一獨立標高點ある地點に同じく「家」の符號あるも、同點には以前舊牧場事務所として大なる石塊の庇蔽を利用せる假小屋のありたる地點にして今日にては雨露を凌ぐにも足りず。寧ろ其れよりも上方同圖幅瑞牆山の「山」の字の西方より出づる深き小澤の右岸一四六〇米の等高曲線上附近に三四人の雨露を避くるに足る岩小屋あり。又該岩小屋より二三町同等高曲線を北方に行きたる地點にも二三人の泊れる岩小屋あるも陰氣なる場所なり。舊牧場には各所に炭燒道あり、又現に炭燒も入り居れり。舊牧場は青草無く、伐採の痕著しく餘り感じ良からず。

舊牧場よりは瑞牆山の岩峯眉の上に懸る。岩は良けれど、針葉樹岩間に生えて甚だ悲觀なり。さもなくば本邦一流の岩壁なるに。然れど稍々距離を置きて見る時は實に立派な岩壁なり。

瑞牆山名所として弘法大師文字及古代文字なるものあり。共にアマドリ澤上流に在りて、大なる岩壁に刻せる文字なり。古くより「ヤマシ」（山師？）の間に知られたるものなりと言ふも、近時山麓增富村青年團の道を開き、道標を打ちて其の名所の喧傳に務め居れり。同文字は二ヶ所に在りて、弘法大師が遊びに來て刻めりと傳ふるものは、アマドリザハ左岸の金峯山圖幅には無き小岩峯に二字二行に刻まれたものなりと言ふも、小生は訪ねんとして道を發見し得ざりしため訪はず。

唯だ古代文字と稱せらるゝものを訪ひたり。同地點は金峯山圖幅上瑞牆山頂二二三〇・二米より正西に五峯の岩峯連續せる內最西より第二番目の岩峯の西側の壯大なる岩壁面にあるものにて、同地點まで微かなる道あり。文字は約一丈程の長さにて、平均二尺四方程の大きさの文字五六字を花崗岩に刻めり。風化して殆んど字形を止めず。最初は此れは人工のものに非ずと思ひたるも、餘りに不自然に字形をなし居ると、同附近岩面に此れに似たる皺襞を全然認めず、且、同岩壁の上方殆んど垂直にして十數丈程高き岩壁に縱に細長き正長方形の岩窟らしきものありて、同點までの岩登りは餘程困難なれども、嘗て岩茸採りが好奇心に驅られて登りみたるに同岩窟內に劍一振奉獻しありたりと聞きたるを以て、此れと考へ合せて、古く修驗者の同岩窟に修行して、其際にても刻みたるには非ずやと判斷して、同古代文字の矢張り人工のものならんと小生も信じたる次第なり。然れど到底大なる足場にても造りて爲さざる時は人工にては不可能なる個所に刻まれあるを以て、よく一人の修驗者にして如何に時間と勞力とを厭はざる者なりと雖も仲々に成し遂げ難きを思ひて未だ完全に疑念晴れず。同文字より岩窟までの岩壁は殆んど垂直にして五六丈の高さなり。文字の凹みを登れば足場と手懸りは相當あれど、小生はロープなくしては下降不可能と思ひて躊躇したり。右方に垂直のチムニイあり。其れより登る事を得んも一ヶ所下方より望みて惡場あり。同文字は垂直にして滑らかなるチムニイ左方の岩面にありて、岩窟に到る唯一絕好の足場と手懸りを成し居れり。察するに上方の岩窟に到りて修行せんとして來れる某修驗者の文字を刻みて足場と手懸りを造りつゝ、該岩窟に攀ぢたるものには非らずやとも考へたり。時夕刻斜陽赫く花崗岩の岩壁を照らし、仰げば岩燕はピイピイと囀りつゝ高き岩壁面の巢より出入して夕空を飛び交ひ、前面遠くには南アルプス八ヶ岳の諸高峯の山頂の殘雪は落暉に染められたる朗らかなる眺望を展開せり。小生同岩壁下の一岩塊に座して、今日我等の殆んど知らざる往昔の不拔なる修驗者の事蹟を想到し、頭上の彼の岩窟に

座す白衣の彼れが姿を想像して、其の人の信仰の力の驚くべきものを知り、甚だ尊敬の念を起せり。明治末期となりて劒岳に最初に到りしと思ひし人々の其の頂上に同じく年月經て錆深き劒を發見して、其れ以前既に其れを奉獻せし人の在りしを知りし時も恐らく同樣に感ぜられしなるべし。小生兩神山にも又同樣修驗者修行の跡の岩窟を見たり。怪奇にして威嚇的なる山貌の山の比較的斯る事蹟の多きは修驗者の求めて斯る山岳を其の信仰力の試練場とせしがための如く思はれるも如何。

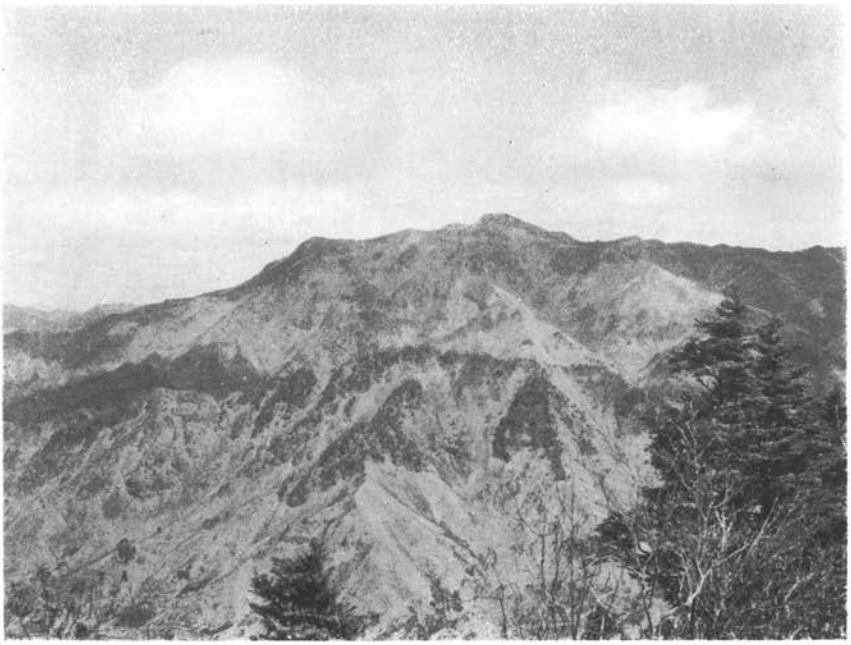
瑞牆山の頂上の岩峰に登る登路はアマドリザハと釜瀬川と金峯山小川山間の山稜傳ひとの三路あり。小生の實際に試みしは釜瀬川の登路のみにて他の二路は知らず。山稜より到るものは甚だ平凡なるものの如し。(登高行第四年年報一九頁參照)釜瀬川の登路は黒森より釜瀬川右岸に沿ひたる小徑を行くなり。同路は釜瀬不動尊に到る路なり。金峰山圖幅上記入の小徑の最終點附近迄は炭燒の通ふ路にて極めて良く踏めたり。其れより釜瀬川は俄然狹まりて澤は所謂釜瀬(カマセ)の名に背かず。然れど道は明らかなり。釜瀬不動尊は遂ひに發見し得ざりき。明白なる路は急に不明となればなり。後俚人に聞きたるに依りて大略位置判明せり。即ち不動尊の位置は一七二八米の獨立標高點右上下二ヶ所の懸崖の符號ある個所の中間の小澤の右岸岩窟内に安置せられたる小なる石尊なりとの事にて、到底不案内にては到り難き由なり。同小澤は落口に於て釜瀬本澤に三丈程の瀧となりて落ち居れり。金峯山圖幅は該地點の地形を表はすに甚だ不充分の點あり。谿谷深く、岩壁岩塔簇生して又針葉樹蒼鬱し苔深く蒸して甚だしく陰濕なり。瑞牆山頂二二三〇・二米に到る登路は該小澤の瀧より左岸に渡ると更らに釜瀬川本流に右手より急なる小澤の落ち來るあるを登るなり。約三〇〇米程の急峻なる梅の密林と岩塊との間の登りにて、一時間を要す。該小澤を直登すれば頂上二二三〇・二米と其の西方の岩峰との中間鞍部に達す。秩父諸澤中小生は斯くの如く陰濕にして苔深く急なる斜面を知らず。鞍部よりは頂上西方の岩峰迄容易に達し得。花崗岩の乾ける岩頂は甚だ朗らかな

り。眺望又良し。頂上へは鞍部より石楠木と栂の矮樹の密生と岩壁を徑て三〇分にて登り得。頂上の岩頂又朗らかなり。頂上より瑞牆山の諸峰を望めば、到る處に小なる岩塔簇生聳立して、困難なる岩登りを呈するものあり、小生の見たる處にては現今の小生の技術にては不可能のもの多くあり、甚だ愉快なり。鞍部より頂上に到る間の一岩頂すら登攀不能なりき。岩は花崗岩の特徴として岩滑らかにして連續せる一枚岩多く、堅固確實の岩なれど手懸りと足場に乏しく、且つ圓味を帶びてゐて困難である。岩の乾ける際にはトリコニイは到底草鞋に及び難き事を痛切に經驗せり。若し此れに石楠木、栂の隙間に叢生する事なくば、實に無理なく立派なるロック、クライミングを成し得て頂上に到り得る山なり。然れど其の岩壁の大きさ、困難さに於て尚本邦中左程劣りたる場所には非らずと信ず。小生は未だ充分に諸岩峯を精査せず。殊にアマドリ澤側は僅かに古代文字の附近の一小岩塔に登りしのみなり。求めれば良き岩壁を登攀して未踏の岩峯にシュタインマンを積む（積むべき小岩片殆んどなき樣なれど）の快を得べし。但しロープ、ピトン、クレッテルシュウか、草鞋と良きバァティは缺くを得べからず。

頂上迄釜瀬川側は微かなる切開あり。此れ大正十二年六月三十日增富村村會議員、道路委員の同村名勝と道路調査のため登りし際切り開きたるものなり。餘り分明ならず。南麓アマドリ澤へ頂上より下りしと記しありたり。頂上直下のガレを下りしものか。甚だ急峻にして小生些か躊躇せり。下りて、進退谷まるを恐れて後日に殘せり。斯る山體の時は此の自制必要ならん。殊に未知の岩壁の降路の下降に際しては。頂上迄黑森より三時間半乃至四時間にて可ならん。釜瀬川左岸谷の狹まる附近には岩小屋あり。三四人は充分泊り得。黑森にも宿屋あり。黑森は心持よき山村なり。牧場事務所又良し。但し蚤多くして安眠を妨ぐ。日野春か韮崎より黑森迄七里、牧場事務所迄七里半。牧場は毎年五月二十日より馬を放牧す。新緑かぐはしき白樺の叢林と山梨の花の咲く緩き青草の斜面に放牧馬の草を喰むを前景にして、馬の鹽を甜



木賊峠より見たる瑞牆山



天狗山より見たる小倉山

武田久吉氏撮影

める平たき石塊に座して黒き瑞牆の岩を望むは氣持良き景色なり。牧場事務所に宿泊するには增富村大字小尾小字神戸在住の牧場管理者の許可を得るなり。同人は毎日通勤し居れり。俚人は同人を「牧主」(ボクシュ)と呼び居れり。

○川上の天狗山

數年前の三月初旬、雪の野邊山を歩いた時、千曲の廣い谷の右岸に立つ、男山と天狗山との、雪を鏤めた岩壁が中々立派なのに心を引かれたが、天候に禍ひされて登攀を斷念したことがある。

その位置と高さとから推して、眺望が廣闊であらうと想像したので、今年三月中旬、同好の山口君を唆かして、野邊山の雪を蹴散らかす序に、一つ天狗山の峯頭に立つて見ようと、甲州日野春から、若神子を通つて、舊佐久甲州往還を辿つた。

粘場ヶ原から野邊山にかゝると、豫期した雪はすつかり消えて居たには且つ驚き且つ失望した。それでも、二三日前の雨で道が落付いて歩きよくなつたと聞いて、いやな氣でもなかつた。

例によつて甚しい道草をするので、國界から袖先迄にザット半日を費し、板橋に來たのが四時頃になり、急行して大深山に著いたのが八時前後であつた。

初めの豫定では、馬越峠の頂から、西に村界の尾根を傳つて天狗山の頂上に達しようといふのであつたが、半途にしてその無謀に近いことを諭され、本道を教へられて、峠道の左の曾根の西にある窪を上つた。頂上から東南に斗出した曾根の右手を、一五〇〇米位の所までは、カラマツの植林を過ぎてから、野火跡の燒木の間に通じた、炭燒路を辿る。アカマツ、クリ、ヤヘガハ(方言ヨグソ)、シラカンバ等の黒く焦げたのが、左右に立つて居る。それを拂下げて炭に燒く爲め、相木から來たといふ炭燒が、小屋を營むで居た。

釜の後ろから水汲路を拾つて、急な斜面を之字狀に昇ると、やがて岩壁の間から、清水の滴り落つる所に出る。更に截り倒された巨木等の間を、ヤハズハハヽコなどの根株につかまり乍ら、這ひ上つて、終に一七三〇米許りの小鞍部に達した。こゝまでは木立は野火と伐採との結果廢滅に歸し

て、亂石の間にカリヤスモドキなどの雜草が生じた、カラ〳〵の斜面である。

鞍部にも大小の岩塊が狼籍し、そこから峠迄の間に續く小峯にも、岩壁と岩塊が重疊し、その間にアカマツ等が生じて、通過には可なりな困難と時間を要しそうに見えた。鞍部から相木側を瞰ると、これはまた更に甚しく伐採してあつて、裸出した山膚には殘雪がコビリつき、寒い風が吹き上げて、コメツガの樹梢についた霧氷をハラ〳〵と吹き散らす。

鞍部に荷物を下して一と休み、前に千曲の谷を瞰下し、その對岸には奥秩父の尤物が、膚にはまだ雪をベットリなすりつけて立つのが素晴しい。小川山の肩を越して、金峰の五丈石がのぞくのも面白い。今度は切り殘された木立の上に伸び上つて、相木の方を眺めると、先づ目につくのは小倉山である。霧雲がその巓をかすめて飛ぶ。東は十文字の連脈から三國につゞき、やがて上信の國境に蟠まる山々、何れを何れと見定めるも面倒な程、大小の峯々が連なつて居る。

さて八ヶ岳の方を眺めるには、どうしても絶頂迄昇らねばならない。薄ッぺらい山稜には、シャクナギ、ビャクナギ、サラサドウダン、コメツガ等が密生し、その枝からはサルヲガセが、さゝらでトロヽコンブを引掻廻したように、縺れ合ひ又たごまり合つて居る。殘雪の淺い山稜ながら、この密生した木立をくゞるとなると、鞍部から三十分はかゝらう。邪魔な荷を殘し、キャメラ丈け携へて頂上に押し上らうかとしたが、ドンヨリと曇りかけた空模樣で、小倉山でさへ頂が見えたり隱れたりする有樣なのに、寫眞も見込なしとあきらめ、近所を三四枚寫してから下山ときめる、岩塊にチヅゴケの見事に生じて居るのが、美しくもあり、又高度から言つて面白い。岩は秩父古成層。

降はいくらも時間が要らない。急いだら大深山迄一時間餘りで十分であらうが、例の僻で道草をする。そして宿へ歸つたのは三時頃であつた。

天狗山は毎夏山麓の者が賽日に登る由。しかし徑は大して明でない。と言つて迷ふ虞は斷じてない位簡單な山である。早春附近の山に殘雪多き頃か、初夏シャクナギの花綻びる頃は、登山に最も適した時期であらう。

（武田久吉）

雜報

○マウナ・ロアの大噴火

【コナ(ハワイ)國際十八日發】ハワイ島中の大火山マウナ・ロア山は去る十五日に猛烈な活動を開始し、盛に熔岩を噴出したが、本日に至り更に猛烈となり、雪崩の如く流出する熔岩は十八マイルも離れてゐるポープロア村を襲ひ、同地の百餘名の住民は目下生死不明である、又當コナ村においても數戸の家屋は五十フイート餘の熔岩のために埋沒された、尙海岸から數百フイート餘の間の海水は熔岩のために煮えくりかへつてゐると。

【ヒロ(ハワイ)國際十八日發】ロア火山破裂の蒸氣は雲狀をなして濛々と立ちこめてゐるにも拘らず、數名の寫眞技師は飛行機に乘じ火山の上空に飛行してその實況を撮影した、右一行の談を聞くに、三千尺の高空に在つても暑氣甚だしく熔岩は四百メートルの高さにまで噴上げられ、それが何れも海拔八千フイートの所にある三つの噴火口から噴き出てゐる、この噴火口から流れてゐる熔岩は河となつて山腹を蜿蜒と流れてゐる樣は、あたかも龍蛇の横はる如くに見え、それが眞赤に空の水蒸氣に反射するので附近を航行する汽船の乘客等に丁度焦熱地獄のそれの樣な感を催させると。(十五年四月廿一日東京朝日新聞)

○大菩薩連山の伐木

山岳會から反對運動

最近登山熱の勃興に伴ひ本縣に於ける大菩薩嶺が全國の登山家から注目されて來たと、同時に植物學方面から見て大正十二年九月一日の大震災で破壞された丹澤山に代るべきは此の地より外に無しと推賞されてゐる折柄、縣當局は大森林をこのまゝに放置するは寶の持ち腐れて遺憾として十ケ年計畫を以て伐木事業を開始せんとしてゐる。これを聞き知つた日本山岳會に其人ありと知られた同會評議員理學博士武田久吉氏が五日付縣當局へきつい抗議を申込んで來た武田博士の縣へ送つて來た文書に曰く

前略、東京における山岳研究團體の旅會の如きは今春大菩薩連嶺號を發行して世に紹介せんとした此の歷史的地理的に興味深い地を植物學方面から見ると一層價値あり針葉樹としては富士山から御坂山塊を通じ奥秩父まで分布するいらもみは中部日本の特産ともいふべく其の樹種の絕滅を防ぐべき價値あるはいふまでもなく又からまつの野生があることも注目されてゐる闊葉樹ではいぬぶな、はしどい、ひろはあしぼそ、うりのき、ふじさくら其他特筆すべきものあり珍稀植物産は大局から見て問題でないとしても景勝地としての大菩薩連嶺は價値頗る大なるものあり殊に老年期の溪谷としては日川谷の如き稀有のものである。東には大菩薩の主脈を西には支脈を中部以下は美しい闊葉樹林に、又上部は針葉林におほはれ四季の眺めに適してゐる此の谷の上流には蜘蛛の淵、素麵淵などあり下流には有名な龍門の瀧

あり兩岸に茂れる密林には時鳥、郭公、慈悲心鳥の聲が縹き清流の魚類と河鹿の聲また得難くきみかげさう、あつもり草の珍花は人々の目を慰める更らに栗の大木あることにおいては本邦に珍らしく秋季遊客を喜ばすに充分である殊に初鹿野驛から田野木賊を經て上流に至る間は甲斐の史蹟としてそれこそ忘れられぬ景德院、片手斬、天目山などあり、鰍澤鹽溫泉までは林道も通じ上下八里の大菩薩に昔の旅人を偲びつゝ遺蹟を探るは最も有意義である、山梨は富士山麓の開發に全力を注ぎ、一面御嶽の紹介にも努めてゐる折柄更らに此の地の樹木伐採を爲すが如きは以ての外で彼の大震災に丹澤山塊を完全に破壞された今日此の地の殘れるは多幸で此の溪谷美を經とし史的背景を緯として天下にあまねく紹介するこそ山梨縣永遠の策である。

といふにある。

甲斐山岳會も呼應反對せん

別項大菩薩峠における縣の伐木事業に對する日本山岳會の反對については本縣の甲斐山岳會にも反對運動を依頼して來たものゝ如く、同會の野々垣幹事は語る「日本山岳會の武田氏は有名な人で明治卅六七年頃小島烏水氏等と日本山岳會を興した山岳方面で五本の指に折られる人です、殊に植物學においては山岳黨の第一人者で、常に日川上流大菩薩峠の荒廢については憂慮され、今回縣が大に伐り倒す計畫を憤慨されてきのふも博士から手紙を頂きました」と。

未だ計畫だけ

右につき縣當局は「同方面で伐採せんとしてゐるのは約四百町歩で、日川流域の材積は針葉樹二十二萬石闊葉樹十二萬石あり、計畫は樹てゝゐるが伐採に着手してゐない」と語つた。

（大正十五年七月十日時事新報山梨報）

○會員通信

△十月十七日の夜、あの雨に東京出發、花敷溫泉に向ひました。草津に行くまでは晴れさうに見えましたが、其先は雷雨にかはり、びしよ濡れになつて五時過ぎ目的地に着きました。中村屋の御馳走は、私に取つては、山間では今迄にない秀逸なものでした。花敷から野反への山稜づたひの景色のよいのに驚きました。歸りは花敷から澁峠を越えて澁溫泉に來ましたが、此道は草津から澁へ行くよりも少しく遠い位ゐで、景色は遙かに雄大です。紅葉は上州方面は少しく早く、熊野湯附近のはもう散つてゐました。花敷方面の溪谷は栗山鄕のそれによく似てゐると思ひます。

（大正十四年十月田部重治）

△拾月廿四日夜行て八ヶ岳に參りました、松原湖を巡る紅葉の美と北佐久高原の秋草のとりどり、何と言つても溪谷と高原の美は秋が第一と思ひます。

八ヶ岳には十八日に新雪があつたとの事で、その夜の本澤溫泉は零下二度、湯治客の二、三人と私らとて伽藍堂としたものでした、夜は大氣が愈々澄んで硫黄岳爆裂火口の眞上に半月が輝いて

ねました。卅六日は夏澤峠に向はず、澤を左岸に渉つて直接硫黄岳に取つき、殘された新雪を踏んで硫黄より横岳を經、赤岳に登攀、思ひがけぬ快晴で白雪の立山連峰から槍の連脈、燒の噴烟、南アルプスの連峰、秩父の山々など、パノラマ風の展望でした、赤岳小舍から直ちに行者小舍に下り、翌原の北佐久に劣らぬ高原の深み行く秋を賞しつゝ茅野驛に下りました。左に時間を揭げます。

小海着前八、四一——八那池一〇、一〇——松原湖一〇、四〇——稻子一一、三〇——森林帶後三、〇〇——本澤溫泉四、〇〇泊。本澤出發前七、四〇——硫黄岳九、二〇——横岳一〇、二五——赤岳小舍一一、二〇——赤岳三角點一一、四〇——赤岳小舍出發後一、〇〇——行者小舍一、四〇——泉野村五、三〇——茅野驛七、三〇、歸京。

（西田誠一）

△十月卅日（晴）朝松本驛にて藤島敏男君と一緒になり、島々迄電車、奈川渡迄自動車、すつかり山の氣分となり、麗な光と秋の匂ひとに久方振りに清々致候。九時半奈川渡出發、番所の芝生の上に坐つて午食の紅茶を沸かしながら新雪に粧を凝らした、乘鞍を眺めるあたり仲々宜敷候。此處にも宿屋あれば乘鞍上下には便宜かと被存候。落葉松の落葉を踏み白樺の黄葉の戰きを聞きながら野麥へつゞく無名の峠道を辿り候が、晩秋の美しさ爰に極まるかと嘆稱致候。此峠はどうも地圖とは違ふやうにて峠に近くして徑は澤となり、最後は根曲竹をかき分ける始末に有之、信州側は徑消失の態なり。登り切ると飛驒側に俄然坦々(?)たるやつが山腹をうねり、野麥の少しく上へ通じ候。その夜は阿多野鄕の農家に宿乞ひ申候。

卅一日朝八時橋場をへて一八六五米の三角點ある尾根を乘鞍へと志し候。はじめは雜木の疎林にして牛馬の放牧あり、雲晴れたらば御嶽は眉を壓するばかりかと被思候。傾斜急ならず道幅ひろく快き登山道にして、やがて黒木の中に入り候が、相當明るき感じいたし、何處やら御岳を想起さするもの有之候。小生の足の調子宜しからず、氣息奄々の態にて、大分時間を費し、頂上にて晝の豫定狂ひ、二時間近く後れて寒風凜冽たる岩頭に立ち申候。霧風の爲に偃松といはず岩石と云はず悉く霧氷を結んで仲々に奇觀なり。雷鳥も數羽白くなつて遊び居り候。雪は大分消えたる由にて深からず難儀する事もなく平湯口へと匆々にして下山、滿目冬枯れてたゞ偃松のみ翠にして夏日の雜踏の樣もなく嬉しき限りに候。頂上の小舍は三千米突を越えどうして立派なものに候。「飛驒の小屋」と稱し居候。ほのぼのと白山の全山容雲表に浮ぶをみつゝ凍えながら五池鷲池枯梗ヶ原と平湯口と平湯峠口との分岐點へ下り候時は既た四時に候ひき。實は二日で乘鞍を上下するつもりでその日番所へ下り松本迄出る積りなりしが、電車の中で日延べをやり平湯へ泊る事と相成、偖道々飛驒の山川を見るにつけ高山へ抜けやうかと陰謀を廻らしたりする次第に候。分岐點に平湯へ三時間と書いたる標木あり、今日も亦提灯の御厄介かと相共に笑ひ申し候。この道滅法荒れて慘嘆の外無之候。之また地圖と異り、大瀧の右岸へ下り候。夫でも三時間はかゝらず二時間餘で平湯屋なる宿屋の「二階半氣註、二階なるも他の座敷より二尺許り高し」に入つて偶々御祭りの料理に御赤飯といふ豪奢に候。

人さへをられば乘鞍も一日二日の山の旅には絶好のものと存候、二日目は山の天氣面白からざりしが殘念に候。

翌十一月一日は藤島君節を曲げて上高地泊りの筈なりしが、上高地に落胆し、松本迄かへり、小生はそのまゝ東歸仕候。上高地の荒廢の甚しき驚きの外にして、梓川の醜狀の如き心外千萬に御座候。大正池の水溜りも、林の立枯れも燒岳の降灰で土の色全くなくなり居候。剩へ處々にパラツク建ち天幕指定地の標木竝び、カルピス十五錢とやらの廣告もあり、河童橋も穗高も何もあつたものに非ず、流石に德本の峠でも秋になつては蜜豆をたべさせてくれる人は居らず、頰にふるゝ巒氣の冷きに前途を急ぎ候。鰐留の例の桂の大樹の lemon yellow になつた狀は暮靄の裡に打仰いで「灰高地」(上高地)より逃れたる氣分となり申候。島々の停車場へ八時少し前に着し、全身眞白になつた灰を落し候。とはいへ晩秋三日の山あるきは豫想外の好收獲にて兩人喜びを盡し申候。

(戸澤英一)

△拜啓。野邊山ノ原の雪景色を賞する豫定にて、日野春より粘場ケ原を經て、信州に入り候ところ、意外にも日陰を除けば千五六百米邊まで雪消え失せ、失望致し候。然し南アルプス、八ケ岳、淺間附近の雪山は如何にも美しく、落葉松、白樺、荒膚樺等の枯林捨て難く思はれ候。川上の大深山迄入り、名物の蕎喬を味ひて後また野邊山を防徨し、海ノ口より自動車と汽車を利して只今小諸着。(大正十五年三月十九日武田久吉)

△小生友人一名と共に去る廿三日夜飯田町を出發、翌朝鹽山より將監峠に出で、其處の小屋に一泊、廿五日は雲取三角點の假小屋一泊、水は殘雪豐富の爲充分に使用致しました。廿六日は後白岩との鞍部より日原川の本谷に下りました。かの釜澤と同じ程位の苦しみにて、長澤谷と唐松谷との間は淵の連續でありました。日原の山上屋につきましたのは七時半頃。廿七日二俣尾に出で歸京いたしました。右御報告まで。(商大山岳部代表者吉澤一郎)

△久し振りで米や味噌を背負つて、柳澤峠から東京市の環狀山徑を經て將監峠に至り、ワナグラ山を雲の爲に放棄して、三峰を通過して栃本に至り、二泊して歸つた。栃本の老婦人は健在、非常によろこんで、大に御馳走をして呉れ、君に健在であることを傳へて呉れとのことであつた。仙波の小舍は可なり破れ、近くには燃料が不足してゐた。柳澤峠から將監峠までは、東京市の道を通ると五里以上は優にあるが、眺望が雄大で雁峠の近くに素的な小舍があつて、風呂もあり、夜具もある。何しろ面白かつたから、六月になつても一度行く。

(田部重治)

會報

○第三十一回小集會記事

大正十五年二月二十一日午後一時半より麹町區紀尾井町皆香園に於て、藤島幹事司會者として開會、左の講演があつた。

守門、淺草、御神樂の三山　藤島敏男氏

守門を除けば本誌にも未記載の山々で、夫が藤島氏に依りて初めて紹介された譯である。氏は大正十四年五月中旬、岡本俊雄氏と同行、松本市より先づ北越の栃尾町に行き、其處から山に入つて、六日間に渡りこの三山を歩かれた、殘雪の豊富は尾根歩きをらくにし、守門、淺草の自然林、御神樂東面の岩嶂を眺めた時の歡び、小三本の池に引寄せられた氣分、山麓の部落の、或は淳朴愛すべき、或は淋しく貧しき有樣、總てこの山々の持つ味ひに日頃求めてゐた「山」の姿を如何になつかしく如實に見たであらうといはれる。例によつて美しい寫眞も見せられた。詳細は「山岳」十九年三號所載の同氏紀行に就て見られたい。

朝日岳近況　沼井鐵太郎氏

羽前、越後の境に蟠まる朝日山塊に就き、先づ同山塊の文獻と登山記錄（未發表の分共）を擧げ、最近特に山形高等學校山岳部有志の大井澤村方面よりの開發により、昨年の如きは昔の朝日岳と思へない程登山が盛になつた事實を話して、各方面の登山徑路を同氏自身の冬山の實地踏査其他の見聞を種として、主に地理地名の說明をされた。寫眞は夏山冬山共同氏の同行者及び友人の撮影せられた美事なものであつた。大分急いで話されたので、朝日山塊の趣を知るには時間不足で遺憾であつたが、朝日山塊の紀行並に雜記は近々發行せらるべき「奥羽號」に掲載せられる豫定である。

冬のフインステラールホルン登山談　別宮貞俊氏

一九二五年一月五日ボーデンゼーを月のいゝ曉

に渡つてチューリヒへ來り、スキーの支度を揃へてダボス、サンモーリッツ、ルガノ、アンダーマットを經てグリンデルワルドへ來た。せめてメンヒ位へ登つて大アレッチ氷河を滑降しようと思つて居たのが、昨冬一所に旅行したブラバントから面白い話を聞かされてオーバーランドの最高峯フィンステラールホルンへスキーで出かけることになつた。一月廿三日グリンデルワルド發、ユンクフラウヨッホで滑降準備をして、一氣にコンコルデヤプラッツまで下り、グリュンホールリュッケまでは海豹（アザラシ）の皮をつけて登り、それからまたフィンステラールホルンの新しい小屋（舊い小屋より約二百米下方フイルンより五十米ばかり上方）まで痛快な滑降をする。同夜新雪あり、翌廿四日も朝の內は少しく雪降り眺望皆無、しかし出發してEisbstückplatzを過ぎて、暫くすると晴れて來た、絶好の眺望を恣にし頂上（四二七五米）でも幸ひ餘り寒くなく、直ちに下山して同日は再びフィンステラールホルン小屋に泊る。廿五日天候不良フイッシャーフイルンを下るのにも遠くが見えなく且雪が惡いので綱で連り、ロートロッホからまた海豹（アザラシ）の皮をつけてオーベラールヨッホまで登る、天候益々陰鬱となり遠望不能、オーベラール氷河の上部は雪がカン〳〵のクラストになつて居るので、スタイクアイゼンをつけ、スキーをかついで下りかゝる、先登に立つブラバントが裂け目へ落ち、シュルネッガーと私とで漸く引き上げ、再び進み出すと間もなくまた落ち、此度はピッケルを深い處へ落して了ふ。そこでスキーに海豹（アザラシ）の皮をつけ危險を冒して漸く氷河を下り終り、午後七時過ぎ眞暗な道を大分滑つてグタンネンの村へ着いて泊る。翌廿六日はマイリンゲンから橇を呼び寄せた所が、馬車が來たので一同呑氣にマイリンゲンまで出て、夕方グリンデルワルドに歸つて會員松方義三郎氏に會つた。

概略右の樣な講演であつたが、其間同氏の面目躍如たる眞率な笑話もあり、かて〻加へて輝かしい幾十枚かの寫眞は觀る者をして垂涎三尺たらしめた。いづれ乞ふて其記事と寫眞を本誌に揭げたいと思ふ。

當日の來會者は吉澤一郎、山崎和一、松本善二、野口末延、吉田次男、松井幹雄、岩井三郎、神谷恭、岩水信雄、別宮貞俊、渡邊漸、伊藤朝太郎、木村鏻吉、酒井忠一、田中菅雄、山口成一、岡田喜一、三輪正雄、新庄球生、吉田直吉、大熊保夫、小松喜一、木暮理太郎、田部重治、高野鷹藏、武田久吉、冠松次郎、高頭仁兵衞、藤島敏男、鳥山悌成、沼井鐵太郎の三十一氏にして他に十一名の會員外來會者があつた。

○本會大會の期日變更に就て

本會に於て毎年一回開催する慣例となつてゐる大會は、第一回以來大抵五月を期して開く事になつてゐた。これは本會設立の當初に在つては、登山する人などは曉天の星の如く寥々として少き有樣であつたから、登山の普及を圖るのが重要なる仕事の一であつた。夫には登山季に先立つて、山岳に關する大會を開き、一面に於ては會員相互の見聞を交換し、他方に於ては大に世人の視聽をそばだてしめ、登山の念を煽る要があつたので、それにはどうしても五月は動かすことの出來ない好季節であつた、それで明治四十一年五月十七日第一回大會を日本橋區西紺屋町の日本地學協會の建物を借りて開會して以來、昨年の第十八回大會に至る迄、其慣例を踏襲して來たのであつた。然し今日となつて見れば最早五月に大會を開く必要を認めなくなつて了つたと稱してもよい。

既に必しも五月に開會するを要しない以上は、登山收穫の最も多い夏期を去る遠からざる秋末十一月の頃が適當の時季と思はれるので、本年から大會を十一月初旬に開催することにしたのである。若し今後冬季の登山が大に行はれるやうになつて、五月開會する方が好都合となれば、之に從ふこと勿論であらう。このことは二月の幹事會に於て決定したので、本號に於て御知らせする次第である。

○日本山岳會有志晩餐會

大正十三年九月二十八日夕、此晩餐會が復活されて四谷の三河屋で其第一回を行つた事及び以前

の晩餐會との關係に就ては、本誌十八年二號に一寸報告して置いた。それから大分日が立つので會員の方々にも第二回の開催を希望する向もあり、夫に大正十五年初に梅澤評議員が突然なくなられたので、追悼といつては失禮でもあるし大げさでもあるが、曾て梅澤氏が小集會の度毎に出席されて快談快笑された清水谷皆香園で、第三十一回小集會の終つた後引續き有志相寄り、故人を追憶しながら靜かな山話しを交はさうといふ事になつた。其は二月二十一日の夕、山家の樣な靜けさで星の光る時、障子の內は三河屋の時とは違つた氣分で話ははづんで行つた。料理も時にふさはしい質素なものであつた。やがて會員別宮貞俊氏がフランスから持つて來られた小型の映寫機でモンブラン登山の活動寫眞が始まる。ブラン違ひで其內の一卷が間違つて白熊が現れたのも時にとつての一興であつた。斯くて散會したのは午後九時半頃であつた。來會者は次の三十氏であつた。

吉澤一郎、山崎和一、松本善二、野口末延、吉田次男、松井幹雄、岩井三郎、神谷泰、岩永信雄、別宮貞俊、邊渡漸、伊藤朝太郎、田中信夫、長谷川孝一、木村鏻吉、酒井忠一、山口成一、岡田喜一、木暮理太郎、田部重治、武田久吉、吉田竹志、冠松次郎、高頭仁兵衞、藤島敏男、鳥山悌成、沼井鐵太郎、吉田直吉、大熊保夫、小松喜一。

○會務報告

大正十五年二月二十一日午前十時麴町清水谷皆香園に於て幹事會開催、本會大會の期日變更に就て議定し、終て入會申込者の詮衡を行ひ、左の二十名入會を許可せらる。

山田俊雄、坂岡奈保志、吉田竹志、山田力、湯村和吉、西野保次郎、吉井正敏、吉田稔巳、永井泰、中山隆良、柳澤悟、柳澤二郎、中田伸直、佐々保雄、下出繁雄、大江明正、宮井幾三、西室貴義、岡榮市、安田倫也。

○會員の訃報

會員神尾錠吉、橘正一郎の兩氏は、過般逝去せられたる旨、遺族の方から通知があつた。神尾氏は殆ど本會創立の時から、又橘氏も古い會員であ

つた。本會は右の兩氏に對し、謹で哀悼の意を表する。

○退會者

左の諸氏から退會の申出であつた。本會では直に規定の處置を取つた。

大正十五年一月廿六日附	（五三一）	東	光治
〃 三月十五日附	（六三一）	經國書亮	
三月卅日附	（七九八）	小野藤一郎	
〃 五月十七日附	（一四）	高椋悌吉	
〃 五月十八日附	（四一二）	ヲスワルド、ホワイト	
〃 五月廿八日附	（八一一）	鳥谷幡山	
〃 五月卅一日附	（八四一）	東京營林局代表	平田慶吉

○交換及寄贈圖書目

雷鳥（創刊號）　岐阜高等農林學校山岳部
やまと　第十六、十七號　神戸高商登山部
Bergheil Heft 1, 2.　第四高等學校旅行部
霧の旅（大菩薩連嶺號）　霧の旅會
同　第二十號　〃
ツーリスト第十四年第一、二號　信濃山岳會
信濃山岳會報大正十五年第一號　信濃山岳會
ペデスツリヤン　第八十、八十一、八十二號　神戸徒歩會
岳友　第二年三、四、五號　日本岳友會
アルカウ趣味　第十三年三、四、五、六、七號　日本アルカウ會
山嶺　第五年二、三、四、五號　東京野歩路會
山岳時報　第七年臨時號　城南山岳會
The Geographical Journal, Vol. LXVI-No. 2, 3, 4, 5, 6, Vol. LXVII-No. 1, 2.
Alpine Journal, Vol. XXXVIII-No. 231
Natural History, Vol. XXV-No. 5, 6, Vol. XXVI-No. 1, 2.
The Mountaineer, Vol. XVII-No. 11, 12, Vol. XVIII-No. 1, 3, 4, 5, 6.
Butlleti Excursionista de Catalunya, Any XXXV-Num. 358, 359, 360, 361-362, 363-364, 365-366.
Bird-Lore, Vol. XXVII-No. 5, 6, Vol. XXVIII-No. 2.
Club Alpino Italiano, Anno XLIV-Num. 10, 11-

12, Anno XLV–Num. 1, 2, 3, 4.
The Prairie Club, Bulletin. No. 148, 149, 151, 152, 153, 155, 156.
Trail and Timberline, No. 84. 85, 86, 88, 89, 90, 91, 92.
The Scottish Mountaineering Club Journal, Vol. 17–No. 100, 101.
Revue Alpine, Vol. 26–No 3, 4, Vol. 27–No 1.
La Montagne, 12e Année–No 185, 186, 187, 188, 189, 190.
Die Alpen Les Alpes, I–No 9, 10, II. II 1, 2, 3, 4.
The Annual of the Mountain Club of South Africa, No. 28–1925.
The Chautauqua Bulletin, Vol. XV. No. 1, 2, 3.
Sierra Club Bulletin, Vol. XII. No. 3.
Mazama, Annual SeriesVol. VII. No. 2.
Svenska, Turistföreningens Arsskrift, 1926.

○本會規則拔萃（大正十三年九月改正）

第二條　本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス
第三條　本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌「山岳」ヲ發行スヽ又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアルヘシ
第五條　本會ハ會長ヲ戴カズ幹事若干名ヲ置キ、一切ノ會務ヲ處理セシム
第十條　本會會員ヲ別チテ正會員及名譽會員トス、名譽會員ハ幹事會ノ決議ニヨリテ推薦セラルルモノトス
第十一條　正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所、姓名、年齡及ビ職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送附スヘシ、但シ紹介者ノ一人ハ本會評議員タルヲ要ス（入會申込用紙ハ事務所、會計取扱所、編輯所ニ備付ケアリ）
第十二條　入會ノ許否ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス
第十三條　入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ、直ニ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込マルヘシ
第十四條　正會員ハ會費年金參圓ヲ每年二月末日迄ニ納付スヘキモノトス（以下略）

現任幹事七名

藤島敏男　冠松次郎　木暮理太郎
高頭仁兵衛　鳥山悌成　槇有恒（歸歐中）
沼井鐵太郎（臺灣赴任）

評議員十六名

小島久太（在桑港）　武田久吉　高野鷹藏
近藤茂吉　中村清太郎　三枝守博

辻本滿丸　田部重治　山川默
及現任幹事七名。

○投稿規定

一、會員は勿論會員以外の何人も投稿隨意のこと。
一、用紙は半紙又は半紙半枚大、天地左右をあけ、毎紙片の面みに字體明瞭に認め、各行二十二字詰とし、毎紙同一行數のこと。
一、、。「」（）等は各一字畫宛とし、行を更むる時は一字下げのこと。
一、地名には片假名を振り、漢字不明にして當字をなす時は、其旨を括弧内に明記すべきこと。
一、スケッチは複製の際誤記脫漏等の虞あるを以て、豫め本誌面に適せる大さに調製ありたきこと。
一、原稿は左記宛て御送付のこと

東京市本郷區駒込蓬萊町三一　「山岳」編輯所

尙ほ編輯に關する用件は總て前記宛御照會のこと、殊に挿圖寫眞等ある原稿は其調製方印刷方につき一應御相談あらば幸也。

大正十五年七月廿八日印刷
大正十五年七月卅一日發行

著作權所有

【定價金貳圓】

發行兼編輯者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍

發行所　新潟縣三島郡深才村深澤　日本山岳會

東京市芝區高輪南町三十番地
日本山岳會會計取扱所
振替口座東京四八二九番

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

多摩郡の山川項目索引

ア之部

鸚鵡岩 一〇一頁
赤ケナ山 八八
（笹平ノ丸）
赤指山 一二二
秋川（アクバ） 一五一
芥場峯 九八
（鍋割山）
蘆澤 一〇六
蘆ノ澤 一三二
愛宕山 一〇六
雨乞瀧 八七
（釣橋ノ瀧）
雨乞場ノ峯 一一八
雨乞場山 一二二
安穏（アンノン）瀧 一三三
雨降川 一二四
綾之滝 一五五
綾廣ノ滝（アユヒロ） 一〇一
鮎跳瀑 一五四

水松谷（アラマキダニ）ノ峯 一二五

イ之部

池坪山 九二
（筑摩山）
石積瀧 九〇
石積澤 九〇
泉澤川 一五一
泉澤山 一五〇
（マツカリ山）
一石山神社 一三四
イツポチ山 一四七
千ケ澤峯 一五四
醍醐峠 一三〇
市道山
出野澤
稲村岩ノ峯
（入奥山）
犬剝籏ノ峯 一二七
芋木ノトツケ 一二五
入川 八九、九三
入奥川 一二三
入奥山 一二一
（稲付岩ノ峯）
入小澤ノ峯 一一七
イヤ入澤 一〇七、一三二
魚留（イワドメ）瀧 八六、一三三
井戸入澤 八〇
イモリ谷ノ峯 一二九
（大蹈躅ノ峯）
キヨウツノ瀧 八七

ウ之部

臼杵山 一四八
笛吹（ウソフキ）澤 一五三
馬佛山 七八、八二
（向ヒ山）

エ之部

江戸小屋山 一〇五
（本谷入山）
荏ノ久保山 九二
海老小屋山 八五
三道山
布瀧ノ峯

オ、ヲ之部

御伊勢山 七九
奥津宮 一五六
奥ノ宮大日ノ窟 一三七
大賀澤 九七
大雲取山 一二五
大藏澤 九〇
大澤川 一〇六、一五三
大瀑 九八、一五五
大嶽 九六、一四九
大嶽川 一五二
大嶽神社（オホダケヒラ） 一五六
大平峯 一〇四
深ダワノ峯 七六
太耶平指山 八〇、八五
大平山 一〇〇
大丹波川
大塚山
棒杭山
白岩山
大蹈躅峯 一二〇
（イモリ谷ノ峯）

大寺山 一二二
大楢（オホナル）澤 一五三
（大鳴澤）
大魚留ノ瀧 一三四
大ムソ澤 一一五
小川 一三一
小川ノ大瀧 一三三

カ之部

景信山 七六
籠岩 一三五
カヤガ瀧 一三三
數馬澤 九四
神庭ノ瀑 九八
神戸岩 一五七
神戸澤 一五二
上川乘澤 一五三
上澤俣川 一五二
神塚山 七八
神萩ノ瀧 九〇
茅倉尾根 一五〇
（葛籠石山）
茅倉澤 一五二
樋ノ木尾 一〇九
（シヨ窪山） 一四七
茅丸山 一三四
唐松澤ノ瀧 一三一
唐松谷ノ澤 一二九
唐松谷ノ峯
（七石山）
狩鞍澤 一三二
狩鞍山 一三〇
小松ガタワノ峯
不老山
刈寄川 一四三
甲籠山 九六、九九
（男具那峯）
川苔川 一〇六、一三二

キ之部

菌岩山 一一七
月夜見山
京道山
黄檗久保ノ峯 九一
（眞名井澤ノ峯）
京道山 一一三
菌岩山
月夜見山

ク之部

鮎澤川 一一九
臭木澤 九六
口止番所跡 一五七
熊倉澤 一五四
熊倉ノ瀑 一五五
熊倉山 一四六
熊澤川 八六
軍茶利山 一四七
倉掛澤 一五二
倉掛山 一一六
倉澤川 一三二
倉澤神社 一四〇
倉戸山 一一二、一二二
（モヂリ山）
九龍山 一〇五
（栃入向山）
荒神ノ窟 一三七
光明神社 一四四

コ之部

越澤川 九〇、九三、九七
小岩瀑 一五五
小岩ノ關趾 一五七
小魚留ノ瀑 一三四
弘法ノ窟 一三六
小川 九七
コカハヅル山 八二
（黒山）
古塞場澤 一五三
小雲取山 一二四
小下澤山 七六
コサカシ澤 一五四
小菅川 一一九
御前山 一一〇、一四九
古瀑 九八
琴平山 七九
小中入澤ノ峯 一〇九
（檜澤ノ峯）
小中澤 一一二
疣高山 九二
小佛川 七六
小佛嶺 七五
覆澤 九〇
小松ガタワノ峯 一〇九
狩鞍山
不老山

駒木野山　七六
駒ノ澤　九七
垢離附ノ瀧　九一

サ之部

逆川　一〇七、一四三
逆川ノ丸　八二
（常盤ノ前山）
境川　一二三
加茂澤川
小袖川
坂本澤　一五三
笹尾ノ瀧　九一
笹ケ峠ノ峰　一四五
笹平ノ尾根　一四六
笹平ノ丸　八五
（赤ケナ山）
指ノ尾根　八八
（頭窓山）
澤ノ川　一〇〇
三道山　八七
海老小屋山
布瀧ノ峯
三之木戸山　一〇四、一〇九
鞘口山　一一一
深ダワノ峯
大平ノ峯
太郎平指山

シ之部

四十八瀧　八六
シダケラ澤　一一二
シボ久保山　一二二
（カヤノ木尾）
鹽地谷川　一〇六
鹽地谷山　一〇二
（日向澤峯）
清水澤　九四
新宮洞　一三五
新藏指ノ丸　八五
新發智瀧　八七
常雲川　八六
障子岩山　八二
障子瀑　一三三
精進瀧　八〇
城山　一四二
（大平山）
城山　九三、九四、九六
城山澤　九五
城山　一〇八、一三〇
白岩山　九六
大塚山
棒杭山
白瀑　九八

ス之部

鈴ケ尾瀑　一五五
寸庭川　九〇

セ之部

小ノ岩山　一二九
（鳥屋戸山）
蟬澤川　八〇、八六
千ケ澤　一四三
淺間嶺　一二八
千足川　一五二

ソ之部

惣岳山　八五
惣岳山　一四九
（水久保山）
蕎麥粒山　一〇一、一二八
三角山
火打山
袖入澤　九四

タ之部

大持澤　一〇七、一三二
高岩山　九六
高尾山　七六
高黒山　一五〇
高指山　九一
燒多亡山
木荷駄山
鷹巣山　一三〇
盜人坂ノ峯
ヒヤマゴノ峯
水根山
高丸山　一二〇
（檜尾）
寶之瀑　一〇一
（七代ノ瀑）
瀧谷ノ峯　一二五
瀧ノ入ノ峯　一二九
瀧ノ川　一〇〇
（御嶽澤）

瀧ノ澤　九五
平茅尾根　一五〇
多摩川　八九、一一四
丹三郎平ノ尾根　八九
三田森山
御側山　八〇
丹縄澤　一三二
檜澤川　一三三
檜澤瀧　一三〇
檜澤ノ峰
（小中入澤ノ峯）
太郎平指山　一四九
鞘口山
大平ノ峯
深ダワノ峰

チ之部

地藏ノ瀧　一三三

ツ之部

月夜見山　一四八
京道山
菌岩山
筑摩山　九三、一〇三
（池坪ノ峰）
坪　澤　一二四
頭窓山　七九
（指之尾根）

テ之部

銚子口ノ瀧　一三三
天狗岩ノ澡　九八
天狗澗　一五四
天地山　九五、一〇五、一四九
（割岩）
天神山　一一四
傳名澤　一四三
天目ノ峰　一二七

ト之部

塔　澤　一一九
戸澤川　一一七
戸澤ノ峯　一一六
栃入向山　一一二
（九龍山）
栃谷部澤　一一九
栃寄澤　一一二
鳥屋戸山　一〇二
（小ノ岩山）
砥　山　一四八
（戸澤峰）
酉谷ノ峯　一二六
酉待戸ノ澡　一五五

ナ之部

長尾ノ地藏瀧　一三三
長尾ノ丸　八一
長　澤　一三一
長澤ノ峯　一二五
中ノ谷澤　一二三
中ノ谷ノ峯　一二一
（日影名栗ノ峯）
中山澡　一五四
中山川　一五一
鍋割山　九六

ニ之部

二階瀧　八〇
西　川　九三
日原川　一〇六、一三一
女房澡　九八
仁王ノ窟　一三六

ヌ之部

縫指ノ峯　二一七、一一八
布　瀧　八七
布　澡　九八
布瀧ノ峯　九一
沼澤川　八〇

ネ之部

杜松ノ澤　一三二
捩　澡　九八

ノ之部

鋸　山　九七、一〇五

ハ之部

灰燒平ノ峯　一四七
榜杭山又棒杭山　八八
大塚山
白岩山
白石山　一二八
（立岩山）
橋　澤　一一九
蜂盤澤　一五三

母ノ胎内潜　一三六
坂東澤　一五三
榛之木尾　一一〇

ヒ之部

燧石谷川　一〇七
日陰ナクリノ澤　一三一
（日影名栗とも書す）
日陰ナクリノ峯　一三〇
（中ノ谷ノ峯）
日向澤峯　八二
（鹽地谷山）
日向谷ノ峯　一二六
檜尾　一三〇
（高丸山）
檜尾澤　一三一
檜尾ノ峯　一一七
（入小澤ノ峯）
檜原城墟　一五六
ヒヤマゴノ峯　一二二
盜人坂ノ峯
水根山
鷹巣山
廣澤ノ瀧　九〇

フ之部

深澤ノ瀧　九一
富士峯　一〇〇
不動瀑　九八、一五五
山毛欅山　九一、一〇三
曲ケ谷峯
舟井戸山
不老山　一〇三
イヤ入ノ峯
狩鞍山
小松ガタワノ峯

ヘ之部

蛇澤川　一一五

ホ之部

棒之折山　八一
弗澤　一五一
弗澤ノ瀑　一五四
本谷入山　一一一
（江戸小屋山）
梵天岩　一三四
本荷駄山　一〇三
高指山
燒多亡山
盆堀川　一四二
堀切澤　九七
堀口澤　八〇、九〇

マ之部

曲ケ谷峯　八三
山毛欅山
舟井戸山
曲ケ谷澤　八六
曲ケ谷ノ瀧　八七
槇之尾山　八一
孫想川　一三一
孫八澤ノ瀑　九八
眞名井澤　八六
眞名井澤峯　八四
（黄檗久保ノ峯）
馬乘石山　八五
マヒモウヅノ瀧　一三三
丸山　一四六

ミ之部

三釜瀑　九八
三國山　一四七
三澤川　九〇
禊ノ瀧　九〇
御嶽山　九九
御嶽道　一〇〇
水窪澤　一一五
水窪山　一一〇、一一四
（水久保山）（惣岳山）
水根澤　一一二、一一五
水根山　一〇七
盜人坂ノ峯
鷹巣山
ヒヤマゴノ峯
美遠澤　一一九
三頭山　一一六、一四五
三頭ノ瀑　一五五
南谷澤　一五三
峯川　一二三
（芋川）
峯畑澤　一〇七
水之戸澤　一五二
巳ノ戸澤　一三二
巳ノ戸ノ大瀧　一三三
峰戸山　七八

五

（三之戸山）
三之戸山　八五、八八
（峰戸山）
明王ノ瀧　一三二
ム之部
室澤　一一五
モ之部
モアリ山　一一〇
（倉戸山）
森ノ澤　一五三
ヤ之部
養澤川　一四三
矢倉峯　七七
矢澤　一五四
山梨山　八一
山伏谷川　一〇七
八割川　一五二
八割ノ瀑　一五五
ユ之部
湯久保川　一五二
湯澤　一一五
弓山瀧　一三四
ヨ之部
除澤　一〇七
ラ之部
雷電山又雷電岩山　八三、一〇三
レ之部
連行峯　一四七
ワ之部
山葵澤　一〇七
割谷ノ峯　一二六

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XX 1926 No. 1